

第3節 第2面の遺構・遺物

第2面は第1面のベースを形成する堆積層（第2-2層）を除去することにより検出される面である。第2-2層はシルトから砂により構成され、シルトの部分では第2面の検出もやや精度を欠くところもあったが、砂の部分ではおおむね良好な状態で、堆積層に覆われる地表面を検出した。第1面では最終的な遺構検出を地表面ではなくベース面で行なったが、第2面では基本的に地表面である第3-1層上面で遺構検出を行なった。

第2面の地形は、特に緑地調査区南側において第2次世界大戦時に投下されたと考えられる爆弾の爆発痕跡により大きな変動を受けている。爆発痕跡である攪乱坑の輪郭は、ひどいところでは数十cmの高さまで隆起しており、クレーター状を呈している。したがってこれにかかる遺構のみならず、周辺の地盤そのものの高低も埋没時のものを残していない範囲が広いものと考えられる。また、緑地調査区の北側は第1面の遺構保存にかかる範囲が広く、結果的に流路部分のみを調査したにとどまり、地形についても多くを知ることはできない。第2面を検出した範囲では緑地調査区北側でT.P.+7.3m前後を測り、緑地調査区南西端でT.P.+7.0m、南東端でT.P.+6.9mを測る。流路付近が高く、南東方向に低くなる地形を呈するものと考えられる。

第2面では弥生時代後期に帰属する遺構を検出した。流路とそれより取水する水路、またその水路より給水を受ける水田が検出され、それぞれは断片的ではあるがおおむね水田景観を構成する要素を確認した。また水田との関係は不明ではあるが、水路に切られる土坑を1基検出した。また第2-2層中で認められた細砂で埋められる小規模な溝については、厳密には第2面の遺構ではないが、攪乱部分で溝43と交差する位置関係にあり、図93に位置のみ記しておく。

以下、第2面で検出された個別の遺構について、順次、報告する。

流路1（図93～95）

流路1は、緑地調査区の北西角において一部を確認したにとどまるものである。面的に検出した範囲は長さ10m程度であるが、第1面溝25の調査時にその下部で流路1に伴う土器群を確認していることから、この範囲まで含むと検出長は15m程度となる。流路の幅については、検出範囲では流路の底に達していないと考えられるので、少なくとも15m以上の幅を持つものと考えられる。検出範囲での流路の深さは2.5mに達し、さらに傾斜が続くと考えられることから、断面がV字を呈する、開析の進んだ流路であると考えられる。流路の傾斜面の方向は浅い部分と深い部分で異なっており、深い開析谷状の部分ではやや西側に向かう面を持ち、浅い部分ではやや北寄りに向かう面を持つ。このことから深い開析谷状の段階での流路は北から西へ抜ける方向を有していたとおもわれるが、下部の埋積が進んだ段階の流路は北東から南西の方向へとやや流れの向きを変化させたものと考えられる。もちろん調査範囲外を含めて考えると、流路自体は蛇行する形状を持つものと推測されることから、調査範囲内での流路の方向についての認識も部分的なものではある。

流路1の埋土は砂礫とシルトを主体とするが、一瞥して複数にわたる堆積の結果であることは明らかである。調査段階においてはそれぞれを個別に掘削することはできなかったが、大きくは3段階に分けて理解することが可能である。もっとも深い開析谷状を呈する部分が相対的に初期に埋没し（第1段階）、その後やや浅い流路の段階が有り、その流路の埋没と流路以外の部分への第2-2層の堆積がみられ（第2段階）、最終的には深さ30cm程度の浅い水たまりのような状態を呈し、それも砂とシルトによって埋

没し（第3段階）、第1面において流路1は完全に埋没している。それぞれの埋積の時期はその堆積層に含まれる遺物から推測されるが、第1段階の埋積については明確な遺物の出土が無く不明である。第2段階の埋積は、その堆積層中に多量の土器が含まれており、第3段階の埋積についても図95の出土状況を示す土器群がみられた。それぞれの土器の帰属年代については後述するが、土器形式的にはほぼ同じ時期に属するものであり、第2段階から第3段階にかけての埋積は極めて短期間の事象であった可能性が高い。また第6章においても詳細な検討を加えているが、第1段階の埋没は第3面段階にさかのぼる可能性も高い。

流路1からのまとまった遺物の出土としては、先述のように第2段階の埋積に伴うと考えられる土器群と、第3段階の埋積時の土器群がある。第2段階の埋積に伴うと考えられる土器群は、図版27の下段に示したように、何らかの意図をもって配された可能性を持つものもあるが、ほとんどは堆積した砂礫に無作為に含まれているといった状況を示す。完形の土器もみられるが、一部を欠く半完形とでも称すべき土器が主体を占める。砂礫に包まれていたため、器壁の遺存状態が良好な個体が多く、甕のみならず壺においても外面に煤の付着する個体が多くみられた。また、堆積の比較的よどんだ箇所と考えられる部分には土器のみならず、植物遺体や木製品の残欠もみられた。流路1の検出は先述のように極めて限られた範囲ではあったが、第2段階の埋積に伴う土器は図示し得たものに限っても70固体に及び、その量の多さは特徴的である。また土器の残存状況が良好であることから推測しても、流路の中で長距離を移動したとは考えがたく、第2段階の埋積をもたらし大規模な堆積作用の過程で、近接地から投入された可能性が高いと考えられる。第3段階の埋積に伴う土器の出土状況は、浅い落ち込み状を呈していた流路の肩部分に多量の土器が隙間無く分布する状態であり、比較的当初の形状を保つものも含まれるが、多くは土圧によりひしゃげた状態で出土した。加えて土器を含む層が比較的粘質のシルトであったことから、土器の取り上げにも困難な状況があり、結果的に多くの土器を良好に取り上げることはできなかった。したがって個体の特定や復元、図示は極限られた個体に限られたが、出土状況から推測すると本来50個体程度がこの部分に存在したと考えられ、壺、甕、高坏を含むが、甕が主体を占める。土器の取り上げ時に特徴的であった点は、1個体の土器の下部に土器の破片が折り重なってみられた点である。正確な個体の特定はできなかったが、異なる個体の破片が重なっていた印象が強い。この箇所の土器の出土状況が意図的な配置を示すものであるのか、あるいは一括して投棄された結果を示すものであるかの判断は難しい。なお、土器群の間隙から石鏃が1点出土している。

流路1から出土した遺物について、第2段階の埋積に伴うものを図96-606～図103-673に、第3段階の埋積に伴うものを図103-674～図104-683に示した。

606～625は壺である。606は大形品で、完形で残存する。平底でやや長胴の体部をもつ。器高の下4分の1付近の調整境が明瞭で、それ以下には明瞭にタタキ痕跡を残しわずかにミガキを施す程度であるが、上位は蜜にミガキを施す。成形時の中断が想起される。内面のミガキも詳細な確認は困難だが、対応する可能性が有る。口縁部はまっすぐに開き、端部は水平な面をなす。607は中形品であるが、やはり体部下半に調整境と接合痕が認められ、成形に中断が認められる。体部下半は内面ハケ調整、体部上半は縦方向のハケとナデで調整を施す。口縁部は外反し、口唇部はヨコナデ後に粗くハケ調整して外側面をなす。体部外面はタタキをハケ調整あるいはナデ調整で消す。608は607に比べ小形である。器壁も厚く調整もナデ程度であるが、全体的なプロポーションは607に似る。612は台付直口壺である。脚部を欠くが、体部から口縁部は完存する。やや扁球状の体部から口縁部が直にのび、内外面とも丁寧なミガ



図93 緑地調査区 第2面全体図

キに覆われる。609～611・613・614・615～618・620～625は扁球形の体部を持つ壺である。直立ないしは内傾気味にのびる頸部から外へ開く口縁部を持ち、口縁端部に波状文、円形浮文、竹管文、凹線文などを施す装飾性の強い壺である。609は口縁部が水平方向に外反し、端部はやや上下に拡張し波状文を施す。体部から頸部外面と頸部・口縁部の内面にミガキをおこない、頸部と体部の境近くに横方向に2条ミガキをめぐる。610は完形で出土した。口縁端部を上下にやや拡張し、端面に凹線文を1条めぐる。調整は、体部外面と頸部内面がミガキ、頸部外面はハケ調整をおこなう。体部最大径付近には帯状に黒斑がめぐる。611は内傾気味の頸部から直線的に外反する口縁をもち、端部は面をもち2個1対の竹管文がめぐる。体部外面はハケ後ミガキ、内面にはハケ調整をおこなう。613は完形で出土した。体部は扁球形で、頸部は内傾気味に直口し、口縁部は外反する。端面には2個1対の円形浮文が4箇所貼りつけられ、その間に円形竹管文がひとつずつ刺突される。また、頸部内面には2箇所に円形竹管文が施される。体部最大径付近には帯状に黒斑がめぐる。口縁部の調整は内外面ハケ調整で、直口部分の外面のみミガキをする。頸部と体部の境はハケ調整で段差がつく。体部外面にはミガキを施すが、成形時のタタキを消しきれていない。内面はハケ調整である。614・615は同様の壺と考えられるが口縁部のみ残存する。614は頸部が直立し、口縁部は短く外反する。内面調整はナデ調整のみであるが、外面は頸部以下にミガキを施している。615の頸部は内傾し、外面に丁寧なミガキを、口縁部内面にも横方向のミガキを施す。616は体部から底部にかけて残存する。体部中位に最大径をもつ無花実形で、タタキにより成形したのちミガキを施すが、消しきれてはいない。内面はハケ調整である。617は口縁部の一部を除きほぼ完形で出土した。体部は扁球形を呈し、短い直口の頸部に広口の口縁部がつき、端部をさらに外側に拡張する。体部には下半と上半で方向を変え、丁寧なミガキが施されるが、その上から縦方向に2条のヘラ描きの曲線を刻んでいる。またこのヘラ描きの対面をややはずれた位置には体部中位



図94 流路1 断面模式図

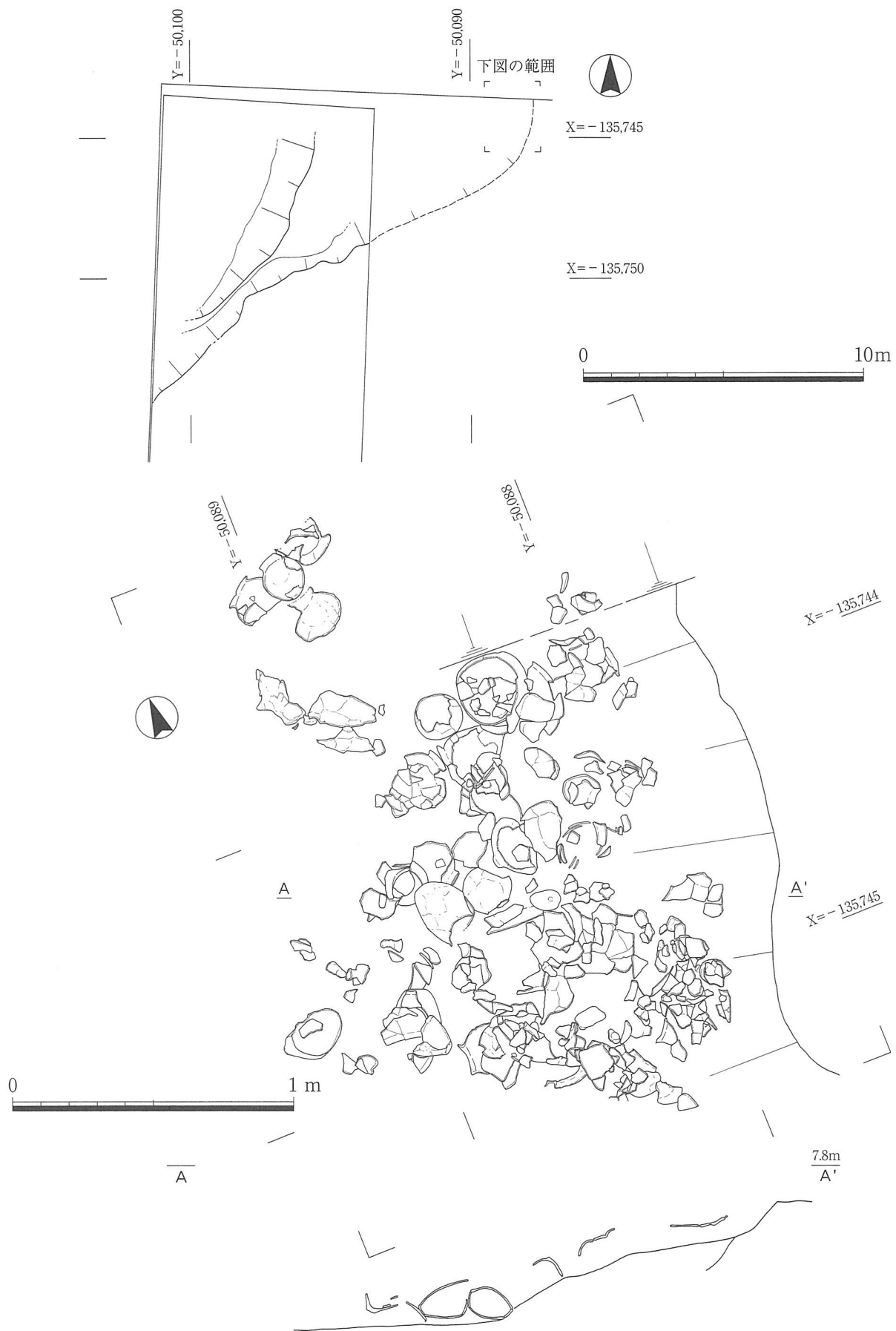
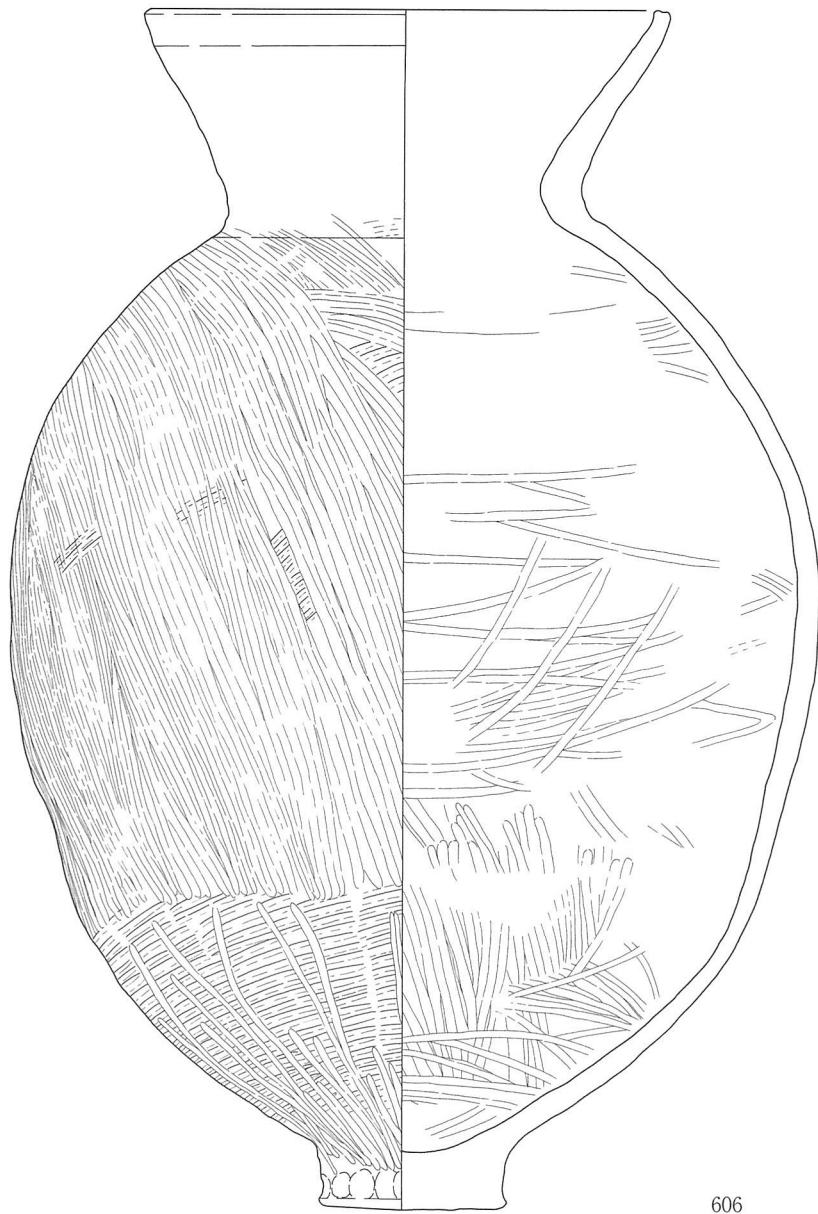
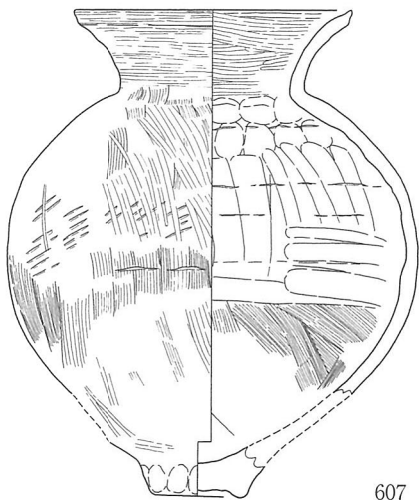


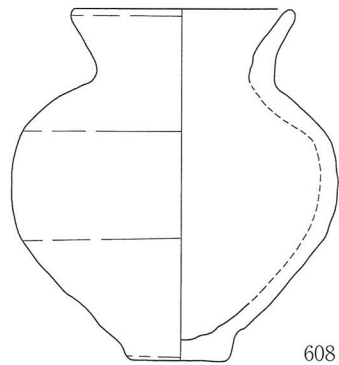
図95 流路1 遺物出土状況図



606



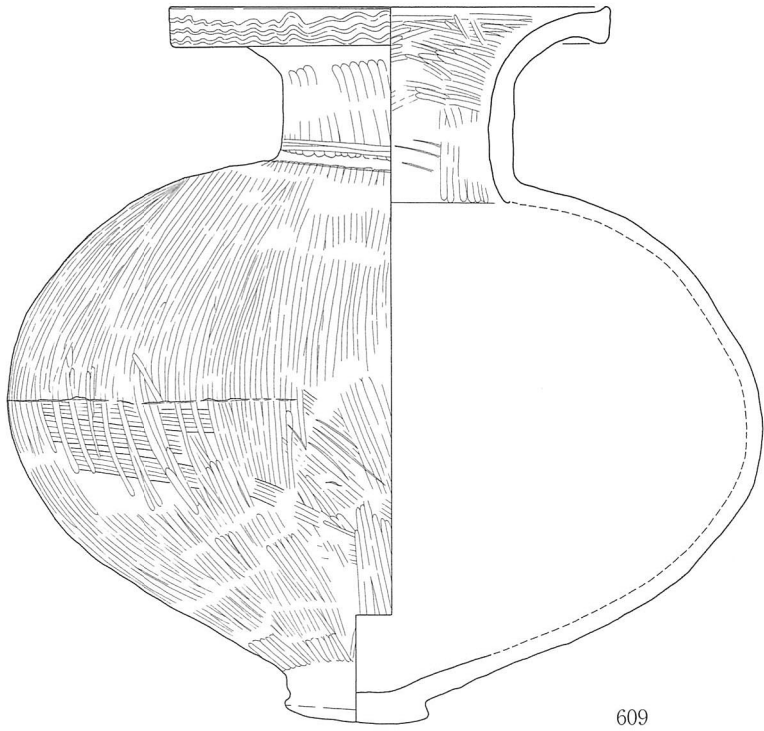
607



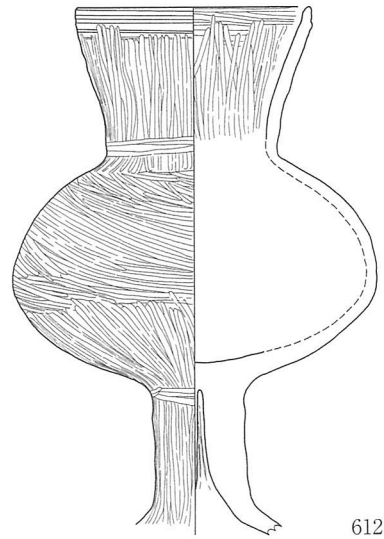
608



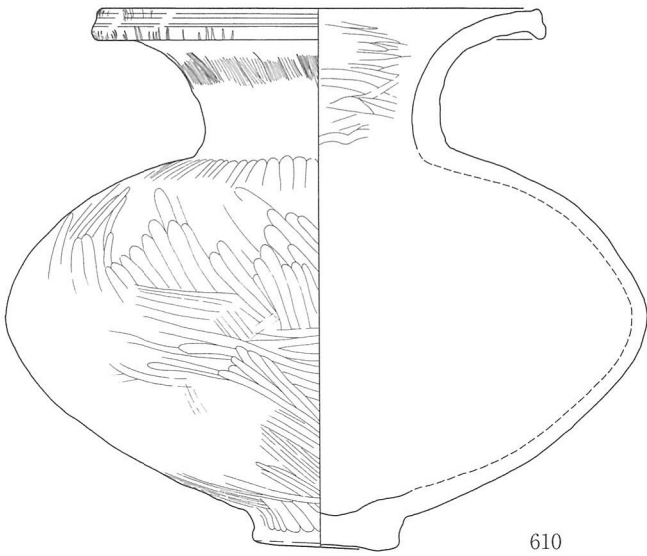
图96 流路1 出土遺物(1)



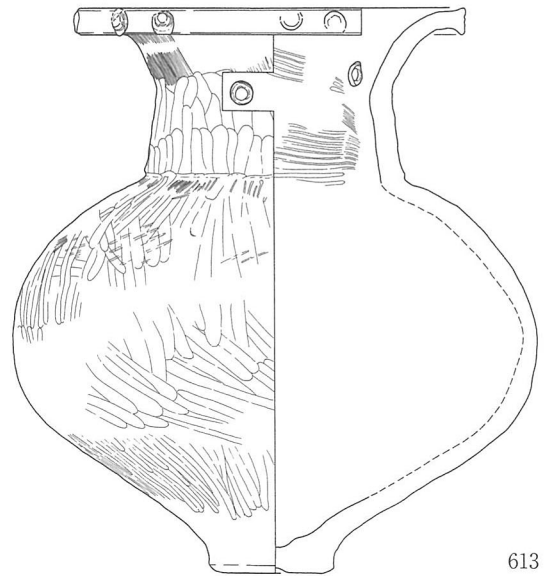
609



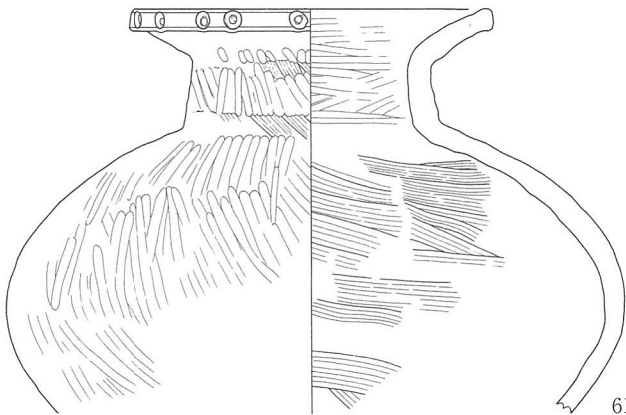
612



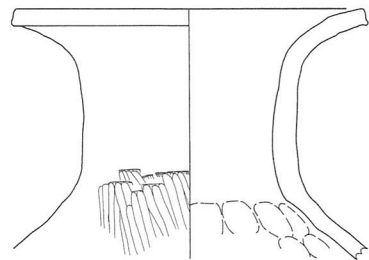
610



613



611



614

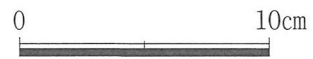


图97 流路1 出土遺物(2)

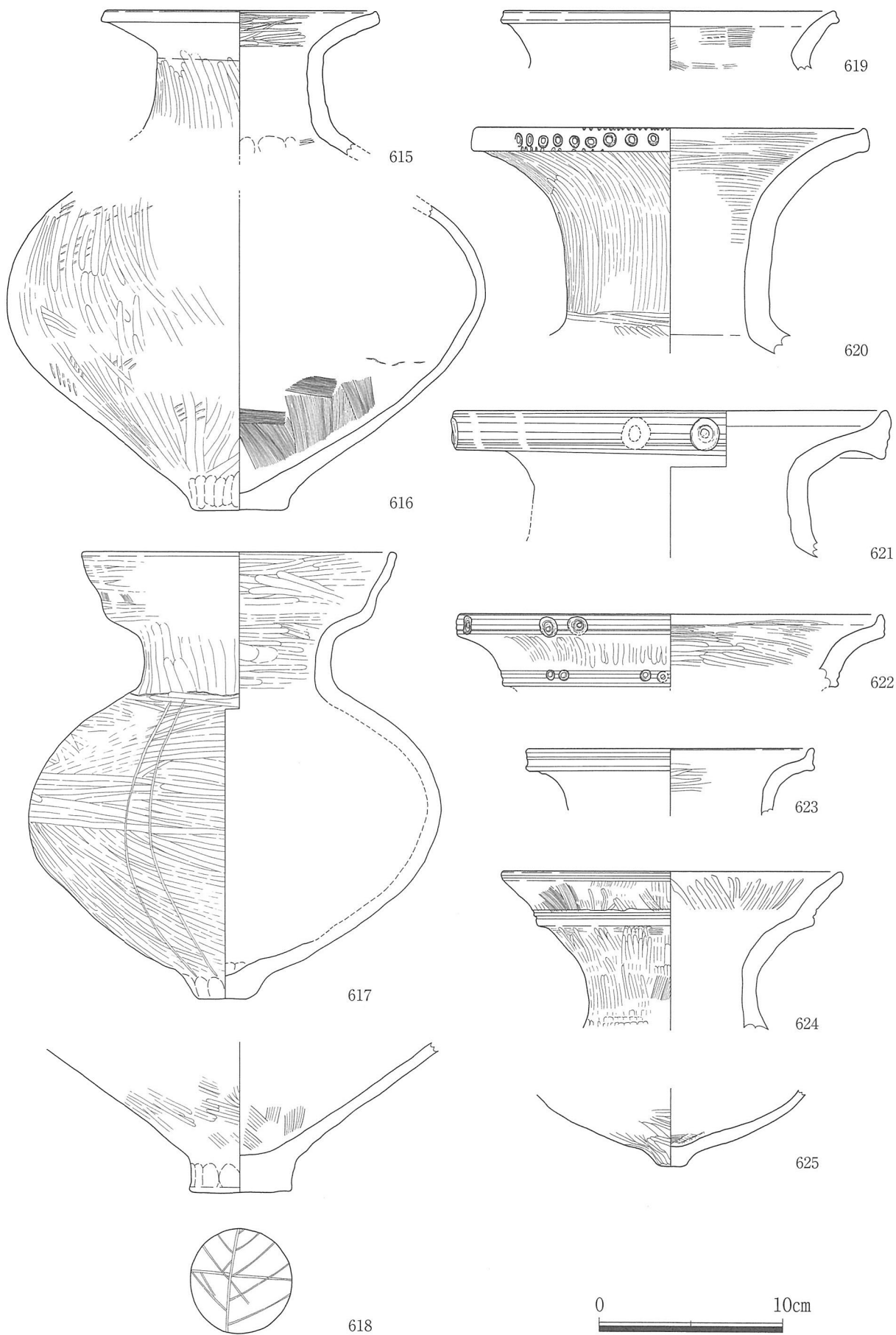


图98 流路1 出土遺物 (3)

に内面からの穿孔の可能性のある孔が認められる。619は短い頸部から口縁部にいたる個体であり、端部に凹線をめぐらす。620～624は壺の口縁部で、加飾が認められるものである。620は緩やかに外反する頸部から口縁部をもつ壺で、口縁端部をややつまみあげ、上下端に刻み目を施し、その間を円形竹管文で加飾する。内外面ともミガキ調整で、頸部と体部の境に横方向のミガキを施す。621は内傾気味に短く立ち上がる頸部から直線的に開く口縁部をもち、端部は上方に拡張され、端側面には3条の凹線文をめぐらす。また2個一組の円形浮文を付す。直径3～6mm前後の砂粒を多く含む胎土である。622は二重口縁壺の口縁部である。口縁端部は上方につまみあげ、端側面に2条の凹線文をめぐらし、2個一組の円形竹管文を刺突する。段部分の外表面にも2条の凹線文と2個1組の円形竹管文を施し、その間を縦方向のミガキで、口縁部内面を横方向のミガキで調整する。623は口縁端部を上方に肥厚させ、端側面に2条の凹線文をめぐらす。内面には横方向の細かいミガキが認められる。624は外反する頸部から二重口縁をもつ個体で、段部分外表面には2条の凹線文をめぐらし、内外面ともミガキを施す。618・625は壺底部である。618は底面に葉脈痕の重複が認められる。625は底部が非常に小さいもので、無花実形の体部と予想される。いずれも外面をミガキが施される。

626～644は甕である。最大径が体部中位よりやや上位に位置し、頸部はくの字に屈曲して短い口縁がつく。いずれも体部はタタキにより成形されるが、タタキ方向の差や切りあいから、成形には中断が認められる。また多くはナデ消すものの、頸部から口縁部にもタタキ痕跡を残すものが含まれる。口縁端部は面をもつものや、上方につまみあげるものがあり、636を除き中～小形品である。

626は完形で出土した。口縁端部に特徴はみられない。体部下半の外表面はタタキの痕跡をナデあるいは板状の工具でナデ消している。628は完形で出土した。口縁端部は平坦面をもつ。体部外表面のタタキは底部際まで及んでおり、また外表面には煤の付着が顕著である。629は体部下半のタタキは底部際でエビオサエにより消されるが、底外表面にはタタキの痕跡が重複する。直接の関係は不明であるが、底は比較的薄い。636は口縁を欠く比較的大型の個体であるが、同様に突出した底部を持ちながらも底は薄い。637は径が小さく、直立する頸部を持ち、短く外反する口縁部に至る。体部外表面のタタキも細かく、形態ともにやや特徴的な個体である。639は全体的にルーズな造形であり、底の突出が小さく薄い。640・641・644は小形の個体である。643はつまみあげた口縁端部外表面に凹線文を施す。

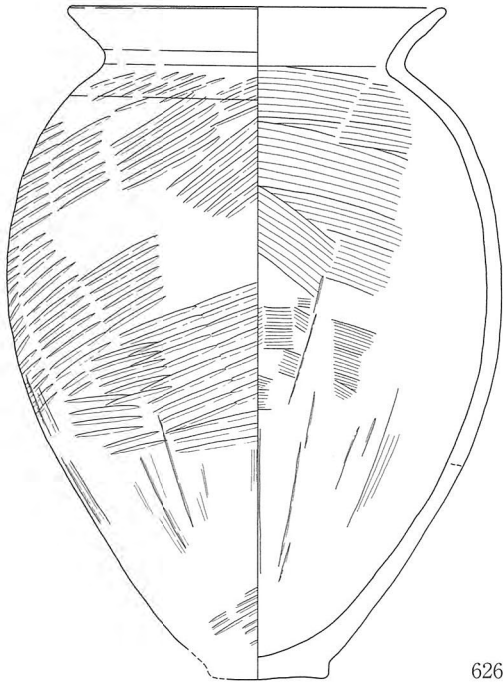
645～647は小型の鉢である。645は内外面とも丁寧なミガキが施される。646は内面に丁寧なミガキを施すが、外表面はタタキが残っており、口縁部は丁寧にナデで仕上げられる。高坏の可能性もある。647は底のみの残存で、上部の形状は不明である。外表面にナデ調整を、内面にハケ調整を施す。

648～650は甕あるいは鉢の底部である。648は外表面にタタキを、内面にクモの巣状のハケ調整をおこなう。649はやや上げ底で、外表面は板状工具によるナデ、内表面はナデ調整する。650も上げ底で、外表面にタタキがみとめられる。

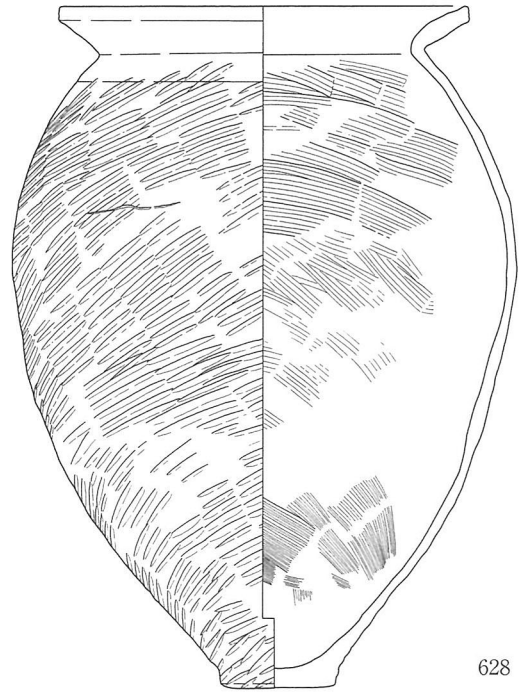
651～655は有孔鉢の底部である。654のように孔の位置が中心を外れたものも認められる。また653は孔を含め、雑な造形である。

656は鉢あるいは高坏の坏部で、椀形の坏部に緩く外反する口縁部がつき、口縁端部は上方につまみあげる。内外面ともミガキを施す。

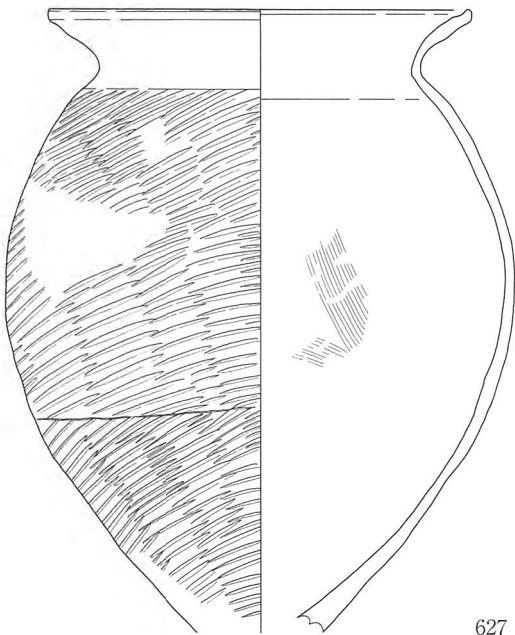
657～663は高坏である。657は坏部がほぼ残存する。浅い坏部に口縁部が斜め上方にのびる。内外面ともケズリを施し、坏部中心部は円盤充填した痕跡がみられる。庄内併行期の高坏であろう。658・659は浅い坏部に外反する口縁部がつく。658は坏部が完形で出土した。内外面に丁寧なミガキを施し、口



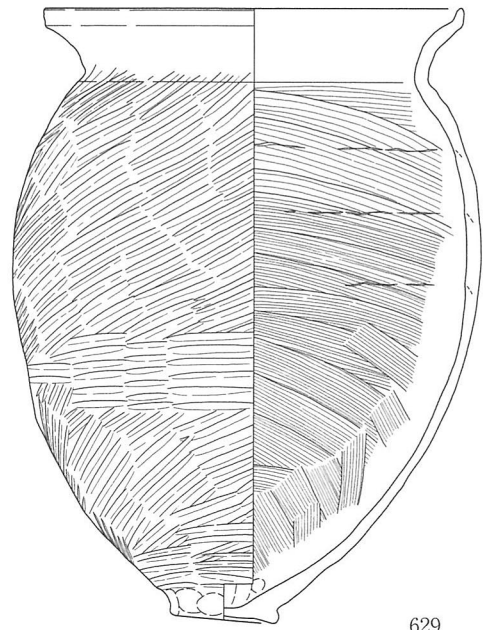
626



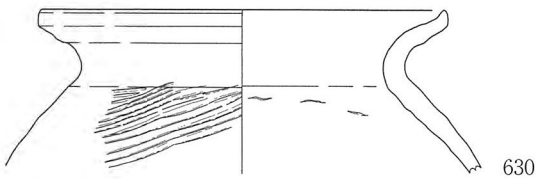
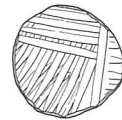
628



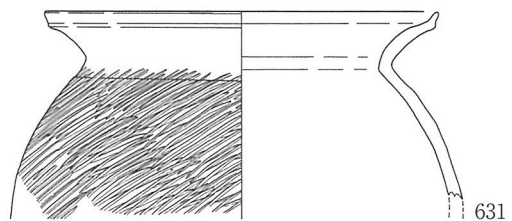
627



629

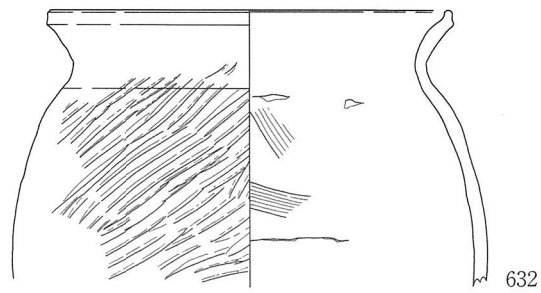


630

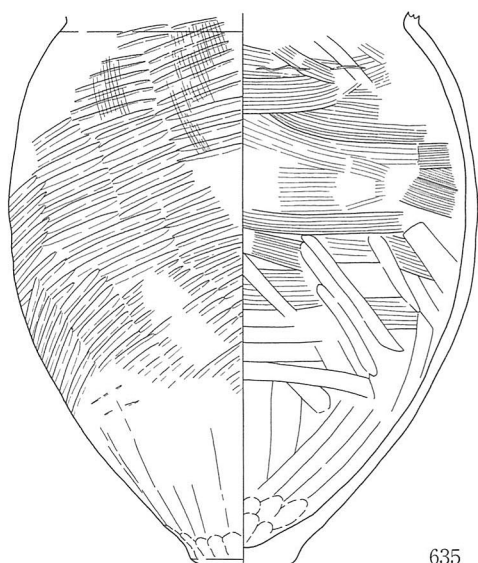


631

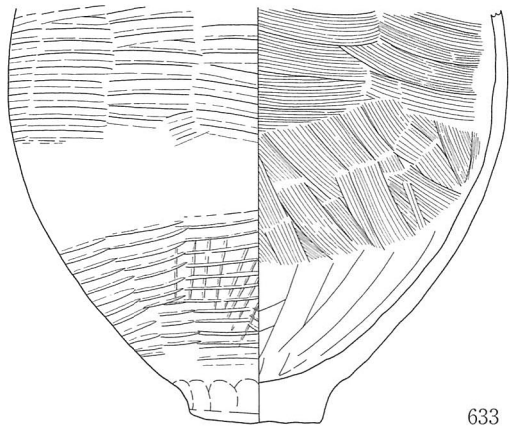
图99 流路1 出土遺物(4)



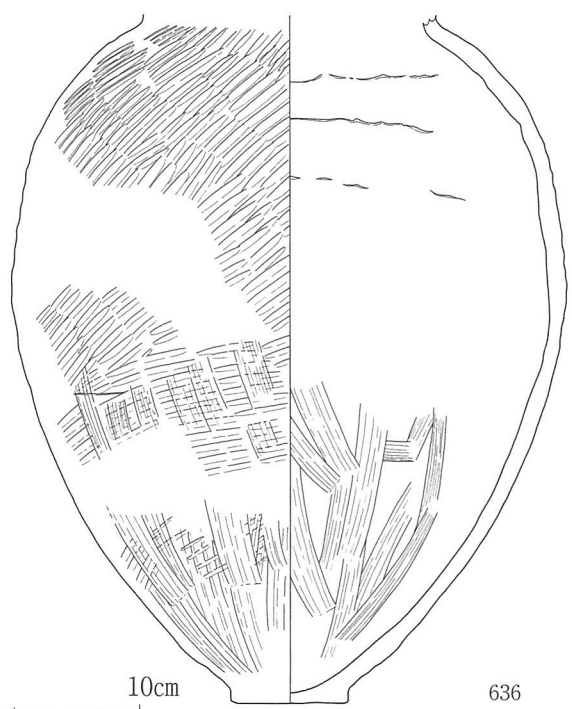
632



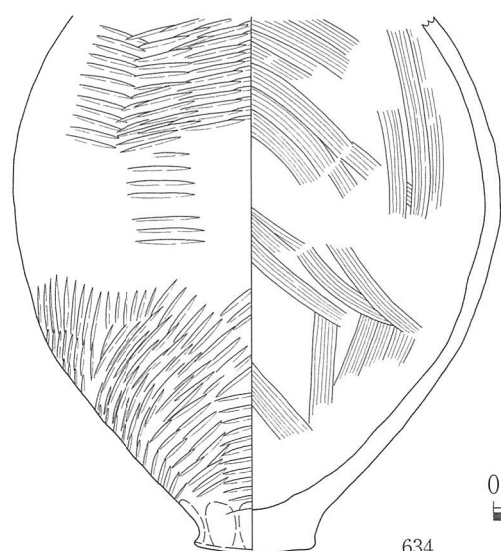
635



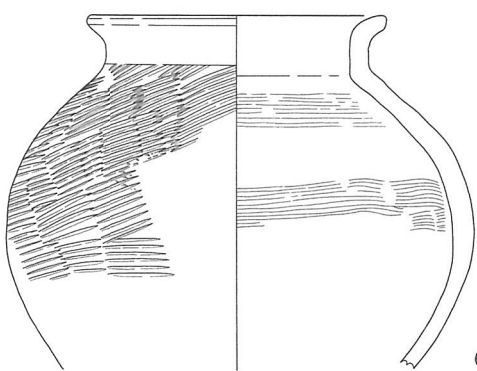
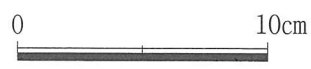
633



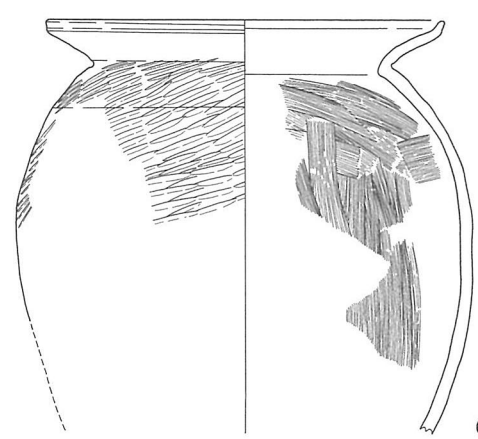
636



634

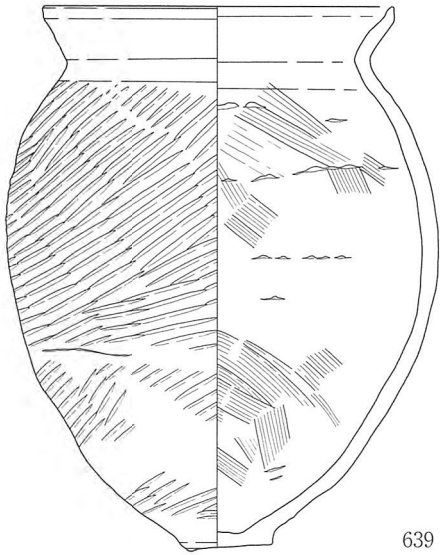


637

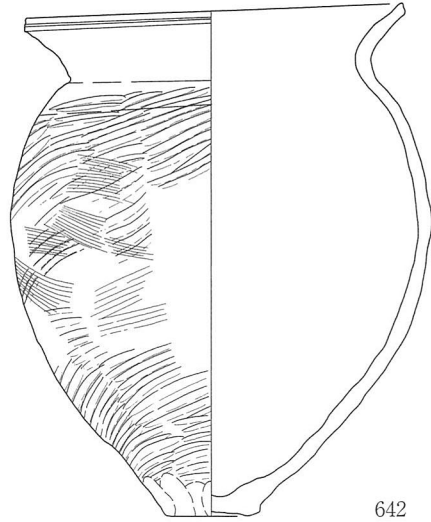


638

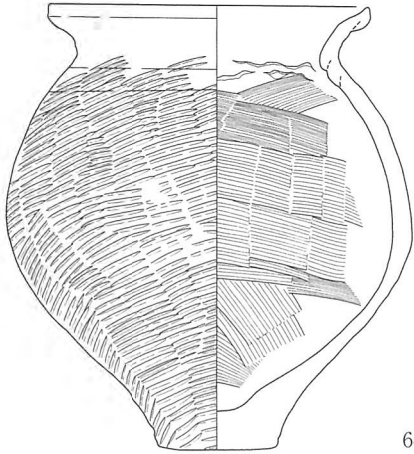
图100 流路1 出土遺物 (5)



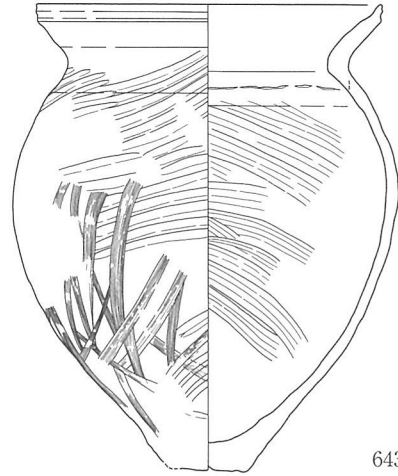
639



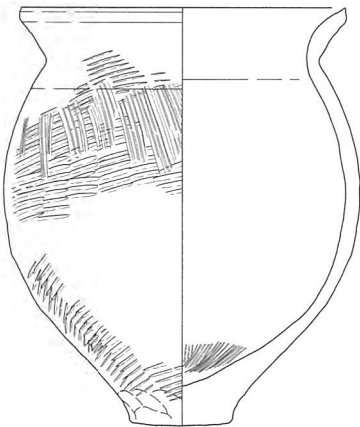
642



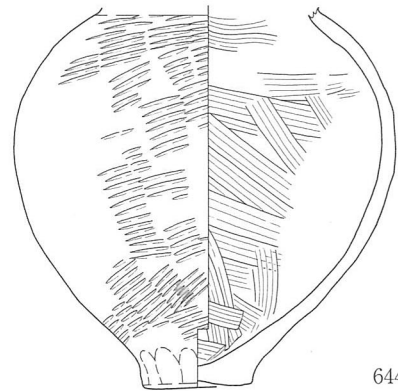
640



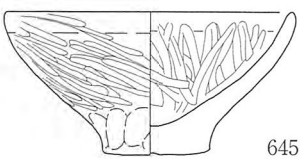
643



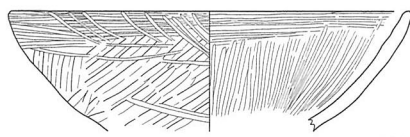
641



644



645



646



647

図101 流路1 出土遺物(6)

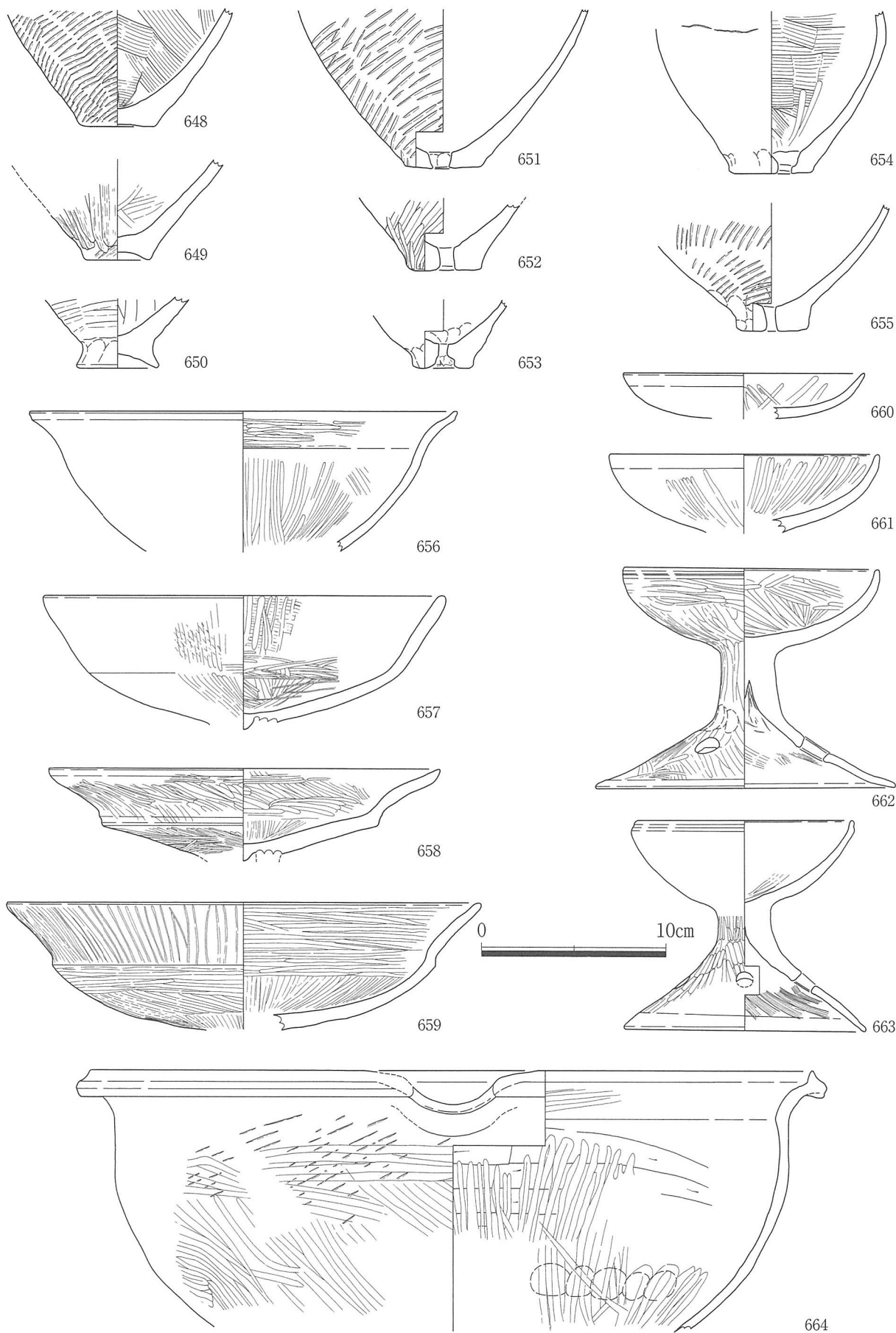


图102 流路1 出土遺物 (7)

縁端部はナデで収める。坏部中には円盤充填した痕跡がみられる。659は坏部の2分の1が残存する。坏部の底部は脚部に直接接合するものである。660～663は椀形の坏部をもつものである。389～662などは浅い椀形で口縁部はヨコナデで丸く仕上げ、内外面ともミガキを施す。662は完形で出土した。椀形の浅い坏部に脚部は中位より屈曲し大きく開く。なお、脚注部は中実である。口縁部外面と脚裾部には沈線が2条めぐらされるほか、脚部内面をのぞいてミガキを施す。脚部内面はハケ目が残り、脚裾部に円形の透かしを3方向に配する。663はやや深い椀形の坏部で脚部は円錐形に開く。口縁端部には凹線文1条をめぐらす。脚裾部には円形の透かしを4方向に配す。

664は大形片口鉢である。内彎する体部から緩く屈曲する頸部を経て、短い口縁端部は上方につまみあげ、下方向には粘土を折り曲げ、ないしは付け足して肥厚させる。片口部には粘土の付け足しをしていない。体部はミガキにより仕上げられるが、タタキの痕跡を消しきれてはいない。内面にはわずかながらケズリの痕跡が認められる。わずかに確認できるのみであるが、外面の頸部直下には赤彩が施される。

665～671は。流路1出土土器であるが、表面の摩滅が著しいことから流路埋没時の土器ではなく、流路に流された古い段階の土器であると考えられる。665は甕口縁部である。頸部がくの字に屈曲し、口縁部は内側におりこむようにして収める。器壁は薄い。666・667は甕底部である。平底から直に立ち上がる体部をもち、外面にはミガキが施される。668は無頸壺で、段状の頸部から口縁部が短く立ち上る。体部には内外面とも丁寧なミガキが施される。669は広口壺の口縁部で、端部を上下に拡張させ、端面に3条の凹線文をめぐらし、上面には扇状文を施す。残存部位が少なく浮文については確認できない。670は大形甕口縁部で、口縁端部を内側におりこみ、端面に凹線状のナデを施す。内面にはハケ調整を施す。671は残存部位が少なく、図示した傾きにも不安を残すが、鉢の口縁部と考えられる。器壁は薄く、口縁端部は外傾する面をもち、断面が「T」字形を呈する。外面にハケ調整をおこなう。

672は木製品で、平鉢である。柄穴より上部を欠損する。樹種はアカガシ亜属である。中央に小孔を持つ。673も木製品の一部で、種類は不明であるが、柄孔とおもわれる方形の孔が空けられている。炭化が著しく、焼却後投棄されたものかと考えられる。

674～683は流路1の埋没最終段階の遺物で、土器については全体的に遺存状態が著しく不良である。674はサヌキトイド製の石鉢で、凹基無莖式に属する。表面の風化は著しい。675～678は甕で、口縁の残るものでは端部を上方に摘み上げるものが有る。外面のタタキ痕跡から、体部の成形に中断が推測される。679は有孔鉢ないしは甕の底部である。680は小型の鉢、681は壺の底部である。682は器台ないしは脚付鉢と考えられる、残存状況は極めて不良である。683は壺で、比較的遺存状況は良好である。扁球形の体部からほぼまっすぐにのびる頸部を持ち、大きく外反する口縁端部を上方につまみあげる。体部下半に内外面とも調整の境が明瞭で、成形の中断が推測される。

これら流路北出土遺物の時期について検討する。まず、壺については直口壺や広口壺が中心となる。器形に注目すると、体部が球形あるいは扁球形を呈しており、中位で膨らむものがほとんどである。また外面にミガキを施すもの、口縁部などを加飾するものが多くみられることから森田編年VI様式の初期の様相であると考えられる。さらに、423・346など二重口縁壺がみられることから森田編年VI-1様式に相当するといえよう。胎土を肉眼観察しても、加飾された壺や二重口縁壺が搬入品とはいききれないため、特殊な用途を想定できるかもしれない。次に甕についてであるが、大まかに中・小形品で構成されており、外面タタキ成形後のハケ調整が省略されている。また、内面もハケ調整するものが多いこと

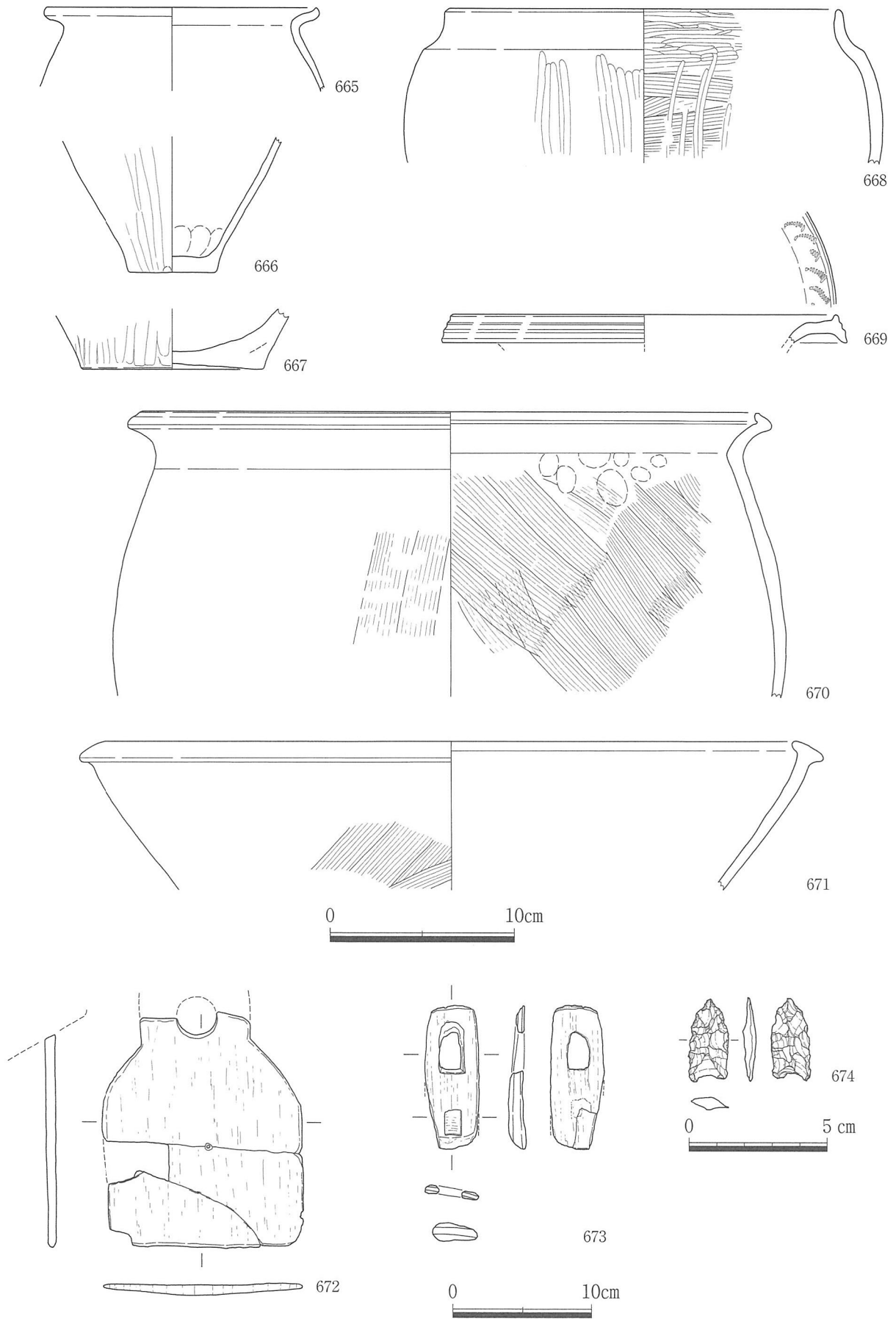


图103 流路1 出土遺物(8)

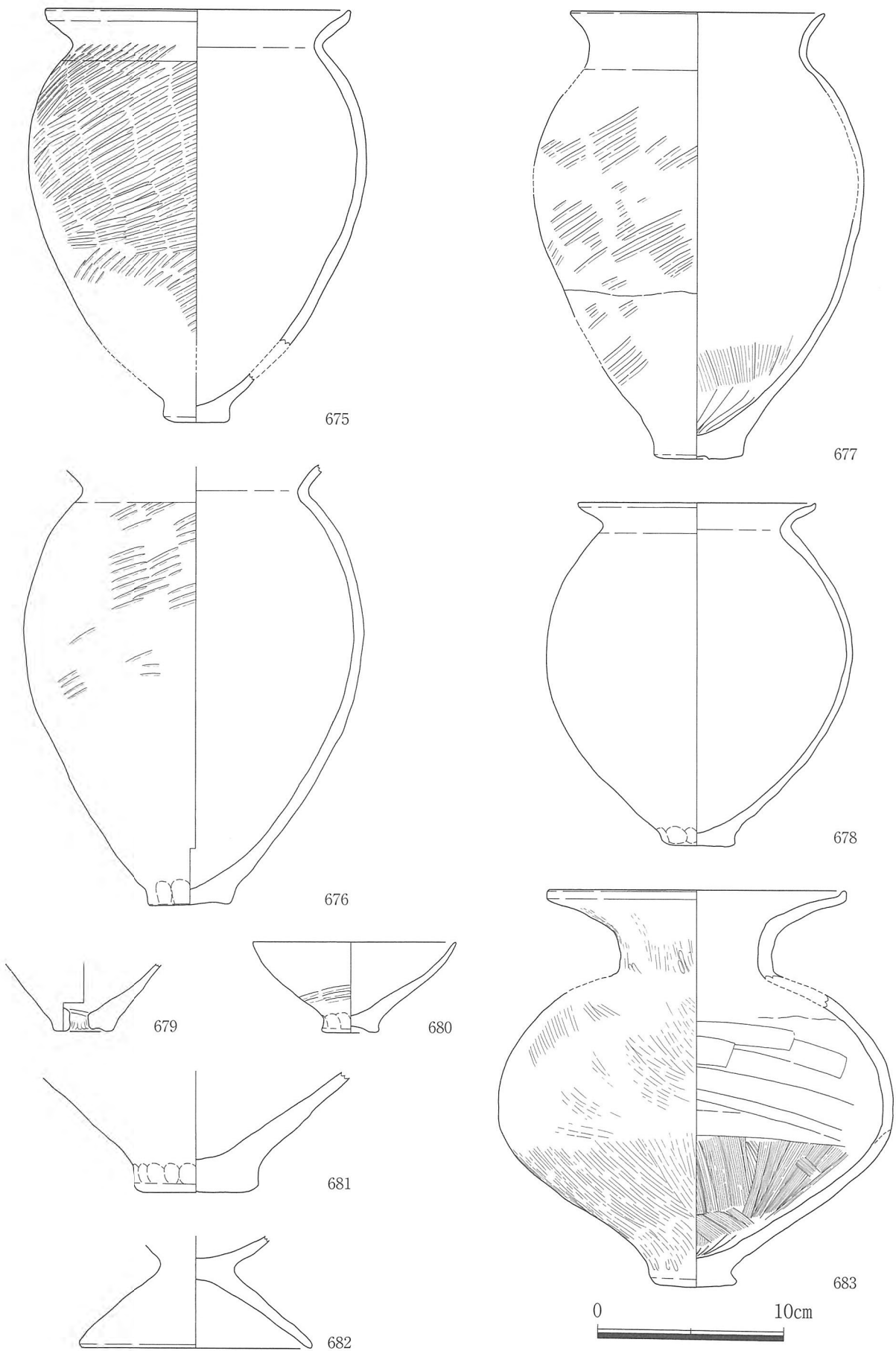


图104 流路1 出土遺物（9）

から、森田編年Ⅵ様式に相当すると思われる。鉢や高坏も丁寧にミガキが施されており、粗製品とはいえないものばかりである。椀形の坏部をもつ高坏も、まだ坏部の浅いもので、口唇部のヨコナデがみとめられないことから、森田編年Ⅵ様式の初期段階に相当すると思われる。新しい様相を示す器種として、大形片口鉢があげられるが、調整も丁寧で焼成も他の遺物と同様に良好であることから、時間差は小さいと思われる。さらに、同じ森田編年Ⅵ様式に相当する他の遺構出土遺物と比較すると、胎土や焼成がしっかりしたものが多く、後者とは作られた時期あるいは目的が異なっているものと考えられる。したがって流路1出土遺物は、Ⅵ-0・1様式に相当し、特に加飾性の強い壺などは祭祀など特定の目的をもって作られたものと考えられる。665~669のように森田編年Ⅳ~Ⅴ様式に相当すると思われる土器は摩滅が著しく、流路よりも古い段階の遺物が流れ出し、含まれたものと考えられる。

流路2 (図93)

流路2は流路1の南に位置する流路で、流路1との正確な関係は不明であるが、緑地調査区の北西部分では約1.5~2.0mの間隔で流路2北岸が位置する。流路2についても第1面の遺構保存のため第2面の検出範囲が限られたことから、一部の検出にとどまり、全容については不明な部分が多い。全てが同時に機能していた訳ではないが、10~15mの幅を持つ流路であると推測される。深さはもっとも深いところで、第2面から約1.5mの深さを測るが、流路1と比べれば浅い。全体の形状がわからない中で部分的な状況認識にはなるが、北端で1箇所分岐する状況が認められた。分岐した流路は幅5m程度のものであるが、この部分の埋土はさらに南側の堆積によって切られており、流路2の中では先行して埋没した部分であると考えられる。流路2の北岸に沿うこの部分は底に粗砂~小礫が充填する溝状の侵食痕がみられ、激しい水流で侵食された部分であり、流路2の初期の段階に埋没した部分であると考えられる。

流路2の南側では後述する水田域に配水するためのものと考えられる水路が分岐する。溝43、溝44が該当するが、緑地調査区の東端で検出された溝42も直接の取水口は検出していないが、流路2から分岐したものである可能性が高い。溝43、溝44の分岐点付近は流路内の侵食痕跡が著しく、流路岸も複雑な形状を示している。溝44の分岐点付近に杭列が認められた。一部は埋土の砂礫中から確認できたが、多くは流路底において検出し、その数20本以上を数える。用いられる樹種は広葉樹で、丸太のものはシイノキ属、ミカン割されるものはコナラ亜属クヌギ節であった。杭は流路あるいは溝44の流れの方向に並んで打設され、検出範囲では3列が確認される。この方向から推測すると、杭列は溝44への整流を目的としていた可能性が高い。また杭列は北側のコンクリート基礎の下にのびる可能性もあり、全体として溝43への配水の為の堰を構成していた可能性も残される。先述のように流路2の最も北よりの部分は比較的初期に埋没し、流路自体は相対的に南側へ移動したことは埋土である砂やシルトの状況からも明らかである。南側の杭列や溝への取水口の状況は最終の埋没前の状況であろうと推測するが、流路としての最終の形状がどの程度の規模であったかについては確認できなかった。

流路2では流路1でみられた多量の土器を投棄するという状況はみられない。出土遺物としては埋土の砂に含まれる土器片がみられるが、細片に限られ、摩滅が著しいことから流水に流されてきた遺物であると考えられる。

図105-684~695は流路2から出土した弥生土器である。684・685は甕で、685は短く開く断面三角形の口縁端面に1条の沈線を巡らし、不規則なキザミを施す。内外面ともハケで調整され、タタキ痕跡は残らない。686は広口壺の口縁部で、下垂口縁に3条の凹線文を施し、推定6個の円形浮文を付す。687

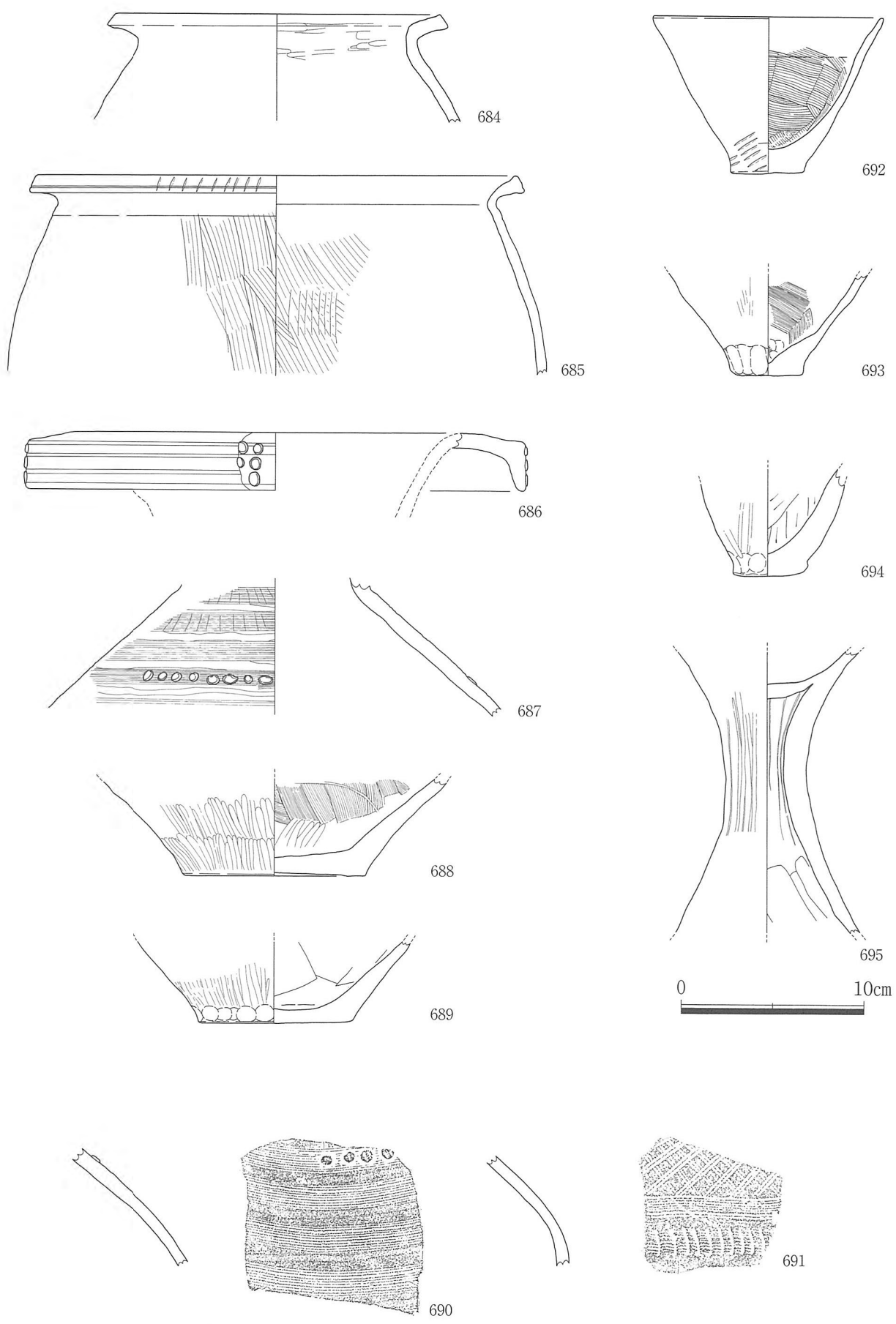


图105 流路2 出土遺物

は壺の肩部で、頸部のくびれ部に突帯文を貼りつけた痕跡があり、体部上半外面には簾状文2帯と残存範囲で4帯の櫛描文を施し、上から2帯目の櫛描文のうえに8個1組の円形浮文を貼りつける。それぞれの簾状文、櫛描文の間には横方向のミガキが認められる。690も壺体部片で、687と同一個体の可能性が高い。691は残存部位が少ないが、壺あるいは鉢の体部片である。外面には斜格子文、櫛描文、簾状文を施し、内面はハケ調整をおこなう。688・689は甕あるいは壺の底部と思われる。いずれも平底で、体部外面には丁寧なミガキが認められる。

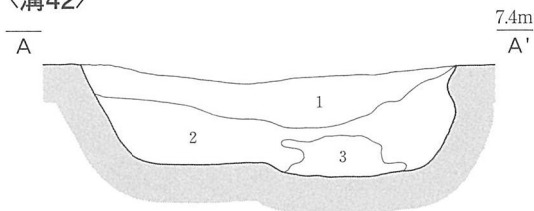
692はタタキ成形された鉢で、内面にハケ調整をおこなう。693は鉢あるいは甕の底部と考えられる。底部外面はユビオサエをし、内面はクモの巣状のハケ調整をおこなう。底部にはドーナツ状に粘土を貼りつけて平底とする。378は小形鉢で、流路1出土の647に類似する。

695は高坏で、脚部と、坏部の底部にあたる円盤状の粘土塊が残存する。脚注部は中空でラッパ状に開くもので、内面に絞り痕がみとめられ、外面はミガキが認められる。

流路から出土した遺物は、いずれも弥生時代中期後半の特徴を示す。特に櫛描文等で装飾された壺は河内産土器の影響を強く受けたものであり、また垂下口縁がつく広口壺は摂津で弥生時代中期に盛行する長頸壺の口縁部にみられる。すでに凹線文がはいっており、これらは森田編年Ⅳ様式に相当しよう。

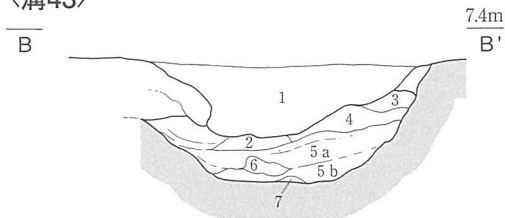
流路1・2は部分的な確認にとどまったが、水田への取水を担う基幹流路であったと考えられる。そ

〈溝42〉



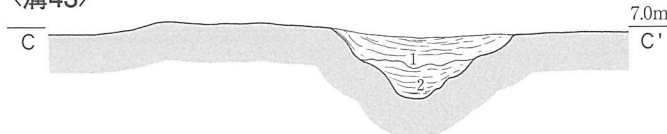
- 1 5Y5/2 (灰オリーブ) 粗砂・2.5Y4/1 (黄灰) シルト、ラミナ 顕著炭化物含む
- 2 2.5Y6/1 (黄灰) 粗砂～礫主体、細砂～シルトラミナ状に入る ベース層のブロック含む、木片含む
- 3 2.5Y4/1 (黄灰) シルト質極細砂、細～中砂多く含む (ベース層ブロック?) (1～3は洪水による堆積層)

〈溝43〉



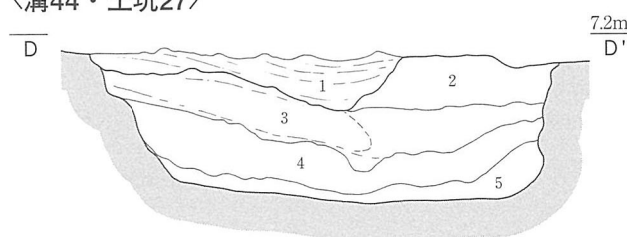
- 1 2.5Y4/1 (黄灰) 細砂、ラミナ顕著
- 2 2.5Y6/2 (灰黄) 中砂、上位にラミナ顕著、西部上部にシルト 多く含む
- 3 2.5Y6/2 (灰黄) 極細砂、下方に礫 (直径5mm以内) 多く含む 東方上部にシルト質土多く含む
- 4 2.5Y4/1 (黄灰) 極細砂～シルト、ブロック土少量含む ラミナ東方向に顕著
- 5 N4/0 (灰) 極細砂、中央上半にラミナ顕著、東方下半に同色 の粗粒砂 (5b) 5a: 極細砂～シルト、5b: 粗～中砂を比較的多く含む
- 6 2.5Y5/2 (暗灰黄) 中砂、上半にラミナ顕著 (砂層)
- 7 2.5Y6/2 (灰黄) 細砂、上半にラミナ顕著

〈溝43〉



- 1 5Y5/1 (灰) 極細砂、ラミナ顕著、粗砂ラミナ状に入る 2との境にシルトの薄い層を挟む
- 2 2.5Y7/3浅黄、細～中砂、ラミナ顕著、上位に粗砂若干含む

〈溝44・土坑27〉



- 1 5Y5/1 (灰) 極細砂含むシルト、Mn沈着、ラミナ顕著 (溝44)
- 2 2.5Y4/1 (黄灰) 細砂含む極細砂、礫 (直径5mm以下) を微量 含むラミナ下半に顕著、ベースブロック土 (第4a層) が東側 から混入
- 3 5Y4/1 (灰) シルト～極細砂、礫 (直径2～3mm) を微量含む (西半図化範囲砂層混入)
- 4 5Y4/1 (灰) ～N3/0 (暗灰) シルト～極細砂、一部流水作用 により5の礫 (直径2～3mm) が巻き上がる
- 5 2.5Y6/6 (黄褐) 粗砂、Mn沈着顕著、礫 (直径2～3mm) を多く 含む



図106 溝42～44、土坑27 断面図

の流走する方向は、北東から南西をとるものと考えられ、おおむね条里制以前の、豊中台地から猪名川への流路の方向を示すものと考えられる。底までの掘削は行なっていないものの、確認調査区においても第1面以下に対応すると考えられる砂礫層を確認しており、加えて、豊中市教育委員会による第3次調査においても調査区北端において自然流路が確認されていることから、個々のつながりは不明な点を残すものの、一連の流路であったと考えられる。

溝42 (図93・図106)

緑地調査区東端で検出した水路で、延長約12m分を検出した。幅2.0m前後、深さ50cm前後を測り、壁の立ち上がりは比較的急である。ほぼ砂礫により埋没する。遺物は弥生土器の細片が出土したにとどまる。

溝43 (図93・図106)

流路2より取水し、南側の水田域へ至る水路である。中央に攪乱をはさむがおおむね35m程度を検出した。流路との取り付け角度は鋭角を持つが、3m程度と35m程度のところで段階的に角度を変え、南下する方向を取る。現代の地形改変の影響を考慮する必要はあるものの、相対的には取水口付近が深く、南側で浅い。取水口付近で幅1.5m、深さ40cmを測り、南側部分で幅1.0m、深さ30cmを測る。取水口付近では溝の掘りなおしが認められるが、古い段階の溝は第3面に対応すると考えられる。南側の水田域では溝の両側に部分的ではあるが大畦畔が設置されている状況が認められるが、調査範囲内では溝43から水田への水口は認められない。埋土は砂礫主体の堆積層である。遺物は出土していない。

溝44 (図93・図106)

詳細は確認できなかったが、緑地調査区西端で流路2から取水する水路と考えられる。先述のように流路2内に打設された杭列は溝44への取水にかかわる可能性が高い。取水口付近では幅3m程度を測るが、検出部分の南端では幅1.5m程度に減じる。深さも取水口付近で70cmを測るが、南側では30cm程度と浅くなる。このことから水路として適当であるかどうかの疑問が残る。埋土は砂礫～シルト主体で、遺物は出土していない。

土坑27 (図93・図106)

緑地調査区南西部に位置する土坑で、コンクリート基礎と溝44に切られており、全容は不明である。径2.5m、深さ70cm程度の円形の土坑で、壁の立ち上がりは急である。シルト、砂礫で埋没する。遺物は出土しておらず、性格も不明である。

水田 (図93)

第2面では緑地調査区の南東部分で水田域を確認した。流路2から幅20m程度の間には水田畦畔は認められず、後述する自然化学分析においてもこの範囲の水田利用には否定的な結果が示される。水田部分では島状高まりと小畦畔を検出した。島状高まりは径5.0m程度の円形を呈し、水田面からの高さは10～15cmを測る。南側に2本の小畦畔が取り付け、北側は水田域の北を画する段に接する。高まり自体は水田作土と同じ土壌で形成されており、ブロック土などは確認できなかったが盛土により形成されることが考えられる。

小畦畔は部分的に確認されたが、高さが低く、平面形状も不定形で、遺存状態は不良である。島状高まりあるいは溝43ともなう大畦畔に取り付く状況が確認されたが、水田区画も明瞭ではない。

以上、第2面に帰属する遺構を順次、報告した。続いて第2面を覆う第2-2層出土遺物を報告する。

図107・図108に示した弥生土器及び石器であり、一部確認調査区出土遺物も含んでいる。確認調査区出土遺物には流路出土遺物が含まれる可能性が有る。

696・697は甕である。696は口縁部があまり屈曲せず、端部に側面をもつ。体部外面タタキ、内面はハケ調整をする。ずんぐりとした器形で、体部に比べ、相対的に底の径が大きい。697は短く外反する口縁部を持つもので、体部の上位に最大径を持つものと考えられる。体部内外面ともハケ調整である。699・700は高坏である。699は坏部のみ残存し、皿形の坏部に外反する口縁部をもつ。口径に比して坏部の高さが低い。また口縁部の外反も顕著である。700は中空の脚柱部で、内面にシボリメを残す。698は小型の鉢である。平底で、体部が直線的に開く。701～704は壺である。701は二重口縁壺の口縁部で、外面に波状文をめぐらす。702は残存部位が少なく、傾き、口径とも不確定であるが、口縁端部を上下

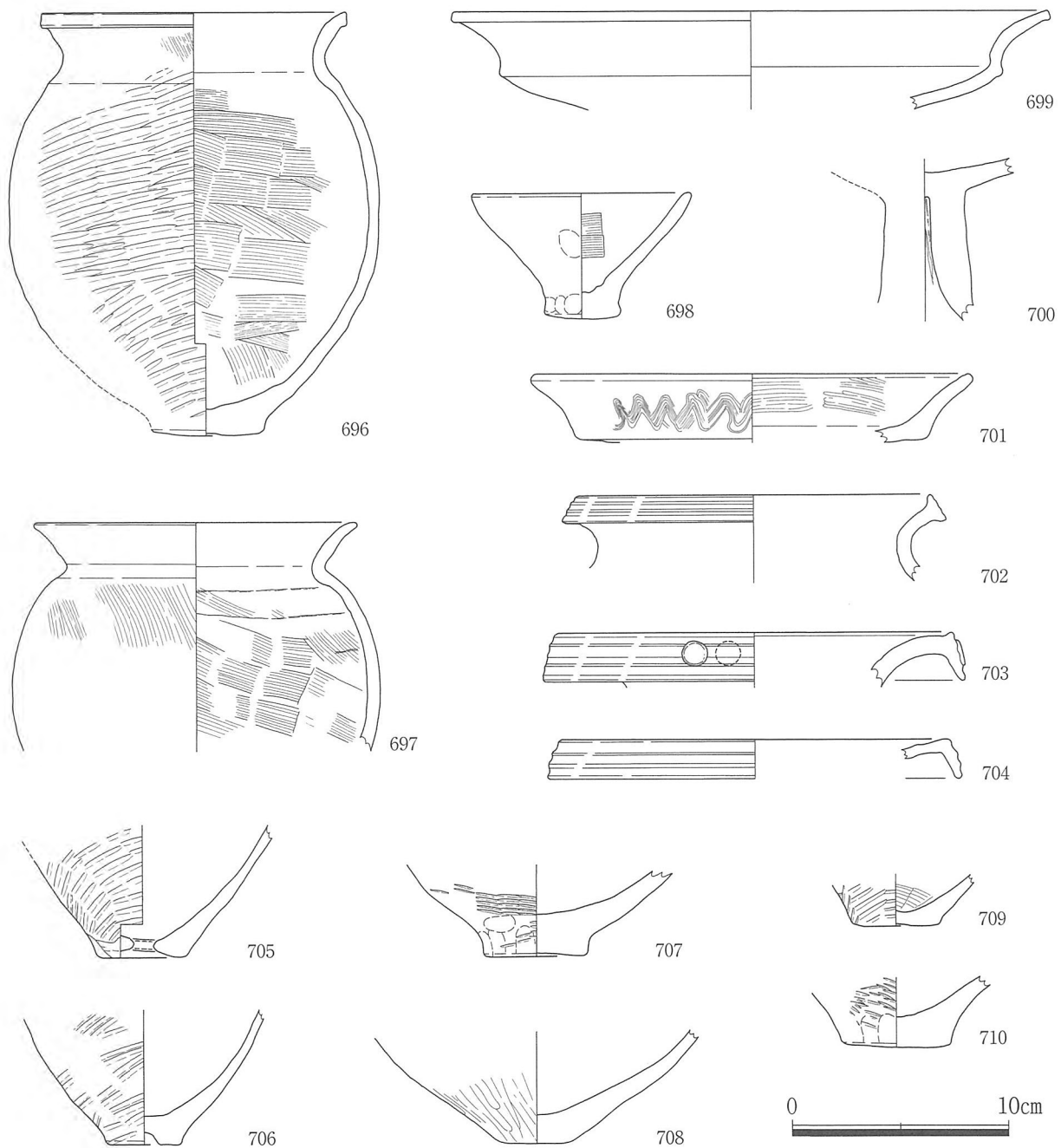
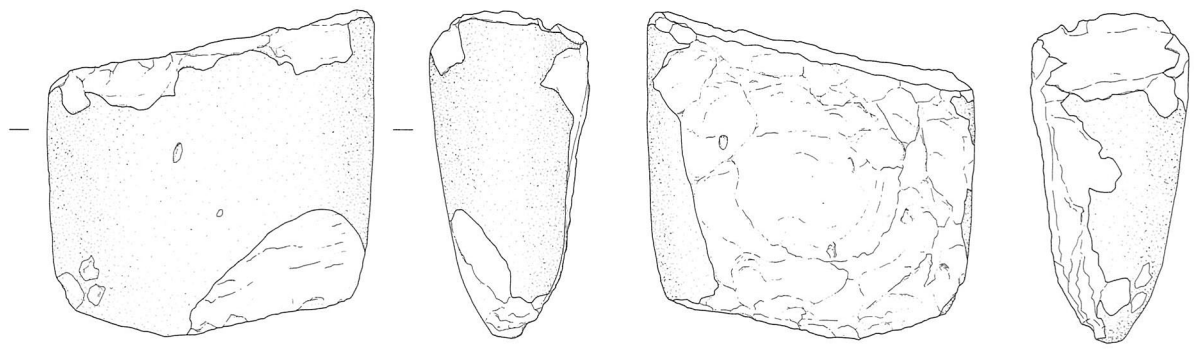
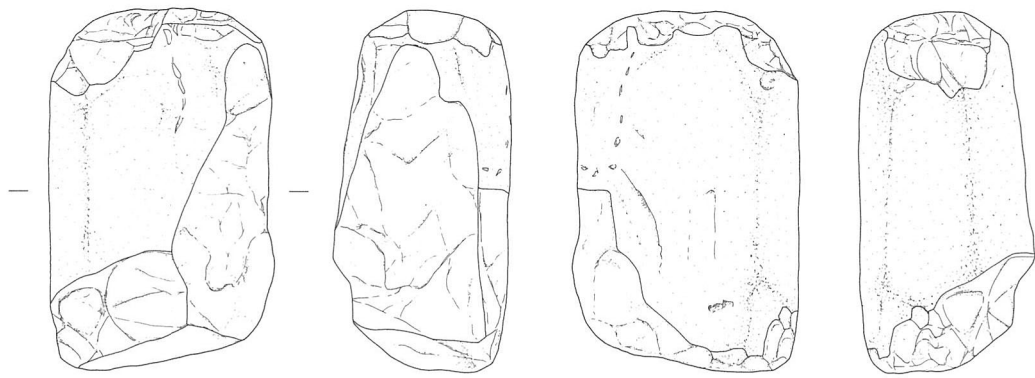
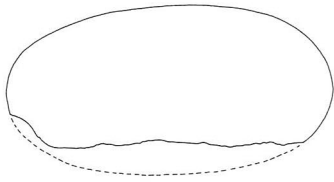


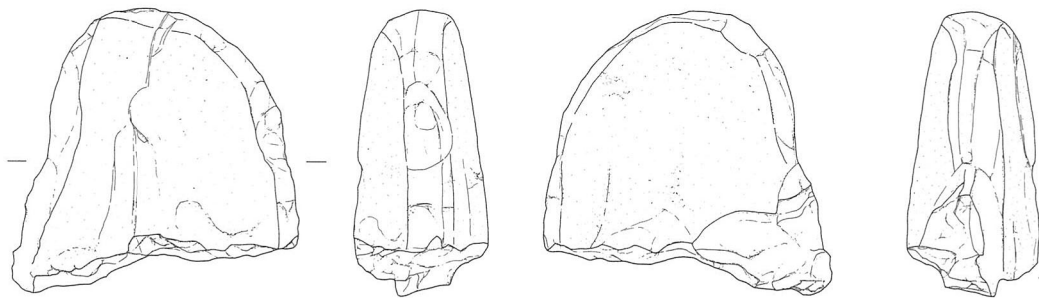
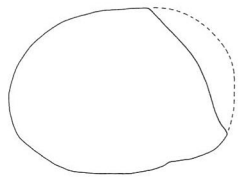
図107 第2層 出土遺物(1)



711



712



713

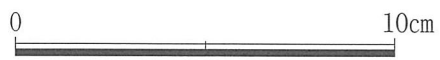
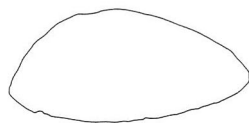


图108 第2層 出土遺物(2)

に拡張し、3条の凹線文を巡らす。胎土が他の土器と異なっており、器形からも東部瀬戸内系の土器と思われる。703・704は口縁端部を垂下させる弥生中期の広口壺である。端面にはそれぞれ3条の凹線文を施し、703には2個1対の円形浮文を付すが、1箇所は剥離の痕跡のみである。なお703は確認調査第7区の出土で、流路1あるいは流路2に続く流路埋土出土の可能性が有る。流路2出土の弥生時代中期の土器と比べ、残存状況が良好である。705～710は壺や甕あるいは鉢の底部である。705は有孔の底部である。705～707・709・710はタタキ成形したものである。708は外面ヘラミガキをおこなっており、壺であると考えられる。

711～713は石斧で、711は太型蛤刃石斧の刃部、712・713は基部と考えられる。いずれも破損しており、全景を窺うことができない。

第4節 第3面の遺構・遺物

第3面の調査は緑地調査区の南半部分、おおむね東西39m、南北27mの範囲についてのみ実施した。第2面同様、中央の爆弾痕跡と、西側のコンクリート基礎が遺構面を攪乱している。

第2面は堆積層に覆われる地表面であり、土壌である第3-1層の上面を遺構面とした。したがって、第3-1層を除去した面、すなわち第3-2層上面においても第2面に帰属する遺構が検出される可能性があるが、第3-2層自体は部分的にしか残存しておらず、第3面の検出予定範囲では多くの部分で第3-1層が第4-1層に接している状況であった。このため第2面の調査終了後は第3-2層上面における遺構検出は行わず、引き続き第3面の検出を行なった。第3-2層は基本的にシルトの部分为主体であるが、緑地調査区南西部では第2面の溝44付近から南東の方向へのびる流水痕跡が溝状に第3面を侵食している状況が認められ、この周辺には砂礫が分布する。

第3面は基本的に第2面と同様の地形環境を示すが、緑地調査区の南側に位置する攪乱による周囲の地盤の隆起は一層顕著であった。検出した第3面の標高は7.1m～6.8mを測り、流路付近が高く、緑地調査区の南西端が最も低い。

第3面では第2面で検出した流路2および溝43が第3面段階から営まれたものであることを確認した以外に、遺構は確認されなかった。遺構の存続時間の中では同一の遺構であることは当然であるが、帰属する面が段階的には異なることから、それぞれ第3面に帰属する遺構として認識した。

流路3は第2面流路2に同じ遺構である。検出範囲は限られるが、緑地調査区の中央部分を北東から南西の方向へ流走するものと考えられる。基本的な形状は第2面段階と変わらないが、第3面において溝44が分岐する地点の西側は第3面段階の状態から土砂が堆積し、流路内の埋没が進んだ状態が第2面に対応することが確認された。ただ、流路内を埋積する砂礫は細かな単位で堆積し、さらに流底の侵食も各所で認められることから、流路と遺構面の対応も単純に2時期に整理できるものではない。

第2面溝43の第3面段階の形状は図106の土層断面図に示したように、同一箇所ですらに深い形状をとるものであるが、第3面からの深さは30cm程度であり、第2面段階の深さとそれほど変わらない。第3面段階の溝は大型攪乱から北の部分においてのみ確認することができた。大型攪乱以南はやはり溝43に踏襲される形状の水路が設置されていたものと推測されるが、痕跡は確認できなかった。第3面の埋没後同じかそれ以上の規模で第2面段階の水路を再掘削したことにより痕跡を残さないものになったと推測する。同じような関係は第2面で溝44とした遺構においても認められる。こちらも第3面段階の流路からの分岐は確認できるが、南側ではその痕跡を認めることはできなかった。

流路あるいは溝以外の第3面は平坦な面を示し、水田畦畔などは認められない。第3面の地表面は土壌とおもわれる砂礫を多く含む暗色のシルトであるが、第6章において報告するプラントオパール分析においても稲作の存在は否定的な結果が得られた。調査範囲に限れば流路周辺の後背湿地という環境であったものと考えられる。ただし流路から取水すると考えられる水路の存在から、同一の遺構面における水田耕作の可能性は高いものと考えられる。流路ののびるさらに南側においてその候補地の存在を推測する。

第3面を覆う第3層からは石器（剥片）が1点出土している（図110-714）。但し、第3層は第2面段階に機能する土壌層であるので、この遺物が第2面、あるいは第3面のどちらの段階に帰属するものであるかは不明である。剥片の縁辺1辺を部分的に加工したもので、刃器的な用途が想定される。材は



X = -135,780

X = -135,790

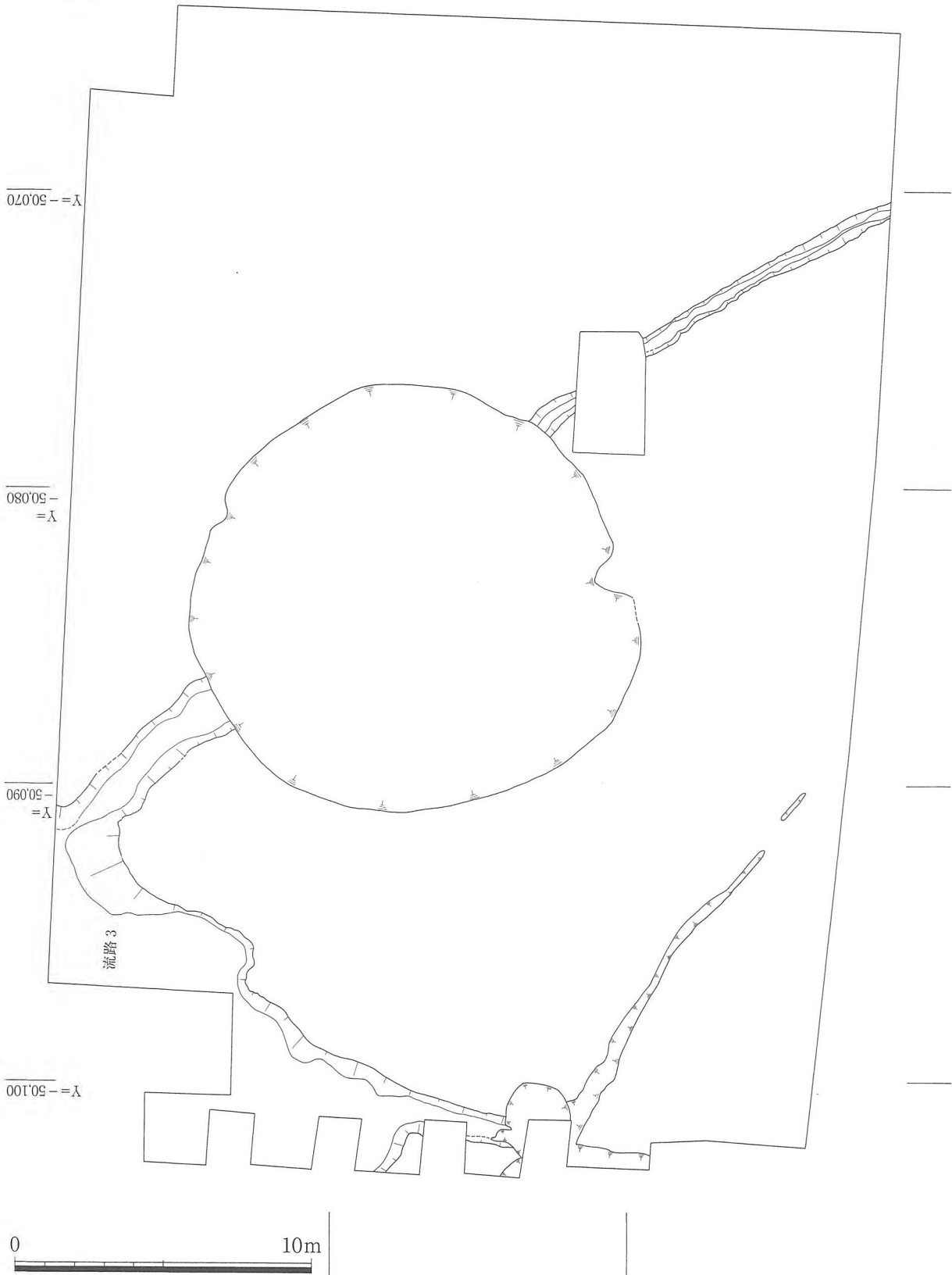


図109 緑地調査区 第3面全体図

サヌキトイドであり、風化が著しい。

第3面の調査終了後、第3面の土壌（第4-1層）を除去した面を第3-2面とし、第3面段階の遺構の有無を確認したが、遺構はみられなかった。ただ流路付近では第4-1層から降下する径10cm大の円形の稲株状痕跡が多数みられた。第3面の調査所見から稲株の可能性は低いと考えられ、後背湿地に繁茂していた植物の根痕ではないかと考えられる。

第3面の地表を形成する土壌である第4-1層からは図110-737に示した縄文土器が1点出土している。摩滅の著しい波状口縁の一部で、上面と側面に沈線による装飾が認められる。胎土は灰白色を呈し、砂礫を多く含む。北白川C4式に属すると考えられる。第3面では遺構に伴う遺物が皆無であり、この土器の出土を持って第3面の年代を縄文時代とすることはいささか早計に過ぎるが、確認調査で確認したさらに下層の土層の状況によると、大阪層群以上に堆積した土層において、土壌と考えられる暗色帯は極めて限られており、沖積地ではありながら堆積作用が活発にみられたとはいいいがたい状況が認められた。このような環境の中では第4-1層が縄文時代に形成された可能性も一概に否定はできないと考えられる。

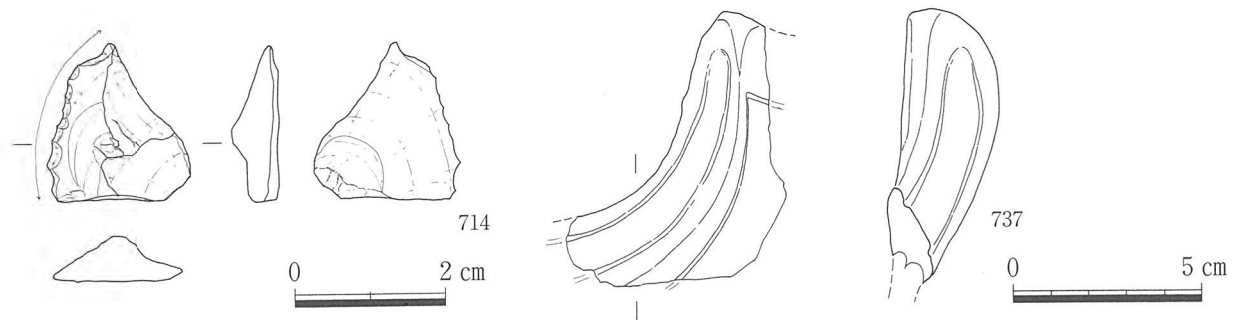


図110 第3層 第4層 出土遺物

第5章 勝部東遺跡の調査

第1節 調査に至る経緯と経過

勝部東遺跡は勝部遺跡の東、約1kmに位置する周知の遺跡である。第1章に記したように、今回の緑地整備事業では緑地造成工事にかかる範囲以外に、緑地造成にともなう移転用地代替地についても確認調査を実施した。確認調査の実施地点は分散するが、その位置を第2章図3に示した。緑地造成範囲については確認調査（確認1～3区）の結果を踏まえ、全面調査を実施し、水路工事部についても確認調査として工事範囲の調査を実施した（確認4・5区）、それらの結果を合わせて本書第4章に報告した。また、周知の勝部遺跡の範囲内に位置する確認6～8・12・13区については、一部を除き顕著な遺構、遺物は認められず、その結果を事業終了報告として提出した。本章で報告する確認調査9～11区は、周知の勝部東遺跡の範囲であり、遺跡内でははじめての発掘調査となった。

調査は平成13年10月4日、機械掘削に着手し、人力掘削、遺構面の検出を経て、10月23日～25日に足場からの全景写真を撮影した。その後遺構図面の作成などを経て、10月26日現地での調査を全て終了した。

第2節 位置と環境

勝部東遺跡は勝部遺跡の東方、約1kmに位置し、千里川の左岸（東岸）に立地する。地理的な環境としては沖積平野部が豊中台地の西縁に接する付近に位置しており、近接して溜池などの痕跡はみられないが、台地を開析した河川などの影響を受ける位置であるといえる。現況は条里区画の良好に残る水田であり、地形の高低などは不明瞭である。

周辺の歴史的環境については勝部遺跡と同じであり、現在も条里区画を良好に残す地域である。

第3節 基本層序

勝部東遺跡では3本のトレンチを設定した（9区～11区）。9区は現況地盤が10区、11区と比べて高いが、これは全て現代の盛土によるものであり、厚さ60～70cmを測る。その下に厚さ10cm程度を測る盛土直前の旧作土層がみられる。中世以降の作土層と考えられる層がその下にみられ、細分は可能であるが、大きくは25～30cmの厚さで把握できる。これを除去した面が中世段階の地表面とみられる。調査では地表面を形成する土壌を除去し、ベースの砂層上面で遺構検出を行なった。この面で現地表から1.2m程度の深さを測り、標高はT.P.+6.0m前後となる。10区、11区は現状の同じ水田内に2本のトレンチを設定したもので、層序もほぼ同一である。現地表が現代の水田面であり、旧作土層、中世以降の作土層をはさんで中世段階の地表面とみられる面がみられる。旧作土は厚さ20cm程度、中世以降の作土層は厚さ30cm程度を測り、やはり細分は可能である。10区、11区における遺構検出も9区同様、中世段階の土壌と考えられる層を除去し、ベースとなる砂層の上面で行なった。この面で、現地表から65cmの深さを測り、標高はT.P.+5.8m前後である。9区と10区、11区の間では中世段階の地表面に20cm程度の高低差がみられる。両者の間には現況の地割から復元して、条里の坪境が南北に走っていることから、中世段階の高低差も条里の区画間の差であり、傾斜地形を示すものではないと考えられる。

第4節 遺構と遺物

9区ではトレンチの北半では遺構は認められなかった。トレンチ南半では土坑、ピットなどを検出した。土坑は円形の平面形を持つものと考えられるが、その約半分がトレンチにかかっているものと考えられる。復元すると径約1.5m程度の規模となる。遺構の掘削は実施していないため、出土遺物ならびに遺構の性格についてすることはできないが、この遺構周辺から特に湧水が顕著にみられたこともあり、井戸の可能性を指摘しておきたい。ピットは土坑の南に1基、トレンチ南端に1基を検出した。遺構掘削は行っていないため、遺物は出土していないが、柱根と考えられる木質を検出面で確認していることから、掘立柱建物の柱穴と考えられる。トレンチ自体の面積が極めて限られているため、柱配置などについては全く不明である。

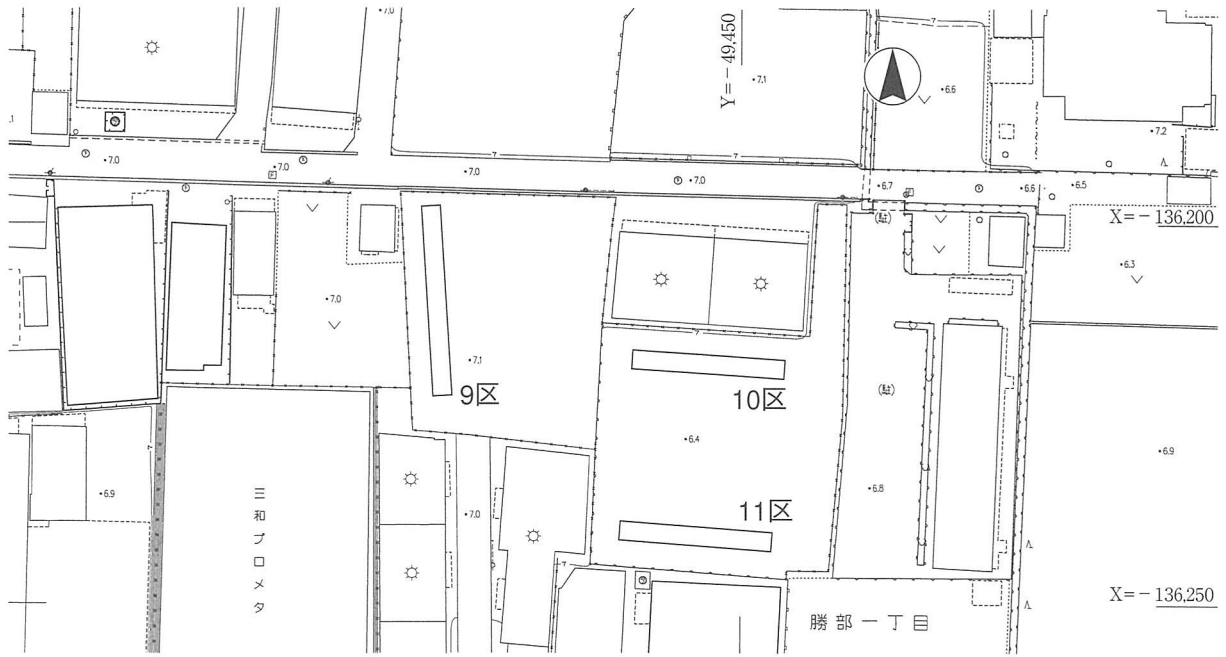
9区から出土した遺物は、中世土器の細片のみである。図示し得たものは無い。

10区ではトレンチの方向に重なるように現代の水田に伴う暗渠が遺構面を攪乱している。この攪乱に切られる形で溝群を検出した。溝は南北方向をとるものと北西から南東の方向をとるものがみられる。トレンチ西端にみられる溝は南北方向をとる大型の溝の東肩部分と考えられ、トレンチよりさらに西側で最も深くなるようである。トレンチ中央部分では斜め方向の溝が2条みられるが、南側の溝はその南側に南北方向の溝を分岐させる。西橋の溝と斜め方向の溝との間にみられる南北方向の溝もトレンチの北側で、斜め方向の溝と連結している可能性が高い。攪乱により部分的な確認にとどまったが、斜めの溝から南へのびる南北溝は東側にさらに2条が認められ、後述する11区検出の各溝と連続するものと考えられる。北側の斜め方向の溝は先述のものより幅が広く、ゆるやかな傾斜を持つ断面形状である。北側で溝あるいは土坑と考えられる遺構を切っている。この遺構は幅3.0mを測り、底に礫を敷いた浅い溝あるいは土坑である。

10区からは中世土器の細片が出土している。図示し得たものは無いが、トレンチ東寄りの南北方向の溝あるいは土坑から出土したものを写真図版63-728~730に示した。728は瓦質土器の三足釜で、足の取り付き部分が残存する。729は白磁碗の部分で、730は表面にタタキ痕の残る陶器片である。

11区では一部に現代水田に伴う暗渠による攪乱がみられたが、その影響を受けることなく、溝、土坑、ピットを検出した。溝はトレンチ西端にみられる大型のものが1条と、それより東に位置する小規模な溝7条がある。西端のものはトレンチ内では底に達しておらず、10で検出したものと一連のものと考えられる。検出幅約1.0mで、最も深い部分は検出面から60cm以上を測る。また小型の溝も10区において斜め方向の溝から南に分岐した部分の延長に位置するものと考えられる。個々の溝は幅10cm前後で、検出面からの深さは20cm程度、当時の地表面からの深さでも30cm程度のものとなる。遺構の切り込み面は明確にはできなかったが、土層断面の観察では、地表面上から掘削され、その後埋め戻された可能性が高いと推測される。小規模な溝の間にはピットや土坑が分布する。土坑は長径0.5m、短径0.35mの楕円形で、深さ10cm強、壁の立ち上がりの極ゆるやかな土坑である。埋土に土器細片を含み、炭化物を多く含んでいた。性格は不明である。

11区の出土遺物は土器細片に限られるが、図示し得たものを図113-715~717に示した。また写真図版63-731~736は写真のみ掲載した。715は瓦器碗で、口縁端部内側に浅い沈線がめぐる。716も瓦器碗であるが、やはり口縁端部内面に浅い沈線が巡り、体部内面には密なミガキが施される。717は黒色土器碗の高台部で、内外面とも黒色処理が施され、体部外面にはミガキがみとめられる。715~717はいずれ



〈調査区配置図〉

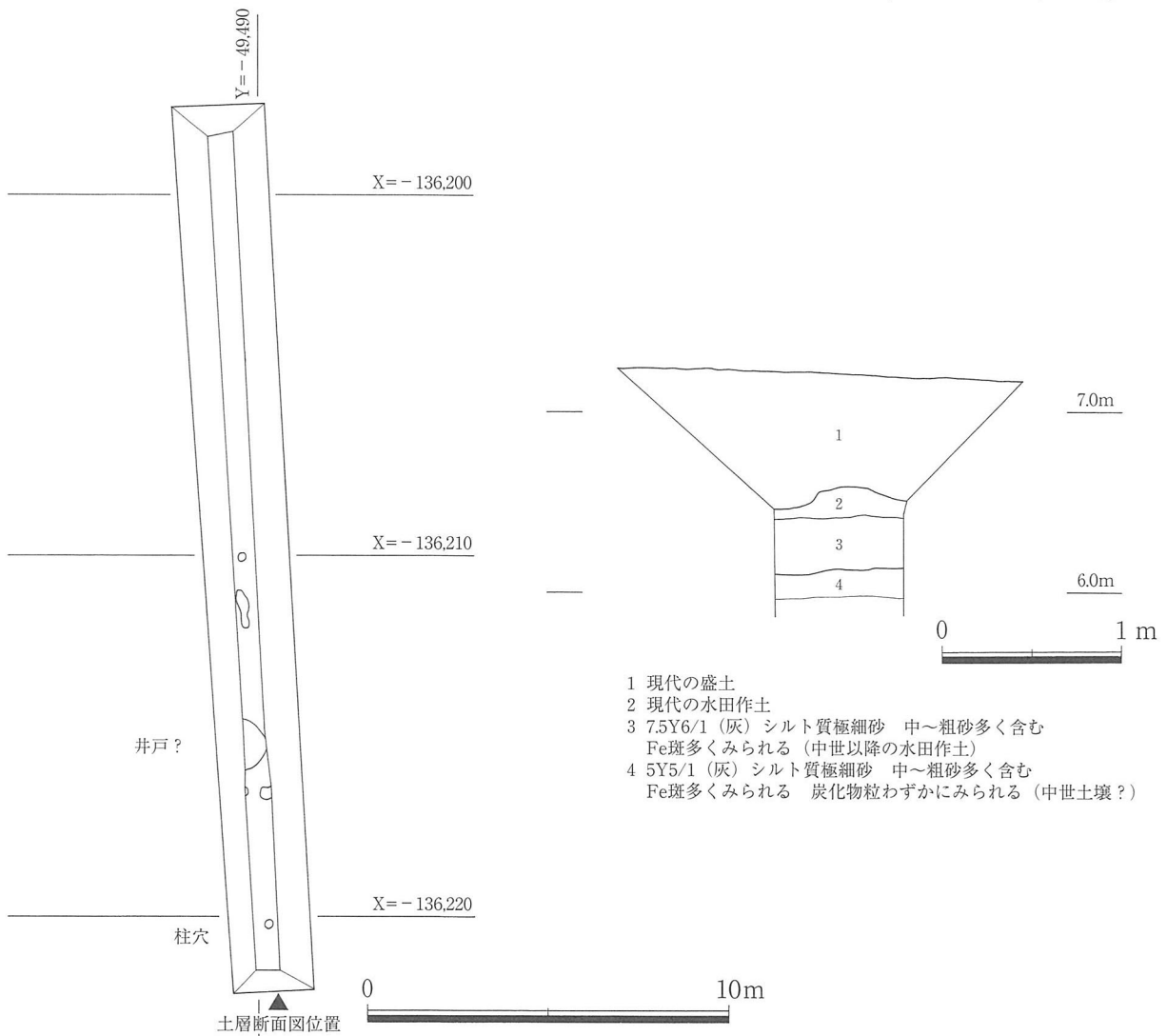
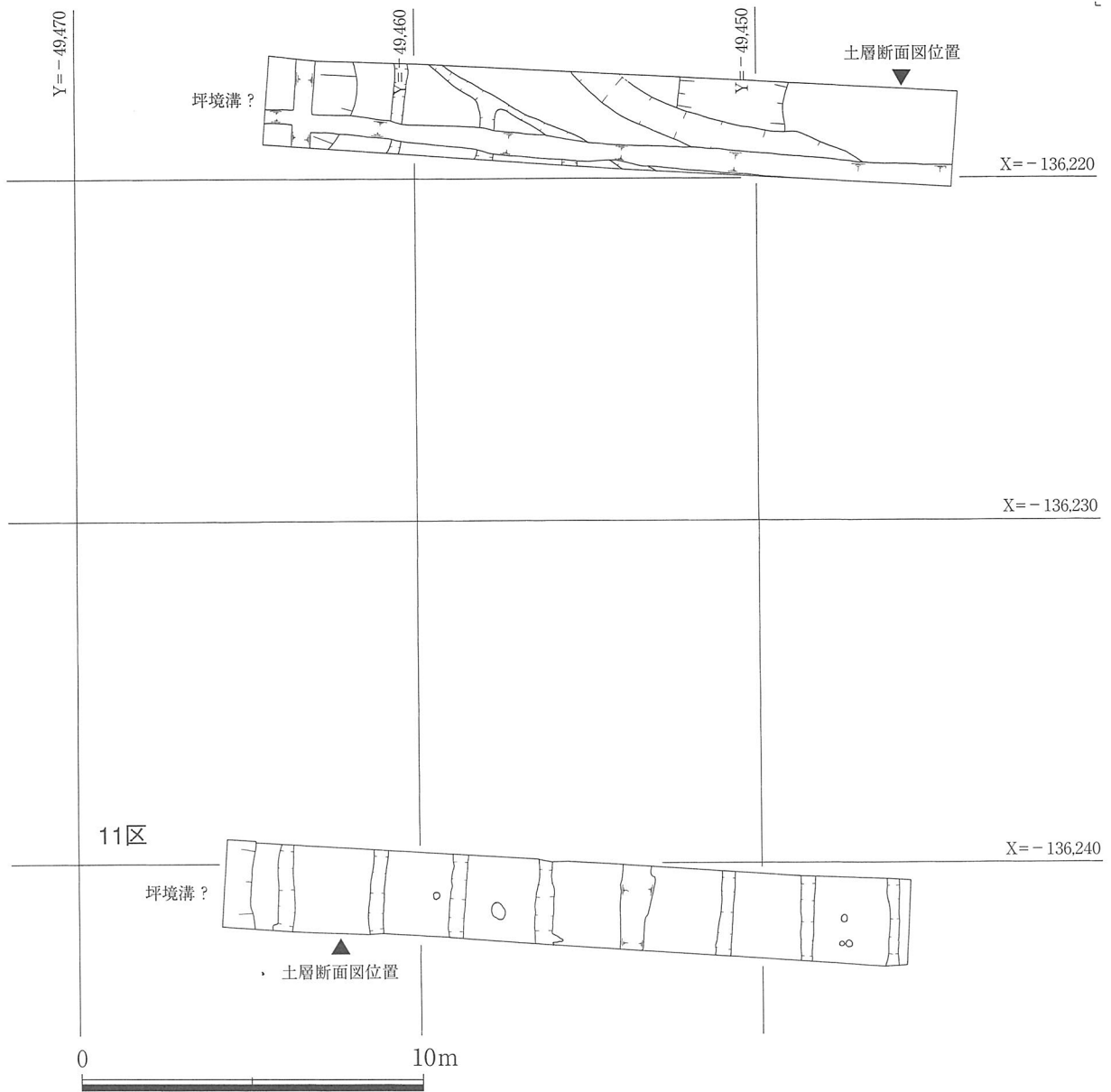
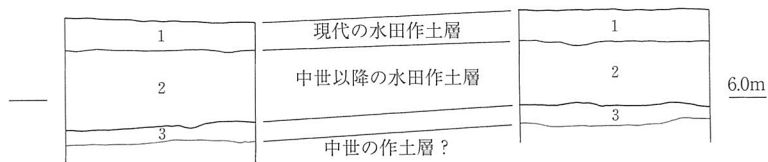


図111 勝部東遺跡 調査区配置図・確認調査9区全体図・土層柱状図



11区 10区 7.0m



- 10区
- 1 現代の水田作土
 - 2 2.5Y6/1 (黄灰) シルト質極細砂 中～粗砂多く含む Fe多く含む Mn斑多く含み、3との境界付近に顕著
 - 3 5Y5/1 (灰) シルト 細～中砂多く含む Feあり Mn斑あり
- 11区
- 1 現代の水田作土
 - 2 2.5Y6/1 (黄灰) シルト質極細砂 中～粗砂多く含む Fe多く含む Mn斑多く含み、3との境界付近に顕著
 - 3 5Y5/1 (灰) シルト質中砂 粗砂多く含む Fe・Mn斑あり

図112 勝部東遺跡（確認調査10・11区）全体図・土層柱状図

も中世以降の作土層からの出土である。731は瓦器椀、732は須恵器の鉢である。733は土師器皿であり、731～733はトレンチ西端の溝からの出土である。734・735は黒色土器である。内外面とも黒色処理が施される。炭化物を含む浅い土坑からの出土である。736は南北方向の小規模な溝からの出土で、瓦器椀である。

第5節 まとめ

9区～11区の調査は勝部東遺跡におけるはじめての調査であり、確認調査という性格上限られた範囲での調査ではあったが、上記の如くの成果が得られた。9区では柱根の遺存するピットの存在から集落の存在を推測することができる。このとき湧水の顕著であった土坑は井戸である可能性を指摘することができる。9区から条里地割では坪境を挟んで西の区画になる10区、11区では南北方向の並行する溝や土坑などを検出した。このうち両トレンチ西端の大型の溝はさらに西側に中心が位置することが予想され、ほぼ坪境に相当する溝ではないかと推測される。またその東側に見られる平行する小規模な溝は、10区において斜め方向の溝により連結することが明らかであり、性格については不明瞭ではあるが、農地の可能性を推測することができる。地表面の土壌について分析などは経ていないが、作土の可能性が高いと推測され、溝を伴う畑の後、水田に転じたものではないかと推測する。

9区～11区の調査成果は極限られた範囲の調査成果であり、同時性についての検討も不十分ではある。また耕作域はともかく集落と推定した範囲の建物などの軸が条里地割あるいは正方位を指向するものであるかどうかの検討もなし得ない。このような不十分な検討の段階ではあるが、現時点での所見としては、坪境を挟んで位置する集落域と耕作域という評価を与えておきたい。帰属時期についても明確にしたいが、出土遺物に黒色土器から瓦器、瓦質足釜が含まれることから、11世紀～13世紀代、古代末から中世にかけての時期に帰属するものと考えておきたい。

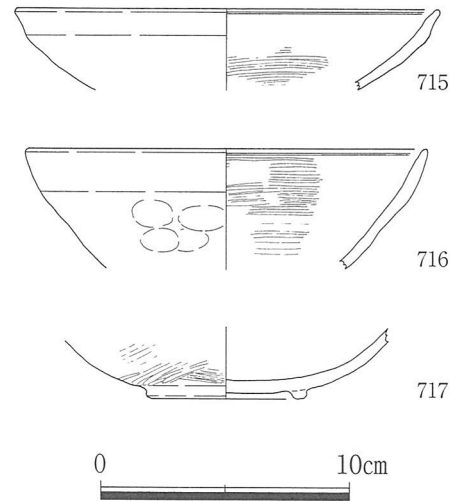


図113 勝部東遺跡 出土遺物

第6章 自然科学分析

第1節 調査における問題意識と分析方法の選択

勝部遺跡の立地は猪名川流域の沖積地であり、地形の形成過程や土地利用の変遷は重要な視点でありながら、既往の調査ではさまざまな制約から十分な確認がなされてはいない状況であった。従って今回の調査に際しては、遺構・遺物の検出はもとより、地形の形成過程や土地利用の変遷などといった観点からの検討が不可欠であるという認識をもつに至り、考古学的な所見以外に、自然科学による分析を加味した総合的な考察を加えるため、分析委託を行うこととした。(その2) 調査では確認調査で水田の検出された第2面については流路の一部を検出したにとどまったため、流路内堆積物を中心に花粉分析、珪藻分析、プラントオパール分析を実施した。さらに第2面以下を面的に検出した(その3) 調査では、垂直方向に加え、面的に採取した試料を用いたプラントオパール分析を実施し、加えて土層断面の軟エックス線撮影を行い、調査者が肉眼で認識できなかった土壌の微細な様相を確認することとした。あわせて堆積環境の検討も実施し、これまで調査事例の少なかった猪名川流域の沖積地における地形形成の状況を考察することとした。

分析業務はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、分析方法ならびに結果、考察については以下に掲出するが、試料の採取にあたっては、現地において調査担当者と十分な意見交換を行った上で実施し、報文の内容についても意見交換を行い、共通認識を形成できるように努めた。

第2節 自然科学分析の成果

パリノ・サーヴェイ株式会社

辻本裕也・辻 康男・田中義文・馬場健司

第1項 分析の目的と方法

(1) 分析目的

今回の分析目的は、遺跡およびその周辺の古環境復元と遺跡内の土地利用状況の推定を行うことである。古環境復元については、花粉分析・植物珪酸体分析・珪藻分析・種実同定を実施した。これらの分析は、(その2) 調査区(緑地調査区北西部)で採取したサンプルについて行った。遺跡内の土地利用状況については、植物珪酸体分析と軟X線写真による微細堆積相の観察から推定を行った。これらの分析は、(その3) 調査区(緑地調査区南半部)で採取したサンプルについて実施した。

(2) 実施した各分析について

(その2) 調査区では、弥生時代後期に埋積が進行した開析谷(流路1)が検出されている。この開析谷を充填する堆積物には、植物遺体を多く含む有機質砂泥層が挟在していた。開析谷の中部～上部に挟在している有機質砂泥層には、弥生時代後期の土器が検出されており、堆積層が当該期頃に形成されたことを示唆していた。現地調査による堆積物の観察結果から、これらの堆積物は、遺跡およびその周辺の古植生をよく反映していることが予想されたため、花粉分析の他に、植物珪酸体分析や種実同定も

あわせて実施し、より総合的な古植生の情報を得ることを目指した。この他、堆積層の上部～最上部付近を構成する中世の遺物を含む層準から採取したサンプルについても、花粉分析と植物珪酸体分析を実施し、当該期の古植生や土地利用の推定を試みた。珪藻分析については、弥生時代後期以前の遺跡およびその周辺の堆積環境の推定を行うことを目的として、遺跡基盤層を構成する泥層からサンプルを採取し分析を実施した。

(その3) 調査区では、弥生時代後期と推定される水田跡が検出された。この水田の形成および埋没過程の検討を行うため、遺構検出面を挟む層準において不攪乱サンプルの採取を行い、このサンプルについて軟X線写真撮影を実施した。植物珪酸体分析は、水田検出面(第2面)およびその下面(第3面)と検出面を挟む上下の層準についての分析を行った。これらの分析から得られた時空間的な植物珪酸体の組成変化を基に、弥生時代後期を中心とした(その3) 調査区における土地利用の推定を試みた。

第2項 勝部遺跡周辺の地質・地形

勝部遺跡は、千里川および猪名川によって形成された氾濫原上に立地している(図114)。本遺跡周辺に分布する氾濫原は幅約3 kmを測り、その東西を比高差5 m程度の段丘崖によって区切られる。氾濫原の東西に分布する段丘は、伊丹台地ならびに豊中台地と呼称されている。勝部遺跡の南側では、台地や丘陵が存在しておらず、沖積低地が広く分布している。本遺跡の西側に位置する伊丹台地南半部には、構成層最上部～上部に最終間氷期である13万年前の海進期に形成されたMa12海成層に対比される伊丹粘土層とその後の海退に伴って累重した伊丹礫層の存在が認められている(古谷, 1978; 田中ほか, 2000)。伊丹台地は地表に4段と地下に7段以上の段丘面が存在しており、豊中台地でも地表に4段程度の段丘面の存在が確認されている(藤田・笠間, 1982; 田中ほか, 2001)。伊丹・豊中台地の構成層最上部は、大阪市の長原遺跡における標準層序(趙, 2001)の中位段丘構成層であるNG16～19層に対比されるものと推測される。但しこれらの台地構成層では、テフラなどの年代資料がほとんど得られておらず、各段丘面の形成・離水時期や対比などの詳細な検討が困難な状況となっている。

勝部遺跡周辺での沖積層の厚さは5～6 mを測り、その基底には最終氷期最寒冷期頃と推定される埋没段丘礫層が存在している(図115; 藤田・前田, 1971; 田中・白井, 1994)。この埋没段丘礫層は、猪名川左岸の池田市宇保付近に所在する伊丹・豊中台地より一段低い位置に存在する標高20～25mの段丘面に連続することが想定されている(田中・白井, 1994)。勝部遺跡の北側約500mの地点に位置する走井付近では、大阪空港建設時に地質調査が行われている(藤田・前田, 1971)。この調査によって記載された地質断面図によると、沖積層は青灰色粘土層を主体し、黒灰色粘土層が挟在する堆積物で構成されており、その所々に砂礫で充填される流路状を呈する削り込みが形成されていることがわかる(図116; 藤田・前田, 1971)。現地表面下2.5m付近の青灰色粘土層からは縄文時代後期後半、流路状の削り込みの一つからは弥生時代前期の土器が検出されている(藤田・前田, 1971)。

勝部遺跡北側に位置する走井周辺では、縄紋海進に伴って形成されたMa13海成層に対比される堆積物が存在していない(藤田・前田, 1971)。これに対し、本遺跡南東に隣接する原田西遺跡では、Ma13海成層に対比される堆積物が確認されている(前田, 1991)。原田西遺跡では、原田処理場の建設に伴う発掘調査によって標高1～3.5m付近で内湾～干潟の堆積環境で形成されたと推定される砂層および泥層が検出されている(前田, 1991)。標高2～3.5m付近に存在する海水～汽水生種の珪藻を含む褐黒色泥層内から検出されたムクロジのC14年代測定値は、心材部で5600±170 y.B.P.(同位体未補正年代値、

以下で示されているC14年代値はすべて同位体分別の補正を行っていない年代値である)、辺材部で5310 ±160 y.B.P.と報告されている (前田, 1991)。この泥層上部には、5280±160 y.B.PのC14年代値が得られたムクノキの材化石を含み淡水生種の珪藻が優占する泥質砂層～砂層が形成されている (前田, 1991)。このほか尼崎市栗山では、埋没段丘礫層を不整合に覆うアカニシ、カキ、アサリなどの貝化石を含む海成砂層が確認されている。この砂層内から検出されたアカニシのC14年代値は、5690±115 y.B.Pであった (前田, 1980)。

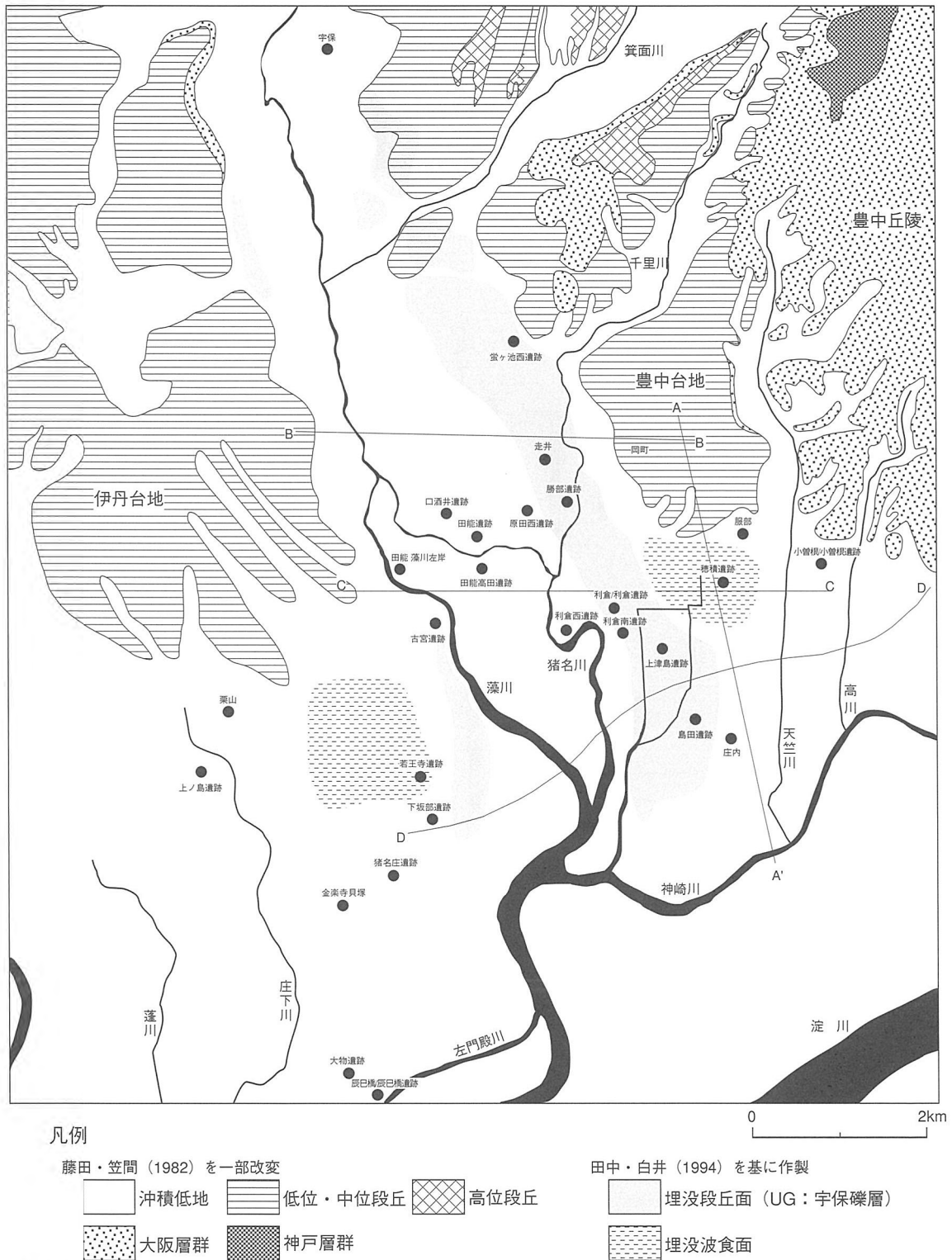


図114 猪名川流域地質図 (藤田・笠間 (1982) ; 田中・白井 (1994) より一部改変して作成)

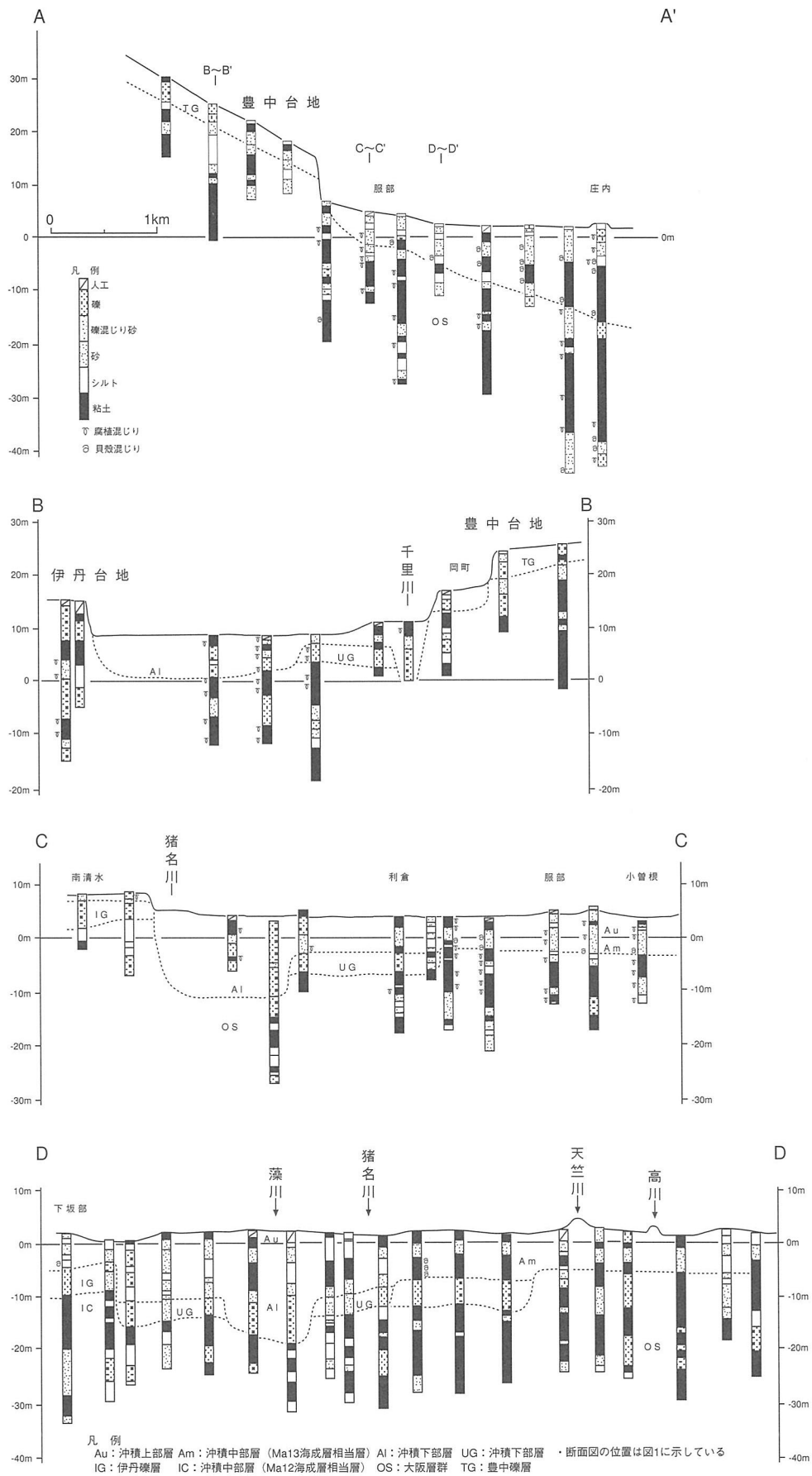


図115 猪名川流域地質断面図 (田中・白井, 1994より一部改変して作製)

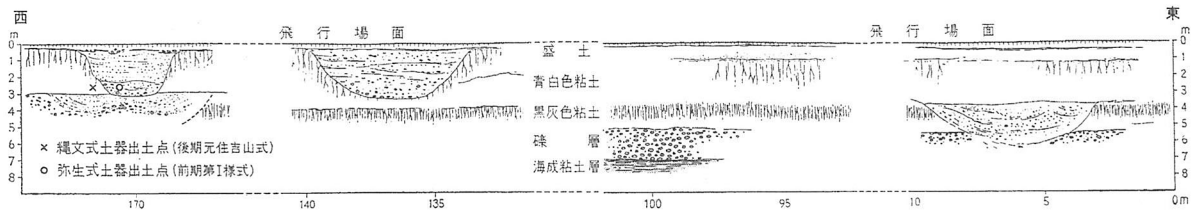


図116 大阪国際空港における東西方向の電気導坑工事現場側壁のスケッチ

勝部遺跡の南東に存在する豊中台地・丘陵の南縁部には、東西～東南東方向にゆるく弧を描く明瞭な崖地形が発達している。この崖地形は、縄紋海進最高海水準期に形成された海食崖であることが想定されている（成瀬，1993）。この崖地形直下には、崖線に平行して離水沿岸洲の可能性が想定される砂質堆積物からなる高まりが存在している（成瀬，1993）。またこの崖下付近には、豊中市服部において現地表面下3～4mで4450±140y.B.P.のC14年代値が得られた海成層の存在が知られているとともに、地表下に波食台と推定される大阪層群を基盤とする平坦な侵食面が分布していることも確認されている（梶山・市原，1986；田中・白井，1994）。

勝部遺跡の南西約2.5kmに位置する尼崎市田能付近の藻川左岸では、Ma13海成層のほぼ上限に相当すると推定される現地表面下7～8mの層準で、猪名川の河口堆積物とされる砂層が確認されている（藤田，1966；梶山・市原，1986）。この砂層に含まれる炭化材のC14年代値は、5960±90y.B.P.を示した（藤田・前田，1971）。藤田・前田（1971）による堆積物の記載や写真などから判断して、砂層はデルタフロントないし三角州平野を構成する堆積物であることが想定される。この砂層から推定される堆積環境およびC14年代値から、尼崎市田能付近では、C14校正年代値で5000～5300年（増田・宮原，2000；増田ほか，2000）とされる縄紋海進最高海水準期の以前にすでに陸化が進行していた可能性が示唆される。砂層の上部には、河道堆積物と想定される礫層が6m程度堆積している。この礫層基底で検出されたイタヤカエデとされる樹幹のC14年代値は縄紋時代晩期頃を示す2700±90y.B.P.であった（藤田・前田，1971）。上記のC14年代値から、砂層と礫層は互いに不整合の関係で接していることが推測される。

勝部遺跡の南西に位置する猪名川・藻川流路帯には、最終氷期最寒冷期に形成されたと推定されている深い埋没谷が存在している（図2；田中・白井，1994）。この部分の現地表面の標高は、埋没段丘面上に立地する勝部遺跡周辺や伊丹台地上に比べ相対的に低い。ここでは、田能遺跡、田能高田遺跡、口酒井遺跡などの考古遺跡が立地している。これらの遺跡では、縄紋時代晩期後半以降の層準において1～1.5m程度の主に砂泥層からなる河川堆積物の厚い累重が認められている（福井編，1982；岡田・益田，1996；甲斐編，1997；浅岡編，2000）。これに対し、伊丹台地南側の沖積低地に位置する上ノ島遺跡では、弥生時代前期以降に比較的安定した堆積環境となっており、河川堆積作用が顕著でなかったことが遺跡の層序から窺える（村川，1980；大平編，1992；岡田・益田，1996）。

勝部遺跡の南東約3.5kmに位置する穂積遺跡は、豊中丘陵・台地の南側に広がる沖積低地に立地している。穂積遺跡では、第14次調査などにおいて海成層の調査が行われてきている（豊中市教育委員会，1993；清水，1994；趙ほか，1999）。第14次調査で検出された海成層に含まれる貝化石は、最下部でマテガイ、中部付近でオオノガイ、上部でチリメンユキガイ、最上部で干潟に棲息するヤマトシジミやハイガイなどとフトヘナタリ、クロヘナタリが主体をなしている。このような貝化石の群集変化については、海が次第に浅化していく様子を示すとされている（石井，2002）。第14次調査では、発掘調査によ

って観察された堆積層の最下部（標高-2.3m付近）に、花粉分析結果から中位段丘構成層の可能性が指摘される砂礫層が認められ、その上部に層厚3m程度の暗灰色を呈する泥～砂層からなる海成層が累重していることが確認されている（水谷，1999；那須・清水，1999）。この海成層の最下部付近（標高-2m付近）には、アカホヤ火山灰を多量に含む層準が検出されている（片岡，1999）。海成層には、標高-2m付近から0.5m付近、0.5m付近から1.2m付近において泥層～砂層へと上方粗粒化する2回のサイクルが認められている。（清水，1999）。層相および貝化石、珪藻分析結果から、海成層の堆積環境は、標高-2.3m付近～-1m付近で潮間帯、-2m付近～0.5m付近で潮下帯、0.5m～1.2m付近で潮間帯へと変化したことが確認されている（後藤ほか，1999；石井，1999；那須・清水，1999）。以上のような調査・分析成果から、第14次調査区では、アカホヤ火山灰降下層準（約7300年前）～縄紋時代中期後半頃（約4500年前）まで浅海底～干潟潮間帯の堆積環境が形成されていたことが推定される。第15次調査では、海成層直上部付近の層準で約3300年前（縄紋時代後期後半頃）のC14年代値が得られている（清水，1995）。穂積遺跡では、海成層の上部に縄紋時代後期～近世頃に形成された主に砂泥～砂層からなる河川堆積物が層厚1～1.5m程度累重していることが既往調査結果から確認される（新本，1997a・1997b；橋田，2000など）。穂積遺跡の南西に位置する上津島遺跡でも、弥生時代～中世頃の層準において約1.5m程度の河川堆積物の累重が認められている（服部，1997）。これらの発掘調査成果から、豊中丘陵・台地南側の沖積低地では、縄紋時代後期以降に継続して活発な河川堆積作用が生じていたことが窺える。

穂積遺跡の南西約4kmのJR尼崎駅北側に位置する猪名庄遺跡では、古墳時代の遺物を包含する流路充填堆積物ならび氾濫堆積物と推定される河川堆積物が検出されており、その上面で奈良時代～中世を中心とした遺構が確認されている（矢口，1999）。猪名庄遺跡の北および北東側に位置する下坂部遺跡、若王寺遺跡などでは、古墳時代の遺構が河川堆積物を基盤とする層準において検出されている（岡田，1981；渡辺・川村，2001）。これら尼崎市域で実施された発掘調査成果から、猪名庄遺跡周辺およびその北側では、古墳時代頃に河川堆積物による埋積によって比較的安定した土地条件が形成されていたことが推定される。

猪名庄遺跡の南側約2kmに位置する尼崎市辰巳橋で行われたボーリングデータの貝化石分析では、C14年代値で7500～8000年前から1660±80y.B.P.を示す層準までは内湾湾央部の泥質域を特徴づける群集が優占し、その後1380±80y.B.P.の年代値を示す層準で内湾湾奥部潮間帯下の砂泥質を特徴づける群集への変化することが認められている（前田，1980）。尼崎市辰巳橋の北側約1.5kmの地点では、平安時代を中心とした人間活動が確認される金楽寺貝塚が存在している（岡田，1982；久保，1999）。金楽寺貝塚は、神崎川によって供給された砂礫を給源として形成されたと推定される沿岸洲上に立地している。本遺跡では奈良時代の住居跡と推定される床面や整地層など検出されていることから、当該期にすでに沿岸洲周辺が離水しており、そのような堆積環境下において居住域を伴うような人間活動が展開していたことが推測される。上記した前田（1980）の辰巳橋ボーリング地点にほぼ隣接する辰巳橋遺跡では、現地表面下8m付近で奈良時代末期の遺物を含む干潟潮上帯の堆積物と推定されるヨシ遺体を含む有機質堆積層とシジミなどを含む黒色砂層が確認されている（村川，1980）。この上位の現地表面下5m付近では、鎌倉時代の遺物を多量に含む遺物包含層が検出されており、その上位には、アカガイを主体とする室町時代の小貝塚が確認されている（村川，1980；久保，1999）。辰巳橋遺跡の西側に近接する大物遺跡では、標高-3.6m付近で沿岸洲ないし海浜堆積物と推定される平安時代後期を下限年代とする遺物を含む砂礫層が検出されている（岡田・山上編，2001）。その上部の標高-1.6m付近までには、平安

時代後期～鎌倉時代の遺物を多量に含む氾濫ならびに後背湿地堆積物と推定される河川起源の泥層～砂層および人為的擾乱堆積物が累重している（岡田・山上編，2001）。上記のような発掘調査成果から、辰巳橋および大物遺跡では、平安時代頃に河川堆積物による陸化が進行し、この時期を前後として顕著な人間活動が認められるようになったことが窺える。

以上、猪名川および神崎川流域を中心とした古環境変遷について述べてきた。その結果、尼崎市田能および原田西遺跡周辺では、縄紋海進最高海水準期以前に猪名川・千里川などの河川から供給された堆積物によってすでに陸化していたことを想定することができた。上記の遺跡周辺で陸化が開始したと推測されるのは、C14年代値から縄紋時代前期中頃以降と推定される。田能遺跡やその周辺に存在する考古遺跡において人間活動が認められるようになるのは縄紋晩期後半以降である（森岡・竹村，1999；岡野，2001）。田能遺跡付近で陸化を開始し始めた縄紋時代前期中頃から弥生時代前期頃までに、猪名川の沖積作用によって三角州の前進・拡大が生じていたことは十分に考えられる。これらのことから、田能遺跡やその周辺遺跡などにおいて本格的な人間活動が開始される縄紋時代晩期～弥生時代前期頃には、すでに三角州前縁ないし海岸線が遺跡よりもかなり南側に位置していたことが予測される。発掘調査報告書に記載されている堆積層の記載などから、弥生時代前期～中期に田能遺跡周辺では、三角州平野の堆積環境が形成されていたことが推定される。田能遺跡や田能高田遺跡などでは、弥生時代中期後半～終末期頃の住居跡が検出されている（福井編，1982；甲斐編，1997；浅岡編，2000）。このような遺構形成は、遺跡周辺における河川堆積作用や地形形成の変化に応答したものである可能性も考えられ、今後のより詳細に検討すべき課題の一つであるように思われる。

一方、田能遺跡付近より南東側に位置する穂積遺跡周辺では、縄紋時代中期後半頃まで浅海底～干潟潮間帯の堆積環境が形成されていたことが明らかとなった。さらに南側に位置する尼崎市辰巳橋付近では、古墳時代頃まで海域が形成されており、その後干潟潮下帯～潮間帯の堆積環境へと変化したことが確認された。また辰巳橋周辺では、奈良時代末期頃に干潟潮上帯の堆積環境へ変化した後、平安時代後半頃に河川堆積物による埋積が行われたことも推定された。辰巳橋遺跡や大物遺跡で干潟潮上帯の堆積環境であった奈良時代に、その北側に位置する金楽寺貝塚周辺ではすでに陸化が完了して居住域などが形成されるような空間が形成されていたようである。

このほか、伊丹・豊中台地の南側に分布する沖積低地では、縄紋時代後晩期頃に河川堆積物が顕著に累重していくような堆積環境へと変化したことも確認された。但し、この河川堆積作用には地域的な差異が認められ、伊丹台地の南側に分布する沖積低地北半部では、弥生時代～古墳時代頃にすでに埋積が静穏化していたことが推定されるのに対し、豊中丘陵・台地南側や猪名川・藻川流路帯に位置する沖積低地では、弥生時代以降も活発な河川堆積作用が行われていたことが想定される。活発な沖積作用が認められる猪名川・藻川流路帯では、河川の上流および下流にそれぞれ立地する考古遺跡における人間活動の展開時期に差異が存在しているようである。猪名川・藻川流路帯上流部とその周辺に位置する勝部遺跡、田能遺跡、口酒井遺跡、古宮遺跡、原田西遺跡や豊中丘陵南縁部の沖積低地に立地する小曾根遺跡などでは、縄紋時代晩期後半頃から人間活動が確認されている（岡田，1999；森岡・竹村，1999；岡野，2001）。これに対し、下流部およびその周辺に位置する若王寺遺跡、下坂部遺跡、穂積遺跡、上津島遺跡、利倉遺跡、利倉西遺跡、利倉南遺跡、島田遺跡などでは、弥生時代後期～古墳時代前半頃以降に本格的な人間活動が展開するようになる（服部，1997；渡辺，1999）。このような人間活動の時期差は、縄紋海進前後以降の河川堆積地形の形成過程と深く関係していることが予想される。この点については、

今後、個々における遺跡形成過程をふまえさらに検討を行っていくべき課題であると思われる。

武庫川・猪名川・神崎川流域では、藤田（1966）、梶山・市原（1986）、成瀬（1993）、趙ほか（1999）、浅岡（2000）などによって古地理復元が行われてきた。古地理復元は、各時期の人間活動と自然の空間構造化過程や歴史的評価を検討する際に有効な基礎データになると考えられる。今後の古地理復元では、海岸線の推定だけでなく沿岸域～陸域に至る生態学的な環境勾配についても復元を行っていくことが必要であろう。このような復元を行っていくためには、遺跡ごとの詳細な遺跡形成過程についての検討が不可欠であり、今後この点を中心にして調査を進めていきたいと考えている。

第3項 層序

緑地調査区において現地調査を実施し、調査区を構成する堆積層断面の観察および記載を行った。記載にあたっては、堆積層の粒度組成や堆積構造などに着目して、緑地調査区内において13ヶ所の柱状図を作製した（図117）。図117は、断面観察から確認された層理および考古遺物や遺構の検出状況などから、緑地調査区内に累重する堆積層について層序対比を行った結果を示したものである。

以下に、確認された堆積層の特徴について述べていく。各層において認められた層相から推定される堆積環境については、Miall（1992・1996）の河成堆積相コードや松田（1999・2000）、人為的な擾乱堆積物の層相については、松田（1996）の記載を参考としている。

①層：灰色を呈し、主に泥混じりの砂礫層からなる現在の盛土。

②層：にぶい黄色を呈する砂質シルト～シルト質砂からなり、8層程度の単層によって構成されている。出土遺物の相対年代から、中世頃に形成されたことが推定される。②層は、塊状をなす堆積物によって構成されており、しまりが比較的悪く孔隙も多い。堆積層内には、酸化鉄および酸化マンガンの沈着が顕著に観察される。本層では、5～15mm程度の砂質シルトからなる微細な偽礫が多く認められる。これらは互いに集合して粒団状の構造を形成している。以上の特徴から、本層は耕作土を中心とした堆積物によって構成されていると判断される。

③層：灰オリーブ色を呈し弱い水平葉理をなす比較的淘汰の良い粘土質砂質シルト～極粗粒砂。下部に流路充填堆積物が存在するLoc.5～8では、中粒砂～極粗粒砂からなる砂質な堆積物で構成されている。Loc.9～13が位置する緑地調査区南半部では、北西部に大きな攪乱が存在しており、③、④層付近の堆積層について、側方への拡がりを連続的に観察にすることが困難な状況であった。そのため、緑地調査区南半部では、③、④層の区分を行うことが出来ず、③～④層として一括して記載している。これらの地点では、赤褐色を呈する草本類起源と思われる幅5mm程度からなる線状の根痕のほか、灰色を呈する幅10mm程度の根痕が観察される。本層は東に向かって細粒化する傾向が認められており、Loc.2では砂質シルトからなる泥質な堆積物で構成されている。本地点では、西側で観察されたような灰色の根痕が存在しておらず、赤褐色で線状を呈す根痕が高密度に形成されている。上記のような層相から、③層は流路（流路2）からオーバーフローしてきた洪水堆積物によって構成されていることが推定される。本層内からは、弥生時代後期の遺物が検出されているほか、上面で弥生時代後期の遺構が検出されている。

④層：灰白色を呈しトラフ型斜交層理・葉理をなす中粒砂・細礫および灰色を呈し植物遺体および細粒砂を多く含み水平ないし塊状をなす粘土質砂質シルト～シルト質砂。本層内からは、弥生時代後期の遺物が検出されている。Loc.5～8にかけて分布する。Loc.5と6の間には、斜交葉理をなす極粗粒砂からなる④層が存在している。④層上部にはトラフ型斜交層理をなす砂礫層が、下部には植物遺体および

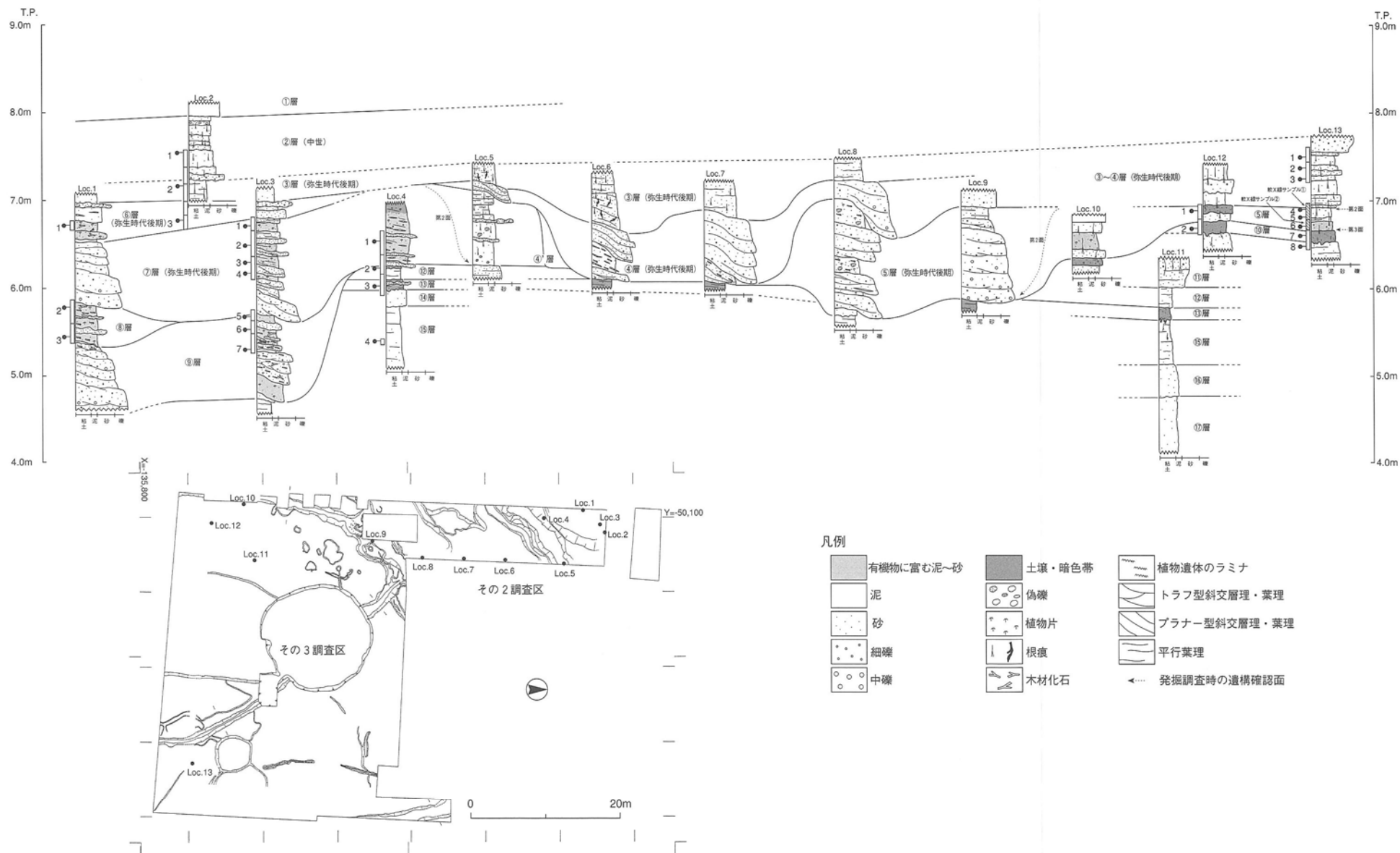


図117 調査地点の層序対比と分析層位および柱状図位置図

細粒砂の斜交葉理が多く存在する砂泥～泥質砂層が累重している。④層では、トラフ型斜交層理・葉理からなる堆積構造が顕著に観察される。砂礫層断面で観察される層理や葉理は、河床平面上に形成された砂床形 (bed form) によって形成される。斜交層理・葉理は、砂床形が移動する時の形態や供給される砂の量に応答して形成される (フリッツ・ムーア, 1999)。④層で認められたようなトラフ型斜交層理は、波状の波頭を持つ漣痕 (ripple) ないし砂碛 (dune) の移動によって形成される (フリッツ・ムーア, 1999)。砂床形の形態は、水深・流速・粒度のすべてに支配されており、Rubin and McCulloch (1980) の3次元ダイアグラムによると、トラフ型斜交層理をなす・層が弱い水平葉理をなす③層よりも大きな流速で形成されたことが推定される (フリッツ・ムーア, 1999)。層相および分布形態から、④層は流路内を埋積する堆積物であると判断される。Loc. 7では、トラフ型斜交層理をなす砂礫層が厚く累重しており、④層によって埋積される流路の滲筋付近に位置していたことが推定される。

⑤層：灰白色を呈しトラフ型斜交層理・葉理をなす粗粒砂～細礫および弱い水平葉理をなし植物遺体を含む中粒砂の互層と黒褐色もしくは灰色を呈す塊状ないし水平葉理をなす粘土質砂質シルト～シルト質砂で構成される。⑤層は、Loc. 8～13かけて分布する。Loc. 8～10は、下位の堆積物を侵食して形成された流路内 (流路2) に位置しているのに対し、Loc. 11～12は流路外に位置する河岸上に累重した堆積層である。層相から、Loc. 9は流路滲筋付近を埋積した堆積物、Loc. 8および10は流路縁付近で形成された堆積物であると判断される。河岸上に位置するLoc. 12～13では、側方への細粒化の傾向が観察される。層相およびその累重様式から、Loc. 12は流路沿いで自然堤防状の高まりを構成する氾濫堆積物、Loc. 13は後背湿地堆積物であると推定される。

⑥層：調査区北西隅では、開析谷が検出されている (流路1)。本層内からは、弥生時代後期の遺物が検出されている。この開析谷は調査区外へと連続しており、今回の調査で検出されたのは谷壁斜面の一部のみである。調査区内において検出された開析谷の最大深度は、2 m前後を測るが、中心部が存在すると予想される北西へ向けてさらに深度を増していくものと思われる。⑥層は、開析谷を充填する堆積層の最上部に位置している。Loc. 1では、⑥層下部に水平葉理をなし植物遺体を多く含むオリーブ黒色有機質砂質シルトおよび粗粒砂が存在している。Loc. 1の⑦層の上面高度は、Loc. 2に比べ相対的に低く凹地を形成している。層相および分布形態から、Loc. 1の⑥層下部を構成する有機質砂泥～砂層は、この凹地を埋積する堆積物であると判断される。Loc. 1の⑥層上部およびLoc. 2では、洪水堆積物と推定される灰白色を呈し弱い水平葉理をなす比較的淘汰の良いシルト質砂～中粒砂が存在している。

⑦層：Loc. 1では灰白色を呈しトラフ型斜交葉理をなす極粗粒砂～細礫、Loc. 3では水平葉理をなし植物遺体を多く含むオリーブ黒色有機質砂質シルト～シルト質砂と弱い水平ないしトラフ型斜交葉理をなす灰白色中粒砂～極粗粒砂の互層、Loc. 4では灰色中粒砂～粗粒砂の葉理を多く含む水平葉理をなす暗オリーブ灰色有機質砂質シルトからなる堆積物で構成されている。本層内からは、弥生時代後期の遺物が検出されている。Loc. 1は、層相から流路充填堆積物と判断される。Loc. 3の・層下部には、最下部にLoc. 1の流路充填堆積物に対比される砂礫層が存在している。この上部には、植物遺体を多量に含む有機質砂泥～泥質砂層から弱い水平ないしトラフ型斜交葉理をなす砂層へと上方粗粒化する逆級化層のセットの累重が観察される。河川堆積物において逆級化層は、洪水堆積物に特徴的に認められる堆積構造である (増田・伊勢屋, 1985)。逆級化層で認められる下部の泥層は、氾濫初期の停滞した氾濫水の水底下で、上部の砂層は氾濫中期に氾濫水の水深が増し、河岸沿いで生じる強い涌き上がりによって浮遊させられた砂が堆積したものとされる (増田・伊勢屋, 1985)。Loc. 3の⑦層中部～上部に存在する

逆級化層は、その累重様式から流路側壁を構成する滑走斜面の堆積物と考えられる（増田・伊勢屋，1985；松田，1998）。Loc. 4 を構成する⑦層でも、セット高1～3 cm程度の逆級化層がよく観察される。Loc. 4 の⑦層は、層相および粒度組成から河岸を構成する自然堤防の堆積物であると判断される（Reineck and Singh, 1980；増田・伊勢屋，1985；Davis, 1992）。堆積層の断面観察から、開析谷を充填するLoc. 1・3・4の⑦層は、同時異相として形成されたことが確認される。本層で観察された層相変化は、流路から河岸への側方方向の細粒化によって生じた堆積環境の違いを示している。Loc. 4 の南側は、開析谷埋積後に新たに形成された③～⑤層で充填される流路（流路2）によって侵食されている。

⑧層：オリーブ黒色を呈し植物遺体を多量に含む有機質砂質粘土質シルト。⑧層の直下に存在する⑨層の堆積面は、流路底に近似した下に凸の形態をなす凹地状を呈している。このような凹地状の堆積面は、⑨層を累重させた流路が上流側で変更されたことによって生じたものと解釈される。⑧層は、⑨層堆積面に形成された凹地状の低所を埋積するようにして形成されている。以上のような堆積層の形態および層相から、⑧層は放棄流路を埋積する堆積物であると判断される（増田・伊勢屋，1985）。本層内からは、弥生時代後期の遺物が検出されている。

⑨層：Loc. 1 では灰白色を呈しトラフ型斜交葉理をなす極粗粒砂～細粒の中礫、Loc. 3 では水平葉理をなし植物遺体を多く含むオリーブ黒色有機質砂質シルト～シルト質砂とトラフ型斜交葉理をなす灰白色中粒砂～極粗粒砂からなる堆積物で構成される。層相から、Loc. 1 は流路充填堆積物、Loc. 3 は流路側壁を構成する滑走斜面の堆積物であると判断される。

⑩層：オリーブ黒色を呈し塊状をなす有機質砂質シルト。本層は、（その3）調査区にのみ分布している。層相から土壌と判断される。

⑪層：オリーブ灰色を呈し塊状ないし水平葉理をなす砂質シルト～粗粒砂。本層中部で最も粗粒化した後、上方細粒化する。層相から、氾濫堆積物であると推定される。

⑫層：青灰色を呈する塊状ないし弱い水平葉理をなす粘土質シルト。粘土質シルト層最上部には、土壌が形成されている。層相から、後背湿地などの静水域で形成された堆積物であると考えられる。Loc. 4 の粘土質シルト層の直上には、洪水堆積物と推定される灰色を呈す淘汰の良い中粒砂が載っている。この砂層は、層相および出現高度から、Loc. 5 最下部に存在する細粒砂～中粒砂からなる砂層に対比されることが想定される。

⑬層：オリーブ黒色を呈し塊状をなす有機質砂質粘土質シルト。層相から土壌と判断される。

⑭層：明緑灰色を呈し塊状ないし弱い水平葉理をなす粘土質砂質シルト。下位の⑮層に比べ粗粒な堆積物で構成されている。層相から、後背湿地などの静水域で形成された堆積物であると考えられるB

⑮層：緑灰色を呈し塊状ないし弱い水平葉理をなす粘土質砂質シルト。上方細粒化の傾向が観察される。層相から、後背湿地などの静水域で形成された堆積物であると考えられる。

⑯層：緑灰色を呈し塊状をなす砂質粘土質シルト。乾痕の発達認められる。

⑰層：緑灰色を呈し塊状をなす砂質粘土質シルト。乾痕の発達が顕著に認められる。⑰層を構成する堆積物は、堅く緻密であることから更新統の可能性が考えられる。⑩層より以下の層準では、考古遺物が検出されておらず、火山灰層も肉眼下では確認されなかった。

以上、緑地調査区を構成する堆積層の観察・記載および層序対比を行った結果、弥生時代後期には、北西部（その2調査区）が流路から流路縁付近、南半部（その3調査区）が流路縁、河岸から後背湿地にかけての堆積環境下に位置していたことが推定された。緑地調査区では、弥生時代後期に氾濫原の埋

積が行われたことが確認された。層相観察から、埋積が完了した弥生時代後期以降には、氾濫堆積物が時折、流入するような比較的安定した堆積環境の氾濫原となったことが推定される。また、弥生時代後期以前には、珪藻分析および堆積物の層相観察から、好気的な土壌環境がかなりの期間が継続するような離水しがちな後背湿地の堆積環境であったことが想定される。

第4項 分析試料

(1) (その2) 調査区

試料は、上記層序記載を行った地点のうち、Loc.1・2・3・4地点から、室内で再度層相に観察が行えるように柱状試料として採取した。珪藻・花粉・植物珪酸体の各分析試料は、目的や層序をふまえ、図4に示す17層準を選択した。

⑫層より下位の堆積物は、Loc.4の試料を用いた。層相を考慮し、⑫・⑬・⑮層から採取した(試料2・3・4)。弥生時代後期の遺物を包含する開析谷の堆積物である⑨層～⑥層および洪水堆積物である③層は、Loc.1・2・3・4の試料を用いた。⑨層はLoc.3から3点(試料5・6・7)、⑧層はLoc.1から2点(試料2・3)、⑦層はLoc.3から4点(試料1・2・3・4)、⑥層はLoc.1から1点(試料1)、③層はLoc.2から2点(試料2・3)を選択し、分析を実施した。中世以降の堆積層②層は、Loc.2から1点(試料7)を分析した。

(2) (その3) 調査区

植物珪酸体分析は、Loc.13、Loc.12および平面サンプルの3地点から採取した試料について実施した。Loc.12は、弥生時代後期以前に相当する試料番号1・2の2点について分析を行った。Loc.13柱状サンプルは、弥生時代後期の堆積物が中心である。今回は、試料番号1～8の8点を分析する。このうち、試料番号1～5は弥生時代後期とみられ、試料番号6・7・8については年代が不明である。平面サンプルは、弥生時代後期とされる第2面、それ以前と考えられる第3面を平面的に採取したものである。第2面からは試料番号1・2・4・5・6・8・10、第3面の試料番号11・13・15の計10点を分析する。これらの合計は全部で20点である。

軟X線写真撮影は、Loc.13において柱状で採取した不攪乱試料であるサンプル①、②の2点について実施した。

第5項 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体を基準に同定・計数する。なお、珪藻化石の産出数の少ない試料は100個体を基準に計数し、100個体未満の試料に関しては産出率の評価が不可能なものとする。種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer(1992)、Krammer and Lange-Bertalot(1986,1988,1991a,1991b)などを参照する。

同定結果は、海水～汽水生種、汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流

水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率2%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、海水～汽水生種・汽水生種については小杉（1988）、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性についてはAsai and Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

（2）花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理の順に物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いたものをそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。なお、総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

（3）植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W, 250KHz, 1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後に、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された植物珪酸体の種類とその個数の一覧表で示す。また、内容物や古植生について検討するために、植物珪酸体群集図を作成する。

（4）種実同定

土壌試料を水に一晩液浸し、試料の泥化を促す。0.5mmの篩を通して水洗し残渣を集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な植物遺体等を抽出する。その形態的特徴および当社所有の現生標本との比較から種類を同定し計数をおこなった。同定・計数後の植物遺体は、種類毎にビンに入れ、50%エタノール溶液による液浸保存をおこなう。

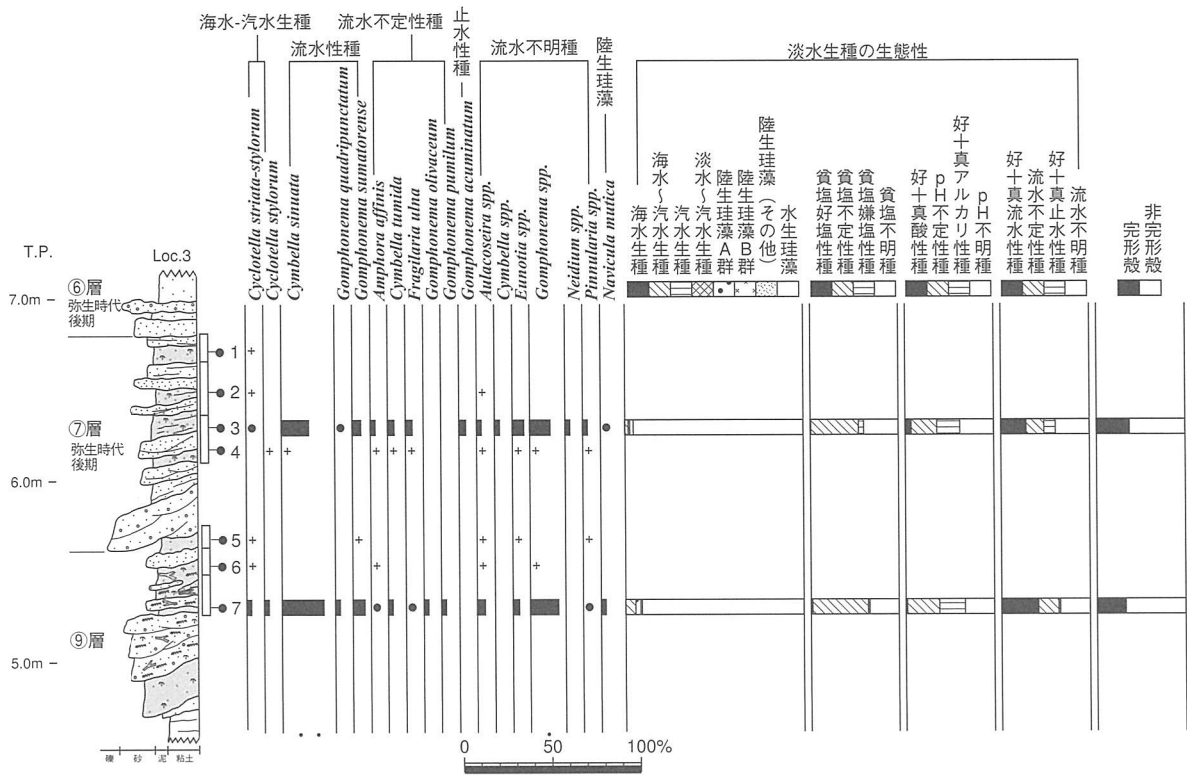
（5）軟X線写真撮影観察

土層断面より採取したブロック状の試料から、幅7cm、長さ20cm、厚さ1cmの板状の試料を分離、成形して軟X線写真の撮影を行った。撮影は、ニッテツ・ファインプロダクツ釜石文化財保存処理センターの協力を得た。

第6項 結果

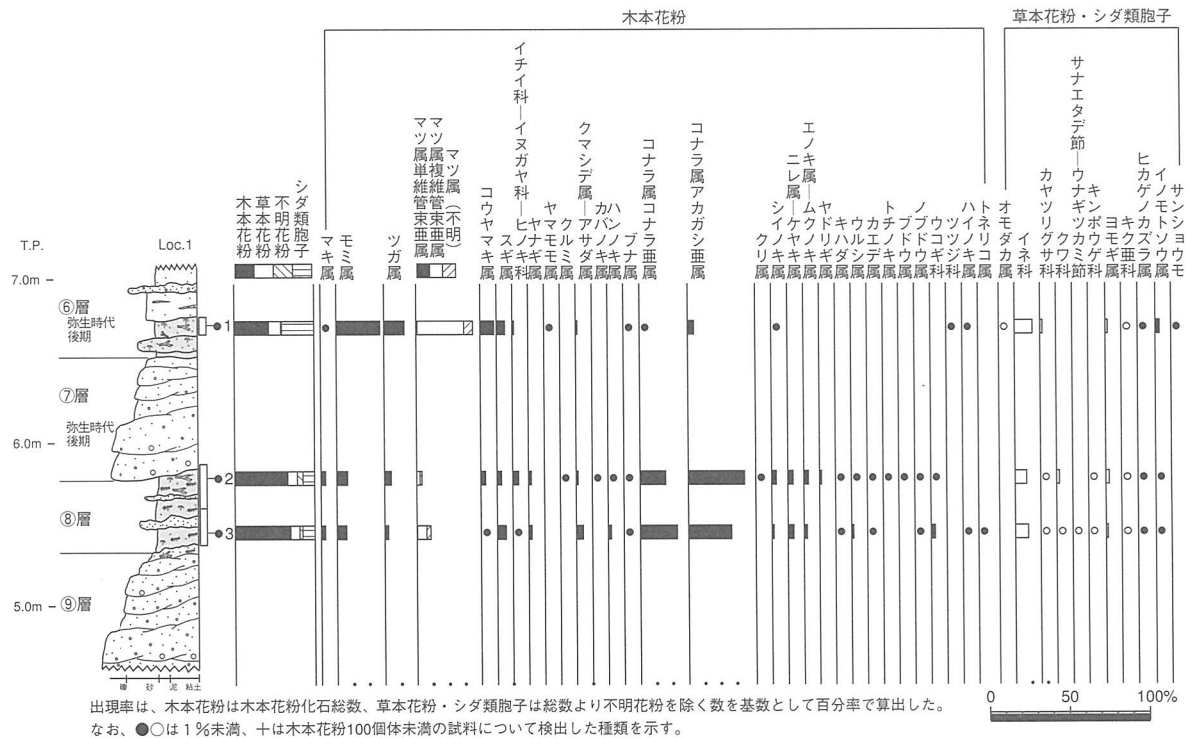
（1）珪藻分析

珪藻分析の結果を表1、図118に示す。珪藻化石は、Loc.3の試料7（⑨層）、Loc.3の試料3（⑦層）



海水-汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

図118 Loc.3の主要珪藻化石群集の層位分布



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

図119 Loc.1の花粉化石群集の層位分布

でのみ100個体以上産出する。その他の試料の産出数は、0～36個体である。産出する珪藻化石群集は、いずれも類似している。産出する珪藻化石は、表面が風化している保存状態が不良なものが多い。

Loc. 3の⑨層・⑦層の群集組成の特徴は、全体的に貧塩不定性種（少量の塩分があってもこれによく耐えることができる種）が多産し、好+真流水性種が比較的多く産出することである。中でも、好流水性種・中～下流性河川指標種（安藤，1990）の*Cymbella sinuata*が約10～20%産出する。その他は、海水～汽水生種・内湾指標種（小杉，1988）の*Cyclotella striata-stylorum*、流水不定性種（止水域にも流水域にも生育する種）の*Amphora affinis*、陸生珪藻A群（伊藤・堀内，1991）など様々な生態性の種が低率で産出する。本地点および他地点の珪藻化石の産出数が少ない試料に関しても、群集構成種は、Loc. 3 試料7・試料3で産出する種に含まれる。

なお中～下流性河川指標種は、主に中～下流部、すなわち、河川沿いに河成段丘・扇状地・自然堤防・後背湿地といった地形が見られる環境で生育する種、内湾指標種は、内湾水中を浮遊生活する種、陸生珪藻は、多少の湿り気のある乾いた環境に生育する種とされる。陸生珪藻の中でも、乾燥に耐性のある種がA群とされる。

（2）花粉分析

結果を表2、図119～121に示す。以下に各地点毎の産出状況を述べる。

Loc.4では全体的に花粉化石の保存が悪く、マツ属、スギ属などの花粉化石が微量検出される程度である。Loc. 1・2・3の開析谷を充填する堆積物中の花粉化石群集は、⑧層と⑦層の層界を境として変化する。⑨層（Loc.3 試料5～7）と⑧層（Loc.1 試料1・2）では、木本花粉の割合が高いのが特徴である。アカガシ亜属の割合が高く、コナラ亜属がそれに次いで多い。そのほか、マキ属、スギ属、シイノキ属、クマシデ属－アサダ属などの花粉化石がみられる。草本花粉では、イネ科やヨモギ属などが検出されている。⑦・⑥層（Loc.1 試料1、Loc.3の試料1～4）では草本花粉の割合が高くなるが、これはイネ科花粉の増加によるものである。イネ科花粉は、特に⑦層のLoc.3 試料3で多くなっている。木本花粉は、マツ属とアカガシ亜属が多く検出され、モミ属、ツガ属、スギ属などが見られる。⑨・⑧層と比較して、針葉樹花粉の割合が増加している。弥生時代後期の洪水堆積物である③層（Loc.2 試料2・3）では、⑦・⑥層と組成が類似する。中世以降の堆積物である②層（Loc.2 試料1）では花粉化石の保存が悪く、あまり検出されていない。

（3）植物珪酸体

1）（その2）調査区

結果を表3、図122～125に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下に植物珪酸体の産出を示す。

⑮層（Loc.4 試料4）では植物珪酸体の産出数が少なく、ネザサ節の短細胞珪酸体やタケ亜科の機動細胞珪酸体がわずかに認められるに過ぎない。⑬層・⑫層（Loc.4 試料3・2）ではネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、ウシクサ族（コブナグサ属やススキ属を含む）、イチゴツナギ亜科が認められる。また、⑫層（Loc.4 試料2）ではネザサ節とヨシ属が増加する傾向が見られる。

Loc.1・2・3・4の弥生時代後期の開析谷内堆積物である⑨～⑥層では、いずれも同様な産出が見られる。ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、ウシクサ族（コブナグサ属やススキ属を含む）、イチゴツナギ亜科が認められる。なお、⑨層（Loc.3 試料6）と⑦層（Loc.3 試料1～4・Loc.4 試料1）からは栽培植物であるイネ属の機動細胞珪酸体がわずかに検出される。弥生時代後期の洪水堆

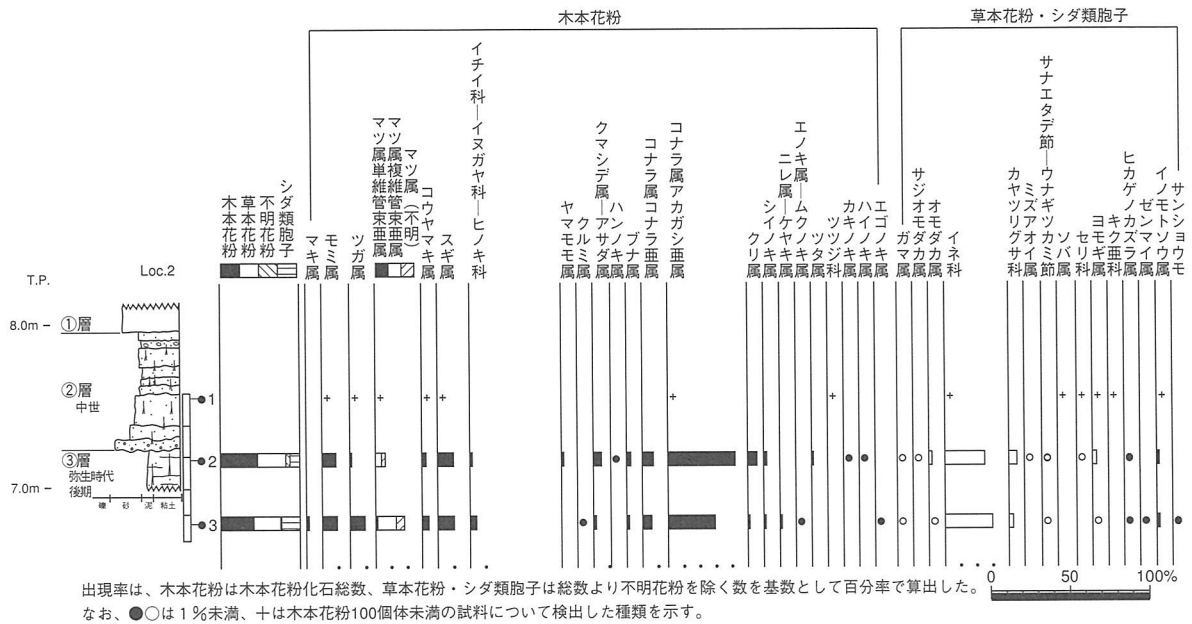


図120 Loc.2の花化石群集の層位分布

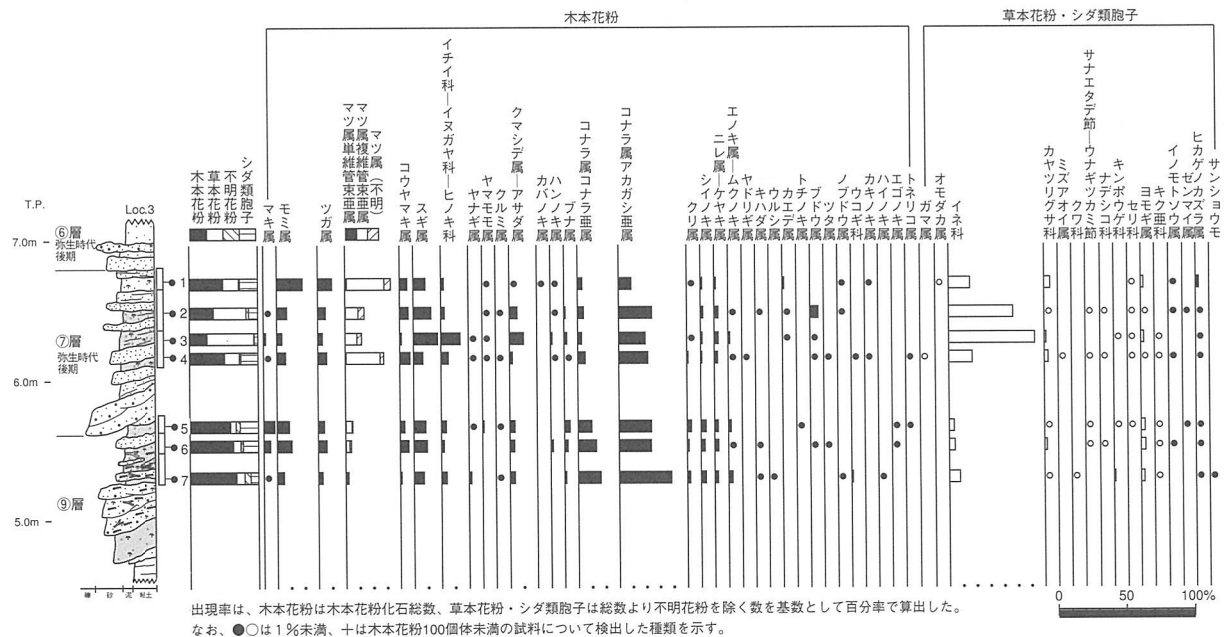


図121 Loc. 3の花化石群集の層位分布

積物である③層 (Loc.2 試料3・2) では、下部で検出個数が少ない。上部の組成は⑨層～⑥層の組成と類似するが、ネザサ節の出現率が低く、ヨシ属がやや多産する点で若干異なる。

中世以降の堆積物である②層 (Loc.2 試料1) では、ネザサ節を含むタケ亜科、イネ属、ヨシ属、ウシクサ族 (コブナグサ属やススキ属を含む)、イチゴツナギ亜科などが認められ、タケ亜科とともにイネ属の産出が目立つ。

2) (その3) 調査区

結果を表4、図126～131に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔 (溶食痕) が認められる。以下に、植物珪酸体の産状を述べる。

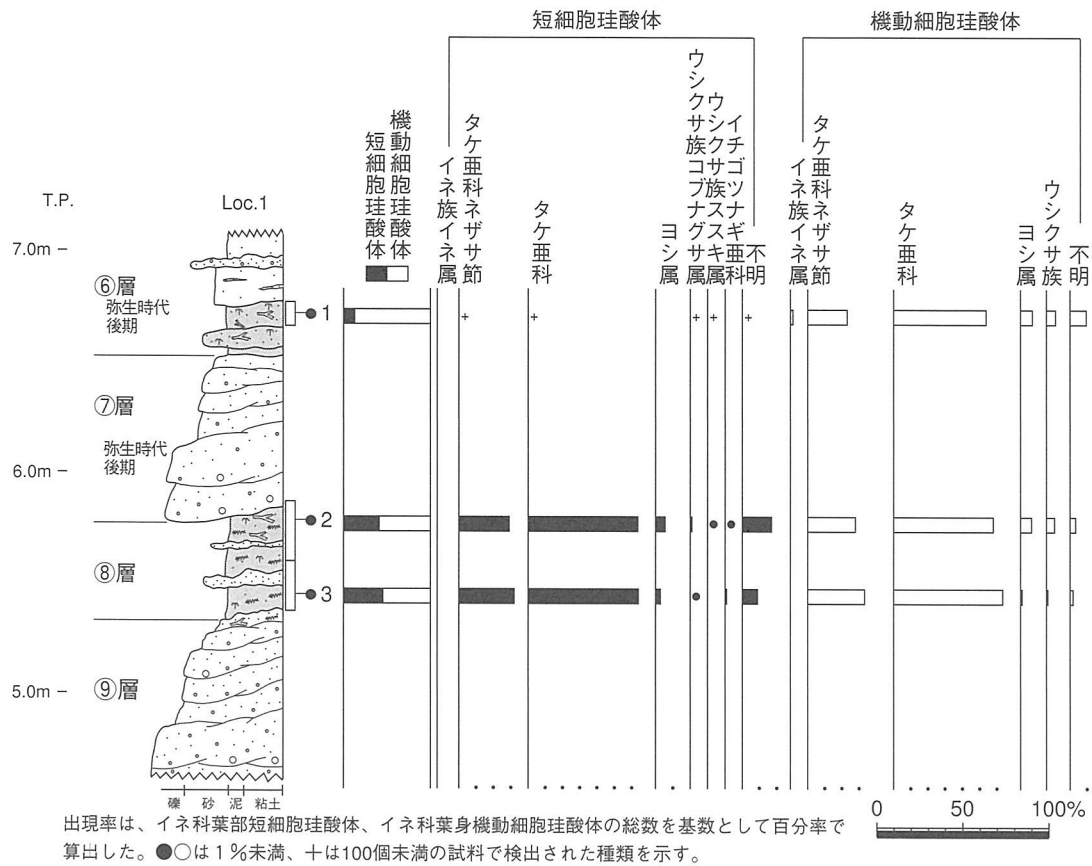


図122 Loc.1の植物珪酸体群集の層位分布

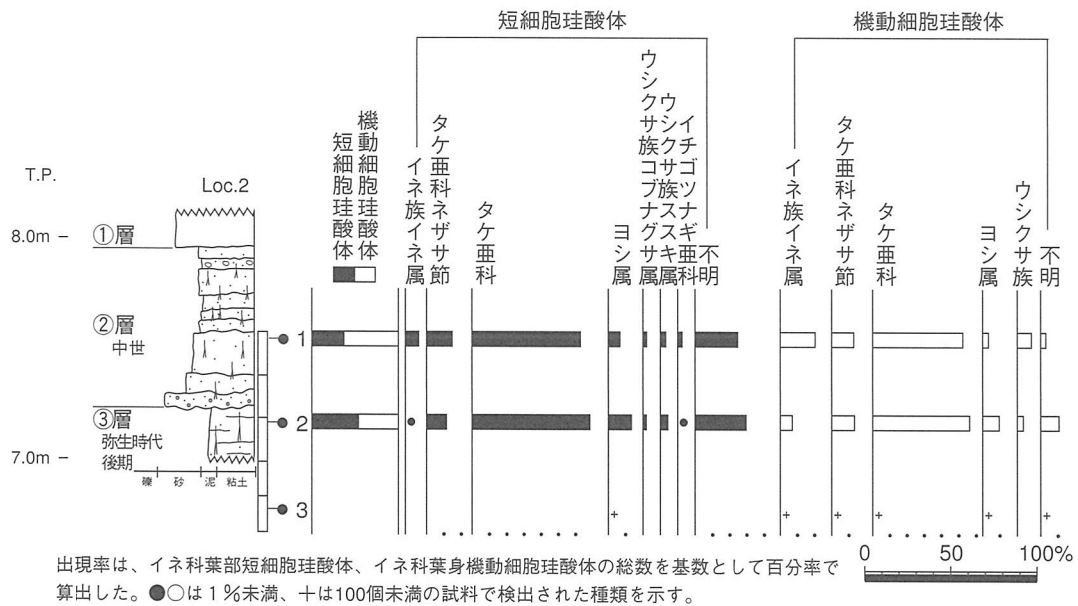


図123 Loc.2の植物珪酸体群集の層位分布

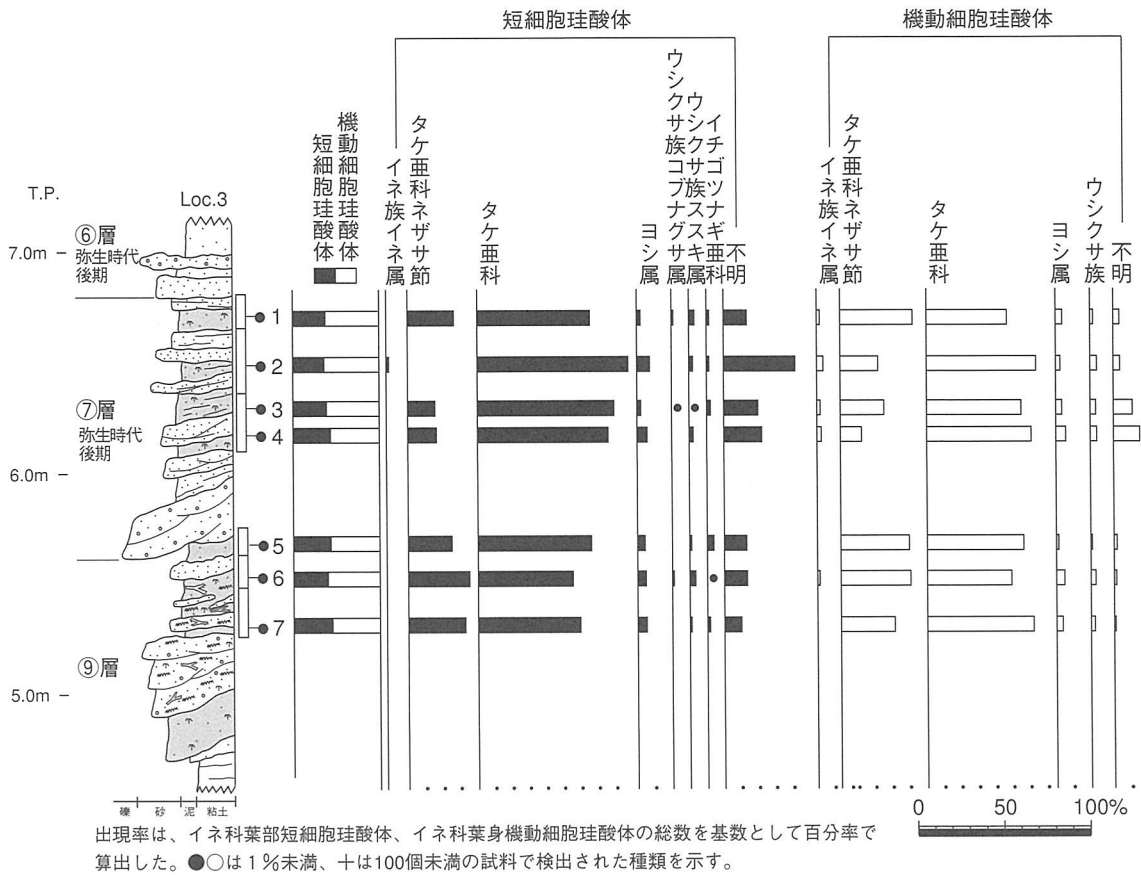


図124 Loc.3の植物珪酸体群集の層位分布

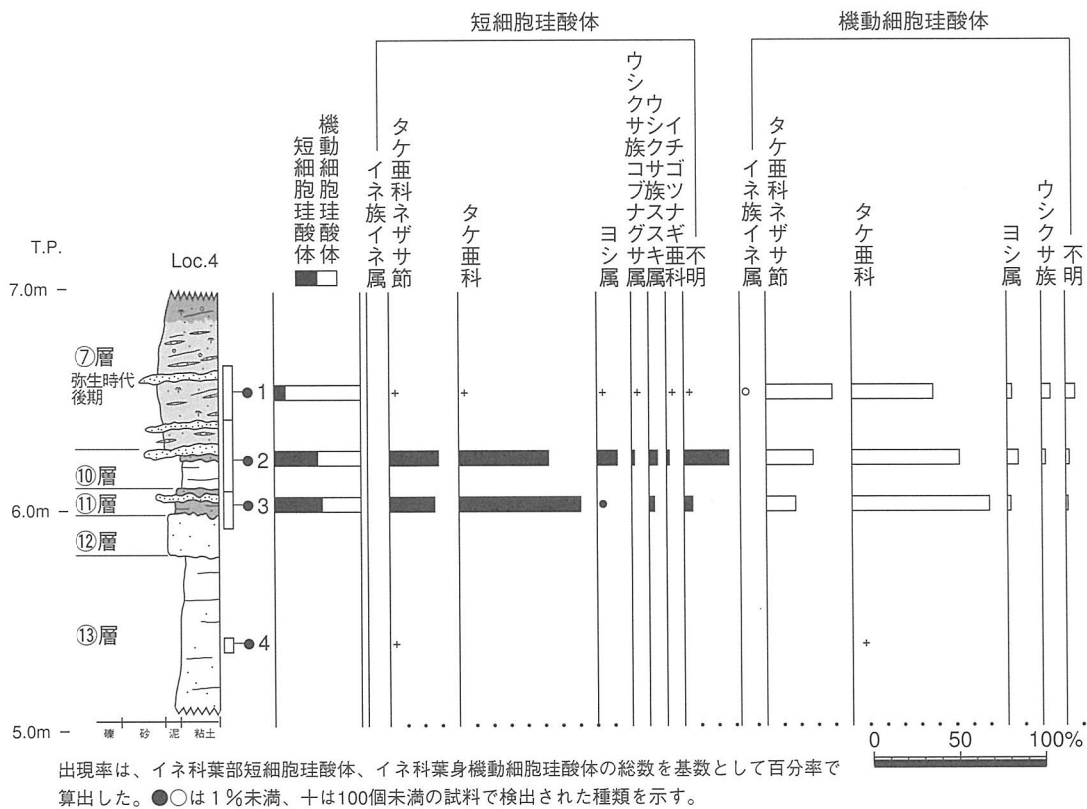


図125 Loc.4の植物珪酸体群集の層位分布

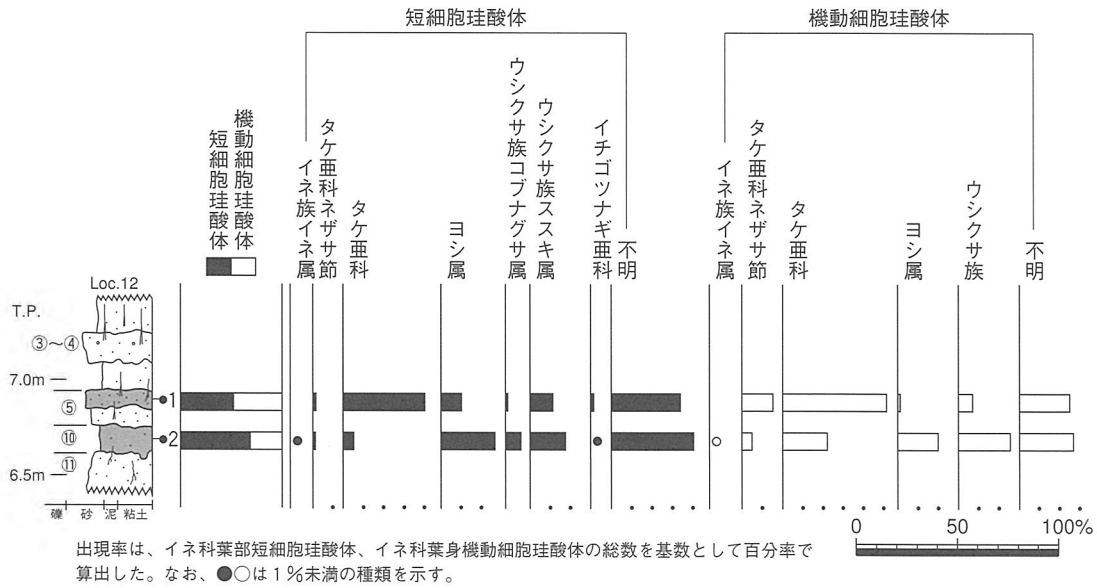


図126 Loc.12の植物珪酸体群集の層位分布

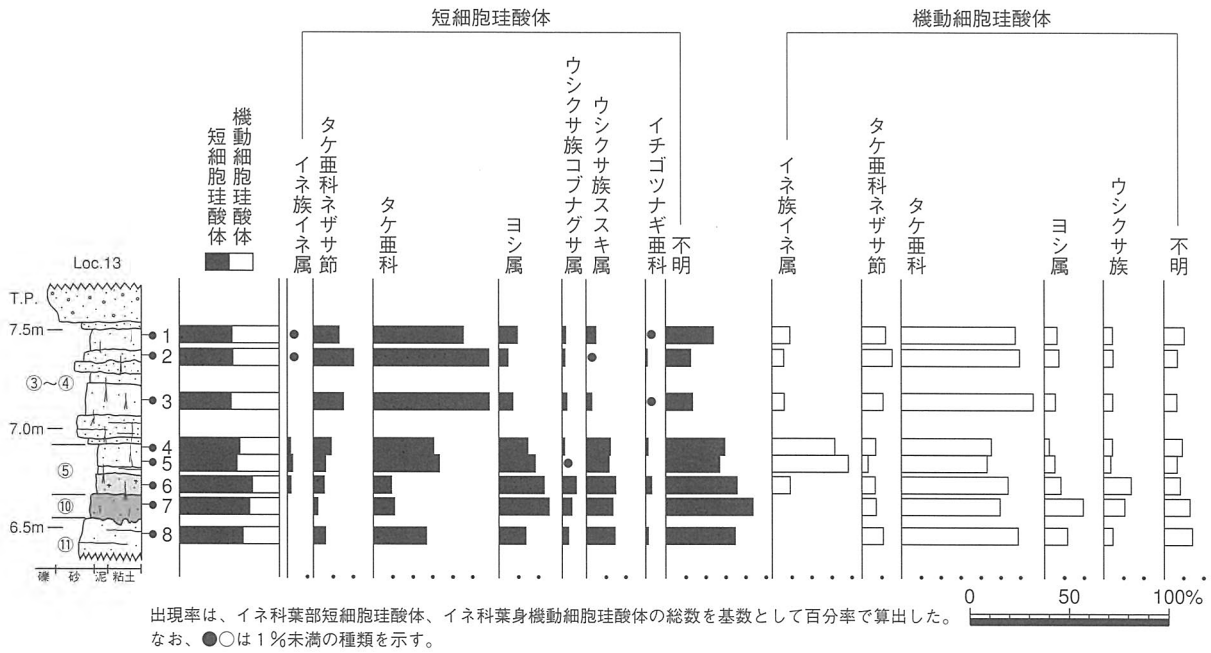


図127 Loc.13の植物珪酸体群集の層位分布

・Loc.12 (図126)

試料2ではヨシ属やコブナグサ属、ススキ属の短細胞珪酸体の産出が目立ち、イネ属やタケ亜科、イチゴツナギ亜科などが認められる。試料番号1ではイネ属が認められず、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つ。ヨシ属やコブナグサ属、ススキ属も認められるものの、出現率が減少する。

・Loc13 (図127)

試料8では、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども認められる。第3面に相当する試料番号7とその上位の試料6では、

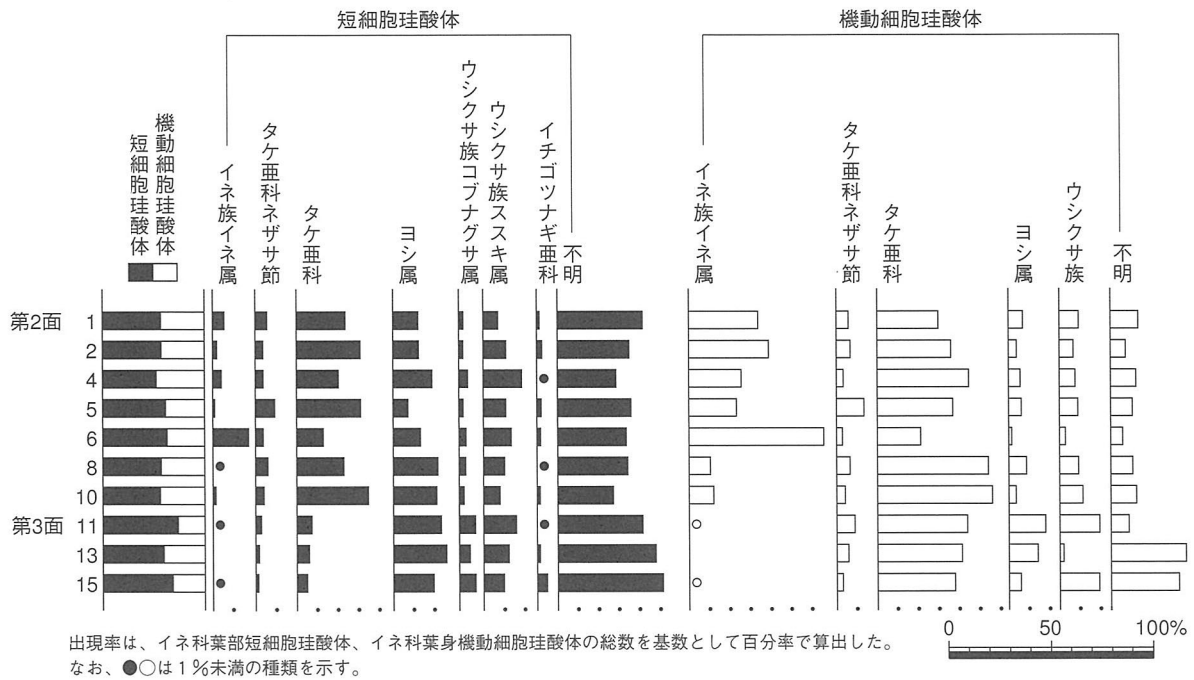


図128 平面サンプルの植物珪酸体群集

ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つものの、ヨシ属やコブナグサ属の短細胞珪酸体の出現率も高い。また、試料6で栽培植物であるイネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が検出される。試料5 E 4では、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つものの、イネ属機動細胞珪酸体の出現率も高く、30~40%弱である。第2面に相当する試料3およびその上位の試料2・1ではイネ属の出現率が減少し、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つ。また、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども認められる。

・平面サンプル (図128・130・131)

第2面では、各試料ともネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属の短細胞珪酸体の出現率も高い。また、各試料からはイネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が検出されるが、調査区の南側と北側でイネ属の産出が極端に異なる。南側では概してイネ属機動細胞珪酸体の出現率が高く、特に試料番号6は約66%である。北側はイネ属の出現率が短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体ともに低い。

第3面では、いずれもタケ亜科機動細胞珪酸体の産出が目立つが、ヨシ属やコブナグサ属の短細胞珪酸体の出現率も高い。イネ属は、試料11・15でわずかに認められるに過ぎない。

(4) 種実同定

結果を表5に示す。被子植物36種類の種実、葉が同定されたほか、木の芽、材、炭化材、蘚苔類、不明植物(木材組織が認められない、部位・種類ともに不明の植物片を示す)、菌類の菌核(おそらく樹皮の表面に付着していた肉座菌などが考えられる)、昆虫遺骸の破片などが検出された。

検出された種類は、保存が比較的良好である。木本は、広葉樹12種類(アカガシ亜属、ブナ科、ヤマグワ、カジノキ属、マタタビ属、キイチゴ属、ウルシ属、ヒサカキ、タラノキ、ミズキ、エゴノキ属、ニワトコ)が同定された。また、葉片が確認されたが、同定根拠となる先端部や基部を欠損するため、広葉樹にとどめた。草本は、単子葉植物7種類(ヘラオモダカ、イネ、アワーヒエ、エノコログサ属、

ホタルイ属、カヤツリグサ科、イボクサ)、双子葉植物16種類(カラムシ属、ギシギシ属、サナエタデ近似種、タデ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、トウゴクサバノオ、アオツツラフジ、カタバミ属、スマレ属、セリ科、チドメグサ属、メハジキ属、イヌコウジュ属、オミナエシ属、キク科)が同定された。以下に、同定された種実遺体の形態的特徴を木本、草本の順に記す。

<木本>

- ・アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科コナラ属

幼果が同定された。灰褐色、環状椀の殻斗に果実が包まれる。径7mm、高さ6mm程度。

- ・ブナ科 (*Fagaceae*)

果実破片が検出された。茶褐色、大きさ7mm以上。表面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。上述のコナラ属の他に、クリ属クリヤシイ属も同様の果実表面形態を持つため、ブナ科にとどめた。

- ・ヤマグワ (*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

種子が検出された。黄褐色で三角状広倒卵形。一側面は狭倒卵形で、他方は稜になって薄い。長さ2mm、幅1.5mm程度。一辺が鋭利で、基部に爪状の突起を持つ。表面には微細な網目模様がありざらつく。

- ・カジノキ属 (*Broussonetia*) クワ科

種子が検出された。黄~茶褐色、長方形状楕円形。一側面は狭倒卵形で、他方は稜になって薄い。長さ2.5mm、幅2mm程度。基部に突起をもつ。表面には疣状の微細な隆起が散在する。

- ・マタタビ属 (*Actinidia*) マタタビ科

種子が検出された。黒褐色、楕円形で両凸レンズ形。長さ2mm、幅1.5mm程度。基部はやや突出し、切形。種皮は硬く、表面には円形・楕円形などの凹点が密布し網目模様をなす。

- ・ヒサカキ (*Eurya japonica* Thunberg) ツバキ科ヒサカキ属

種子が検出された。茶~黒褐色、不規則な多角形でやや偏平、径1mm程度。一端に臍があり、臍の方に薄い。臍を中心に楕円形や円形凹点による網目模様が指紋状に広がる。

- ・キイチゴ属 (*Rubus*) バラ科

核(内果皮)が検出された。淡黄褐色、半円形~三日月形。長さ2mm、幅1mm程度。腹面方向にやや湾曲する。表面には大きな凹みが分布し網目模様をなす。

- ・ウルシ属 (*Rhus*) ウルシ科

核が検出された。繭形でやや偏平。長さ4mm、幅3mm、厚さ1mm程度。背腹両面の中央部はわずかに凹む。表面はやや平滑。内果皮は厚くてやや堅い。

- ・タラノキ (*Aralia elata* (Miq.) Seemann) ウコギ科タラノキ属

核(内果皮)が検出された。茶褐色、半月形でやや偏平。長さ2.5mm、幅1.5mm程度。腹面はほぼ直線状で、片端に突起が見られる。背面には数本の浅い溝が走る。表面はざらつく。

- ・ミズキ (*Cornus controversa* Hemsley) ミズキ科ミズキ属

核が検出された。褐色で大きさは5mm程度。縦方向にややつぶれた球形。基部に大きな臍がある。縦方向に走る深い溝がみられる。

- ・エゴノキ属 (*Styrax*) エゴノキ科

種子が検出された。黒褐色、卵形で長さ10mm、幅6.5mm程度。基部は切形で淡褐色の大きな臍点がある。表面には3本程度の縦溝が走る。種皮は厚く(1mm程度)硬く、外面は微細な網目模様があり、内面はスポンジ状でざらつく。

・ニワトコ (*Sambucus racemosa* L. subsp. *Sieboldiana* (Miq.) Hara) スイカズラ科ニワトコ属

核(内果皮)が検出された。淡~黄褐色、広倒卵形でやや偏平。基部はやや尖る。長さ2.5mm、幅1.5mm程度。背面は円みがあり、腹面の中央は縦方向の鈍稜をなす。腹面下端には小さな孔がある。内果皮はやや硬く、表面には横皺状模様が発達する。

<草本>

・ヘラオモダカ (*Alisma canaliculatum* A. Br. et Bouche) オモダカ科サジオモダカ属

果実が検出された。淡褐色、楕円形で偏平、基部は切形。長さ2mm、幅1.5mm程度。背部に深い縦溝が1本走る。果皮はスポンジ状で柔らかく、中の種子が透けてみえる。種子は茶褐色、倒U字状に曲がった円柱状で偏平。大きさ1mm程度。種皮は膜状で薄くやや透き通り柔らかい。表面には微細な網目があり縦筋が目立つ。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

炭化した胚乳が検出された。胚乳は黒色、長楕円形でやや偏平。長さ4mm程度。一端に胚が脱落した凹部があり、両面には2~3本の縦溝がある。

・アワーヒエ (*Setaria itarica* Beauv. - *Echinochloa crus-galli* Beauv.) イネ科

炭化した胚乳が検出された。黒色、広楕円形でやや偏平。長さ1.5mm、幅1mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平らで、基部に胚の凹みがある。

・エノコログサ属 (*Setaria*) イネ科

穎が検出された。淡褐色ないし茶褐色、半偏球形で長さ2.5mm、径1.5mm程度。穎は薄く柔らかくて弾力があり、表面には横方向に長い細胞が密に配列する。

・ホタルイ属 (*Scirpus*) カヤツリグサ科

果実が検出された。黒褐色、片凸レンズ状の広倒卵形。長さ2mm、幅1.5mm程度。背面はやや高く稜がある。先端部は尖り、基部から伸びる逆刺を持つ髭状の腕が残る。表面は光沢があり、不規則な波状の横皺状模様が発達する。

・カヤツリグサ科 (*Cyperaceae*)

果実が検出された。上述のホタルイ属以外の形態上差異のある複数の種を含んでいるものを一括した。スゲ属と思われる個体などを含む。スゲ属 (*Carex*) の果実は淡褐色ないし茶褐色。三稜状倒卵形。長さ2mm、幅1mm程度。頂部の柱頭部分がわずかに伸びる。表面には微細な網目模様がありざらつく。形態上差異のある複数の種を含む。

・イボクサ (*Aneilema Keisak* Hassk.) ツユクサ科イボクサ属

種子が検出された。赤みがかかった灰褐色で半横長楕円形。径2.5mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平らである。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、表面は円形の小孔が多数存在する。

・カラムシ属 (*Boehmeria*) イラクサ科

果実が検出された。淡黄褐色、非対称な広倒卵形で偏平。径1.2mm程度。先端部や基部は尖り、中央部は両凸レンズ形。果皮は薄く表面はざらつく。

・ギシギシ属 (*Rumex*) タデ科

果実が検出された。暗褐色、卵状三稜形。径3mm程度。両端は急に尖り、稜は鋭い。

・サナエタデ近似種 (*Polygonum* cf. *lapathifolium* L.) タデ科タデ属

果実を覆う花被が検出された。茶褐色、心円形で薄く、径5mm程度。大きな網目模様の脈があり、縁に歯牙がある。

・タデ属 (Polygonum) タデ科

果実が検出された。サナエタデ近似種以外のタデ属で、形態上差異のある複数の種を含んでいるものを一括した。ハナタデーイヌタデと思われる個体を含む。

ハナタデーイヌタデ (Polygonum caespitosum Blume subsp. Yokusaianum (Makino))

Danser - Polygonum longisetum De Bruyn) : 黒色、丸みのある菱形で三稜形。長さ2~3mm、幅1.5mm程度。表面は光沢が強く、微細な網目模様がある。

・アカザ科-ヒユ科 (Chenopodiaceae - Amaranthaceae)

種子が検出された。黒色。側面観は円形で、上面観は凸レンズ形を呈している。大きさは1mm程度。側面に「へそ」がある。表面は細胞が亀甲状に配列している構造がみられる。

・ナデシコ科 (Caryophyllaceae)

種子が検出された。茶褐色、腎臓状円形でやや偏平。径1mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には、臍を取り囲むように瘤状突起が同心円状に配列する。

・トウゴクサバノオ (Isopyrum trachyspermum Maxim.) キンボウゲ科シロカネソウ属

種子が検出された。淡褐色、球形。径1mm程度。果皮は薄く、表面には小突起が密布する。

・アオツブラフジ (Cocculus orbiculatus (L.) DC.) ツブラフジ科アオツブラフジ属

核が検出された。褐色で、大きさは4mm程度。楕円形で扁平。外周は比厚し、放射状に細かい隆起がある。表面は堅くて厚く、ざらつく。

・カタバミ属 (Oxalis) カタバミ科

種子が検出された。黒灰色、卵形で偏平。長さ1.6mm、幅1.2mm程度。先端は尖る。種皮は薄く柔らかく、縦方向に裂けやすい。表面には4~7列の肋骨状横隆条が並び、わらじ状にみえる。

・スミレ属 (Viola) スミレ科

種子が検出された。淡黄~淡灰褐色、広倒卵形。長さ1.5mm、径1mm程度。基部は尖り、頂部には円形の臍点がある。種皮は薄く、表面は細い縦筋が走りざらつく。種皮内面は横長の細胞が配列する。

・セリ科 (Umbelliferae)

果実が検出された。複数の異なる種類を含む。黄褐色、楕円形で偏平。長さ2mm、幅1.5mm程度や、両端が尖る線状長楕円形で偏平。長さ2mm、幅1mm程度など。果皮はスポンジ状で、表面には数本の幅広い稜があり、その間に半透明で茶褐色の油管が配列する。

・チドメグサ属 (Hydrocotyle) セリ科

果実が検出された。黄褐色、半月形でやや偏平。径1mm程度。一端には太い柄があり、合生面は平坦。果皮は厚く、やや弾力がある。表面には1本の明瞭な円弧状の稜がある。

・メハジキ属 (Leonurus japonicus Houtt.)

果実が検出された。灰褐色、広倒被針状六稜形。長さ2.5mm、径1mm。背面は丸みがあり、腹面と左右の縁は稜をなす。

・イヌコウジュ属 (Mosla) シソ科

果実が検出された。茶褐色、卵円形。径1.2~1.4mm程度。下端は舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面には大きく不規則な網目模様がある。

・オミナエシ属 (Patrinia) オミナエシ科

果実が検出された。黒褐色、完形ならば先端が尖る楕円形で偏平。大きさ1.8mm程度。縁は翼状で、腹面の正中線上には隆条があり、その上部は突起し孔がある。表面には微細な網目模様がありざらつく。

・キク科 (Compositae)

果実が検出された。淡褐色、狭倒皮針形。長さ2mm、径0.5mm程度。頂部は切形で円形の臍がある。果皮表面には浅い縦溝と微細な網目があり、ざらつく。

(5) 軟X線写真撮影観察

軟X線写真およびそのトレース図を図129に示す。軟X線写真の観察結果については、微化石分析結果を合わせ次章で述べる。

第7項 考察

(1) 堆積環境変遷

今回の分析では、ほとんどのサンプルで珪藻化石が検出されなかった。珪藻化石が少ない理由としては、堆積物に取り込まれた珪藻化石の量が少なかったり、珪酸分の溶脱や粘土化による作用により堆積後に分解した可能性などが考えられる。少量検出された珪藻化石群集の特徴は、流水性種がやや卓越し、その他に様々な環境で生育する種が低率で産出することである。このような群集は混合群集とされ、氾濫堆積物中で認められることが多い(堀内ほか, 1996)。この結果は、堆積層断面の観察とも調和的である。なお、分析試料の大部分で、海水～汽水生種などの塩分濃度の高い環境で生育する種が若干産出するが、これらは遺跡周辺に分布する更新統の海成層に由来するものと思われる。

調査区北西隅で検出された開析谷(流路1)は、層相から主に後背湿地堆積物と推定される⑫～⑮層付近を侵食して形成されている。⑫～⑮層では、珪藻化石がほとんど産出されなかった。珪藻化石が少ない理由については、上記したような理由が挙げられる。本層準に含まれる珪藻化石は完形殻の出現率が低く、分解が進んだ個体が比較的多く観察される。このような珪藻化石の遺存状態および堆積物の層相観察から、本層準は水浸かりの後背地湿地でなく、好氣的な土壌環境がかなりの期間が継続するような離水しがちな後背湿地の堆積環境であったことが推定される。

開析谷内(流路1)とその南側に存在し③～⑤層によって充填される河道堆積物(流路2)では、垂直および水平方向における堆積相の累重様式に明瞭な差異が認められる。開析谷(流路1)は、層相から後背湿地堆積物と推定される⑫～⑮層を侵食して形成されている。開析谷下部では、流路充填堆積物に指交する流路縁ないし流路側壁堆積物が存在している。開析谷上部では、河岸堆積物の累重が顕著に観察される。以上のような累重様式から、開析谷内では、側方堆積作用が卓越する流路が形成されていたことが推定される。流路充填堆積物の上面では、放棄流路が形成されており、主に上流側での流路変更によって流路位置が交代するような河道であったことが想定される(松田, 1999)。

③～⑤層によって充填される河道(流路2)は、開析谷内に存在する流路によって形成された河岸堆積物の一部を侵食して形成されている。この河道では、流路縁～河岸堆積物の発達が悪く、主に流路充填堆積物および氾濫堆積物によって埋積されている。以上のような累重様式から、③～⑤層によって充填される河道(流路2)内では、滲筋があまり蛇行せず、流路充填堆積物の分布帯内において位置を交代させながら流下していくような流路が形成されていたことが推定される(松田, 1999)。

開析谷およびその南側に存在する流路を埋積する③～⑦層からは、弥生時代後期の土器を下限年代と

する遺物が出土している。③層上面では、弥生時代後期の遺構が形成されている。検出されている弥生時代後期の土器は、堆積層ごとの型式学的な差異がほとんど認められていない。このことから緑地調査区北西部では、弥生時代後期のうちのある短期間に開析谷の最終的な埋積ならび新たな流路形成およびその充填が行われたことが推定される。堆積層断面の観察から、緑地調査区北西部では、顕著な河道堆積物の累重を伴う弥生時代後期の氾濫原形成により、堆積面が局所的に1 m前後上昇したことが確認された。③～⑦層で検出されている弥生時代後期の土器は、ローリングを受けたものが少なく、ごく近辺から流下してきたものと考えられる。このことは、急激な氾濫原形成が行われていた弥生時代後期に、本調査区周辺で当該期の人間活動領域が存在していたことを示唆する。

遺構・遺物の検出状況および堆積層の累重様式から、堆積層の上面で弥生時代後期の遺構が検出された・層形成以降には、堆積速度が遅くなり地形環境が安定したことが窺える。②層は、耕作土を主体とする堆積物によって構成されている。②層を構成する堆積物は、シルトを多量に含む極細粒砂～細粒砂で主に構成されている。これらの堆積物は、粒径から判断して洪水時に調査区内へ流入してきたウォッシュロードや浮遊砂であると考えられる。ウォッシュロードとは、出水時に河川を浮遊輸送される河床物質荷重のうち、河床物質中にほとんど含まれず上流から流下してくる微細な荷重のことを指している。以上のような特徴から、②層は細粒な氾濫堆積物が流入するようなやや不安定な堆積環境下において、耕作を主とする人間活動が行われてきたことが推定される。

(2) その3 調査区における弥生時代後期の土地利用状況

1) 軟X線写真観察からみた弥生時代後期の土地利用状況

図129で示した軟X線写真は、ポジ写真の色調を反転しており、堆積物の密度が大きい部分がより白く、小さい部分がより黒く表現されている。堆積物の観察にあつては、撮影試料の目視およびスキャナーによってコンピューター上に取り込んだ軟X線写真の画像から、堆積層の累重や土壌・堆積構造の観察するとともに、これらのパターンについてもトレースを行った。画像については、階調や明るさ、コントラストの調整などの簡単な補正を実施している。より細部の土壌・堆積構造については、画像を任意に切り取り、それについて拡大および画像補正を行い、観察を実施した(図129の1～4)。

軟X線写真の記載については、『土壌薄片記載ハンドブック』(久馬・八木訳監修, 1989)を参考とした。各写真については、土壌の基本的構造である粒団(ベッド)や粗孔隙ないし間隙(写真で黒く表現されている部分)の形状や分布を中心として堆積物の微細な堆積構造の記載を試みた。図版の軟X線写真では、堆積物中の粗孔隙ないし間隙量が相対的に多いほど、全体的に黒みを増していく傾向となる。

「粗孔隙」と「間隙」の用語については、(成岡その他2000a・b)に従い、粗孔隙を土の乾燥収縮、植物根の腐朽跡あるいは地中動物の通行跡などに相当し、面状や管状などの構造単位の特定な単位に、間隙を、粗孔隙を含むすべてのすき間に対して使用する。また、「粗孔隙」のうち、円孔断面またはそれに近い断面のすき間が想定されるものについては、特に「管状孔隙」と呼称することにした。以下に軟X線写真の観察を行ったサンプル①と②の特徴について述べていく。これらのサンプルの採取位置については、図117に示している。

サンプル①の上半部は、灰黄色を呈し淘汰の良い中粒砂～粗粒砂層によって構成されている。この砂層内には、やや不明瞭な水平葉理が観察される。最上部と上部には、塊状をなす直径2～3 mm程度の粒団が発達する層厚20mm程度の層準が認められる(図129の写真1・2)。この層準は、周囲に比べやや泥がちの粒度組成となっている。本層準で認められる粒団は、安定した地表面となり、植物が着生して土

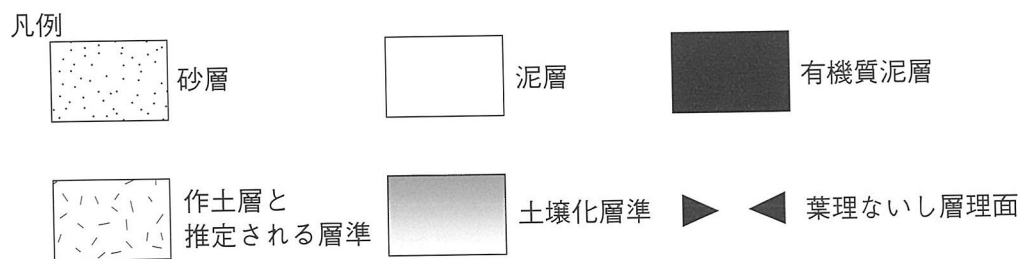
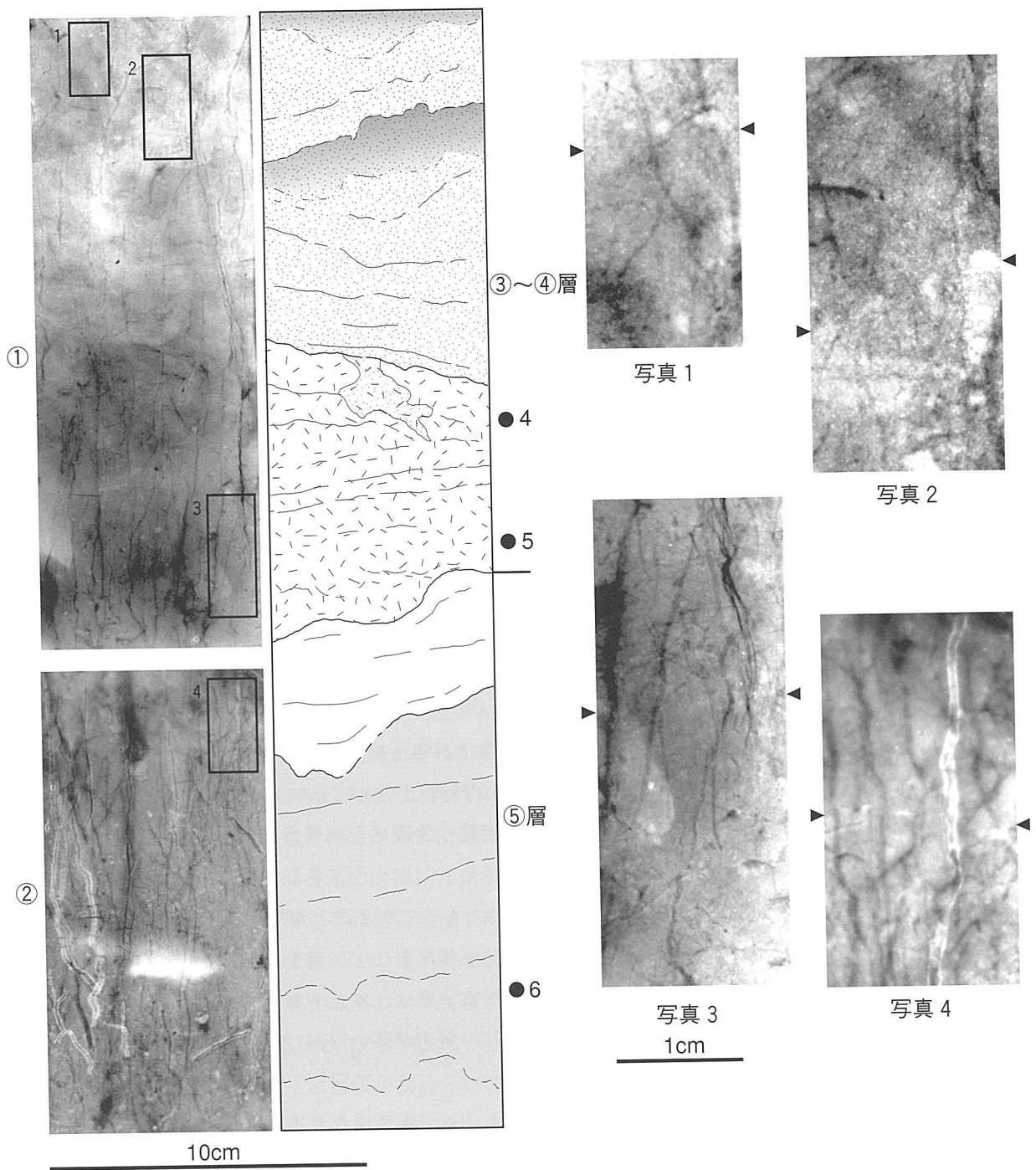


図129 Loc.13サンプル①・②の軟X線写真とそのトレース図

属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などのイネ科植物がある。これらの植物珪酸体の中には、氾濫時に土砂とともに二次的にもたらされたものや、氾濫の合間に地表面に被覆した母植物に由来するものが含まれると思われるが、どちらに由来するかを明確に決めることは難しい。ただし、先に述べた植物珪酸体の生産量等から考えると、タケ亜科は、当時の地表面化した際に生育していたものよりも、二次的にもたらされたものが多く、周辺植生を漠然と反映している可能性があると思われる。一方、ヨシ属やウシクサ族（ススキ属を含む）の植物珪酸体は、第3面など腐植化が進んだ層準で多く検出される傾向にあることから（Loc.12試料2，Loc.13試料6～8，第3面の平面サンプリング試料11～13）、母植物が腐植の供給に関与していた可能性が高い（図126～131）。この他、層相観察や緑地調査区北西部の結果を考慮すると、弥生時代後期以前には、好気的な土壤環境がかなりの期間が継続するような後背湿地の堆積環境であったことが示唆される。この際、ヨシ属やウシクサ族（ススキ属を含む）などが地表面を覆い、腐植が蓄積され、土壌化していったと考えられる。

第2面で検出された水田跡の上部を覆う砂層では、タケ亜科の珪酸体が高率で検出されている（Loc.12の①，Loc.13の①～③）。これらの砂層は、緑地調査区北西部で確認された河道（流路1・2）からオーバーフローしてきた氾濫堆積物である。このような堆積環境の変化が、周辺植生から二次的にもたらされるタケ亜科の珪酸体を相対的に増加させたものと思われる（図126・127）。

植物珪酸体の挙動やその後の風化に関しては、（江口1994，1996）などに示されており、pH値が高い場所や、乾湿を繰り返すような場所で風化しやすいことなどが指摘されているが、不明な点も多く、資料の蓄積を行った上で、再評価していきたい。

栽培植物であるイネ属は、第3面を構成する暗オリーブ黒色砂質粘土質シルト層より上位で検出されている。軟X線写真による堆積物の観察では、第2面を構成するLoc.13の④・⑤層が水田作土を構成する堆積層であることが推定された。④・⑤層は、イネ属の珪酸体が検出された他のサンプルに比べ高い出現率を示している。発掘調査では、第2面上において畦畔などの水田耕作に伴う遺構が検出されている。これら堆積層の層相やイネ属珪酸体の出現率、遺構の検出状況は、互いに調和的な傾向を示している。但し、第2面上において河道に近く、Loc.13よりも相対的に高所に位置しているLoc.12（試料1）では、イネ属の珪酸体が検出されなかった（図126）。Loc.12では、河岸を構成する砂質な氾濫堆積物によって構成されており、Loc.13周辺に分布しているような後背湿地泥層が存在していない（図117）。Loc.12周辺では、畦畔などの水田に伴う遺構が分布しないことが発掘調査によって確認されている。Loc.12試料1の上位は、氾濫堆積物の泥質砂～砂層によって埋没しており、侵食や削剥をほとんど受けてないと判断される。以上のような堆積層の層序、イネ属珪酸体の出現率や遺構の検出状況から、河岸状に高まりをなし、相対的に水がかりが悪いことが推定されるLoc.12周辺では、水田が造成されず耕作が放棄されていた可能性が示唆される。

水田面として土地利用されていたと考えられる第2面の平面サンプルをみると、同一層位でありながら、イネ属の組成に大きなばらつきが認められる（図128・130）。このような現象は、耕作行為などにより、植物珪酸体にばらつきが生じたためと推測される。これまでの調査事例によれば、水田耕土よりもそれに隣接する水路の方が、イネ属植物珪酸体の割合が高い場合もある（パリノ・サーヴェイ株式会社，1996b）。これらは、水田内での植物珪酸体の挙動に関わると思われるが、不明な点が多く、今後の検討課題である。一方、稲作の痕跡が認められない第3面では第2面ほど植物珪酸体組成にばらつきがみられない（図127・131）。これは、自然状態においては偏りがない方が安定であるから、組成が平均

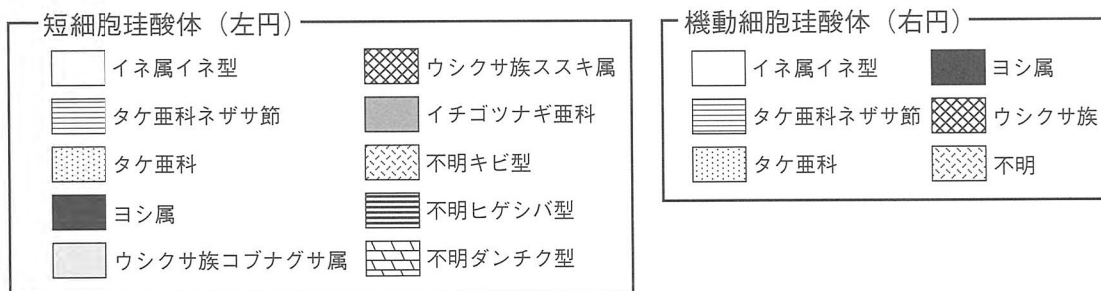
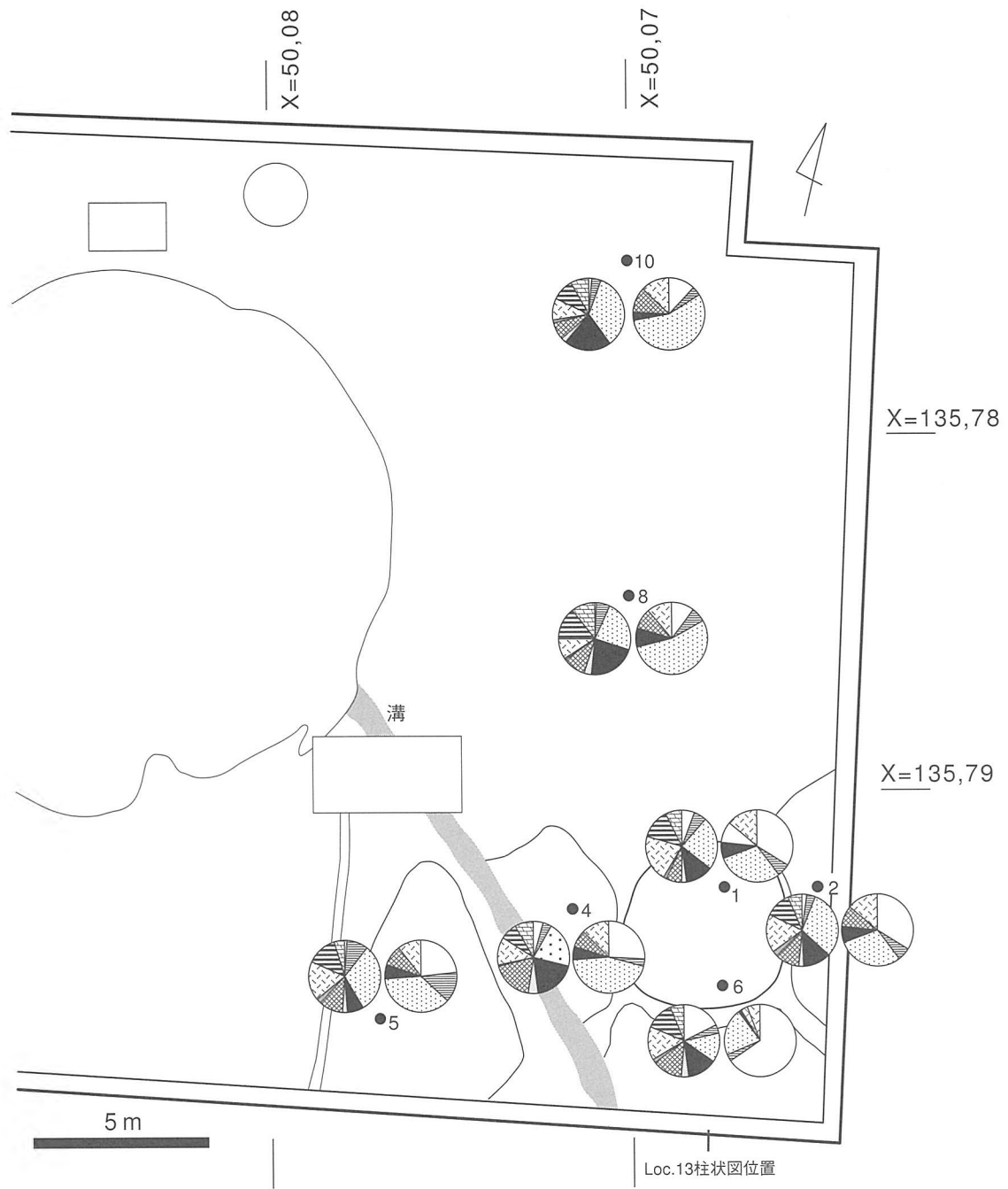


図130 第2面東半部における植物珪酸体組成

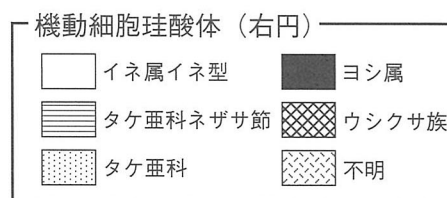
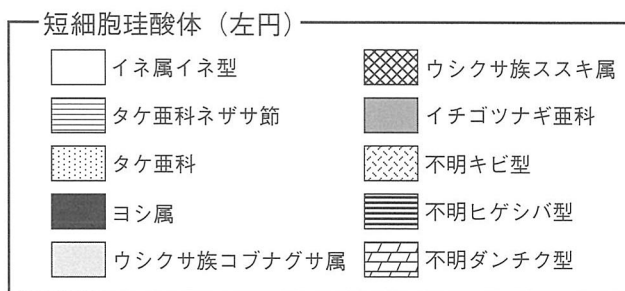
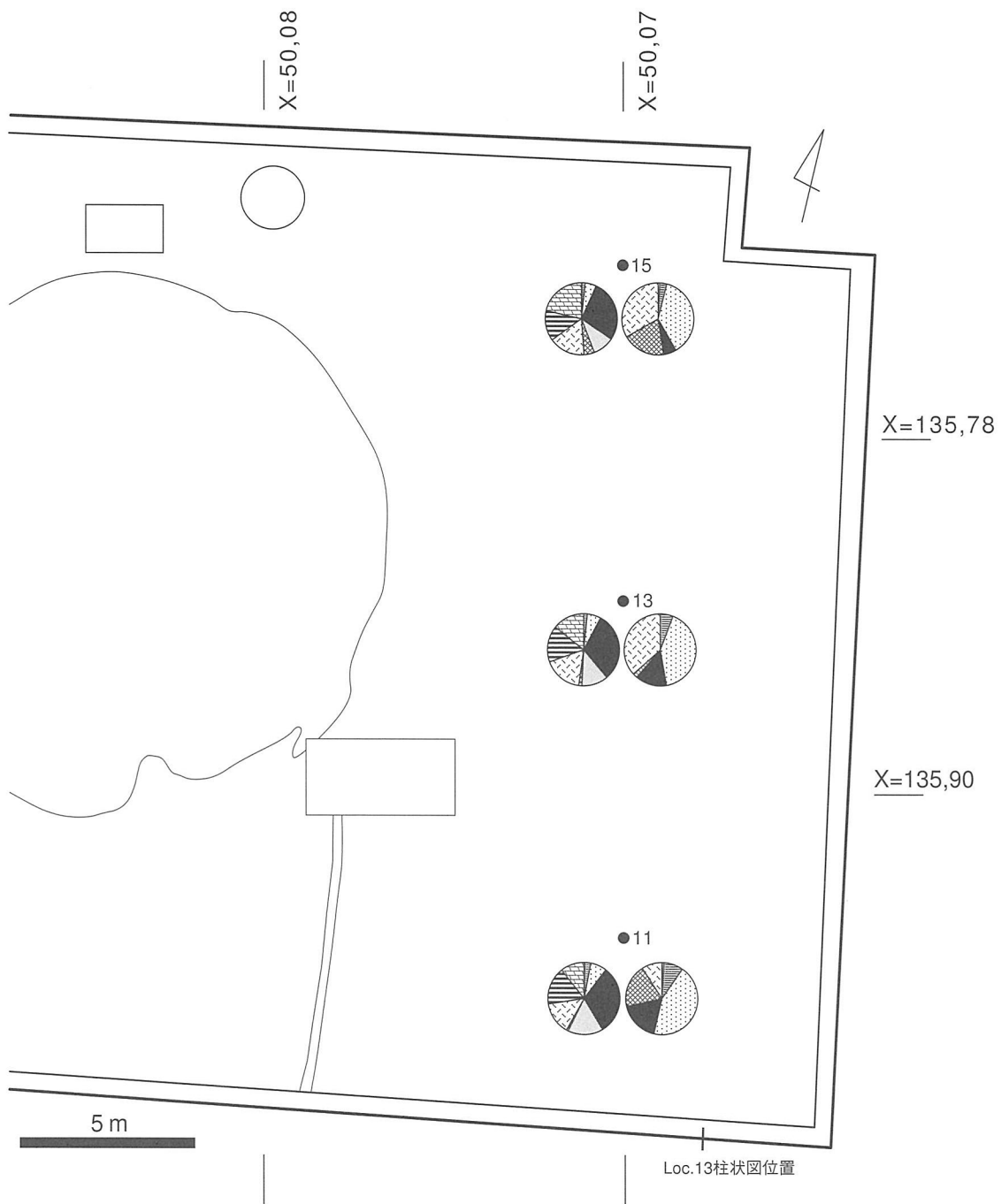


図131 第3面東半部における植物珪酸体組成

化されていると思われる。

(4) 古植生変遷

弥生時代後期の開析谷（流路1）に侵食されている後背湿地堆積物⑮～⑫層の植物化石は、花粉・種実ともに保存状態が悪く、ほとんど検出されなかった。上述のように⑮～⑫層は好気的な土壌環境がかなりの期間にわたり継続するような離水しがちな後背湿地の堆積環境であったこと、好気的状況下では花粉は分解されやすいこと（中村，1967など）から、種実ともども土壌化作用を受ける際に分解消失した可能性がある。以上の産状から本時期の古植生については残念ながら言及することができない。

開析谷（流路1）を充填する⑨層～⑥層における花粉・種実・植物珪酸体の各化石群集は、次のような特徴を示した。花粉化石群集は、⑨・⑧層では樹木の種類には森林の高木・低木層を構成するもの他につる性の樹木などが含まれること、総花粉・胞子の中で木本類の占める割合が高いことが特徴である。高・低木層を構成する種類は、多産する暖温帯性常緑広葉樹林（照葉樹林）の主要素であるアカガシ亜属のほか、コナラ亜属・ニレ属ーケヤキ属・エノキ属ームクノキ属などの落葉広葉樹、モミ属・ツガ属・コウヤマキ属・スギ属・イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科などの温帯性針葉樹が認められる。また、つる性植物のブドウ属・ノブドウ属・ヤドリギ属などを伴っている。これに対して⑦・⑥層では、木本類のうち、アカガシ亜属や落葉広葉樹の種類が多くが減少傾向を示し、低率であった陽樹であるマツ属複維管束亜属や温帯性針葉樹の種類が増加し、イネ科を主とした草本花粉の占める割合が増加する特徴を示す。

種実化石群集は、⑨・⑧層に比較して⑦・⑥層で種類数が増加し、その種類には畑地や人里の路傍や水田に普通な陸生草本の種類が含まれる。⑨・⑧層では木本類では常緑広葉樹のアカガシ亜属・ヒサカキ、落葉広葉樹のヤマグワ・カジノキ属・キイチゴ属・ウルシ属・タラノキ、その他つる性植物のマタタビ属・アオツツラフジ、草本類では湿地ないし水生植物のホタルイ属、湿った場所に分布するトウゴクサバノオなどが認められる。⑦・⑥層になると、湿地ないし水生植物のホタルイ属・ヘラオモダカ属・イボクサ、湿った場所に分布するギシギシ属・トウゴクサバノオ・チドメグサ属・イヌコウジュ属、荒地や人里の路傍に分布するカタバミ属・メハジキ属・エノコログサ属、栽培種のイネ・アワーヒエなどが増加ないし出現するようになる。

植物珪酸体群集は、ネザサ節を含むタケ亜科が卓越し、湿った場所に分布するヨシ属や比較的乾いた場所に分布するススキ属が伴い、⑦・⑥層では栽培種のイネ属が検出されるようになる。

以上のように各植物化石群集は、いずれも⑧層から⑦層にかけて層位的に変化し、いずれも人間活動と関連性の高い種類の増加によって特徴づけられる。本変化は、先述のように⑨層から⑥層が同様な堆積環境下で形成された堆積物と判断されることから、堆積環境変化に起因すると考えるより、むしろ集水域周辺の植生変化を反映していることが推定される。各植物化石群集の対応関係をみると、種実化石で認められた種類の多くは花粉化石群集でも認められる。これらの種類のうちアカガシ亜属以外は、湿地や湿った場所に生育する草本類の他、河畔林を構成する要素からなり、流路1の集水域沿いに母植物集団が分布していたものと推定される。一方、アカガシ亜属やコナラ亜属などのように花粉化石で比較的多産するが種実化石では希かもしくは産出しない種類は谷斜面から台地を中心に母植物集団が分布していた可能性がある。モミ属・ツガ属などの温帯性針葉樹も同様な場所、もしくはより後背地域に分布していた可能性がある。

以上のことから、⑨～⑥層堆積期の周辺植生を推定すると、⑨・⑧層堆積期は、流路沿いの集水域周

辺には、ヤマグワ、ヤナギ属、コナラ亜属、ミズキ、エノキ属、ニワトコ、エゴノキ属、カジノキ属などの高・低木が分布し、その林縁部などにはツル性の植物が絡まるような植生が成立していたことが推定される。ホタルイ属などの水生植物が生育する湿性草地も認められたであろう。一方、アカガシ亜属・シイノキ属などの照葉樹は主に谷斜面から台地にかけて分布していたものと思われる。

⑦・⑥層堆積期になると周辺植生は変化し、流路沿いに分布していたと考えられるコナラ亜属やエノキ属などの落葉広葉樹、谷斜面から台地にかけて分布していたアカガシ亜属などの照葉樹が分布を狭め、逆に低地を中心にイネ科を主とする草本類が分布を拡げ、さらに林分が存在した場所ではマツ属などの二次林要素からなる林分へ変化していったことが推定される。本植生変化は、本時期に分布を拡げる種類の多くが、二次的な植生の構成要素であり人里植物や栽培種の植物であることから、人間活動に起因するものと判断される。出土遺物から弥生時代後期頃と推定される。

ところで本時期に該当する植生に関する情報は、本遺跡北側の豊中台地西側縁辺の氾濫原に位置する蛭池西遺跡（パリノ・サーヴェイ，1998a）、本遺跡西側の猪名川の氾濫原に位置する口酒井遺跡（金原，1991）の花粉分析成果がある。蛭池西遺跡では、弥生時代後期後半～弥生時代終末期前半にはコナラ亜属がアカガシ亜属を上回る出現率を示し、弥生時代終末期後半になるとコナラ亜属が減少し、スギ属・マツ属が増加する特徴を示している。一方、口酒井遺跡第15次調査区では、縄文時代晩期（凸帯文期）より上位層準では本遺跡と同様にアカガシ亜属が多産し、スギ属・マツ属などが増加する傾向が認められるものの、コナラ亜属が多産する層準はなく、また、スギ属の出現率はアカガシ亜属とほぼ同等の出現率を示している。このように豊中台地から西摂平野に位置する遺跡の各遺跡の花粉化石群集の特徴は地点により異なり、豊中台地に近い勝部遺跡や蛭池西遺跡ではコナラ亜属・マツ属が高率に出現するが、台地からの距離が遠い口酒井遺跡では顕著ではない。また、コナラ亜属が多産する層準は勝部遺跡では弥生時代後期後半であり、蛭池西遺跡ではこの段階でマツ属が既に高率に出現している。さらに針葉樹のスギ属の出現率は勝部遺跡に比較して、蛭池西遺跡や口酒井遺跡で高い。このような花粉化石群集の遺跡間での特徴の違いは、各遺跡における集水域の違いや林分からの距離の差に起因する可能性が高い。勝部遺跡や蛭池西遺跡の集水域は豊中台地に求めることができ、一方、口酒井遺跡は猪名川流域と集水域は広い。勝部遺跡・蛭池西遺跡で共通して認められた弥生時代後期のコナラ亜属やマツ属の多産は、豊中台地ないしその縁辺での植生変化を反映している可能性が高い。コナラ亜属の生育環境をみると、クヌギやナラガシワなどのように、河畔や低地に生育し、林を形成する場合がある。本遺跡の立地からすれば、河畔林や湿地林としての、局地的なナラ林の存在が考えられる。一方、同じナラ類でも、コナラやアバマキなどの里山林は人為的な伐採や保護によって成立し、維持される林である。ナラ類はクリなどとともに、二次林としては一般的であるが、花粉化石群集からは自然植生との区別が付きにくいのが現状である。本遺跡や蛭池西遺跡でのナラ類の多産が、二次林に起因する可能性はあるが、今後、豊中台地およびその縁辺部に位置する遺跡の動態と合わせた評価を行っていくようにしたい。

中世以降の②層は層相から耕作土と推定されている。本層ではイネ属植物珪酸体の割合が増加し、ソバ属の花粉化石が見られることなどは層相と調和的な結果を示している。花粉化石の保存状態が悪かったが、産出した種類ではマツ属が多産し、コナラ亜属も比較的多く検出されていることから、二次的な林分の存在が想定され、遺跡周辺の環境は、弥生時代後期に比較して大きく異なっていた可能性がある。本地域では豊中台地南縁辺の沖積地に位置する穂積遺跡において中世後半以降の花粉化石群集が確認されている（水谷，1999）。そこでは中世後半以降の層準において、コナラ亜属が多産する群集から、マ

ツ属が多産する群集への変化が認められており、植生への人為の影響が指摘されている。同様な傾向は東摂平野に位置する東奈良遺跡（パリノ・サーヴェイ，1998b）でも確認されている。一方、当時の生駒山西麓に位置する北島遺跡（パリノ・サーヴェイ，1996a）などではマツ属が卓越しており、豊中台地に比較して、森林相が貧弱であったことが推定される。このように中世には人間活動の影響を強く受け、植生の攪乱は著しくなったものと思われるが、人間活動の影響は地域により異なっていた可能性がある。このような地域差は各地域の人間活動の様態の違いに起因する可能性もあり、各地域の考古遺跡の調査成果と合わせた評価が必要である。

以上、今回の成果をみると、本遺跡周辺の弥生時代後期以降の人間活動に伴う植生変化は、ナラ類の増加にはじまり、稲作に伴う草地の拡大とマツ林の増加によって、その変化が加速している状況が示唆される。⑨層から⑥層は短期間に堆積したと考えられているが、今後はこれらの転換点となった時代を詳細に検討することと、遺構、遺物の変化との関連について調査していくことが課題である。

（引用文献）

- 浅岡俊夫編（2000）「口酒井遺跡－第1次～第10次・第12次～第16次調査の概要－」。六甲山麓遺跡調査会，53p.
- 浅岡俊夫（2001）東大寺猪名庄の位置とミヤケ開発。尼崎市立地域研究資料館紀要－地域史研究－，31-1，p.2-34.
- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理，42，p.73-88.
- 石井久夫（1999）軟体動物（貝類）。「穂積遺跡第14・15次発掘調査報告－豊中市南部における縄文海進期の基礎的研究－」，豊中市教育委員会，p.83-95.
- 石井久夫（2002）食材の（古）貝類学 その3 オオノイガイ。Nature Study，48-1，p.3-5.
- 伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用。珪藻学会誌，6，p.23-45.
- ウィリアム J. フリッツ・ジョニー N. ムーア（1999）層序学と堆積学の基礎。原田憲一訳，愛智出版，386p.
- 江口誠一（1996）沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物のpH値。ペトロジスト，40，p.81-84.
- 江口誠一（1994）沿岸域における植物珪酸体の分布 千葉県小櫃川河口域を例にして。植生誌研究，2，p.19-27.
- 大平茂編（1992）「上ノ島遺跡」。兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所，54 p.
- 岡田 務（1981）「尼崎市 下坂部遺跡（第4次調査報告）」。尼崎市教育委員会，36 p.
- 岡田 務（1982）第2章.要約。「尼崎市 金楽寺貝塚Ⅱ」。尼崎市教育委員会，p.29-46.
- 岡田 務（1999）古宮遺跡。「尼崎市埋蔵文化財年報 平成6年度」。尼崎市教育委員会，p.34-42.
- 岡田 務・益田日吉（1992）上ノ島遺跡（第11次調査）。「尼崎市埋蔵文化財年報 平成4年度」，尼崎市教育委員会，p.21-27.
- 岡田 務・益田日吉（1996）田能遺跡（第20次調査）。「尼崎市埋蔵文化財年報 平成4年度」，尼崎市教育委員会，p.29-37.
- 岡田 務・山上真子（2001）「尼崎市埋蔵文化財年報 平成7年度（2）－大物遺跡第1次調査概要－その1－」。尼崎市教育委員会，79p.
- 岡野慶隆（2001）西摂地域の弥生集落。みずほ，第35号，p.66-81.
- 甲斐昭光編（1997）「田能高田遺跡 園田競馬場厩舎改築事業に伴う発掘調査報告書」。兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所，65p.
- 梶山彦太郎・市原実（1986）大阪平野のおいたち。青木書店，138 p.
- 片岡香子（1999）火山灰分析。「穂積遺跡第14・15次発掘調査報告－豊中市南部における縄文海進期の基礎的研究－」，豊中市教育委員会，p.163-166.
- 金原正明（1991）口酒井遺跡第15次調査の花粉分析。「口酒井遺跡－自然遺物編－」，六甲山麓遺跡調査会 p.47-54.
- 橋田正徳（2001）穂積遺跡第27次調査。「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要－阪神淡路大震災復旧・復興事業に伴う発掘調査－平成12（2000）年度」，豊中市教育委員会，p.49-71.
- 久馬一剛・八木久義訳監修（1989）土壌薄片記載ハンドブック。博友社。176p.
- 久保和士（1999）動物と人間の考古学。真陽社，390p.
- 小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用。第四紀研究，27，p.1-20.
- 後藤敏一・清水 晃・水谷睦彦（1999）珪藻分析。「穂積遺跡第14・15次発掘調査報告－豊中市南部における縄文海進期の基礎的研究－」，豊中市教育委員会，p.125-162.
- 近藤鍊三（1982）Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究。昭和56年度科学研究費（一般研究C）研究成果報告書，32p.

- 近藤鍊三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p.31-64.
- 近藤鍊三 (1988) 植物珪酸体 (Opal Phytolith) からみた土壌と年代. ペトロジスト, 32, p.189-202.
- 清水 篤 (1994) 穂積遺跡第14次 (HZ-14). 「豊中市埋蔵文化財年報」, VOL.2, 豊中市教育委員会, p.72-73.
- 清水 篤 (1995) 穂積遺跡第15次 (HZ-15). 「豊中市埋蔵文化財年報」, VOL.3, 豊中市教育委員会, p.49.
- 清水 篤 (1999) 粒度分析. 「穂積遺跡第14・15次発掘調査報告—豊中市南部における縄文海進期の基礎的研究—」, 豊中市教育委員会, p.63-70.
- 杉山真二・藤原宏志 (1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料—として—. 考古学と自然科学, 19, p.69-84.
- 鈴木 茂 (1992) 小阪遺跡15Fトレンチの花粉化石. 「小阪遺跡—近畿自動車道松原海南線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書—自然科学・考察編」, p.525-533. 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 田中眞吾・白井哲之 (1994) 猪名川下流部低地の地形と地下構造. 尼崎市立地域研究資料館紀要—地域史研究—, 24-2, p.1-25.
- 田中眞吾・井上茂・辻村紀子 (2000) 伊丹台地南縁の地表・地下の段丘地形. 尼崎市立地域研究資料館紀要—地域史研究—, 30-3, p.2-20.
- 趙 哲済 (2001) 長原遺跡の標準層序. 「長原・瓜破遺跡発掘調査報告 XVI」, (財)大阪市文化財協会, p.7-22.
- 趙 哲済・別所秀高・松田順一郎・渡邊正己・久保和士・松尾信裕 (1999) 海から平野へ—遺跡の地層から平野の形成と人の営みをさぐる—. 「大地のおいたち—神戸・大阪・奈良・和歌山の自然と人類」, 地学団体研究会大阪支部編, 築地書館, p.149-194.
- 辻 誠一郎 (1993) 植物と気候. 「古墳時代の研究 総論・研究史」, 石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編, p.105-112. 雄山閣.
- 豊中市教育委員会社会教育課文化財保護係編 (1993) 縄文の狩人—森と海にささえられたゆたかな生活—. とよなか文化財ブックレット No.2 通史編Ⅱ, 豊中市教育委員会, 16p.
- 中村 純 (1967) 「花粉分析」, 232p., 古今書院.
- 那須孝悌 (1993) 穂積遺跡の発掘から. 文化財ニュース 豊中, No.19, p.7.
- 那須孝悌 (1999) 穂積遺跡と縄文時代の豊中. 「保積遺跡第14・15次発掘調査報告—豊中市南部における縄文海進期の基礎的研究—」, 豊中市教育委員会, p.173-180.
- 成岡 市 (1992) 土壤粗孔隙の形態とその測定法 土壤の不均一性と物質移動の研究前線. 日本土壤肥糧科学雑誌, 64-1, p.90-97.
- 成岡 市・岩田幸良・駒村正治 (2000a) 関東ローム層土における粗孔隙の透水、通気および排水機能. 農業土木学会論文集, No.208, p.63-71.
- 成岡 市・駒村正治 (2000b) 武蔵野台地関東ローム層の深さ方向に発達している管状孔隙群について. 農業土木学会論文集, No.208, p.99-105.
- 成瀬 洋 (1993) 完新世海進最盛期における大阪平野北縁部の海岸線. 大阪経大論集, 43-6, p.7-26.
- 新本真之 (1997a) 穂積遺跡第17次調査. 「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要—阪神淡路大震災復旧・復興事業に伴う発掘調査—平成7 (1995) 年度」, 豊中市教育委員会, p.53-57.
- 新本真之 (1997b) 穂積遺跡第19次調査. 「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要—阪神淡路大震災復旧・復興事業に伴う発掘調査—平成8 (1996) 年度」, 豊中市教育委員会, p.1-16.
- 服部聡志編 (1997) 「上津島遺跡 第5次調査」. 豊中市教育委員会, 118 p.
- 原口和夫・三友 清・小林 弘 (1998) 埼玉の藻類 珪藻類. 「埼玉県植物誌」, p.527-600, 埼玉県教育委員会.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1996a) 珪藻化石・植物化石・樹種による古環境復元. 「北島遺跡の耕作地と古環境—寝屋川南部流域植附ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第1次発掘調査報告書—」. (財)東大阪市文化財協会, p.71-130.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1996b) 自然科学分析. 「葛飾区遺跡調査会調査報告第35集 上千葉遺跡葛飾区西亀有1丁目12番地点発掘調査報告書」 p.242-275, 葛飾区遺跡調査会.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1998a) 蛭池西遺跡の古環境. 「蛭池西遺跡—阪神高速道路大阪池田線池田延伸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」, 蛭池西遺跡調査団, p.263-271.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1998b) 東奈良遺跡の古環境復元. 「東奈良遺跡」, (財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第32集, p.174-192.
- 福井英治編 (1982) 「田能遺跡発掘調査報告書」. 尼崎市教育委員会, 595p.
- 藤田和夫 (1966) 尼崎平野の形成. 「尼崎市史 第1巻」, p.9-64, 尼崎市役所.
- 藤田和夫・前田保夫 (1971) 伊丹の地質構成. 「伊丹市史 第1巻」, 伊丹市役所, p.7-70.
- 藤田和夫・笠間太郎 (1982) 大阪西北部地域の地質. 地質調査所, 112p.

- 古谷正和 (1978) 大阪平野西部の上部更新統. 地質学雑誌, 84, p.341-358.
- 古谷正和・田井昭子 (1993) 大阪層群と段丘堆積層・沖積層の花粉化石. 「大阪層群」, 市原 実編著, p.247-255, 創元社.
- 堀内誠示・高橋 敦・橋本真紀夫 (1996) 珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について—混合群集の認定と堆積環境の解釈—. 日本文化財科学会, 第13回大会研究発表要旨集, p.62-63.
- 前田保夫 (1980) 縄文の海と森. 蒼樹書房, 238p.
- 前田保夫 (1991) 口酒井遺跡第6次調査の花粉分析. 「口酒井遺跡—自然遺物編—」, 六甲山麓遺跡調査会, p.39-45.
- 前田保夫 (1992a) 失われた尼崎の森の歴史—最終間氷期以降の大阪湾北岸の植生史—. 尼崎市立地域研究資料館紀要—地域史研究—, 21-2, p.1-21.
- 前田保夫 (1992b) 伊丹の自然史. 伊丹の自然 第1巻. 伊丹市立博物館, p.1-67.
- 増田富士夫・伊勢屋ふじ子 (1985) “逆グレーディング構造”: 自然堤防帯における氾濫洪水堆積物の示相堆積構造. 堆積学研究会誌, 22・23, p.108-116.
- 増田富士夫・宮原伐折羅 (2000) 大阪湾地域の完新統海成粘土層の特徴と形成過程. 第四紀研究, 39, p.349-355.
- 増田富士夫・宮原伐折羅・広津淳二・入月俊明・岩淵 洋・吉川周作 (2000) 神戸沖海底コアから推定した完新世の大阪湾の海況変動. 地質学雑誌, 106, p.482-488.
- 松田順一郎 (1996) 「北島遺跡の耕作地と古環境—寝屋川南部流域植附ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第1次発掘調査報告書—」. (財) 東大阪市文化財協会, 157p.
- 松田順一郎 (1999) 瓜生堂第40次調査地における河川堆積作用の変化. 「瓜生堂・若江北・山賀遺跡発掘報告書—電気工事予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の調査報告」, (財) 東大阪市文化財協会, p.93-105.
- 松田順一郎 (2000) 八尾市小阪合遺跡における弥生時代～古代の河川堆積作用と地形発達. 「小阪合遺跡—都市基盤整備公団八尾団地建替えに伴う発掘調査報告書」, (財) 大阪府文化財調査研究センター, p.259-276.
- 松田順一郎 (2001) 河内平野沖積低地南部における完新世後半の旧大和川分流利路発達と人間活動. 「環境と人間社会—適応、開発から共生へ—」. 埋蔵文化財研究会, p.39-51.
- 水谷睦彦 (1999) 花粉分析. 「保積遺跡第14・15次発掘調査報告—豊中市南部における縄文海進期の基礎的研究—」, 豊中市教育委員会, p.100-124.
- 村川行弘 (1980) 尼崎市史 第11巻 別編. 尼崎市役所, 370p.
- 森 他寸志 (2000) 軟X線による非破壊土壌中の排水機構の解明. 土壌の物理性, No.83, p.59-65.
- 森岡秀人 (2001) 弥生集落研究の新動向 (VI) —小特集「兵庫県東南部における集落の様相」に寄せて—. みずほ, 第35号, p.103-123.
- 森岡秀人・竹村忠洋 (1999) 若宮遺跡をめぐる二、三の考証. 「若宮遺跡 (第1・2地点) 発掘調査報告書—震災復興住環境整備事業 (芦屋市若宮町住宅1号館建設) に伴う埋蔵文化財事前調査の成果—」. 芦屋市教育委員会, p.124-140.
- 矢口裕之 (1999) 1.層序. 「猪名庄遺跡—第31次 (JR尼崎駅北市街地再開発事業に伴う) 発掘調査概要—」, 尼崎市教育委員会, p.14-16.
- 安田喜憲 (1992) 小阪遺跡の泥土の花粉分析. 「小阪遺跡—近畿自動車道松原海南線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書—自然科学・考察編」, p.519-522. 大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター.
- 渡辺 昇 (1999) II.位置と環境. 「猪名庄遺跡—第31次 (JR尼崎駅北市街地再開発事業に伴う) 発掘調査概要—」, 尼崎市教育委員会, p.9-13.
- 渡辺 昇・川村真也 (2001) 若王寺遺跡. 『平成12年度年報』, 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所, p.105-106.
- Asai, K. and Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.
- Davis, R.A., Jr. (1992) Depositional systems: an introduction to sedimentology and stratigraphy, 2nd ed. Prentice Hall, 604 p.
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p.1-353., BERLIN・STUTTGART.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.

- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnantheaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von : Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- Miall, A.D. (1992) Alluvial Deposits, in Walker, R.G. and James, N.P. (ed) Facies Models. Geological Association of Canada, p.119-142.
- Miall, A.D. (1996) The Geology of Fluvial Deposits: Sedimentary Facies, Basin Analysis, and Petroleum Geology. Springer, 582p.
- Reineck, H.E. and Singh, I.B. (1980) Depositional Sedimentary Environments (2nd ed.) .Springer, 551p.
- Rubin, D.M. and McCulloch, D.S. (1980) Single and Superimposed Bedforms: a synthesis of San Francisco Bay and Flume Observations. Sedimentary Geology, 26, p.201-231.

表2 花粉分析結果

学名	和名	地点・層名・試料名																
		Loc. 1			Loc. 2			Loc. 3						Loc. 4				
		⑥	⑧		②	③		⑦			⑨			⑦	⑩	⑪	⑬	
		1	2	3	1	2	3	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4
Arboreal pollen	木本花粉																	
<i>Podocarpus</i>	マキ属	1	7	8	-	-	4	-	1	4	1	22	12	1	-	-	-	-
<i>Abies</i>	モミ属	72	16	18	3	22	22	44	20	9	19	24	26	14	1	-	-	-
<i>Tsuga</i>	ツガ属	33	10	7	5	3	22	24	15	8	19	12	15	9	-	-	-	-
<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylo</i>	マツ属単維管束亜属	2	-	1	-	-	3	3	1	-	2	1	1	2	-	-	-	-
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylo</i>	マツ属複維管束亜属	76	5	18	39	10	28	63	24	20	72	11	6	2	1	-	1	-
<i>Pinus</i>	マツ属(不明)	15	3	8	7	6	12	11	12	8	8	2	3	2	3	-	1	-
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	22	7	2	1	7	10	13	17	3	22	9	15	3	11	7	5	-
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	14	7	17	1	25	24	20	34	41	20	23	23	20	1	-	-	-
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イテイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	3	9	3	-	4	10	5	7	33	16	10	5	11	-	-	-	-
<i>Salix</i>	ヤナギ属	-	4	6	-	-	-	-	1	1	1	-	5	-	-	-	-	-
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属	1	-	-	-	4	-	1	1	1	3	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pterocarya</i>	サワグルミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Juglans</i>	クルミ属	-	1	-	-	-	1	-	1	-	1	1	-	1	-	-	-	-
<i>Carpinus</i>	クマシデ属-アサダ属	3	3	13	-	13	4	2	15	24	6	10	8	10	1	-	-	-
<i>Corylus</i>	ハンバミ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Betula</i>	カバノキ属	-	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	-	2	6	-	2	-	1	1	3	1	-	4	-	1	-	-	-
<i>Fagus</i>	ブナ属	1	1	3	-	7	4	-	3	5	2	11	6	4	-	-	-	-
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属コナラ亜属	1	38	70	-	18	14	8	12	7	16	27	32	46	2	-	-	-
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属アカガシ亜属	10	84	82	3	107	70	22	65	46	63	64	57	107	-	-	-	-
<i>Castanea</i>	クリ属	-	1	-	-	15	3	1	-	1	3	8	3	6	-	-	-	-
<i>Castanopsis</i>	シイノキ属	1	7	4	-	5	3	3	5	3	3	10	7	10	-	-	-	-
<i>Ulmus-Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	-	8	11	-	-	3	3	8	7	7	7	7	7	5	-	-	-
<i>Celtis-Aphananthe</i>	エノキ属-ムクノキ属	-	7	6	-	-	2	-	2	3	1	5	2	8	-	-	-	-
<i>Viscum</i>	ヤドリギ属	-	3	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Distylium</i>	イスノキ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Phellodendron</i>	キハダ属	-	2	1	-	-	-	-	1	-	-	-	1	1	-	-	-	-
<i>Mallotus</i>	アカメガシワ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Rhus</i>	ウルシ属	-	2	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Ilex</i>	モチノキ属	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Acer</i>	カエデ属	-	1	1	-	-	-	3	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Aesculus</i>	トチノキ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-
<i>Vitis</i>	ブドウ属	-	1	-	-	-	-	16	2	1	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Parthenocissus</i>	ツタ属	-	-	-	-	3	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-
<i>Ampelopsis</i>	ノブドウ属	-	1	1	-	-	-	1	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-
<i>Elaeagnus</i>	グミ属	1	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Araricaceae	ウコギ科	-	2	8	-	-	-	-	-	-	1	-	-	3	-	-	-	-
<i>Cornus</i>	ミズキ属	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ericaceae	ツツジ科	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diospylos</i>	カキノキ属	-	-	-	-	1	-	1	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
<i>Symplocos</i>	ハイノキ属	1	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Styrax</i>	エゴノキ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
<i>Trachelospermum</i>	テイカカズラ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>CalliCARPA</i>	ムラサキシキブ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Clerodendrum</i>	クサキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Viburnum</i>	ガマズミ属	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Lonicera</i>	スイカズラ属	2	-	2	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Nonarboreal pollen	草本花粉																	
<i>Typha</i>	ガマ属	-	-	-	-	1	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	1	-	-	-	10	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gramineae	イネ科	67	24	34	4	128	167	72	340	576	96	15	15	29	4	-	-	-
Cyperaceae	カヤツリグサ科	9	1	1	-	27	16	21	4	13	16	3	7	1	1	-	-	-
<i>Impatiens</i>	ツユクサ属	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	-	-	-	-	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Iridaceae	アヤメ科	-	-	-	-	1	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Moraceae	クワ科	-	6	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
<i>Polygonum</i> sect. <i>Echinocaulon-Persicaria</i>	サナエタデ節-ウナギツカミ節	-	-	3	-	1	1	-	1	-	1	2	3	-	-	-	-	-
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Chenopodiaceae	アカザ科	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Caryophyllaceae	ナデシコ科	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	1	-	-	-	-	-
Ranunculaceae	キンボウゲ科	-	3	1	-	-	-	-	-	1	-	1	-	4	-	-	-	-
Rosaceae	バラ科	-	-	-	-	2	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Dunbaria</i>	ノアズキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Leguminosae	マメ科	-	-	1	-	-	-	-	2	4	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Rotala</i>	カカシグサ属	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Ludwigia</i>	ミズユキノシタ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Umbelliferae	セリ科	-	-	1	3	-	2	1	1	2	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Oscuta</i>	ネナシカズラ属	-	-	-	-	-	1	-	-	8	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Patrinia</i>	オミナエシ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	9	7	5	3	14	2	10	6	22	3	13	13	10	2	-	-	-
Carduoideae	キク亜科	3	1	1	2	-	-	-	-	5	1	1	2	1	-	-	-	-
Cichorioideae	タンポポ科	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Unknown	不明花粉	7	25	17	-	29	7	8	30	6	14	27	14	36	1	-	-	-
Fern Spore	シダ類孢子																	
<i>Salvinia natans</i>	サンショウモ	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
cf. <i>Marsilea</i>	デンジソウ属近似種	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Other Pteridophyta	他のシダ類孢子	241	52	67	55	65	130	124	100	50	143	119	84	45	113	147	65	0
Total Arboreal pollen	木本花粉	262	239	305	60	255	240	231	264	233	292	267	240	277	27	7	7	0
Total NonArboreal pollen	草本花粉	92	42	49	11	191	194	108	361	631	124	36	41	48	7	0	0	0
Total spores	シダ類孢子	243	52	67	55	65	131	124	100	50	143	119	84	46	113	147	65	0
Total pollen&spore	総計(不明を除く)	597	333	421	126	511	565	463	725	914	559	422	365	371	147	154	72	0

表5 微細植物片分析結果

学名	和名	部位	地点・層名									
			Loc. 3	Loc. 1	Loc. 3	Loc. 1	Loc. 4					
			⑥	⑦	⑧	⑨	⑦	⑩	⑪			
木本類	木本類											
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	幼果	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fagaceae	ブナ科	果実	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Morus australis</i>	ヤマグワ	種子	4	8	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Broussonetia</i>	カジノキ属	核	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Actinidia</i>	マタタビ属	種子	2	-	-	-	1+	-	-	-	-	-
<i>Rubus</i>	キイチゴ属	核	2	-	1	1	-	-	-	-	-	-
<i>Rhus</i>	ウルシ属	核	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eurya japonica</i>	ヒサカキ	種子	-	1	4	2	1	-	-	-	-	-
<i>Aralia elata</i>	タラノキ	核	4	2	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cornus controversa</i>	ミズキ	核	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Styrax</i>	エゴノキ属	種子	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Sambucus racemosa</i>	ニワトコ	核	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
草本	草本											
<i>Alisma canaliculatum</i>	ヘラオモダカ	果実	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Oryza sativa</i>	イネ	穎	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-
<i>Setaria itarica-Echinochloa crusgalli</i>	アワーヒエ	胚乳	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Setaria</i>	エノコログサ属	穎	-	-	4	6	-	-	-	-	-	-
<i>Scirpus</i>	ホタルイ属	果実	1	2	31	7	-	-	-	-	-	-
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	4	1	14	21	2	-	-	-	-	-
<i>Aneilema Keisak</i>	イボクサ	種子	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Boehmeria</i>	カラムシ属	果実	-	-	3	1	1	-	-	-	-	-
<i>Rumex</i>	ギンギシ属	花被	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Polygonum</i> cf. <i>lapathifolium</i>	タデ属サナエタデ近似種	果実	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	1	1	5	7	-	-	-	-	-	-
Chenopodiaceae - Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	種子	-	-	6	2	-	-	-	-	-	-
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-
<i>Isopyrum trachyspermum</i>	トウゴクサバノオ	種子	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cocculus orbiculatus</i>	アオツツラフジ	核	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Oxalis</i>	カタバミ属	種子	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-
<i>Viola</i>	スミレ属	種子	1	1	2	4	-	-	-	-	-	-
Umbelliferae	セリ科	果実	1	-	2	-	-	-	-	-	-	-
<i>Hydrocotyle</i>	チドメグサ属	果実	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-
<i>Leonurus japonicus</i>	メハジキ属	果実	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
<i>Mosla</i>	イヌコウジュ属	果実	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
<i>Patrinia</i>	オミナエシ属	果実	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Compositae	キク科	果実	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
不明種実			破	-	-	-	1	破	-	-	-	-
広葉樹の葉			破	-	破	-	-	-	-	-	-	-
木の芽			-	1	2	-	-	-	-	-	-	-
材			破	破	破	破	-	-	-	-	-	-
炭化材			破	破	破	破	破	破	破	破	破	破
不明炭化物			-	-	-	破	-	-	-	-	-	-
蘚苔類			-	-	破	-	-	-	-	-	-	-
菌核			5	11	18	8	2	2	-	-	-	-
動物遺骸			破	破	破	破	破	破	破	-	-	-

注 Loc. 1・3は400cc、Loc. 4は200ccの堆積物に含まれる植物遺体の個数を示す。

破：細片のため個数推定が困難であることを示す。数字+：数字以上の個数が推定されることを示す

第7章 遺構・遺物の検討

第4章までに記したように、今回の勝部遺跡の調査では既往の調査によって明らかにされてきた勝部遺跡の性格をさらに豊かにする内容が認められた。勝部遺跡の性格として著名である「弥生時代前期から中期にかけての拠点集落」という位置付けに直接つながる成果は得られなかったが、中世あるいは古墳時代集落の検出や、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての多量の土器の出土、また弥生時代の生産遺構である水田域の検出は、勝部遺跡のみならず周辺地域における歴史理解の上で重要な調査成果といえる。このうち、調査地周辺の埋没微地形の検討と弥生時代における土地利用、特に水田耕作についての自然科学の方法による検討については第6章において報告した。本章では発掘調査で得られた考古資料の基礎分析として、中世遺構出土の遺物、古墳時代前期～中期の遺物、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物について、遺構との関わりをふまえながら検討を加えることとしたい。

第1節 中世遺構出土遺物の検討

1. はじめに

今回調査を行った勝部遺跡緑地調査区からは集落を形成する遺構とともに、土器を中心とする中世遺物の良好な一括資料を得ることができた。これら中世の遺物の内で最も普遍的に出土し、かつ既往の研究によってその所属時期等がある程度明示されている遺物に、瓦器碗及び土師器皿がある。各々の遺物の詳細は報告文中に示したが、ここでは項を新たにしてそれらの遺物を既存の研究に照らして再度概観し、いくつかの項目について検討を加え中世遺物のまとめに代えたい。

当遺跡より出土する瓦器碗は、地域型でいうと楠葉型と和泉型の二者に限定される。報告において各々の編年観については、楠葉型を橋本久和氏のそれに、和泉型を尾上実氏の編年観に準拠している。また、各々の瓦器碗に付与される年代観には、各地域型において実年代の伴う共伴資料を基に、従来の年代観の修正を図った森島康雄氏の成果がある。報告においては各々の瓦器碗の年代観は基本的に森島氏の成果に拠った。また京都において編年作業が整備されている土師器皿については、小森俊寛・上村憲章両氏によって都市より出土する京都系土師器皿の検討が詳細に行われている。当遺跡より出土する土師器皿の傾向は極めてこれと近似する関係にあることから報告文中でもこれに準拠している。

2. 瓦器碗及び土師器皿の併行関係

今回の調査においては、複数時期にまたがる遺物が安定して出土しており、各々の出土遺構が良好な一括資料となる性格を持ち合わせている。ここでは瓦器碗を検討する際の有意な属性の一つとして、口径・器高の判明する一括性の高い瓦器に限定してその分布域をグラフ化し、図134に掲げた。これを参考に、瓦器碗のもつ特徴について概観する。さらに出土遺構を単位とする帰属時期の検討により、以下に示すI期～IV期の4段階に分類することができる。

I期

建物1・2及び水溜1から出土した瓦器碗がこれに相当する。すべて楠葉型瓦器碗で構成される。これらの個体外面には分割ヘラミガキが明瞭に残存する。内面ヘラミガキは極めて密に施され、見込みの暗文は楠葉型では同心円状のものが施される。安定感のある広い高台を貼り付けている。

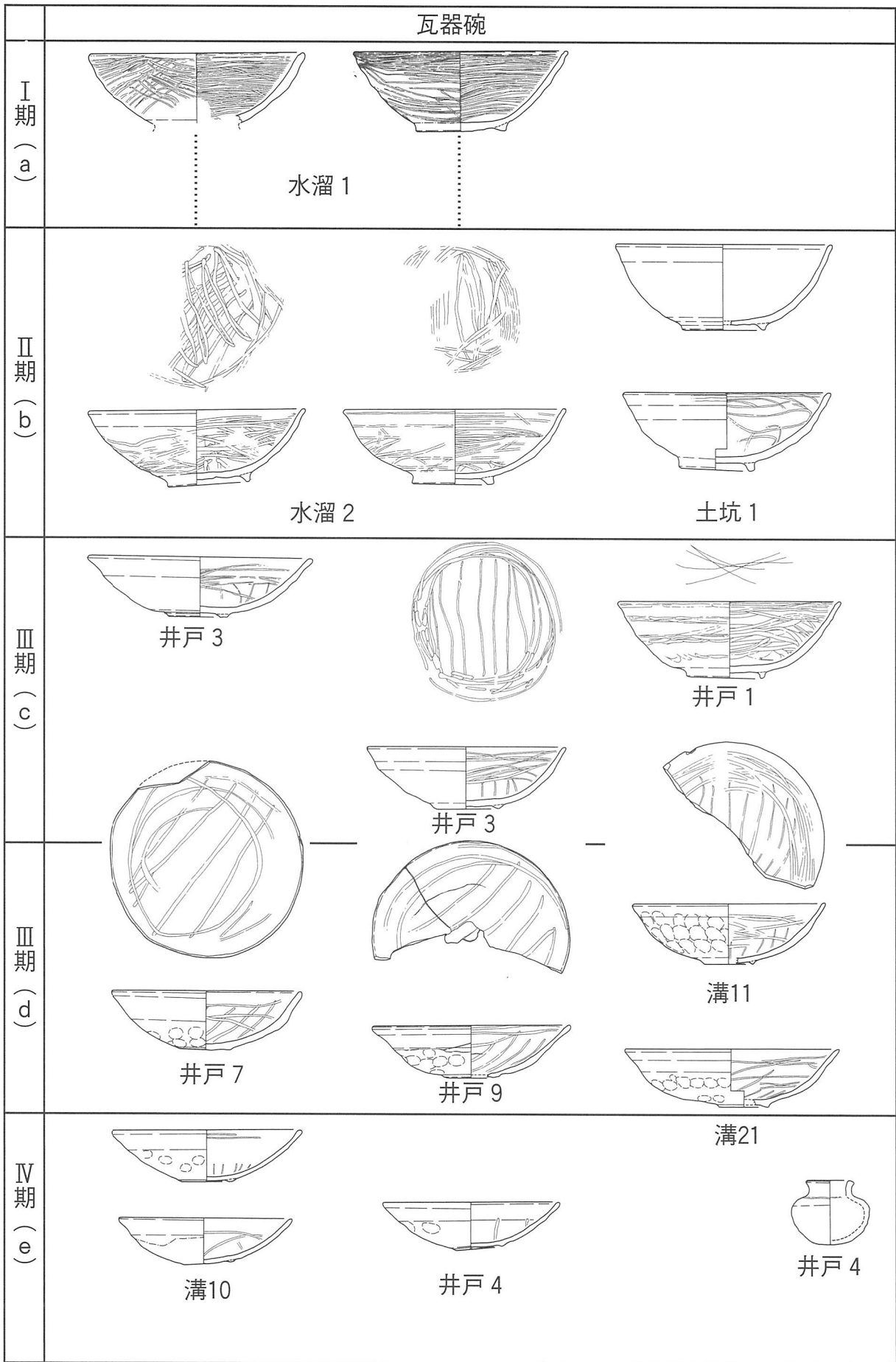


図132 中世土器一覽 (1)

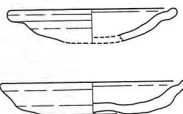
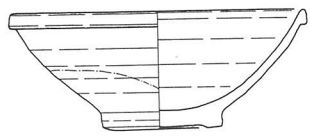


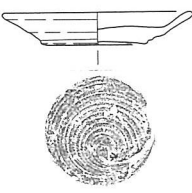

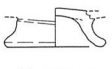


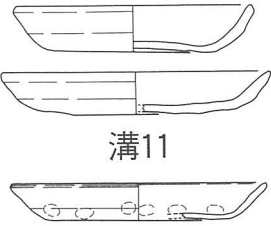

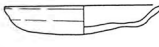
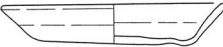
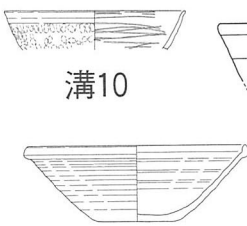
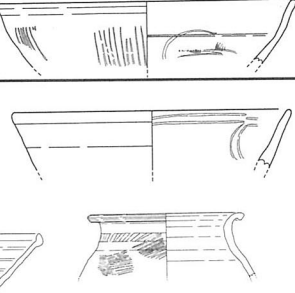
土師器小皿	土師器大皿	その他(貿易陶磁・東播系須恵器・瓦質土器)	
 <p>水溜 1</p>		 <p>水溜 1</p>	
 <p>水溜 2</p> <p>溝 2</p>	 <p>水溜 2</p>	 <p>溝 12</p>	
 <p>井戸 3</p> <p>井戸 1</p>		 <p>井戸 1</p>	 <p>井戸 1</p> <p>井戸 1</p>
 <p>溝 11</p> <p>井戸 7</p>	 <p>溝 11</p> <p>井戸 7</p>	 <p>井戸 7</p>	
 <p>井戸 4</p>	 <p>井戸 4</p>	 <p>溝 10</p> <p>井戸 4</p>	 <p>溝 10</p>

図133 中世土器一覽(2)

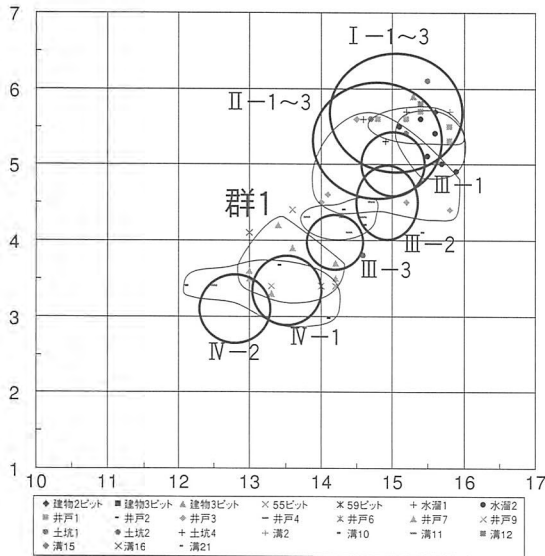


図134 瓦器椀の法量分布

Ⅱ期

水溜2、土坑1、溝12から出土した資料がこれに該当すると考えられる。当期以降、当遺跡より出土する瓦器椀はすべてが和泉型となり、前段階に認められた楠葉型瓦器椀は認められない。全体の傾向としては、尾上氏が既に述べているようにⅡ期の小期内型式間における相対的な前後関係は、法量分布からは明確に弁別し難い側面があり、これが土坑1出土瓦器椀の型式認定に大きく影響を及ぼしているものと考えられる。土坑1出土瓦器椀が法量上は口径が16cm前後を境とする分布を示すのに対して、器高の計測値は5.5cmから6.5cm前後とかなりの幅を有している。高台の径は広く、断面方形を呈し、内外面に丁寧なナデを施すことで、外側へと大きく張り出す

形状を示している。以上の様相から和泉型Ⅱ-2期に相当するものと考えられる。ただし見込みには単位の太い乱方向のミガキが極めて密に施されており、尾上氏の述べる平行ミガキの発現する前段階の古相を示すものに該当しよう。

Ⅲ期

井戸1・3・7・9、溝11出土の瓦器椀がこれに相当する。法量分布からⅢ期及びⅣ期の瓦器椀は明瞭に弁別されるが、この間を埋める形で分布する個体群が認められ、これを群1する。これには井戸7出土の一括資料が含まれ、同時性が高いといえるが、これを同一型式としてみた場合、群1のドットが散在的な分布を示す点は、同一形式内における法量の個体差が大きいということと、器高に比して口径が大きくなる傾向にあるという点を反映しているものと考えられる。調整は外面のミガキがほぼみられなくなり、これに呼応して体部外面には指頭圧痕が密に残存するようになる。見込みの暗文は単位の細かい平行ミガキが口縁部直下1cm前後のところまで施される。内面の圈線ミガキは疎らになり、形骸化の一途をたどる。高台は断面方形のものを貼り付けるものと、カマボコ状を呈するものの二者が認められ、粘土紐が全周しないものも若干認められる。

Ⅳ期

口径が13.5~14.0cmの間に収まり、器高は3.4~4.4cm前後を示している。井戸9の東半は溝10に切られるようであるが、出土遺物よりおおむね同時期に帰属するものとしてよいと考えた。法量分布では前段階の井戸7と本期に該当する井戸9・溝10出土瓦器はいずれも口径がほぼ同じ数値を示すものの、器高がさらに縮小化傾向にあるという点において両者は弁別可能である。これに加え、Ⅲ期段階でも見受けられた体部下半の強い張りとは、これに伴って見込みに施される平行線状暗文の及ぶ範囲が広くなるという点が一層顕著となる。なお、溝10では瓦質の鉢が出土しており、帰属時期がやや新しくなる可能性もあるが、出土する瓦器椀はいずれの個体も高台がつくことから尾上編年Ⅳ-2期までのものに限定されるといえる。

以上のように、瓦器椀の帰属時期からは4段階の時期区分が設定された。次に土師器皿についても個体の持つ特徴から帰属時期を検討し、出土遺構における供伴関係を基礎に瓦器椀と対応を検討する。土

師器皿について口径・器高の両計測値をグラフ化したものが図135である。大皿では口径12.0～13.5cmに収まるものと、13.5～15.0cmに収まるものが遺構間格差として明確に弁別可能であり、小皿でも同様に8.0～9.0cmと9.0～10.0cmの二者が認められる。これらの土師器皿は法量分布からは小森・上村編年のV期(古)～VII期(古)の範疇に収まるものであり、おおむね11世紀末～14世紀初頭にかけての所産であるといえる。次に個々の様相から、勝部遺跡出土土師器皿の型式変化の推移について

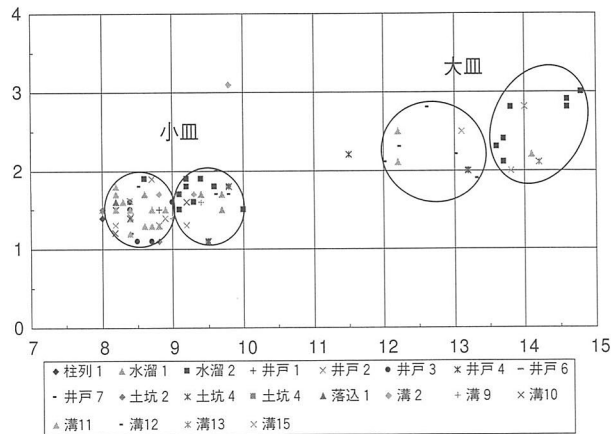


図135 土師器皿の法量分布

て検討を行うが、資料の実態としては大皿の個体数が限定されるために、小皿を主な対象として検討を加えたい。次に述べる通り、法量及びその他の様相から勘案すると、勝部遺跡出土土師器皿にはおおむね5つの段階が認められる。これらは当遺跡出土資料が小森・上村編年という(古)(中)(新)の三小期に実状として必ずしも合致しないため、これを仮にa～eの5類に分類し、各々の概要をみていく。

a 水溜1出土資料はいわゆる「ての字」状口縁の皿であり、器壁は約3mm前後を示す。口縁端部の立ち上がりは弱く、小森・上村編年で言うV期(古)～(中)段階に属する。楠葉型I期と共伴する。

b 水溜2、井戸1等の出土資料が該当する。口径は小皿が9.1～9.6cm、大皿が13.6～14.8cm前後を示し、aよりも縮小化傾向にある。体部外面には明瞭な二段ナデを施し、小森・上村編年V期(新)～VI期(古)段階に併行する。なおこの段階には口縁端部が外反傾向にあり、胎土が赤褐色を呈する小森・上村編年で言う皿Nの分化形態が少量数伴う。瓦器碗は和泉型II-1～2期のものが共伴している。

c 井戸3等の出土資料が相当する。口径は小皿が8.5～9.0cm、大皿が12.2cm前後を示し、一層の縮小傾向にある。口縁端部は丸く収められ、体部外面には二段～一段のナデが施される。器壁はdと比較するとやや厚手であり、約4mmを測る。小森・上村編年VI期(古)～(中)段階に併行する。

d 溝10・11出土土器を指標とする。口径は小皿が8.2～8.9cm、大皿が12.2cm前後を測る。器高は1.2～1.8cmと縮小傾向にあり、体部外面のナデは明瞭な一段のものに変容する。口縁端部は外面の強い横ナデによって断面が三角形に仕上げられ、cとはこの点を以って弁別が可能である。小森・上村編年VI期(中)～(新)段階に相当するものと考えられる。

e 井戸4出土土器を指標とするが、溝10・11の一部の資料もこれに属する可能性がある。さらなる器高の減少も手伝って体部外面の一段ナデが形骸化し、端部はやや外反する。内面体部と底部との境界が明瞭になり、器壁は最も薄い箇所約2～3mmと、前代のものと比較して極めて薄くなる。小森・上村編年でVI期(新)～VII期(古)段階の範疇に含まれる。

以上の5類型について各々の共伴関係から瓦器碗との対応を示すと、aがI期、bがII期、c・dがIII期、eがIV期に相当する。III期はc・dと共伴することから若干時間幅が長い可能性がある。これらとその他の特徴的な遺物の共伴関係を図132、133に示した。

3. まとめ

以上、勝部遺跡より出土した瓦器碗、土師器皿について帰属時期と対応関係を整理した。その結果導

出される一・二の問題点について言及し、まとめに代えたい。

瓦器碗については、尾上氏の提示した和泉型瓦器碗の法量分布では、Ⅳ－Ⅰ期前後のもの口径は13.2～14.0cm前後を示しており、当遺跡出土の瓦器碗とはやや様相を違える。すなわち当遺跡出土瓦器碗の示す法量分布は尾上氏の提示した和泉型瓦器碗の法量分布とは異なり、器高が尾上氏の提示した法量分布とほぼ同じ傾向を示すのに対して、口径が縮小化傾向にない資料が多いという点が特徴として挙げられる。当遺跡出土の尾上編年Ⅲ－Ⅱ～Ⅲ期に相当する資料群が一律に見込み及び口径を特徴的に広くとるという事象から、Ⅲ期の段階に瓦器碗生産のさらなる在地化の存在を想定することもできるが、詳細な検討は今後の課題である。

瓦器碗および土師器皿の年代について、共伴関係を基礎にして森島氏が付与した年代観と小森・上村編年における土師器皿の年代観を比較すると、当遺跡出土の一括遺物に限定する限り、各々の年代観におよそ四半世紀前後の幅で齟齬が認められるようである。当遺跡が猪名川流域という京都からは離れた地にあるということや、土師器皿の型式変化が地理的勾配によって漸移的な変化幅を有する可能性を考慮に入れても、北摂地域ないしは西摂地域までの土師器皿の持つ型式変容幅はそれほどの時間差を有していないものと考えられる。しかしながら北摂地域での京都系土師器皿の併行関係が未だ判然としていない現在では詳細は不明であり、今後のさらなる資料の蓄積が望まれる。

遺物によって導かれる遺構の年代は、集落の廃絶時期となるⅣ期段階の遺構の評価に与える影響も大きい。直角に曲折する溝や、短期廃絶の井戸など、遺構の特殊性や集落の廃絶はこの段階に認められるが、これが勝部遺跡における集落廃絶に連なる事象であると仮定すれば、これら遺構の年代は集落の廃絶という画期へと向かう時期を示すこととなる。このような中世集落の廃絶は、その後の集落景観の形成と一連の事象としてとらえられることから、年代を基準としたその評価は周辺地域の歴史的な問題に直結するものであるだけに、重要な問題をはらんでいるといえる。いずれも本稿では十分な検討を加えることはできなかったが、今後の検討課題としたい。

以上のように勝部遺跡出土の瓦器碗・土師皿はあくまでも一般に北摂ないし西摂の中世集落に通有の傾向を示すものではあるが、広範囲に分布する和泉型の中で異なるバリエーションがどういった時期から形成されたかを考察するための良好な材料となると考えられる。年代の検討も含め、今後に残した課題は多いものの、こうした資料の蓄積により、諸々の問題点は明らかになっていかねばならない。

(正岡)

(参考文献)

- 尾上 実 1985「大阪南部の中世土器－和泉型瓦器碗－」『中近世土器の基礎研究』中世土器研究会
1983「南河内の瓦器碗」『藤澤一夫先生古希記念論集 古文化論叢』同刊行会
小森俊寛・上村憲章 1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要 第3号』(財)京都市埋蔵文化財研究所
橋本久和 1980『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会
森島康雄 1987「西ノ辻遺跡周辺における中世土器の編年」『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要Ⅳ』大阪府教育委員会
1992「畿内産瓦器碗の併行関係と暦年代」『大和の中世土器Ⅱ』大和古中近研究会
2001「瓦器碗編年からみた京都系土師器皿の年代観」『中世土器研究論集－中世土器研究会20周年記念論集』中世土器研究会
中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

第2節 古墳時代の遺構・遺物の検討

1. はじめに

今回の勝部遺跡の調査では、古式土師器を含む遺構を検出し、掘立柱建物や井戸が含まれることから集落を形成していたものと判断した。また遺構には伴わないものの、初期須恵器、あるいは陶質土器の可能性のある遺物が数点出土した。遺構ならびに遺物の総量では中世段階のものや弥生時代後期～古墳時代初頭に属するものと比較して少量であるが、勝部遺跡の変遷を考える上で、また古墳時代の周辺地域の様相を考察する上で今回の調査成果は看過できないものといえる。本節では古墳時代前期に帰属する遺構・遺物について検討を加え、調査成果の整理をおこなう。

2. 古墳時代前期の遺構

古墳時代前期に帰属する遺構としては、掘立柱建物、井戸、土坑、溝がある。掘立柱建物は厳密には出土遺物から帰属時期を判断したものではないが、掘立柱建物の軸方向は北東－南西方向をとるもので、東西－南北方向をとる条里地割施行後の建物方位とは全く異なっており、古墳時代に属する蓋然性は高いと判断される。井戸については井戸枠を持つものは無く全て素掘りのものではあるが、井戸10に典型的なように壁下半の崩落は相当の水が溜まっていたことを示している。ちなみに堆積層である砂層をベースとする各遺構は井戸に限らず掘削すると水が湧く環境にあったと推測され、井戸と土坑の分別は客観的な判断基準を示しがたいが、一定の径と深さがあり、比較的壁面が直立するものを井戸とした。

各遺構の分布は図136に示したが、建物の軸に典型的なように、大きくは北東から南西へ方向性を持つ遺構分布を示している。この集落の持つ方向性は弥生時代の遺構同様、旧河道の方向あるいはそれを起源とする堆積物により形成された微地形の方向に規制される。全体的には散漫な遺構分布であるといえるが、溝25より北西には遺構はみられず、また井戸10と井戸12を結ぶラインの南東側にも遺構はみられない。したがってこの間が集落（居住域）範囲であろうと推測されるが、溝はまだしも井戸が集落範囲を画する存在になりうるかどうかは断定を避けたい。

後述するように各遺構の形成時期は大きく異なるものではないと考えられるため、これらをほぼ同時期の集落景観としてみた場合、遺構分布からは遺構配置の規則性に類するものをみいだすことができる。先述のように井戸10と井戸12をむすぶラインは調査範囲では遺構分布の南東限を画するものであるが、このラインから北西に約15m幅の部分は遺構分布のみられない空闲地である。またこの北西側には土坑の散漫な分布がみられ、その北西側に建物と井戸が1基分布する。これが集落における当初からの空間利用計画を示すとする確証はないが、長期間にわたる遺構の重複がみられないという状況は、逆にそのような空間利用の基本的な構造を知り得る可能性を有する点を指摘しておきたい。

3. 土器からみた遺構の時期

各遺構出土遺物の時期については個別の報告において極力示したが、単体の土器の帰属時期を限定することは困難であり、全体的に若干の時期差を想定することはできても、遺物の出土しない遺構の存在も含めて、その時期差を明確に遺構分布に対応させることは難しい。井戸10からは比較的遺存状況の良い土師器甕2点（247・248）が出土した。247は典型的な布留式甕であり、球形の体部から内彎気味にのびる口縁をもち、端部を内面に肥厚させ上端にゆるやかな面を持たしている。体部内面上半にはケズ

りを施し、指頭圧痕の残る下半とも薄い器壁を成形している。遺存状態の面でやや不正確な比較になるが、このような特徴は井戸11出土249や溝37出土286にも共通してみられるものである。同様の形式の甕では土坑127出土276がやや長胴の体部と直線的に伸びる口縁をもち、端部の肥厚も顕著でなく、また器壁も相対的に厚いといった特徴をみせる。直線的にのびる口縁部は井戸11出土250や土坑9出土254などにもみられる。これら布留甕における形態の違いを仮に時期差に置き換えた場合、前者が古く、後者が新しい傾向を示すと考えられ、土坑127出土の278のような口縁端部外面がやや肥厚する形態が後出するといった指摘とも整合する。一方、井戸10出土248はやや長胴を呈する甕で、体部内外面に整美なハケを施した後内面の下半にヘラケズリを施しているが、ケズリは体部中位でややまばらとなり、全体としては器壁を薄くするという目的で施されるものではないと考えられる。類例の多くを検討したわけではないが、これらの特徴は韓式系長胴甕の影響を受けたとされる土師器にみられる特徴と類似しており、布留式土器の段階では後出する器種である可能性が高い。仮に布留式甕において新旧の時期差を土器の形態から指摘した場合においても、井戸11においては両者が出土し、井戸10においても相対的に古相を呈する247と後出する器種と考えられる248が共伴する点は、土器の新古がそのまま遺構の時期を示すものではないことを示唆するものといえる。また壺についても同様の検討を加えたいが、ほぼ完形に復元できた個体は溝26出土の272に限られ、土器埋納遺構である土坑15、土坑17出土の壺はともに口縁部を欠いている。いずれも二重口縁を持つものであると推測するが、体部に関しては269、272はほぼ球形、289はやや背の高い形態を持つ。いずれも遺存状況が良好ではないが、体部にはハケによる調整が認められる。ただ269は体部上半にハケでは消しきれていないタタキの痕跡を残し、粗雑な印象を受ける。その他の器種としては高坏脚や小型丸底壺があり、それらの様相を加味しても、各遺構出土土器からみた遺構の年代は布留段階でも新しい段階を中心とすると考えられる。なお古墳時代前期の遺物は遺構出土の土器を中心とし、包含層に相当する第2-1層や第1層からは遺物がほとんど出土しない。これは中

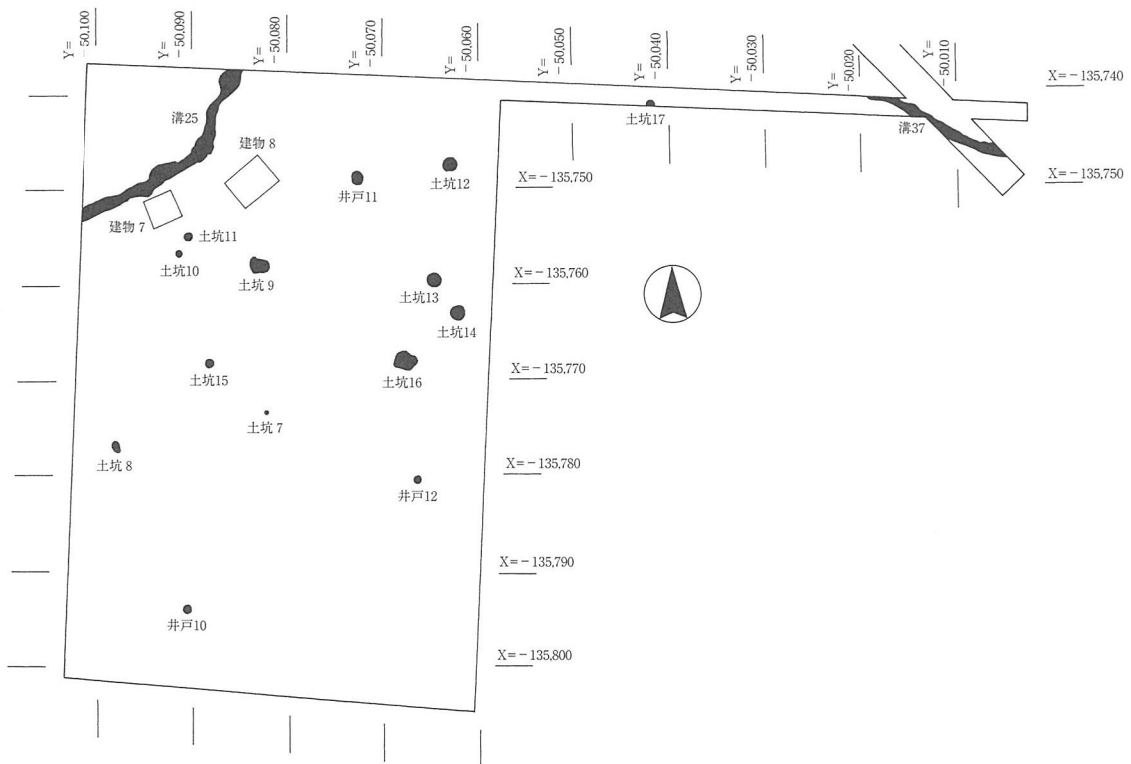


図136 古墳時代前期の遺構分布

世段階の集落の形成やその後の耕地化によって攪乱された可能性を考慮するにしても、元々遺物量が少ない状況を想定するほうが自然である。遺構分布の散漫な状況も合わせると、長期間におよんで集落が営まれた形跡は希薄であり、比較的短期間に集落は廃絶したのではないかと推測する。

4. 玉類について

第1面土坑8からは碧玉製管玉1点、滑石製白玉6点が出土した。いずれも埋土の水洗選別により検出したものであるが、遺構そのものが攪乱により半壊しており、また埋土の全てを洗浄したものでもないため、これ以上に存在した可能性は否定できない。土坑からの土器の出土は細片に限られたため、時期を判断することはできないが、埋土の特徴が古墳時代前期の遺構に共通する状況も認められることから先述の土器を出土した各遺構と同じ時期に属するものと推測する。管玉の特徴については比較検討する観点を有していないが、滑石白玉については古墳時代中期から後期にかけて大量に生産される白玉と比べると、全体的に小ぶりであり、表面も円滑に仕上げられている。技術的側面の反映する可能性の高い孔の径についても、ほぼ1mm程度であり、精度の高い穿孔が施された製品であると評価できる。詳細な検討を加えたものではないが、おそらくこれは時期的な特徴であり、古墳時代を通じた白玉の変遷は、精細から粗雑への方向を示すものとして理解される。

土坑8からは玉類以外では土器細片のほか、木片が多く含まれていた。農工具の残欠や自然木の細片であるが、焼成を受け炭化したものも多く含まれており、埋土にも炭化物粒が多く含まれていた。これだけをもって土坑の性格を判断することは問題ではあるが、玉類の出土も含めて火が用いられた祭祀が行なわれた状況を推測しておきたい。類例の集成は行っていないが、管見では初期須恵器段階の遺構と考えられる大和川今池遺跡検出された土坑においても類似する様相が認められる。

5. 初期須恵器・陶質土器について

遺構に伴うものではなかったが、今回の調査では初期須恵器あるいは陶質土器と考えられる土器が数点出土した。図137に一部を再度掲出するが、高坏形器台、筒形器台、有蓋高坏蓋、高坏脚があり、図示し得なかったものでは無蓋高坏の口縁部(図版63-725・726)がある。個々の遺物は図上では復元し得たものもあるが、遺存状態は不良である。したがって断片的な検討にならざるを得ないが、個々の特徴と類例との比較から時期的な位置付けを検討したい。

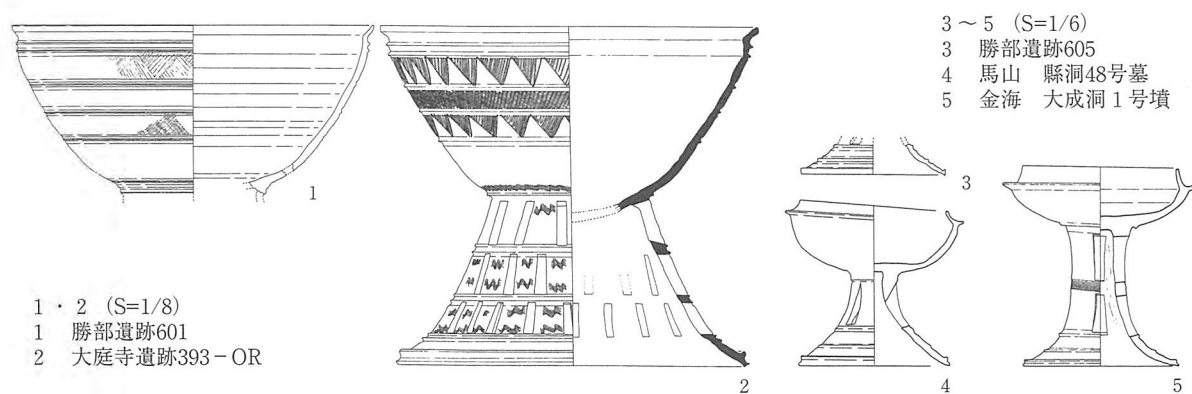


図137 初期須恵器・陶質土器の比較

601は高坏形器台である。やや坏深が深い形態を示し、口縁端部は屈曲し短く開くが、ややつまみあげ気味に内湾する。突帯は口縁直下に2条が巡り、やや間隔を空けて3条の突帯が配置され、その間を紋様態とする。脚との接合部にも3条の突帯を巡らす。各突帯は断面が三角形を呈するもので、総じてシャープである。文様構成は上部にヘラ描き鋸歯文、無紋の文様帯を挟んで下段にヘラ描き斜格子文が施される。それぞれの描線も極めて精緻である。以上のような特徴を同種の器台が多数出土した大庭寺遺跡（陶邑TG232窯）と比較すると坏部が深い点、造形がシャープである点などより古相を呈する可能性が認められる。大庭寺遺跡出土器台では総じて櫛描き波状文を施す個体が多いが、601にはみられない。文様構成は個体ごとの違いが多くみられる状況を踏まえても、口縁端部の造形が久米田古墳群出土器台に類似する点も含めて、TG232型式段階かあるいはそれに先行する可能性を指摘しておきたい。

筒形器台602は類例に乏しいが、器高が高く、透かしが直列する点は相対的に古い要素と考えられる。造形的には601に比べ粗雑な印象が強いが、残存部位には文様が全くみられない点、特に波状文が施されない点は古相を呈する可能性がある。

蓋603・604は極細片であるが、短い口縁部、長くのびた突帯、やや丸みを持つと推測される天井部に施される粗い櫛描刺突文といった特徴を良く示している。特に突帯については基本的に時期が下れば短くなるという傾向をもつ属性であるので、類似する資料の中でも古い様相を示すと考えられる。

高坏脚605もごく一部しか残存していないが、胎土や焼成が類似する725・726が同一個体であるとすれば無蓋高坏と考えられる。透かし以下の残存であるが、類例から透かしは三角透かしであり、透かし下端に接して突帯を巡らす点、脚端部までの間にさらに1条の突帯を巡らす点、脚端部を上下に拡張する点などが特徴であり、全体的にシャープな造形である点も指摘できる。透かしと突帯の関係や、その下に1条の突帯を加える点はTG232型式段階に先行する形態で、韓国伽耶地域に類例が認められる。

以上のように断片的な残存ながら各遺物の特徴を観察したが、全てが一時期のものではないと考えられるものの、初期須恵器の中でも古相を呈する一群であり、TG232型式段階に同じか先行する可能性があるものと想定される。さらに蓋603・604や高坏605については断定はできないものの、陶質土器である可能性も残される。このようにそれぞれの個体の帰属については不明瞭な部分を残しながらも初期須恵器の段階でも古い段階に帰属するという見方が可能である。

6. まとめ

以上、いくつかの項目に関して検討を加えた。結果、整理された状況について列記したい。

- ・古墳時代前期段階の集落は遺構分布から、計画的な遺構配置が行なわれた可能性がある。
- ・遺構分布や出土遺物量から、集落は比較的短期間に廃絶したものと推測される。
- ・出土遺物の様相から、集落の形成された時期は布留式段階の後半と考えられる。
- ・土坑から炭、灰などと共に玉類が出土し、祭祀痕跡と推測される。
- ・出土初期須恵器は古相を呈するもので、陶質土器が含まれる可能性がある。

以上列記した内容は推測の部分が多く含むものであり、今後、周辺の調査成果の蓄積により変更を余儀なくされる可能性を含むものではあるが、今回の調査成果における一定の評価として示しておきたい。残された検討課題も多く、特に遺構の年代については布留式土器に関する既往の研究成果を参照したが、個々の遺物自体の年代と、それらが共伴する形で出土する遺構の年代を如何に設定するかについて、なお検討の余地が残されている。この点については土器群の様式的把握と年代比定が進んでいる研究動向

であるが、土器単体の型式認定は可能であっても、セット関係が揃わない出土状態を示す土器群の年代比定は難しい。

また今回、初期須恵器の年代については比較的古相を示すという判断を行なったが、それらと遺構出土土師器との関係については、共伴関係がみられなかったので確定はできなかった。しかし、初期須恵器の形式が相対的にさかのぼる状況の中で、布留式土器との重複期間も相対的に長くなっていくことは十分想定され、今回の調査成果においても遺構出土の土師器と初期須恵器を全く時期の異なるものとする根拠も希薄である。いまのところ可能性の指摘にとどまるが、今回の調査で検出した古式土師器群と初期須恵器の時期的な重複も否定できないものとしておきたい。

(森本)

(引用・参考文献)

- 一瀬和雄 1989「久宝寺・加美遺跡の古式土師器」『大阪文化財論集』(財)大阪文化財センター
岡戸哲紀 1993「陶邑と大庭寺遺跡」『古墳時代における朝鮮系文物の伝播』埋蔵文化財研究会
岡戸哲紀編 1995『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』(財)大阪府埋蔵文化財協会
1996『陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ』(財)大阪府文化財調査研究センター
木下 亘 1991「陶質土器とその分布」『古墳時代の研究』6 雄山閣出版
杉本厚典 2003「河内における布留式期の細分と各地との併行関係」『古墳出現期の土師器と実年代』(財)大阪府文化財センター
寺沢 薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県教育委員会
朴 天秀 1993「韓半島から見た初期須恵器の系譜と編年」『古墳時代における朝鮮系文物の伝播』埋蔵文化財研究会
米田敏幸 1991「土師器の編年 1. 近畿」『古墳時代の研究』6 雄山閣出版
慶星大校博物館 2000『金海大成洞古墳群Ⅰ』
昌原大校博物館 1990『馬山縣洞遺跡』

第3節 弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構と遺物

1. はじめに

今回の調査では、第1面、第2面の遺構から弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての遺物が多数出土した。これらの土器は一瞥して在地の弥生時代後期の特色を示すものが中心であったが、中には時期的に後出する可能性のある個体あるいは外来系かと考えられる個体も含まれていた。ここではこれら遺構出土土器について概観し、帰属時期や外来系土器について整理したい。出土遺物が多くみられた遺構は、第1面の土坑19・溝26・溝28や第2面の流路1などで、まとまった出土状況から一括資料として扱うことのできる可能性が高いと考えられる。

2. 分類と時期の検討

様相の整理のため、各遺構出土土器を分類し、一覧図を作成した(図138～141)。分類基準はやや不明瞭で、帰属が曖昧な個体も生じたが、一応の目安として作業を進めた。これらの土器群を摂津地域の既存の土器編年(森田1990)と比較し、時間的な位置付けをおこなう。器種には壺・甕・鉢・高坏・器台が中心で、壺には二重口縁壺が含まれている。また細片であり図、写真とも掲載できなかったが手焙形土器の一部と思われる個体も溝28から出土している。このような器種構成から大きくは摂津Ⅵ段階に相当するといえるが、以下器種ごとの様相を述べ、新しい要素がみられる器種については出土遺構の帰属面の時期差、すなわち第1面と第2面の時期差を示す根拠になりうるかを検討する。

壺				
	直口壺 口縁部が体部より屈曲し、直線的に立ち上がる	広口壺 直立あるいは内傾する頸部から口縁部が外に開く 口縁端部に面をもつ	広口壺 直立する頸部から口縁部が外に開く 端部を上方につまみあげある	広口壺 直立あるいは内傾する頸部から口縁部が外に開く 端部が下方に肥厚(下垂)する
土坑19				
溝26	350		334 335 342 333	336
溝28			367	374 373
その他の遺構				
流路1	608 538 607 606	614 615 611 613 620	621 683 609	610

図138 弥生時代後期～古墳時代初頭土器一覽(1)

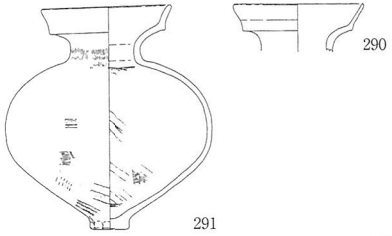
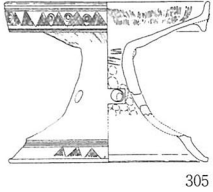
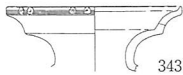

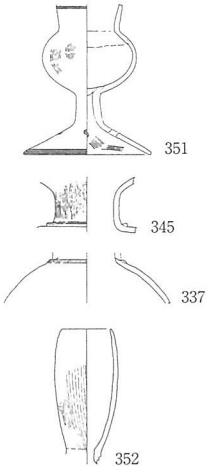

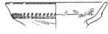
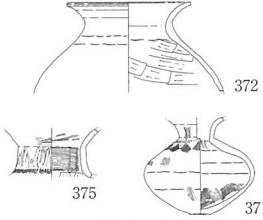

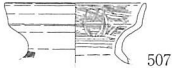

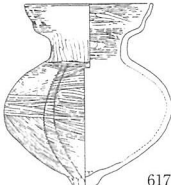
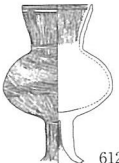
壺		器台	
二重口縁	(外来系)	その他	(外来系)
			
			
			
			
			

図139 弥生時代後期～古墳時代初頭土器一覽（2）

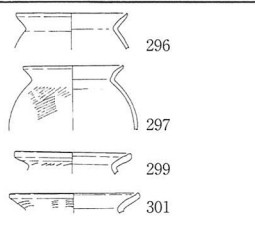
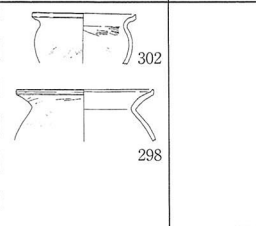
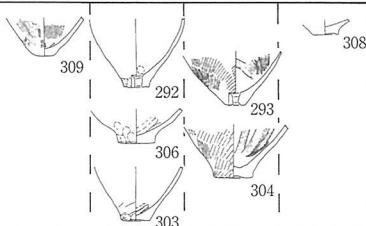
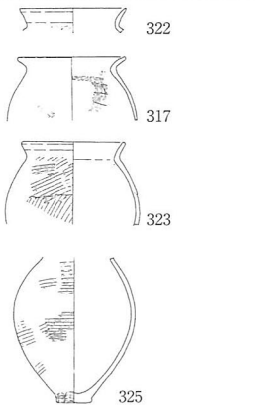
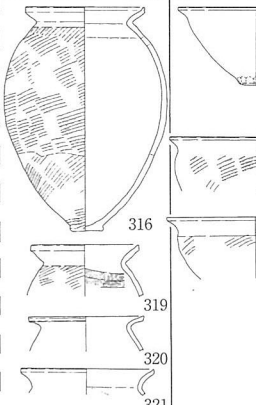
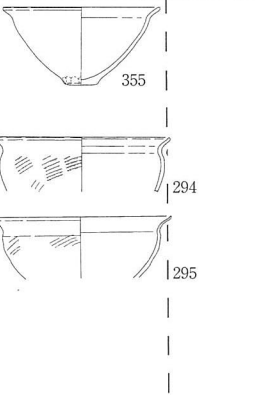
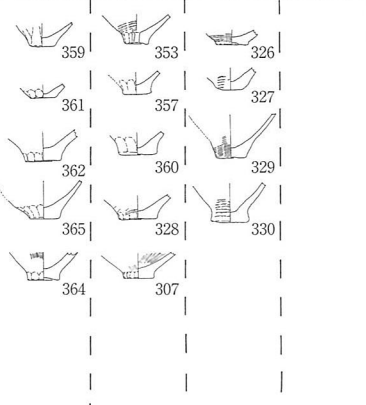
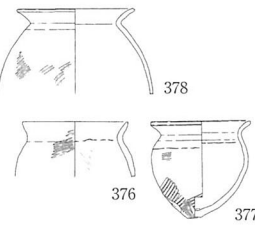
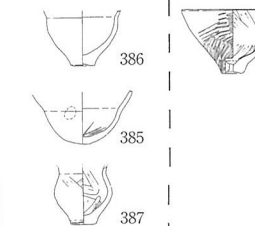

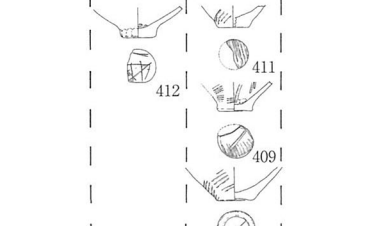
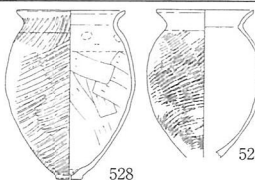

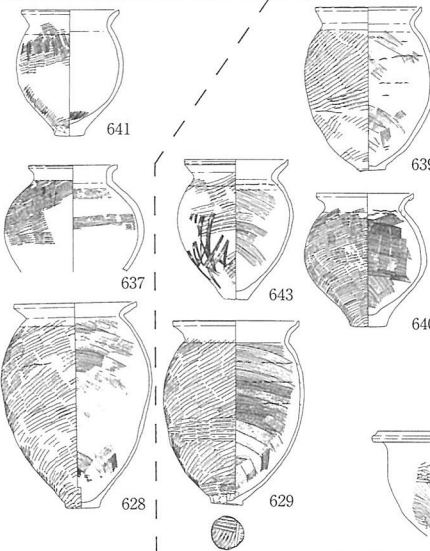

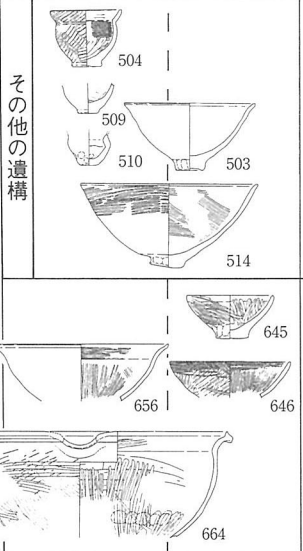
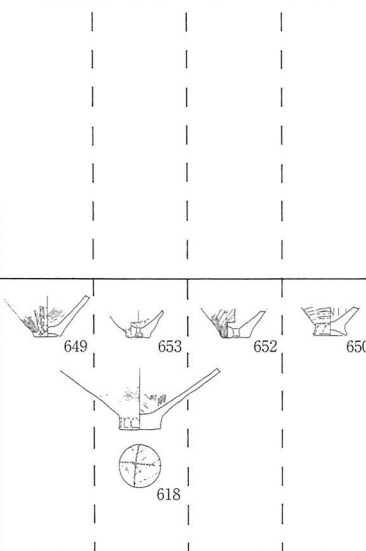
	甕		鉢		底部			
	口縁端部がナデのみ	口縁端部をつまみあげる あるいは端面が凹線状	口縁部が屈曲する	口縁部が屈曲しない	a	b	c	d
土坑19	 <p>296 297 299 301</p>	 <p>302 298 308</p>			 <p>309 292 293 306 304 303</p>			
溝26	 <p>322 317 323 325</p>	 <p>316 319 320 321</p>	 <p>355 294 295</p>		 <p>359 361 362 365 364 353 357 360 328 307 326 327 329 330</p>			
溝28	 <p>378 376 377</p>		 <p>386 385 387</p>	 <p>388</p>	 <p>412 411 409 407</p>			
土坑25	 <p>528 525</p>			 <p>530</p>				
流路1	 <p>641 637 628 643 629</p>	 <p>639 640</p>	<p>その他の遺構</p>  <p>504 509 510 503 514 645 646 664</p>		 <p>649 653 652 650 618</p>			

図140 弥生時代後期～古墳時代初頭土器一覧（3）

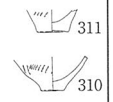
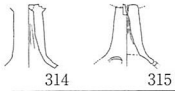
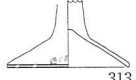
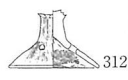
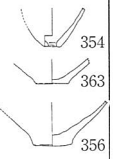
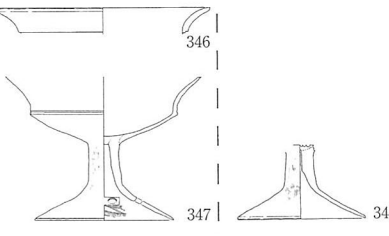
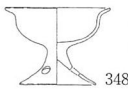
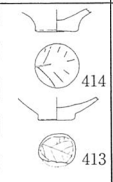
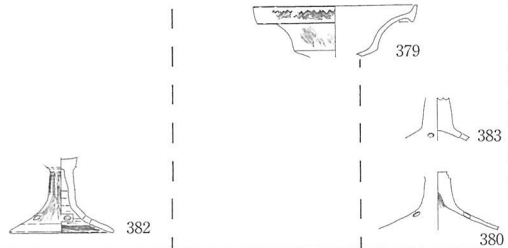
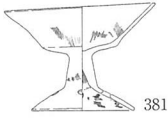
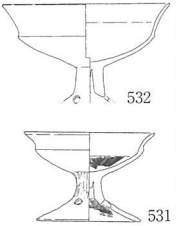
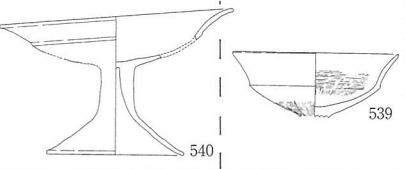
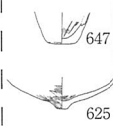
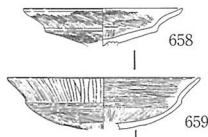

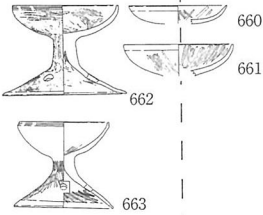
底部	高坏				
	有稜坏部			椀形坏部	
	口縁部が外反する		口縁部が直線状にのびる		
接合は坏部充填	接合は坏部充填 脚裾部が大きく広がり 内面に稜をもつ	坏部の充填はしない 脚裾部が大きく広がる			
 311 310	 314 315	 313	 312		
 354 363 356	 346 347 349		 348		
 414 413	 382 379 383 380	 381			
	 532 531				
落込 2	 540 539				
 647 625	 658 659	 657	 660 661 662 663		

図141 弥生時代後期～古墳時代初頭土器一覧（4）

壺は、広口壺が主体である。口縁部に加飾すること、体部が胴部中位で大きく扁球形に膨らむなどの特徴があげられる。広口壺、二重口縁壺は口縁端部に加飾するものが主体で、622・624のように口縁部の接合部分と端部に凹線文・円形浮文をつける例は、摂津地域でよくみられるが、343・622のように端部をつまみ上げる例は少ない。台付き壺は摂津地域ではV様式以降みられる器種で、VI様式にも引き続き存在するとされるが、口縁と脚端部に沈線を施しており、外来系土器の可能性もある。また壺部と脚部の接合方法には高坏にみられるように2種類がある。

壺の中で新古を考えた場合、広口壺の体部形状は流路1と溝26を比較すると、前者がより扁球状であり、球形の体部を持つ333、335などは後出の要素が指摘できる。出土土器と頸部がすぼまる直口壺607は、やや新しく摂津VI-3様式に下る可能性があるが、大きくは加飾する広口壺が主体をなすことから、摂津VI-1・2様式に属するといえる。

甕は、平底を持ち、外面にタタキの残される第V様式系の甕のみで構成され、庄内甕は全く認められない。口縁部はくの字に屈曲し、短く外反する。体部の最大径は胴部のほぼ中央に位置するが、比較的胴長な器形が中心となるが、最大径を胴部の上位に持ち、やや肩の張ったようにみられる個体(626・629・638など)も含まれる。口縁端部の成形は単純なナデ調整で終えるものと、端部をつまみ上げる状態でナデたり、端面に凹線文を施す例などが含まれる。成形は二分割・三分割の単位がみとめられ、成形における中断が認められるが、時期的に後出する要素とされる「連続ラセンタタキ技法」によると考えられる個体は316などが候補となるが明瞭ではない。従ってVI-3様式に下る可能性もあるが、中心は摂津VI-2様式にあると考える。

さて、甕底部は多くが残存するが、溝28や流路1からは、甕底部外面にタタキ目や木葉痕が残るものが多く出土した。いずれもこの時期の甕底部に認められる要素であるが、407のように輪台状の底部において輪台部の内側、つまり底から浮いた部分に木葉痕を残す個体は、輪台部の成形が体部の成形から遅れることを示唆する。底部にタタキを施す意図はよく分からないが、底部成形の最終段階での造作によると考えられる。さらに底部について注目すれば比較的底の薄い個体も一定数含まれる。628、629、636、639、642などで、底部の成形技法との関連で興味深い。

鉢は、VI様式を通して形態の変化が乏しいが、今回出土した資料では、有孔鉢の割合が大きいことや、片口をもつ大形品の存在より、摂津VI-2段階にまで下ると考えられる。

高坏は器形の変化が著しい器種であり、今回の出土遺物の中でも比較的細分が可能であった。まず坏部の形態で大きく二分した。口縁部に稜をもつ坏部を持つものは、口縁部の外反の度合いや口縁部の高さ、また脚部の形態から、時間差がみとめられる。脚部は、脚柱部が中空で緩やかに開くものと、短い脚柱部から円錐形に大きく開くものがあり、前者は基本的に「円盤充填法」により坏部と接合されている。このような脚部形態に対応する坏部は、口径部の高さが浅く、外反の度合いが大きいことから、第V様式に近い形態である。一方、坏部の底径が小さいものや、口縁部が直線的に開き高さを有するものは新しい形態といえ、脚分類の後者がこれに対応すると考えられ、「挿入付加法」により接合される例(381)を含み、これは脚内面の屈曲部に稜を持つ。

椀形の坏部を持つ高坏は、基本的に中実の脚を持ち、脚内面の屈曲部に稜をもたない。第2面流路1出土の662、663は脚部の開き方には違いが認められるが、口縁端部に沈線を巡らすといった特徴は共通する。また坏部の口縁が緩やかに外反し、脚②が付く348は、摂津VI-3段階に登場する小形高坏(台付椀)に変化していく器形と考えられる。

稜を有する坏部形態の高杯では第1面溝26出土347や溝28出土381に新しい要素がみられ、第2面流路1出土の658、659は古い形態を有するとみることができる。一方、第2面流路1からは椀型坏部形態の662、663が出土しており、溝26では348が共伴する。662は相対的に新しい形態を持つものと考えられ、摂津VI-2様式にまで下がる可能性がある。このようにみると第1面と第2面では高杯の形態に時期差を認めることは可能であるが、段階的に古い遺構である第2面流路1においても相対的に新しい個体が含まれることから、土器に示される時期差を即遺構間の時期差とみることが難しいものといえる。

以上のように粗いものではあるが各器種における分類と帰属様式を既存の編年成果の中に位置付ける作業を行なったが、第2面流路1にやや古層の遺物が含まれる状況が認められるものの、第1面の遺構も含め、総じて新旧入り混じった様相を呈するといえる。後述するように遺構出土遺物の一括性については注意すべき点も残されるが、摂津VI-1段階の特徴を残すものも含み、摂津VI-2段階が主体である遺物群としておきたい。

次に摂津地域における当該期の資料集成を試みた作業成果（森岡ほか1996）との対応をみると摂津VI-2様式に属する資料は、米田編年（米田1991）の庄内I以前・庄内式期I・庄内式期IIの3つの段階に相当するとされる。今回の出土遺物群は第V様式甕や加飾する壺が主体をなし、口縁部が直口する高杯などが含まれる点で、服部遺跡や東奈良遺跡、新庄遺跡の庄内式期I・II段階の一括資料同様の構成を示している。このような点からも現段階では摂津VI-2様式のなかでも新しい段階にまで下る資料であるといえるが、時間軸の中では幅を持たせた位置付けが適当ではないかと考えられる。

3. 外来系土器について

当遺跡で出土した土器は、肉眼でみた限りでは3～4種類の胎土に分けられたが、搬入土器の可能性が想起された個体は器台305のみである。従って可能性のある個体を含め、外来系土器と思われる器種を列挙する。

器台305は全体的に白っぽい胎土、焼成で他に例がないことから搬入品と考えられる。ヘラ描き鋸歯文や擬凹線文・円形浮文による加飾から、東部瀬戸内産（播磨・備前・讃岐）の可能性はある。

細頸壺（352）は内湾気味にのびる口縁部形状は讃岐の下川津IV式の細頸壺と類似する。しかし胎土は一般的に讃岐産の特徴といわれる角閃石を含んだチョコレート色のものではない。模倣土器の可能性もある。また、広口壺で、頸部が内傾して口縁部が開く個体（373・611・613など）や、頸部と体部の境付近に刺突列点文をめぐらす溝28出土375も讃岐の土器に近い形態と思われる。

二重口縁壺は口縁部形態のみでも幾通りにも分けられ、外来系土器を抽出するのは困難であるが、338・369は胎土の面からもその可能性があると考えている。

台付壺（361・612）は直口壺に脚部がついたものであるが、361の口縁端部・脚裾部端に沈線を巡らす点や、他地域の影響を受けた可能性がある。612も同じ器形ではあるが、胎土や脚部の成形技法が異なっており、外来系土器とその模倣土器といった関係を持つ可能性がある。

4. 土器群出土の遺構について

本節で出土土器資料の提示を行なった遺構は第2面の流路と第1面の溝、土坑であるが、いずれの遺構面においても集落を構成する遺構は認められない。第2面は流路と流路縁の後背湿地、水田域であり、流路1出土の土器群は流路の埋積による砂層を中心に出土している。第2-2層の堆積がどの程度の時間

幅で進んだものであるかをしる根拠はないが、流路1出土遺物が極めて遺存状況がよい状況からは、土器自体は流路内をそれほど移動したとは考えがたく、また長期間流水にさらされたとも考えがたい。この点から推測して、流路1の大規模な埋没のさなかに土器が投棄された状況が推測され、厳密な意味での一括資料ではないが、比較的一括性の高い出土状況を想定する根拠となる。ただし最上層の堆積であるシルト層からのまとまった土器の出土があり、段階的に埋没した可能性、あるいは第1面段階にも浅い水溜りのような状況を呈していた可能性は高い。しかしいずれにしても流路の埋没と第2-2層の堆積は、地形環境を激変させ、調査範囲内では耕作地の放棄という状況を生じさせたものである。したがって第1面にみられる溝や土坑は地形環境変化後の最初の土地利用というべきものとなる。第1面の遺構は溝28を除くとすべて独立した遺構であり、遺物の出土状況も破損品の投棄といった印象が強い。個々の遺構の性格を決定する根拠は少ないが、溝28を除くと一時的な遺構の可能性が高く、第1面形成直後の遺構としても矛盾は感じられない。しかし投棄された土器が本来使用されていたエリアは近接地にあると想定され、溝28もこのような集落域からの排水路の可能性が想起される点において、溝28が他の遺構と比べ長期間維持された可能性は指摘できる。

5. まとめ

今回出土した土器は、撰津VI様式のうちでも新しい要素をもつ土器が散見しており、弥生終末期（庄内期古相段階）の土器様相を示すのに良好な資料である。とはいえ既往の編年研究との対応では時期的な変遷課程を良好に示すものとはいいがたい。甕の構成が第V様式系甕に限られ、庄内甕の搬入や使用が認められない点や、器台、壺にみられる東部瀬戸内地域からの影響などの特色は、撰津でも西撰津における状況と調和的であるが、庄内甕の搬入がみられない点や時期的な特徴を見出しにくいという点については、厳密には集落遺構にあたらないという遺構の持つ性格によるものであるか、地域性として提示されるべきものであるのかは今後も検討されるべき課題であるとおもわれる。今後、厳密な集落遺構から得られた資料の蓄積により比較検討が進むことが期待される。またそれに伴い流路2に多量に投棄された土器群の性格などについても考察の材料が増えるものと期待する。

(小野・森本)

(参考文献)

- 大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『下川津遺跡』第2分冊 香川県教育委員会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター 本州四国連絡橋公団
- 森岡秀人ほか 1996「庄内式併行時の様相をめぐる撰津地域の動向」『庄内式土器研究』XII 庄内式土器研究会
- 森田克行 1990「撰津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社
- 森田克行 1977「第VI章 遺物およびその考察」『安満遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会
- 正岡睦夫・松本岩雄編 1992『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 木耳社
- 米田敏幸 1991「土師器の編年 1. 近畿」『古墳時代の研究』6 雄山閣出版
- (財)大阪府文化財センター編 2003『古墳出現期の土師器と実年代』シンポジウム資料集
- なお、他に発掘調査報告書を参照したが、紙面の都合上割愛した。また今回の検討にあたって当センター秋山浩三氏・市村慎太郎氏はじめ多くの方にご教示いただいた。末筆ながら感謝申し上げます。

第8章 調査のまとめ

前章までに発掘調査における成果を報告し、不十分ながらそれに対する検討結果を提示した。本章ではそれらを総括し、今回の勝部遺跡調査成果のまとめとしたい。

弥生時代から中世にかけての地形環境の変遷

今回の調査地における地形環境の変遷については考古学的な知見に加え、堆積学や土壌学の方法による検討を加えた（第6章第2節第2項・第3項）。勝部遺跡は豊中台地と猪名川の間広がる沖積地に立地しており、従前、「猪名川により形成された広い平野部」を背景にし、「千里川によって形成された自然堤防上に立地する」という位置付けが一般的であった。今回の調査では第3面から第2面に継続する流路を検出し、豊中台地から猪名川に流れる中小河川の影響を強く受けた微地形上に遺跡が広がることが明確となった。しかし現在の千里川はいうまでも無く流路の固定化が行なわれて以降の位置を保持しており、弥生時代において現在と同じ流路を流れていた可能性は低い。今回検出された流路は基本的に北東から南西へ方向をとるものであることから、調査地付近ではほぼ南北方向を取る現千里川は、条里施行段階以降のものである可能性が高い。昭和36年作成の都市計画図（図3に使用）では、現在の下走井橋の南付近から今回の調査地方向にむけて北東から南西方向への地割の乱れが認められる。これが旧流路の痕跡を示す可能性は高く、これが現千里川の氾濫痕跡であるのか、それ以前の流路の痕跡であるのかは判断が難しい問題であるが、少なくとも現在の千里川そのものが、条里施行以前の地形環境に影響を与えている可能性は低いものと考えられる。ちなみに勝部遺跡第1次調査範囲は今回の調査地から南に300m以上はなれた地点であり、微地形レベルでは異なる地形環境に属していた可能性が高い。したがって想定される水利関係などを根拠に遺跡間の関係を論じるに際しても、微地形レベルでの関係に注意を払っておく必要がある。

今回の調査で検出した第3面は流路縁辺の後背湿地であるという状況が推測された。第3面に伴う土壌層である第4層からは1点のみであるが縄紋時代中期の土器片が出土している。第3面以下の土層観察においても沖積地でありながら活発な堆積とその上面での土地利用が繰り返された痕跡は希薄であったこともあり、今回の調査範囲に限れば縄文時代を含め、第2面までの土地利用も活発であったとはいえない。第2面において水田としての土地利用がみられるわけであるが、これも廃絶は弥生時代後期末～古墳時代初頭という時期であり、弥生時代前期から中期にかけて拠点集落と目される勝部遺跡の生産域としては適当なものとはいえない。周辺地域での水田遺構については今後周辺地域での調査例が増えることが期待されるが、今回の調査成果からみるかぎり、活発な堆積環境の中で耕地の拡大が進行する状況がみられなかったと推測する。

弥生時代末～古墳時代初頭の洪水により第2面は廃絶し、第1面が形成される。第1面段階では第2面流路上が微高地としてやや高くなった地形を有しており、後述するようにこの部分を中心に中世までの遺構が検出され、相当長期にわたり安定した状態であったと考えられる。この間若干の砂層の堆積は認められるが、部分的なものであり、地表面の廃絶には至らなかったものと考えられる。

第1面以上の土層、すなわち第1層は複数の作土の重なりであり、中世の集落以降、耕地化されたものと考えられる。堆積層が明瞭に認められないため詳細は不明であるが、小規模な洪水により土砂に覆

われた耕作地に再開発を繰り返し、作土の重なりが形成されたものと考えられる。また、第1面に伴う土壌層は部分的にしか残存しておらず、この耕地化の過程に第1面は水平化のための削平を受けたものと考えられる。

弥生時代の水田

第2面で検出した弥生時代水田は、流路とそれより取水する取水口、取水口よりのびる水路、水田畦畔、島状高まりという、水田景観を構成する要素が一揃い検出されたものである。また厳密には井堰とする根拠には欠くが、流路内には多数の杭が打設されている状況も明らかとなった。水路は調査範囲からさらに南側へと配水するためのものと考えられ、周辺に水田の広がる蓋然性は高いが、周辺地域での既往の調査では水田遺構の検出例は少なく、その意味では今回の調査成果は推測を中心に語られることの多かった猪名川流域の弥生時代の農耕生産についての具体例として貴重なものといえる。一方で先述のように長期間にわたり埋没と再開発を繰り返した痕跡は希薄であり、生産規模や集落との関係など不明な部分も多く残されている。なお今回水田土壌と判断された層順を中心に土層の軟X線撮影を実施し、土地利用の痕跡を追求した(第6章第2節第7項)。結果、一連の堆積とも考えられた砂の堆積の途中(第1面と第2面の間)にも地表面があり、耕作が行なわれた可能性が指摘された。遺構としては建物9や柱列2が対応する可能性が高いが、第7層第3節で検討を加えたように、第2面の埋没に伴う遺物と第1面に営まれた遺構出土遺物には大きな時期差は認めがたい。この短い期間に地表面化したわずかの間に簡素ながら建物を営み、水田耕作に着手するという状況が指摘されることは、耕地の再開発に対する積極的な取り組みを示すものとして重要である。

弥生時代末～古墳時代初頭の環境変化と土器群

水田生産域として利用されていた第2面は洪水によって埋没し、砂層をベースとする第1面が形成される。上述のようにこの堆積の間にも耕地化への取り組みがなされた痕跡が認められることから、第2面が洪水砂に覆われたことが即、土地利用の放棄につながったものではないが、この取り組みも本格的な耕地の再開発には至らず、短期間で第1面の形成に至ったようである。そして第1面では耕作関連の遺構がみられず、この段階に至り土地の耕地化は断念されたとみることができる。第1面では比較的長い期間維持された可能性のある溝28以外では、小規模な土坑や溝を認めるのみとなる。溝28は確認調査区において検出した数条の溝と一連のもので、さらに北東側に位置すると予想される集落域からの排水を担った可能性が想定されるが、今回の調査範囲では詳細は不明である。また土坑や小規模な溝についても性格は不明であるが、いずれも長期間にわたって営まれた遺構ではなく、溝28に比較的長期間の存続を認めたとしてもおおむね庄内段階で廃絶する。今回の調査範囲に限れば、洪水にともなう土砂災害による生産域の廃絶という状況のなか、若干の利用痕跡を残しつつも布留段階での集落の形成までの間、ほぼ放置された状況を認めることができる。

第2面の廃絶と一連の事象とおもわれる流路上部に埋積した砂層からは多量の土器が出土した。また第1面の土坑や溝からもまとまった土器が出土している。これら土器群の時期的な位置付けについては第7章第3節において検討を加えた。時期的には摂津第Ⅵ様式とされる一群でも新しい要素を有しており、北摂地域あるいは西摂地域における当該期のまとまった土器資料としては良好なものといえる。西摂地域は庄内甕の搬入や使用という状況が希薄な地域であることがこれまで指摘されてきたが、今回の

資料においても搬入土器はあるいは外来系の土器は瀬戸内地方のものを中心とし、庄内甕は全く出土していない。加えて西摂津地域での当該期の土器資料では遺跡単位での編年をなし得る資料の不足がいわれてきたが、今回の資料においても型式上、第1面出土土器と第2面出土土器ではそれほどの差を見出しがたい。これは洪水による砂の堆積の最中と直後という関係で理解できるものではあり、時間差の無い資料である蓋然性は高い。ただ西摂地域では多くの遺跡において編年軸に沿った良好な様式構成をもつ資料が抽出されないという状況は、庄内甕の搬入がみられないという状況も合わせ、地域性として提示される可能性のある点も意識しておかなければならない。加えて使用目的によって土器が使い分けられていた状況を想定すると、集落では実用に応じた最新の土器を、生産域や祭祀には古い形態を残す土器を用いていたとする仮定も示し得る。いずれも今後検討されるべき課題である。

布留期の集落と初期須恵器

庄内段階の若干の土地利用を経て、布留期には集落が営まれる。集落の構成と出土遺物については第7章第2節で検討を加えた。集落は掘立柱建物、井戸、土坑、溝で構成されるが、遺構分布の面からは長期間にわたる集落ではなく、短期間に廃絶する集落ではないかと考えられる。井戸や土坑からは土器がまとまって出土しており、時期的な検討も試みたが、やはり様式的な検討に十分耐えうる器種構成を残しておらず、帰属時期については曖昧な部分が残された。しかし布留段階でも新しい様相を示す資料が含まれることから、全体的にも布留段階の新しい時期に位置付けられると考えた。

細片ばかりであり、遺構に伴う遺物ではないが、出土した数点の初期須恵器は形式的に大庭寺段階(TG232形式段階)に先行する特徴を有しており、陶質土器である可能性を指摘し得る個体も含まれる。

遺構からの出土でないため、土師器との確実な共伴関係を示すことはできないが、初期須恵器としては最も古い段階の資料であり、遺構出土の土師器と時期的に併行する可能性を指摘しておきたい。

集落の性格について具体的に示す根拠は少ないが、集落が比較的短期間で廃絶する点、初期須恵器があるいは陶質土器を使用しながら土師器を主体的に用いる点からは、渡来系集団と関係の深い集団の一時的な居住という状況が推測される。ただし韓式系軟質土器がみられない点では渡来系集団の直接の居住とするのは適当ではない。第7章第2節でも示したように、堺市・松原市所在の大和川今池遺跡では炭化物や灰とともに土師器を埋納する土坑(井戸)が調査されている。ここからは勝部遺跡井戸10同様、布留式の甕と韓式系長胴甕の影響を受けたと考えられる甕がセットで埋納され、滑石製白玉、初期須恵器片が共伴する。また包含層からコンパス紋を有する器台破片なども出土しており、類似する様相をみることができる。時期的にはやや遅れる可能性もあるが、短期間の廃絶が推測される点など初期須恵器段階の集落遺構として共通点が多い。地理的にやや離れた地域でこのように類似する様相がみられることは、将来的に当該期の集落の一類型として把握できる可能性を有するものとして評価できる。

古墳時代から古代の様相

布留段階の集落廃絶後、中世段階まで遺構はみられないが、包含層に相当する第2-1層、第1層からは土師器、須恵器、黒色土器などが出土しており、何らかの土地利用が推測される。遺物はそれほど多いものではなく遺構を伴わないことから、耕作域としての土地利用が候補となるが、古代以降においては条里制施行時期の検討が不可欠となろう。この地域における条里水田の施行時期について考古学的な検証は十分ではない。後述する中世集落の段階には現在まで遺存する条里区画が設定されていたと考え

られるため、条里施行時期としては奈良時代、平安時代後期、あるいは鎌倉時代がその候補となる。

中世集落の形成と変遷

古墳時代から中世にかけての土地利用については不明瞭な部分が多いが、12世紀には集落が形成される。集落遺構出土土器についての検討は第7章第1節で行なった。遺構の変遷まで含んだ総括的な検討には至らなかったが、おおむね12世紀後半から13世紀にわたる各段階の遺構により構成されていることが明らかとなった。集落を構成する各遺構は第Ⅰ期では掘立柱建物、水溜、井戸、第Ⅱ期では水溜、溝、第Ⅲ期では井戸、溝、第Ⅳ期では井戸、溝などとなる。時期の明確な掘立柱建物はいずれも第Ⅰ期に属し、第Ⅱ期に属する溝1～3が壁立ち建物となる可能性があるが、それ以降の建物は明確ではない。建物として復元がなしえなかったピットが存在する可能性が高い。井戸については第Ⅰ期から第Ⅳ期までみられるが、第Ⅰ期、第Ⅱ期には水溜もみられ、基本的に井戸に先行する給水施設と考えられる。井戸には素掘りのもの、土器羽釜、曲物を井戸枠に用いるもの、木枠のものがあり、素掘り、木枠のものが後出する。井戸はいずれも人為的に埋め戻されたと考えられ、埋め戻し時に土器の埋納を伴っている。溝については先行する集落遺構と重複するものが多いことから集落を囲郭すると考えられるものは少なく、緑地調査区北辺の溝8にその可能性を認めるのみである。段階的には集落遺構より後出するものが多く、集落の廃絶にかかわるものである可能性は高いが性格は不明である。

調査地周辺は現代まで条里地割が良好に遺存する地域であり、その区画内にいとなまれる集落景観をあきらかにした意義は大きい。悉皆的に資料収集を行なったものではないが、近接地では勝部遺跡第一次調査や原田西遺跡の複数の地点において東西、南北の方向をとる掘立柱建物や溝が検出されている。それぞれ調査面積が小さいこともあり集落総体の検出には至っていないと考えられるが、今回検出したような小規模な集落が条里区画内に散在する景観がみられた可能性が高い。勝部遺跡も含めこれら集落の廃絶時期はその後の村落形態への変化を示す時期として、非常に重要であると考えられる。

土器の検討からは第7章第1節で指摘したように、瓦器碗に地域的な様相が反映している可能性があり、今後、地域型という枠の中での在地的なバリエーションについて検討する際の良好な資料となることが期待される。遺物を通じた遺構の時期比定については残された課題は多い。

集落の廃絶と耕地化

上述のように詳細な年代については不明瞭な部分を残すが、おおむね13世紀末～14世紀には集落は廃絶し、調査地周辺は条里水田として現代にいたるまで利用されたものとおもわれる。この間、堆積物の供給量が少なく、堆積後の再攪拌により各時期の地表面は遺存しない状態で推移する。作土からの出土遺物には近世の遺物が極端に少ないことが指摘され、水田面が重層的に形成された時期は、おおむね中世後期を中心とした時期であったと推測される。

以上、今回の調査成果について要約し、勝部遺跡の変遷を軸に、現時点での評価を加えた。今後周辺地域における事例などとの比較検討や総合評価により地域史の具体相が描かれることを期待し、まとめとしたい。

遺物觀察表 1 ~12

遺構一覽表 1 ~ 4

遺物観察表 (1)

挿図 番号	図版 番号	遺物 番号	遺物名	器種	残存状態	時期	遺構面/層	遺構名	口径	器高	調査次	登録番号
15	32	1	瓦器	椀	完形	12c前半	第1面	建物2ビット9	15.6	5.7	2	361
15		2	瓦器	椀	不良	11c末~12c	第1面	建物3ビット6	(14.6)	(4.4)	2	492
15		3	瓦器	椀	やや良	13c前半	第1面	柱列1ビット2	(13.6)	(4.4)	3	111
15		4	瓦器	椀	やや良	11c末~12c	第1面	ビット5	(14.9)	(4.1)	3	116
15	32	5	瓦器	椀	良	12c前半	第1面	建物3ビット10	15.3	5.9	2	258/473
15		6	瓦器	椀	やや良	13c中頃	第1面	柱列1ビット2	(14.0)	(3.4)	3	111
15		7	瓦器	椀	良(底)	12c	第1面	建物3ビット8	*(4.7)	(3.0)	2	421
15		8	土師器	皿	やや良	13c後半	第1面	柱列1ビット1	(8.0)	(1.4)	3	118
15	32	9	土師器	台付皿	良		第1面	ビット4	(7.6)	2.5	2	236
15		10	瓦質土器	羽釜	良(脚)		第1面	ビット5		(15.9)	3	116
15		11	土師器	鍋	やや良		第1面	建物1ビット7	(26.2)	(9.0)	2	62
15	32	12	須恵器	鉢			第1面	建物1ビット1	(29.6)	(4.8)	2	81
15		13	土師器	鍋	不良		第1面	建物3ビット3	(29.2)	(5.5)	2	460
15		14	土師器	鍋	不良		第1面	建物3ビット1	(31.0)	(3.7)	2	476
15		15	土師器	鍋	不良(口縁)		第1面	ビット4	(35.4)	(10.8)	2	236
16		16	木製品	(別掲)								
16	57	17	鉄製品	(別掲)								
18	34	18	土師器	皿	不良		第1面	水溜1	(8.6)	(1.7)	2	226
18	34	19	土師器	皿	良	11~12c	第1面	水溜1	(9.7)	1.5	2	226
18	34	20	土師器	皿	良	11~12c	第1面	水溜1	9.4	1.7	2	305/355/226
18	34	21	土師器	皿	良	11~12c	第1面	水溜1	9.7	1.7	2	226
18	34	22	瓦器	椀	良	11c後半~12c前半	第1面	水溜1	(15.2)	(5.0)	2	226
18	34	23	瓦器	椀	良	11c後半~12c前半	第1面	水溜1	(15.2)	5.7	2	226
18		24	瓦器	椀	良	11c後半~12c前半	第1面	水溜1	(14.6)	5.6	2	226
18		25	瓦器	椀	やや良	11c後半~12c前半	第1面	水溜1	(15.4)	(5.2)	2	226
18	34	26	瓦器	椀	不良	11c後半~12c前半	第1面	水溜1	(16.0)	(4.1)	2	305
18		27	瓦器	椀	良(高台)	11c後半~12c前半	第1面	水溜1	*5.4	(1.2)	2	226
18		28	瓦器	椀	良(高台)	11c後半~12c前半	第1面	水溜1	*4.8	(1.6)	2	226
18		29	瓦器	椀	良(高台)	11c後半~12c前半	第1面	水溜1	*5.4	(3.1)	2	226
18	34	30	白磁	碗	良	11~12c	第1面	水溜1	(15.4)	6.2	2	226
20	33	31	土師器	皿	完形	12c後半	第1面	水溜2	9.1	1.5	2	47
20	33	32	土師器	皿	完形	12c後半	第1面	水溜2	9.2	1.8	2	47
20	33	33	土師器	皿	良	12c後半	第1面	水溜2	(8.6)	1.9	2	37
20		34	土師器	皿	やや良	12c後半	第1面	水溜2	(10.0)	1.5	2	37
20	33	35	土師器	皿	完形	12c後半	第1面	水溜2	9.4	1.9	2	37
20	33	36	土師器	皿	良	12c後半	第1面	水溜2	9.6	1.8	2	48
20	33	37	土師器	皿	良	12c後半	第1面	水溜2	(9.2)	1.9	2	48
20		38	土師器	皿	やや良	12c後半	第1面	水溜2	(9.3)	1.6	2	48
20	33	39	土師器	皿	完形	12c後半	第1面	水溜2	9.2	1.9	2	37
20	33	40	土師器	皿	完形	12c後半	第1面	水溜2	9.1	1.7	2	47
20	33	41	土師器	皿	やや良	12c後半	第1面	水溜2	(13.6)	2.3	2	48
20	33	42	土師器	皿	良	12c後半	第1面	水溜2	(13.7)	(2.4)	2	48
20		43	土師器	皿	不良	12c後半	第1面	水溜2	(13.7)	2.1	2	37
20	33	44	土師器	皿	完形	12c後半	第1面	水溜2	13.8	2.8	2	47
20	33	45	土師器	皿	やや良	12c後半	第1面	水溜2	(14.6)	2.8	2	47
20	33	46	土師器	皿	やや良	12c後半	第1面	水溜2	(14.6)	2.9	2	47
20	33	47	土師器	皿	良	12c後半	第1面	水溜2	14.8	3.0	2	36/37
20	33	48	瓦器	椀	良	12c中頃~後半	第1面	水溜2	(15.1)	5.5	2	47/48
20	33	49	瓦器	椀	良	12c中頃~後半	第1面	水溜2	15.4	5.6	2	37
20		50	瓦器	椀	不良	12c中頃~後半	第1面	水溜2	(14.7)	(4.5)	2	140
20		51	瓦器	椀	やや良	12c中頃~後半	第1面	水溜2	(14.4)	(4.6)	2	48
20		52	瓦器	椀	不良	12c中頃~後半	第1面	水溜2	(14.6)	(4.5)	2	48
20		53	瓦器	椀	やや良	12c中頃~後半	第1面	水溜2	(15.5)	5.1	2	37
20	33	54	瓦器	椀	良	12c中頃~後半	第1面	水溜2	15.6	5.4	2	48
20		55	瓦器	椀	やや良	12c中頃	第1面	水溜2	(15.7)	5.0	2	37
20		56	瓦器	椀	やや良	12c中頃	第1面	水溜2	(15.9)	4.9	2	48
22		57	瓦器	椀	やや良	12c中頃~後半	第1面	井戸1	(15.2)	5.6	2	318/330
22	36	58	瓦器	椀	やや良	12c中頃~後半	第1面	井戸1	(14.8)	5.6	2	318
22	36	59	瓦器	椀	不良	12c中頃~後半	第1面	井戸1	(15.8)	5.3	2	330
22	36	60	瓦器	椀	完形	12c中頃~後半	第1面	井戸1	15.4	5.7	2	328
22	36	61	瓦器	椀	完形	12c中頃~後半	第1面	井戸1	15.8	5.5	2	329
22	36	62	土師器	皿	不良	12c後半	第1面	井戸1	(8.8)	1.5	2	318
22	36	63	土師器	台付皿	完形(台)	12c	第1面	井戸1	*5.1	(2.0)	2	318
22	36	64	白磁	碗	不良	11~12c	第1面	井戸1	(16.7)	(3.3)	2	318
22	36	65	白磁	碗	不良	11~12c	第1面	井戸1	(17.4)	(3.1)	2	318/330/454
23	57	66	石製品	(別掲)								
23		67	木製品	(別掲)								
25	35	68	土師器	羽釜	良	12c末~13c	第1面	井戸2	31.0	21.7	2	155/352
25	35	69	土師器	羽釜	良	12c末~13c	第1面	井戸2	27.0	(23.5)	2	352
26	35	70	土師器	羽釜	良	12c末~13c	第1面	井戸2	(28.4)	(17.0)	2	141
26	35	71	土師器	鍋	良	12c末~13c	第1面	井戸2	(37.6)	16.0	2	352
26		72	瓦質土器	羽釜	不良(脚)	12c末~13c	第1面	井戸2		(9.3)	2	332
26	35	73	瓦器	椀	完形	13c前半~中頃	第1面	井戸2	14.6	4.2	2	350

遺物観察表 (2)

挿図 番号	図版 番号	遺物 番号	遺物名	器種	残存状態	時期	遺構面/層	遺構名	口径	器高	調査次	登録番号
26	35	74	土師器	皿	良	13c前半	第1面	井戸2	8.9	1.4	2	448
26	35	75	土師器	皿	完形	13c前半	第1面	井戸2	8.7	1.9	2	353
28		76	土師器	皿	不良	13c前半～中頃	第1面	井戸3	(9.0)	1.6	2	206
28	34	77	土師器	皿	完形	13c前半～中頃	第1面	井戸3	8.5	1.1	2	234
28		78	土師器	皿	やや良	13c中頃	第1面	井戸3	(8.4)	1.5	2	234
28	34	79	土師器	皿	やや良	13c中頃	第1面	井戸3	(8.7)	1.1	2	118/206
28	34	80	土師器	皿	完形	13c前半～中頃	第1面	井戸3	8.4	1.6	2	234
28	34	81	瓦器	皿	不良	13c	第1面	井戸3	(8.4)	1.6	2	110
28	34	82	瓦器	椀	完形	13c前半～中頃	第1面	井戸3	14.1	4.6	2	234
28	34	83	瓦器	椀	完形	13c前半～中頃	第1面	井戸3	14.0	4.5	2	234
28	34	84	瓦器	椀	完形	13c前半～中頃	第1面	井戸3	14.5	5.6	2	234
28		85	瓦器	椀	不良	13c前半～中頃	第1面	井戸3	(15.2)	4.5	2	310
28		86	瓦器	椀	良	12c中頃～後半	第1面	井戸3	15.8	4.4	2	110/118/206
29	35	87	土師器	皿	完形	13c後半	第1面	井戸4	8.2	1.5	2	67
29	35	88	土師器	皿	良	13c後半	第1面	井戸4	11.5	2.2	2	327
29	35	89	瓦器	椀	完形	13c後半	第1面	井戸4	12.5	3.4	2	67/119
29	35	90	瓦器	壺	良	13c	第1面	井戸4	2.8	4.6	2	317
29		91	瓦質	羽釜	不良	13c	第1面	井戸4		5.7	2	449
29		92	瓦質	羽釜	やや良	13c	第1面	井戸4	(27.5)	(6.3)	2	67
29	35	93	須恵器	鉢	不良	13c	第1面	井戸4	(18.7)	10.0	2	67/119
30	57	94	石製品	(別掲)								
36	37	95	土師器	皿	やや良	13c前半～中頃	第1面	井戸7	(8.4)	(1.2)	3	168
36	37	96	土師器	皿	完形	13c後半	第1面	井戸7	12.0	2.1	3	163
36		97	土師器	皿	不良	13c後半	第1面	井戸7	(13.3)	(1.9)	3	161
36		98	土師器	皿	やや良	12c後半	第1面	井戸7	(12.6)	(2.8)	3	164
36	37	99	土師器	皿	完形	13c後半	第1面	井戸7	(12.2)	2.3	3	168
36	37	100	土師器	皿	完形	13c後半	第1面	井戸7	13.0	2.2	3	163
36	37	101	瓦器	椀	完形	13c中頃～後半	第1面	井戸7	13.6	3.9	3	163
36	37	102	瓦器	椀	完形	13c後半	第1面	井戸7	13.0	3.6	3	167
36		103	瓦器	椀	やや良	13c後半	第1面	井戸7	(13.0)	(3.3)	3	161
36	37	104	瓦器	椀	完形	13c後半	第1面	井戸7	13.0	3.5	3	167
36	37	105	瓦器	椀	不良	13c前半～中頃	第1面	井戸7	(14.2)	(3.5)	3	167
36	37	106	瓦器	椀	完形	13c中頃～後半	第1面	井戸7	13.4	4.2	3	167
36	37	107	瓦器	椀	やや良	13c中頃～後半	第1面	井戸7	(13.3)	3.3	3	168
36	37	108	瓦質土器	押鉢	良	13c中頃～後半	第1面	井戸7	20.8	7.4	3	167
36		109	瓦質土器	羽釜	不良	13c中頃～後半	第1面	井戸7	(34.0)	(6.2)	3	161
36		110	瓦質土器	羽釜	不良	13c中頃～後半	第1面	井戸7	(27.4)	(8.8)	3	167
37	37	111	瓦質土器	羽釜	良	13c中頃～後半	第1面	井戸7	17.1	(13.8)	3	167
37	37	112	瓦質土器	羽釜	良	13c中頃～後半	第1面	井戸8	17.6	(12.6)	3	169
37		113	瓦質土器	羽釜	良	13c中頃～後半	第1面	井戸9	(17.4)	(14.0)	3	159
37		114	瓦質土器	羽釜	不良	13c中頃～後半	第1面	井戸9	(19.8)	(9.3)	3	119
37		115	瓦器	椀	やや良	13c中頃～後半	第1面	井戸9	14.2	(3.7)	3	185/238
37		116	瓦器	椀	やや良	13c中頃～後半	第1面	井戸9	(13.3)	(3.4)	3	159
37		117	瓦器	椀	やや良	13c中頃～後半	第1面	井戸9	(14.2)	(3.4)	3	159
37		118	白磁	碗	やや良(底)	11～12c	第1面	井戸9	*(6.0)	(4.1)	3	159
37		119	土師器	皿	やや良	13c前半～中頃	第1面	井戸6	(8.2)	1.3	2	285
37		120	土師器	皿	やや良	13c前半～中頃	第1面	井戸6	(8.4)	1.4	2	285
37		121	土師器	皿	不良	13c前半～中頃	第1面	井戸6	(8.8)	1.3	2	494
37		122	土師器	皿	不良	13c前半～中頃	第1面	井戸6	(9.2)	1.3	2	285
37		123	土師器	皿	不良	13c前半～中頃	第1面	井戸6	(14.0)	(2.8)	2	494
37		124	瓦器	椀	不良	12c後半	第1面	井戸6	(15.6)	(3.7)	2	494
39		125	瓦器	椀	やや良	12c中頃	第1面	土坑1	(14.7)	5.6	2	233
39		126	瓦器	椀	不良	12c後半	第1面	土坑1	(15.5)	6.1	2	233
39		127	瓦器	椀	やや良	12c後半	第1面	土坑1	(15.5)	(4.0)	2	233
39		128	瓦器	椀	やや良	12c中頃	第1面	土坑1	(15.2)	(5.4)	2	233
39		129	土師器	鍋	不良(口縁)	12c中頃～後半	第1面	土坑1	(30.3)	(4.8)	2	233
39		130	土師器	鍋	不良	12c中頃～後半	第1面	土坑1	(29.8)	(5.8)	2	233
39	32	131	土師器	鍋	やや良	12c中頃～後半	第1面	土坑1	(30.5)	(11.3)	2	233
42	32	132	土師器	鍋	不良(口縁)	12c中頃～後半	第1面	溝2	(36.3)	(4.7)	2	221
42		133	土師器	皿	やや良	13c前半～中頃	第1面	溝2	(8.8)	1.7	2	221
42	32	134	土師器	皿	良	12～13c	第1面	溝2	9.3	1.7	2	220
42	32	135	土師器	皿	やや良	12～13c	第1面	溝2	(9.8)	3.1	2	221
42		136	瓦器	皿	不良	12～13c	第1面	溝2	(9.9)	1.9	2	484
42		137	瓦器	皿	不良	12～13c	第1面	溝2	(9.9)	1.9	2	220
42		138	瓦器	椀	不良	12c後半	第1面	溝2	(14.4)	(4.8)	2	220
42		139	瓦器	椀	不良	13c後半	第1面	溝2	(15.6)	(4.4)	2	220
42	32	140	瓦器	椀	良	12c前半	第1面	溝2	15.8	5.7	2	506/481
42		141	瓦器	椀	不良	12c前半	第1面	溝2	(14.4)	(4.7)	2	221
42		142	瓦器	椀	良(高台)	12c前半	第1面	溝2	*5.4	(1.1)	2	221
42		143	土師器	台付皿	良(高台)	12～13c	第1面	溝4/溝6	*3.8	(1.95)	3	265
42		144	土師器	台付皿	良(高台)	12～13c	第1面	溝2	*3.9	1.7	2	221
42	32	145	白磁	碗	不良(底)	12c	第1面	溝2	(17.3)	(3.8)	2	221
42		146	白磁	碗	不良(底)	11～12c	第1面	溝2	*(5.6)	(3.5)	2	220

遺物観察表 (3)

挿入 番号	図版 番号	遺物 番号	遺物名	器種	残存状態	時期	遺構面/層	遺構名	口径	器高	調査次	登録番号
45		147	土師器	皿	やや良	13c前半～中頃	第1面	溝10	(8.4)	1.4	2	27
45		148	土師器	皿	やや良	13c前半～中頃	第1面	溝10	(8.2)	1.2	2	75
45		149	瓦器	皿	不良	13c	第1面	溝10	(9.0)	2.1	2	27
45		150	瓦器	椀	不良	12～13c	第1面	溝10	(13.8)	(3.8)	2	75
45		151	瓦器	椀	不良	13c前半	第1面	溝10	(14.3)	4.4	2	75
45	40	152	瓦器	椀	完形	13c末頃	第1面	溝10	12.1	3.4	2	27
45	38	153	須恵器	鉢	不良(口縁)	13c	第1面	溝10	(26.0)	(6.8)	2	203
45	38	154	瓦質土器	鉢	不良(口縁)	13c	第1面	溝10	(23.7)	(5.1)	2	27
45	38	155	瓦質土器	羽釜	不良(口縁)	13c	第1面	溝10	(14.7)	(5.4)	2	27
45	38	156	瓦質土器	羽釜	不良(口縁)	13c	第1面	溝10	(17.6)	(4.6)	2	27
45		157	土師器	羽釜	不良(口縁)	13c	第1面	溝10	(31.0)	(6.4)	2	27
45	38	158	土師器	羽釜	不良(口縁)	13c	第1面	溝10	(32.0)	(7.6)	2	27
45	38	159	土師器	鍋	不良(口縁)	13c	第1面	溝10	(38.4)	(7.0)	2	27
45		160	土師器	鍋	不良(口縁)	13c	第1面	溝10	(36.6)	(8.2)	2	27
46	39	161	土師器	皿	完形	13c前半～中頃	第1面	溝11	8.0	1.5	2	154
46	39	162	土師器	皿	完形	13c前半～中頃	第1面	溝11	8.4	1.5	2	377
46	39	163	土師器	皿	完形	13c前半～中頃	第1面	溝11	8.4	1.2	2	154
46	39	164	土師器	皿	やや良	13c前半～中頃	第1面	溝11	(8.7)	1.3	2	35
46	39	165	土師器	皿	不良	13c前半～中頃	第1面	溝11	(8.8)	1.3	2	154
46	39	166	土師器	皿	完形	13c前半～中頃	第1面	溝11	8.2	1.5	2	154
46	39	167	土師器	皿	やや良	13c前半～中頃	第1面	溝11	(8.3)	1.6	2	154
46		168	土師器	皿	不良	13c前半～中頃	第1面	溝11	(8.4)	1.4	2	154
46	39	169	土師器	皿	完形	13c前半～中頃	第1面	溝11	8.8	1.3	2	76
46		170	土師器	皿	不良	13c前半～中頃	第1面	溝11	(8.9)	1.5	2	154
46	39	171	土師器	皿	完形	13c前半～中頃	第1面	溝11	8.2	1.5	2	154
46	39	172	土師器	皿	良	13c前半～中頃	第1面	溝11	(8.4)	1.5	2	205
46	39	173	土師器	皿	良	13c前半～中頃	第1面	溝11	(8.6)	1.3	2	154
46	39	174	土師器	皿	良	13c前半～中頃	第1面	溝11	(8.8)	1.3	2	154
46	39	175	土師器	皿	完形	13c前半～中頃	第1面	溝11	8.2	1.8	2	154
46	39	176	土師器	皿	完形	13c前半～中頃	第1面	溝11	8.2	1.7	2	154
46	39	177	土師器	皿	やや良	12～13c	第1面	溝11	(8.7)	1.5	2	35
46		178	土師器	皿	不良	13c前半～中頃	第1面	溝11	(8.7)	1.3	2	128
46		179	土師器	皿	不良	13c前半～中頃	第1面	溝11	(12.2)	2.1	2	154
46	40	180	土師器	皿	完形	13c後半	第1面	溝11	12.2	2.5	2	154
46	40	181	土師器	皿	やや良	13c前半～中頃	第1面	溝11	(14.1)	2.2	2	154
46	39	182	瓦器	皿	良		第1面	溝11	9.1	1.9	2	128
46	39	183	瓦器	皿	完形	13c前半	第1面	溝11	(8.8)	1.9	2	76
46		184	瓦器	椀	不良	12～13c	第1面	溝11	(14.2)	(3.5)	2	154
46		185	瓦器	椀	やや良	12～13c	第1面	溝11	(13.8)	4.3	2	154
46	40	186	瓦器	椀	良	12～13c	第1面	溝11	14.3	4.3	2	154
46		187	瓦器	椀		12～13c	第1面	溝11	14.6	4.3	2	35
46		188	瓦器	椀	やや良	13c前半	第1面	溝11	(14.4)	4.1	2	154
46	40	189	瓦器	椀	やや良	13c前半	第1面	溝11	14.7	4.5	2	154
46		190	瓦器	椀	不良	13c前半	第1面	溝11	14.4	(4.0)	2	76
46		191	瓦器	椀	不良	13c前半	第1面	溝11	(13.2)	(3.9)	2	154
46	41	192	須恵器	甕	不良(口縁)	12～13c	第1面	溝11	(32.6)	(6.2)	2	377
47		193	瓦質土器	羽釜	不良	12～13c	第1面	溝11	(17.6)	(5.5)	2	76
47		194	瓦質土器	羽釜	不良	12～13c	第1面	溝11	(21.4)	(6.7)	2	128
47		195	土師器	羽釜	不良	12～13c	第1面	溝11	(28.0)	(6.5)	2	128
47		196	瓦質土器	羽釜	良(脚)	12～13c	第1面	溝11		(3.9)	2	205
47		197	瓦質土器	羽釜	やや良(脚)	12～13c	第1面	溝15		(16.9)	2	213
47		198	土師器	皿	良		第1面	溝11	13.9	2.6	2	196
47		199	土師器	皿	やや良	13c	第1面	溝15	(13.1)	2.5	2	213
47	40	200	土師器	皿	良	13c	第1面	溝15	(13.8)	2.0	2	213
47		201	土師器	皿	不良	13c	第1面	溝13	(14.2)	2.1	2	53
47	40	202	土師器	皿	良	12c	第1面	溝12	(9.8)	1.7	2	61
47		203	土師器	皿	不良	11c後半	第1面	溝9	(9.4)	1.6	2	303
47	39	204	土師器	皿	良	12c前半	第1面	溝9	(9.0)	1.4	2	303
47	40	205	土師器	皿	良	12c後半	第1面	溝12	(8.5)	1.8	2	54
47	40	206	土師器	皿	完形	12c前半	第1面	溝12	9.6	2.0	2	61
47	40	207	土師器	皿	良	12c後半	第1面	溝12	9.6	1.7	2	54
47	40	208	土師器	皿	完形	12～13c	第1面	溝15	8.4	1.6	2	213
47		209	瓦器	皿	不良	12～13c	第1面	溝15	(7.8)	2.0	2	213
47	40	210	瓦器	皿	完形	12～13c	第1面	溝15	8.7	2.2	2	213
47	34	211	瓦器	皿	完形		第1面	溝11	8.4	1.7	2	92
47	40	212	瓦器	椀	良	12c中頃	第1面	溝12	15.4	5.8	2	54
47		213	弥生土器	有孔鉢(甕)	良(底)	弥生後期	第1面	溝12	*(2.2)	(5.5)	2	61
47	57	214	石製品	(別掲)								
47	57	215	鉄製品	(別掲)								
48		216	瓦器	椀	不良	12～13c	第1面	溝10/溝11	(15.1)	(4.1)	3	123
48		217	瓦器	椀	不良	12～13c	第1面	溝16	(13.0)	(4.1)	3	110
48		218	瓦器	椀	不良	12～13c	第1面	溝10/溝11	(13.0)	(2.9)	3	123
48		219	瓦器	椀	不良	13c	第1面	溝10/溝11	(13.4)	(3.7)	3	45/123

遺物観察表 (4)

挿入 番号	図版 番号	遺物 番号	遺物名	器種	残存状態	時期	遺構面/層	遺構名	口径	器高	調査次	登録番号
48		220	瓦器	椀	不良	13c	第1面	溝10/溝11	(14.1)	(3.0)	3	123
48	41	221	青磁	椀	不良(口縁)	13c	第1面	溝10/溝11	(15.8)	(3.4)	3	45
48	41	222	青磁	椀	不良(口縁)	13c	第1面	溝10/溝11	(14.3)	(3.1)	3	123
48	41	223	白磁	碗	不良(底)	12~13c	第1面	溝10/溝11	*(7.0)	(2.5)	3	123
48	41	224	須恵器	甕	不良(口縁)	12~13c	第1面	溝10/溝11	(20.9)	(8.6)	3	123
48		225	須恵器	押鉢	不良(口縁)	12~13c	第1面	溝10/溝11	(33.6)	(4.4)	3	123
48	41	226	土師器	羽釜	不良(口縁)	12~13c	第1面	溝10/溝11	(27.5)	(7.5)	3	123
48	41	227	瓦質土器	羽釜	不良(口縁)	12~13c	第1面	溝10/溝11	(32.0)	(10.0)	3	123
48		228	瓦質土器	羽釜	不良	12~13c	第1面	溝16	(29.6)	(8.8)	3	110
50		229	土師器	皿	やや良	13c前半~中頃	第1面	土坑2	8.0	1.5	3	61
50		230	土師器	皿	不良	13c前半~中頃	第1面	土坑2	(8.8)	1.1	3	61
50		231	瓦器	椀	不良	12~13c	第1面	土坑2	14.6	(3.8)	3	86
50		232	瓦質土器	羽釜	やや良	12~13c	第1面	土坑2	(20.2)	(13.0)	3	79
50		233	土師器	羽釜	不良	12~13c	第1面	土坑2	(34.7)	(11.9)	3	79
50		234	土師器	皿	不良	13c	第1面	土坑4	(9.5)	(1.1)	2	237
50		235	土師器	皿	不良	12c中頃	第1面	土坑4	(13.2)	(2.0)	2	237
50		236	土師器	皿	不良	11c後半	第1面	土坑4	(9.8)	(1.8)	2	237
50		237	黒色土器	椀	良(高台)		第1面	土坑4	*(5.9)	(1.3)	2	237
50		238	瓦器	椀	やや良	12c前半	第1面	土坑4	(14.9)	5.3	2	237
50		239	土師器	皿	完形	13c前半~後半	第1面	落込1	8.2	1.6	3	69
50		240	土師器	皿	不良		第1面	土坑6	(16.7)	(2.2)	2	495
50		241	土師器	皿	やや良		第1面	土坑5	13.4	2.2	2	418
50	34	242	土師器	皿	良	12c前半	第1面	土坑3	15.1	2.6	3	121
50		243	瓦器	椀	やや良	13c前半	第1面	溝21	(15.4)	(4.1)	3	82
50		244	白磁	碗	やや良(高台)	12~13c	第1面	落込1	*6.0	(4.0)	3	71
50		245	石製品	(別掲)								
50	45	246	土師器	把手	完形		第1面	落込1	*8.7	(5.5)	3	69
54	42	247	土師器	甕	良	古墳前期	第1面	井戸10	15.1	24.9	3	182
54	42	248	土師器	甕	完形	古墳前期	第1面	井戸10	13.2	24.6	3	181
56	44	249	土師器	甕	やや良(口縁)	古墳前期	第1面	井戸11	(12.4)	(8.9)	2	363/401
56		250	土師器	甕	やや良	古墳前期	第1面	井戸11	(17.4)	(12.2)	2	276/401
56		251	土師器	鉢	良	古墳前期	第1面	井戸11	10.8	(5.0)	2	276/363
56		252	土師器	小型丸底壺	やや良	古墳前期	第1面	井戸11	(7.7)	5.2	2	276
56		253	土師器	小型丸底壺	やや良(体)	古墳前期	第1面	井戸11		(4.2)	2	276
56		254	土師器	甕	良(口縁)	古墳前期	第1面	土坑9	(14.1)	(4.7)	2	283
56		255	土師器	甕	やや良好	古墳前期	第1面	土坑9		(14.0)	2	462
56		256	土師器	甕	不良(口縁)	古墳前期	第1面	土坑9	(19.8)	(4.5)	2	283
56		257	土師器	鉢	やや良好	古墳前期	第1面	土坑9	(10.2)	4.6	2	283
56		258	土師器	小型丸底壺	やや良好	古墳前期	第1面	土坑9		(5.8)	2	450
56		259	土師器	小型丸底壺	不良	古墳前期	第1面	土坑9		(4.5)	2	283
56	44	260	土師器	丸底壺	やや良好	古墳前期	第1面	井戸12		(9.4)	3	142
56	59	261	木製品	(別掲)				土坑8				
56	57	262	石製品	(別掲)				土坑8				
56	57	263	石製品	(別掲)				土坑8				
56	57	264	石製品	(別掲)				土坑8				
56	57	265	石製品	(別掲)				土坑8				
56	57	266	石製品	(別掲)				土坑8				
56	57	267	石製品	(別掲)				土坑8				
56	57	268	石製品	(別掲)				土坑8				
61	42	269	土師器	広口壺	良	古墳前期	第1面	土坑10		(30.2)	2	208
61		270	土師器	高坏	やや良(脚柱)	古墳前期	第1面	土坑10		(7.0)	2	208
61		271	土師器	高坏	良(脚)	古墳前期	第1面	土坑10	*10.2	(6.2)	2	208
61		272	土師器	二重口縁壺	やや良	古墳前期	第1面	溝25			1	88
61	45	273	土師器	二重口縁壺	やや良	古墳前期	第1面	溝25	(31.4)	(6.2)	1	50
61	45	274	土師器	小型丸底壺	不良	古墳前期	第1面	溝25	(8.8)	(5.1)	1	50
61	45	275	土師器	小型器台	不良	古墳前期	第1面	溝25		(3.3)	1	50
64	44	276	土師器	甕	良	古墳前期	第1面	土坑13			3	282
64		277	土師器	小型丸底壺	良	古墳前期	第1面	土坑13	(8.0)	8.3	3	267
64		278	土師器	甕	やや良	古墳前期	第1面	土坑13	(15.6)	(7.5)	3	282
64		279	土師器	鉢	不良	古墳前期	第1面	土坑14	(35.8)	(4.9)	1	53
64		280	土師器	高坏	やや良	古墳前期	第1面	土坑15	16.0	(11.3)	2	326
64		281	土師器	壺	完形(底)	古墳前期	第1面	土坑15	*(3.5)	(3.3)	2	326
64		282	土師器	壺	不良(体)	古墳前期	第1面	土坑15	*6.0	(17.6)	2	326/57/79
64		283	土師器	二重口縁壺	不良	古墳前期	第1面	土坑12	(18.0)	(5.9)	3	270
64		284	土師器	小型丸底壺	良	古墳前期	第1面	土坑14	(7.0)	7.3	3	271
64		285	土師器	壺	良(体)	古墳前期	第1面	土坑14		(7.5)	3	271
65		286	土師器	甕	不良	古墳前期	第1面	溝37			1	210
65		287	土師器	高坏	良(脚)	古墳前期	第1面	土坑16			2	261
65		288	土師器	高坏	良(脚)	古墳前期	第1面	土坑18	*10.8	(4.1)	1	119
65	44	289	土師器	壺	やや良	古墳前期	第1面	土坑17			1	160
67	43	290	弥生土器	二重口縁壺	良(口縁)	弥生後~古墳初	第1面	土坑19	16.9	(6.2)	2	474
67	43	291	弥生土器	二重口縁壺	良	弥生後~古墳初	第1面	土坑19	(16.8)	29.3	2	376
67		292	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後~古墳初	第1面	土坑19	*3.4	(9.0)	2	376/474

遺物観察表 (5)

挿図 番号	図版 番号	遺物 番号	遺物名	器種	残存状態	時期	遺構面/層	遺構名	口径	器高	調査次	登録番号
67		293	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	土坑19	*2.4	(7.1)	2	376
67		294	弥生土器	鉢(甕)	やや良	弥生後～古墳初	第1面	土坑19	(22.9)	(7.2)	2	376
67		295	弥生土器	鉢	やや良	弥生後～古墳初	第1面	土坑19	(23.6)	(8.5)	2	376
67		296	弥生土器	甕	不良	弥生後～古墳初	第1面	土坑19	(14.6)	(4.7)	2	376
67	44	297	弥生土器	甕	やや良	弥生後～古墳初	第1面	土坑19	13.2	(8.4)	2	376
67		298	弥生土器	甕	完形(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	土坑19	17.9	(6.8)	2	376
67		299	弥生土器	甕	やや良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	土坑19	(15.2)	(2.8)	2	376
67		300	弥生土器	甕	やや良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	土坑19	(17.0)	(2.4)	2	376
67		301	弥生土器	甕	完形(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	土坑19	17.0	(2.4)	2	376
67		302	弥生土器	甕	不良	弥生後～古墳初	第1面	土坑19	(13.4)	(6.6)	2	376
67		303	弥生土器	甕(鉢)	やや良(底)	弥生後～古墳初	第1面	土坑19	*3.4	(7.1)	2	474
67		304	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	土坑19	*5.1	(7.0)	2	376
68	43	305	弥生土器	器台	やや良	弥生後～古墳初	第1面	土坑19	(26.4)	(15.1)	2	376
68		306	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	土坑19	*4.8	(4.6)	2	376
68		307	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	土坑19	*4.0	(3.4)	2	474
68		308	弥生土器	鉢(甕)	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	土坑19	*3.1	(2.0)	2	376
68		309	弥生土器	鉢(甕)	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	土坑19	*2.0	(5.2)	2	376
68		310	弥生土器	鉢(甕)	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	土坑19	*2.9	(4.5)	2	376
68		311	弥生土器	鉢(甕)	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	土坑19	*4.0	(3.0)	2	474
68	43	312	弥生土器	高坏	完形(脚)	弥生後～古墳初	第1面	土坑19	*11.6	(8.2)	2	376
68	43	313	弥生土器	高坏	良(脚)	弥生後～古墳初	第1面	土坑19	*(15.8)	(8.8)	2	474
68		314	弥生土器	高坏	良(脚)	弥生後～古墳初	第1面	土坑19		(8.4)	2	376
68		315	弥生土器	高坏	良(脚)	弥生後～古墳初	第1面	土坑19		(7.7)	2	376
72		316	弥生土器	甕	良	弥生後～古墳初	第1面	溝26	(15.4)	29.3	2	230/231
72		317	弥生土器	甕	不良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	(14.2)	(8.4)	2	181
72		318	弥生土器	甕	不良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	(15.0)	(5.9)	2	181
72		319	弥生土器	甕	不良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	(13.9)	(6.9)	2	180
72		320	弥生土器	甕	不良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	(15.1)	(4.6)	2	162
72		321	弥生土器	甕	やや良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	(17.3)	(3.4)	2	45
72		322	弥生土器	甕	不良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	(14.0)	(3.3)	2	164
72		323	弥生土器	甕	不良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	(13.6)	(10.9)	2	77
72		324	弥生土器	甕	やや良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	(15.1)	(6.7)	2	189
72		325	弥生土器	甕	良	弥生後～古墳初	第1面	溝26	*(4.6)	(18.9)	2	166
72		326	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	*4.2	(2.0)	2	45
72		327	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	*2.3	(2.9)	2	189
72		328	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	*(4.9)	(3.2)	2	45
72		329	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	*4.0	(5.7)	2	77/181
72		330	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	*5.0	(5.2)	2	132
72		331	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	*2.6	(12.4)	2	188
72		332	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	*4.8	(7.7)	2	181
73	46	333	弥生土器	広口壺	良	弥生後～古墳初	第1面	溝26	(16.9)	24.7	2	165
73	46	334	弥生土器	広口壺	良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	(18.6)	(9.5)	2	180
73		335	弥生土器	広口壺	やや良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	(15.2)	(11.2)	2	136
73		336	弥生土器	広口壺	やや良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	(18.9)	(9.3)	2	231
73		337	弥生土器	壺	不良	弥生後～古墳初	第1面	溝26		(6.3)	2	162/166
73	46	338	弥生土器	広口壺	良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	14.6	(6.1)	2	138
73		339	弥生土器	広口壺	不良	弥生後～古墳初	第1面	溝26	(17.9)	(3.6)	2	180
73		340	弥生土器	広口壺	やや良	弥生後～古墳初	第1面	溝26	(15.9)	(4.9)	2	163
73		341	弥生土器	広口壺	やや良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	(16.5)	(5.2)	2	180
73		342	弥生土器	広口壺	やや良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	(20.0)	(6.7)	2	180
73	46	343	弥生土器	二重口縁壺	やや良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	(22.8)	(8.6)	2	165/180
73		344	弥生土器	壺	不良	弥生後～古墳初	第1面	溝26		(6.3)	2	180
73		345	弥生土器	壺	不良	弥生後～古墳初	第1面	溝26		(7.2)	2	36
74		346	弥生土器	二重口縁壺	不良	弥生後～古墳初	第1面	溝26	(27.8)	(3.5)	2	36
74		347	弥生土器	高坏	良	弥生後～古墳初	第1面	溝26	*(18.2)	(18.8)	2	36/45/180
74	46	348	弥生土器	高坏	良	弥生後～古墳初	第1面	溝26	(13.6)	10.2	2	134
74		349	弥生土器	高坏	やや良(脚)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	*(16.6)	(9.7)	2	165
74	46	350	弥生土器	直口壺	完形	弥生後～古墳初	第1面	溝26	7.7	12.3	2	180
74	46	351	弥生土器	脚付き壺	良	弥生後～古墳初	第1面	溝26	*(17.0)	(19.7)	2	139
74	47	352	弥生土器	長頸壺	完形(口頸)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	6.4	(17.7)	2	137
74		353	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	*3.2	(4.0)	2	36
74		354	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	*2.0	(5.2)	2	164
74		355	弥生土器	鉢	やや良	弥生後～古墳初	第1面	溝26	(20.6)	10.3	2	129
74		356	弥生土器	壺(甕)	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	*5.1	(5.7)	2	164
74		357	弥生土器	壺(甕)	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	*3.6	(3.0)	2	181
74		358	弥生土器	甕(壺)	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	*4.5	(2.3)	2	45
74		359	弥生土器	壺(甕)	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	*3.3	(3.1)	2	181
74		360	弥生土器	甕(壺)	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	*5.0	(3.0)	2	36
74		361	弥生土器	鉢(甕)	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	*(3.1)	(1.8)	2	45
74		362	弥生土器	壺(甕)	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	*(4.4)	(4.0)	2	36
74		363	弥生土器	甕(壺)	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	*(4.1)	(3.3)	2	162
74		364	弥生土器	壺(甕)	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	*4.0	(3.7)	2	162
74		365	弥生土器	壺(甕)	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝26	*4.0	(4.9)	2	180

遺物観察表 (6)

挿入 番号	図版 番号	遺物 番号	遺物名	器種	残存状態	時期	遺構面/層	遺構名	口径	器高	調査次	登録番号
76	48	366	弥生土器	二重口縁壺	不良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	(17.6)	(6.8)	2	378
76		367	弥生土器	広口壺	やや良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	(15.3)	(6.4)	2	239
76		368	弥生土器	二重口縁壺	不良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	(14.2)	(3.7)	2	239
76		369	弥生土器	二重口縁壺	やや良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	(12.9)	(3.0)	3	174
76		370	弥生土器	壺	不良	弥生後～古墳初	第1面	溝28		(2.9)	2	218
76	47	371	弥生土器	広口壺	良(体)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*2.9	(12.7)	3	259
76		372	弥生土器	広口壺	不良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝33	(16.0)	(11.8)	1	111
76	47	373	弥生土器	広口壺	完形(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	16.0	(9.0)	3	176
76	48	374	弥生土器	広口壺	不良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	(17.4)	(5.7)	1	60
76		375	弥生土器	壺	やや良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝28		(6.4)	1	70
76		376	弥生土器	甕	不良	弥生後～古墳初	第1面	溝28	(13.9)	(7.2)	2	437
76		377	弥生土器	甕	良	弥生後～古墳初	第1面	溝28	(12.9)	12.8	3	179
76		378	弥生土器	甕	やや良	弥生後～古墳初	第1面	溝28	(15.1)	(11.2)	2	437
77		379	弥生土器	高坏	やや良(坏)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	(21.5)	(6.8)	2	437
77		380	弥生土器	高坏	やや良(脚柱)	弥生後～古墳初	第1面	溝28		(7.7)	2	437
77	47	381	弥生土器	高坏	完形	弥生後～古墳初	第1面	溝28	19.8	14.1	2	238
77		382	弥生土器	高坏	完形(脚)	弥生後～古墳初	第1面	溝35	*13.4	(10.0)	1	114
77		383	弥生土器	高坏	不良(脚)	弥生後～古墳初	第1面	溝28		(5.7)	2	218
77	48	384	土製品	有孔円盤	完形	弥生後～古墳初	第1面	溝28	4.1	0.8	3	269
77		385	弥生土器	鉢	やや良	弥生後～古墳初	第1面	溝28		(7.0)	2	218
77		386	弥生土器	鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.2	(7.3)	2	218
77		387	弥生土器	壺	やや良(体)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.3	(7.5)	3	173
77		388	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	(13.6)	8.4	1	70
77	48	389	弥生土器	有孔鉢	やや良(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.4	(2.9)	3	173
77		390	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.2	(2.6)	3	173
77	48	391	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*1.8	(3.7)	3	173
77	48	392	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.6	(2.2)	3	173
77	48	393	弥生土器	有孔鉢	完形	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*2.6	(4.0)	3	176
77		394	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.1	(1.7)	3	85
77		395	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.8	(2.1)	2	213
77	48	396	弥生土器	有孔鉢	完形	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.8	(4.7)	3	176
77	48	397	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.2	(4.4)	3	173
77		398	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.4	(4.7)	3	85
77		399	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.6	(3.0)	3	78
77		400	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.4	(4.0)	1	60
78		401	弥生土器	有孔甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.5	(9.9)	1	70
78		402	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.8	(5.6)	3	176
78		403	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.9	(2.0)	3	60
78	48	404	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.2	(5.8)	3	101
78		405	弥生土器	有孔甕	やや良(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*(4.9)	(5.2)	3	101
78		406	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*5.4	(5.3)	3	179
78		407	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*5.0	(4.7)	3	78
78		408	弥生土器	壺(甕)	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*5.2	(3.8)	3	172
78		409	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.8	(3.8)	1	70
78		410	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.7	3.4	3	179
78		411	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.9	(2.9)	3	59
78		412	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.6	(4.1)	3	66
78		413	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.3	(3.1)	3	59
78		414	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*5.8	(3.0)	3	172
78		415	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*2.7	(11.9)	3	175
78		416	弥生土器	甕	不良	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.8	(9.6)	3	8
78		417	弥生土器	甕	底(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.6	(4.7)	2	378
78		418	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*5.0	(5.0)	3	60
78		419	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝33	*4.8	(4.4)	1	111
79		420	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.2	(8.8)	3	66
79		421	弥生土器	鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝33	*4.9	(8.8)	1	132
79		422	弥生土器	鉢	やや良	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.0	(7.0)	1	70
79		423	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*5.1	(6.4)	3	78
79		424	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝33	*5.1	(6.0)	1	107
79		425	弥生土器	壺(甕)	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.1	(4.5)	2	378/437
79		426	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.9	(5.4)	1	138
79		427	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.5	(2.3)	2	378
79		428	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*(5.0)	(3.4)	3	172
79		429	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.6	(3.2)	3	101
79		430	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.6	(2.8)	3	59
79		431	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.4	(4.2)	3	66
79		432	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.2	(3.5)	3	60
79		433	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.2	(2.4)	2	437
79		434	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.9	(3.4)	3	101
79		435	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.3	(3.0)	3	60
79		436	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.7	(2.0)	3	101
79		437	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.6	(2.4)	3	59
79		438	弥生土器	壺(甕)	不良(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*(4.0)	(2.3)	3	174

遺物観察表 (7)

挿岡 番号	図版 番号	遺物 番号	遺物名	器種	残存状態	時期	遺構面/層	遺構名	口径	器高	調査次	登録番号
79		439	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*5.6	(3.3)	3	66
79		440	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝33	*4.8	(2.6)	1	111
79		441	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.7	(2.2)	3	60
79		442	弥生土器	壺(甕)	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*5.6	(2.7)	1	54
79		443	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*5.9	(3.2)	3	59
79		444	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*5.2	(2.3)	3	101
79		445	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*5.2	(2.4)	3	101
79		446	弥生土器	壺(甕)	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.7	(2.3)	3	59
79		447	弥生土器	甕	やや良(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	(4.2)	(3.0)	2	437
79		448	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.1	(2.9)	3	59
79		449	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.8	(3.5)	2	378
79		450	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.3	(5.3)	2	218
79		451	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.8	(2.3)	3	101
79		452	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.2	(5.2)	3	101
79		453	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*5.3	(3.0)	3	59
79		454	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*5.7	(1.5)	3	60
79		455	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.6	(6.8)	3	179
79		456	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*5.3	(5.2)	3	66
79		457	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.2	(4.4)	3	85
79		458	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.4	(5.8)	2	378
80		459	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.3	(2.8)	3	59
80		460	弥生土器	壺(甕)	良(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*5.0	(3.3)	3	9
80		461	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.0	(3.7)	3	101
80		462	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.0	(3.1)	3	172
80		463	弥生土器	甕(壺)	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*2.8	(3.6)	2	218
80		464	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.0	2.9	3	179
80		465	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.6	(3.3)	3	78
80		466	弥生土器	甕	やや良(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.8	(2.5)	3	59
80		467	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*(5.5)	(3.1)	2	239
80		468	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.1	(3.4)	2	217
80		469	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.6	(3.1)	3	101
80		470	弥生土器	壺(甕)	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*2.2	(4.2)	2	217
80		471	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*2.7	(3.3)	3	66
80		472	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*2.0	(4.9)	3	179
80		473	弥生土器	鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*2.1	(4.1)	3	101
80		474	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*(2.3)	(4.2)	3	179
80		475	弥生土器	鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*2.7	(2.1)	3	9
80		476	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝33	*7.0	(2.3)	1	111
80		477	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.6	(4.1)	1	70
80		478	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.2	(3.7)	3	78
80		479	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*(2.3)	(2.5)	3	174
80		480	弥生土器	鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*2.9	(2.2)	1	70
80		481	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*2.3	(2.7)	3	101
80		482	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*2.3	(2.4)	3	179
80		483	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.1	(4.4)	3	66
80		484	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.6	(3.3)	3	174
80		485	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.2	(3.5)	3	85
80		486	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*2.4	(3.8)	1	60
80		487	弥生土器	鉢(甕)	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*2.7	(2.5)	3	172
80		488	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*(4.8)	(3.3)	3	8
80		489	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.0	(6.5)	3	85
80		490	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*5.0	(2.6)	3	101
80		491	弥生土器	壺(甕)	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*5.0	(2.2)	2	239
80		492	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*5.8	(2.9)	3	59
80		493	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.1	(2.9)	3	179
80		494	弥生土器	壺(甕)	良(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*5.9	(3.1)	2	437
80		495	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*2.7	(6.4)	3	174
80		496	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝33	*6.3	(3.5)	1	107
80		497	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.6	(3.5)	3	66
80		498	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.3	(4.1)	1	70
80		499	弥生土器	鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*3.6	(3.7)	1	80
80		500	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝28	*4.2	(3.8)	3	59
82		501	弥生土器	高坏	不良(坏)	弥生後～古墳初	第1面	溝30	(21.7)	(5.8)	3	171
82		502	弥生土器	高坏	良	弥生後～古墳初	第1面	溝30	(14.6)	(10.1)	3	171
82		503	弥生土器	鉢	良	弥生後～古墳初	第1面	溝30	(16.8)	(8.9)	3	171
82		504	弥生土器	鉢	やや良	弥生後～古墳初	第1面	溝30	(9.1)	(7.5)	3	171
82		505	弥生土器	有孔鉢(甕)	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝30	*4.0	4.6	3	58
82		506	弥生土器	広口壺	不良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	土坑20	(13.2)	(3.6)	3	209
82	48	507	弥生土器	二重口縁壺	良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	土坑20	(18.8)	(8.0)	3	97/209
82		508	弥生土器	高坏	完形(脚)	弥生後～古墳初	第1面	土坑20	*(13.5)	(8.6)	3	102
82		509	弥生土器	壺(鉢)	良	弥生後～古墳初	第1面	土坑20	*2.3	(4.0)	3	102
82		510	弥生土器	甕	良	弥生後～古墳初	第1面	溝31	*2.0	(4.4)	1	62
82		511	弥生土器	広口壺	やや良(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	溝32	(14.8)	(4.3)	1	92

遺物観察表 (8)

挿入番号	図版番号	遺物番号	遺物名	器種	残存状態	時期	遺構面/層	遺構名	口径	器高	調査次	登録番号
82		512	弥生土器	鉢	良(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝32	*7.0	(3.2)	1	137
82		513	弥生土器	有孔甕	良(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝32	*3.4	(8.1)	1	137
82		514	弥生土器	鉢	やや良	弥生後～古墳初	第1面	土坑21	(23.2)	(11.0)	2	379
82		515	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	土坑22	*3.8	(2.8)	3	197
82		516	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	土坑24	*2.0	(3.6)	3	53
82		517	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝31	*3.4	(3.1)	3	263
82		518	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	土坑23	*3.0	(6.7)	3	55
82		519	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝31	*3.6	(2.4)	3	281
82		520	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝31	*4.8	(3.2)	3	281
82		521	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後～古墳初	第1面	溝31	*(5.8)	(5.9)	3	281
83	58	522	石製品	(別掲)								
83	58	523	石製品	(別掲)								
83	58	524	石製品	(別掲)								
85	49	525	弥生土器	甕	やや良	弥生後～古墳初	第1面	土坑25		(19.4)	1	214
85		526	弥生土器	甕	やや良(底)	弥生後～古墳初	第1面	土坑25	*4.2	(20.2)	1	185
85		527	弥生土器	甕	良(底)	弥生後～古墳初	第1面	土坑25	*4.4	(21.8)	1	185
85		528	弥生土器	甕	良	弥生後～古墳初	第1面	土坑25	(14.4)	(22.1)	1	214
85		529	弥生土器	甕	やや良	弥生後～古墳初	第1面	土坑25	*3.8	(22.0)	1	214
85	49	530	弥生土器	鉢	完形	弥生後～古墳初	第1面	土坑25	11.2	7.2	1	214
86	49	531	弥生土器	高坏	やや良	弥生後～古墳初	第1面	土坑25	(17.1)	11.6	1	214
86	49	532	弥生土器	高坏	良	弥生後～古墳初	第1面	土坑25	22.0	(12.7)	1	185/214
86	49	533	弥生土器	甕	良	弥生後～古墳初	第1面	溝40	14.2	18.8	1	198
86	49	534	弥生土器	壺	やや良	弥生後～古墳初	第1面	溝40	10.6	12.1	1	200
86		535	弥生土器	壺	完形(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	土坑26	14.1	(5.0)	1	148
86		536	弥生土器	鉢	やや良	弥生後～古墳初	第1面	落込2	(13.2)	7.4	1	194
86		537	弥生土器	甕	完形(口縁)	弥生後～古墳初	第1面	落込2	(17.0)	(3.6)	1	202
86		538	弥生土器	直口壺	良	弥生後～古墳初	第1面	落込2			1	194
86		539	弥生土器	高坏	やや良	弥生後～古墳初	第1面	落込2	(21.8)	(8.5)	1	194
86		540	弥生土器	高坏	良	弥生後～古墳初	第1面	落込2	30.4	18.7	1	194
88	59	541	木製品	(別掲)								
88	59	542	木製品	(別掲)								
88	59	543	木製品	(別掲)								
90	60	544	土師器	皿	良	11～12c	第2-1層		9.4	1.6	2	202
90		545	土師器	皿	やや良	12～13c	第1層		(9.2)	1.9	1	94
90		546	土師器	皿	やや良	12～13c	第1層		(8.7)	(1.5)	2	12
90		547	土師器	皿	やや良	13c	第1層		(8.0)	1.5	2	12
90		548	土師器	皿	やや良		第1層		(8.5)	1.6	2	12
90		549	須恵器	皿	不良	奈良時代	第1層		(15.6)	2.1	2	21
90	60	550	土師器	台付皿	不良		第1層		*(8.8)	(3.8)	3	11
90	60	551	土師器	椀	不良(底)		第1層		*(6.5)	(1.3)	1	19
90	60	552	黒色土器	椀(内黒)	不良		第1層		*(5.7)	(2.1)	3	37
90	32	553	黒色土器	椀(内黒)	やや良		第1層		(13.8)	4.7	1	56
90		554	須恵器	甕	不良(口縁)		第1層		(30.6)	(4.6)	3	29
90		555	須恵器	片口鉢	不良(口縁)		第1層		(28.2)	(6.3)	2	17
90	60	556	土師器	鍋	不良(口縁)	14c	第1層		(29.5)	(2.3)	2	518
90		557	瓦器	皿	良		第1層		(9.5)	(1.8)	2	17
90	60	558	瓦器	椀	良(底)		第1層		*4.3	(0.7)	2	517
90	62	559	白磁	碗	不良(口縁)		第1層		(17.0)	(4.4)	2	121
90		560	白磁	碗	不良(口縁)	11～12c	第1層		(16.0)	(3.6)	2	124
90	62	561	白磁	碗	不良(口縁)	11～12c	第1層		(14.7)	(2.3)	2	124
90		562	白磁	碗	不良(高台)		第1層		*5.6	(2.7)	2	149
90		563	白磁	碗	完形(高台)		第1層		*4.8	(2.5)	2	124
90		564	白磁	碗	完形(高台)	11～12c	機械掘削		*5.0	(3.0)	2	7
90	62	565	白磁	碗	完形(高台)		第1層		*5.8	(2.7)	2	157
90	62	566	白磁	皿	不良		第1層		(9.5)	(2.2)	3	36
90		567	白磁	皿	不良		第1層		(10.1)	(2.9)	2	10
90	62	568	白磁	皿	不良		第1層		(11.8)	(2.7)	3	42
90	45	569	須恵器	坏(蓋)	不良(口縁)	古墳後期	第1層		(13.3)	(3.5)	1	41
90		570	須恵器	坏(蓋)	不良	古墳後期	第1層		(15.2)	(4.1)	1	109
90		571	須恵器	坏(蓋)	不良(口縁)	古墳後期	第1層		(11.7)	(3.0)	1	103
90	45	572	須恵器	〇/壺	不良(体)	古墳後期	第1層			(6.6)	2	146
90	60	573	須恵器	坏	不良(底)	奈良時代	第1層		*6.2	(1.8)	2	14
90	60	574	須恵器	坏B	不良(底)	奈良時代	第1層		*(12.6)	(2.1)	1	28
91		575	弥生土器	高坏	やや良(坏)	弥生後～古墳初	第1層		(22.4)	(8.7)	3	11
91		576	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第1層		*3.6	(3.0)	1	41
91		577	石製品	(別掲)								
91	62	578	白磁	碗	不良(口縁)	11～12c	第2-1層		(16.6)	(4.4)	2	29
91	62	579	須恵器	甕	不良(頸)		第1層				3	25
91	62	580	須恵器	甕	不良(体)		第1面	建物3ビット10				473
91	60	581	黒色土器	椀(内黒)	不良(高台)	10～11c	第2-1層		*(6.9)	(1.4)	3	47
91		582	黒色土器	椀(両黒)	不良(高台)	10～11c	第2-1層		*(6.0)	(0.9)	3	255
91	60	583	黒色土器	椀(両黒)	不良(高台)	10～11c	第2-1層		*(6.0)	(1.3)	3	257
91		584	土師器	皿	完形	12c	第2-1層		9.4	2.0	2	207

遺物観察表 (9)

挿図 番号	図版 番号	遺物 番号	遺物名	器種	残存状態	時期	遺構面/層	遺構名	口径	器高	調査次	登録番号
91	60	585	瓦器	椀	やや良(高台)	12c	第2-1層		*5.7	(1.0)	2	31
91	60	586	須恵器	坏(蓋)	不良	奈良時代	第2-1層			(1.7)	2	24
91	60	587	須恵器	坏(蓋)	不良	奈良時代	第2-2層				3	190
91	60	588	須恵器	坏(蓋)	完形(つまみ)	奈良時代	第2-1層			(1.1)	2	24
91	60	589	須恵器	坏(蓋)	完形(つまみ)	奈良時代	第2-1層			(1.5)	2	30
91		590	須恵器	壺	不良(底)	奈良時代	第2-1層		*(11.3)	(6.1)	2	26
91		591	須恵器	坏(蓋)	不良(口縁)	古墳後期	第2-1層		(13.4)	(3.6)	1	118
91	45	592	須恵器	坏	不良(口縁)	古墳後期	第2-1層		(11.9)	(3.9)	2	24
91	45	593	須恵器	坏	やや良	古墳後期	第2-1層			(4.7)	1	181
91		594	須恵器	坏	不良(口縁)	古墳後期	第2-1層		(10.7)	(3.4)	1	118
91	45	595	須恵器	坏	不良(口縁)	古墳後期	第2-1層		(13.8)	(3.3)	2	175
91		596	須恵器	坏	不良	古墳後期	第2-1層			(2.8)	1	116
91		597	須恵器	坏	不良	古墳後期	第2-1層			(3.7)	2	24
91	45	598	須恵器	提瓶	不良(口縁)	古墳後期	第2-1層		(8.4)	(7.4)	2	23
91		599	土師器	鼓形器台	不良(頸)	弥生後~古墳初	第2-1層			(3.7)	1	104
91		600	弥生土器	有孔鉢	良(底)	弥生後期	第2-2層		*1.9	(5.9)	3	9
92	61	601	須恵器	器台	不良(坏)	初期須恵器	第1層 第2-1層他		(37.8)	(17.7)	2	4/9/10/19/54/12 4/153/157/175/1 84/472/503
92	61	602	須恵器	器台	不良	初期須恵器	第1層他		*(28.8)	(33.4)	2	41/74/124/147/1 59/161/175/184/ 221/503
92	63	603	須恵器	蓋	不良(口縁)	初期須恵器	第2-1層		(14.0)	(3.0)	2	175
92	63	604	須恵器	蓋	不良(口縁)	初期須恵器	第1~2層		(13.7)	(3.5)	2	127/226
92	63	605	須恵器	高坏	不良(脚)	初期須恵器	第2-1層		*(11.4)	2.4	2	153
96	52	606	弥生土器	広口壺	完形	弥生後~古墳初	第2面	流路1	20.0	47.3	1	99
96		607	弥生土器	広口壺	やや良	弥生後~古墳初	第2面	流路1	(10.9)	19.1	2	333
96	54	608	弥生土器	直口壺	完形	弥生後~古墳初	第2面	流路1	8.6	13.9	2	335
97	52	609	弥生土器	広口壺	完形	弥生後~古墳初	第2面	流路1	17.3	28.2	2	338
97	53	610	弥生土器	広口壺	完形	弥生後~古墳初	第2面	流路1	17.3	26.3	2	322
97		611	弥生土器	広口壺	やや良	弥生後~古墳初	第2面	流路1	14.0	(16.0)	2	512
97	54	612	弥生土器	台付壺	良	弥生後~古墳初	第2面	流路1	9.1	(20.8)	2	312
97	53	613	弥生土器	広口壺	完形	弥生後~古墳初	第2面	流路1	15.2	22.2	2	312
97	54	614	弥生土器	広口壺	良(口縁)	弥生後~古墳初	第2面	流路1	(13.8)	(9.9)	1	93
98	53	615	弥生土器	広口壺	完形(口縁)	弥生後~古墳初	第2面	流路1	14.5	(7.7)	2	333
98		616	弥生土器	壺	やや良(体)	弥生後~古墳初	第2面	流路1	*5.4	(17.0)	2	314
98	53	617	弥生土器	二重口縁壺	完形(口縁)	弥生後~古墳初	第2面	流路1	(16.6)	23.8	2	333/334
98		618	弥生土器	壺	良(底)	弥生後~古墳初	第2面	流路1	*5.5	(8.1)	2	334/340
98		619	弥生土器	壺	不良(口縁)	弥生中期?	第2面	流路1	(17.8)	(3.2)	2	334
98	54	620	弥生土器	広口壺	やや良(口縁)	弥生後~古墳初	第2面	流路1	(20.8)	(12.1)	1	75
98	54	621	弥生土器	広口壺	完形(口縁)	弥生後~古墳初	第2面	流路1	23.2	(7.9)	1	75
98		622	弥生土器	二重口縁壺	不良(口縁)	弥生後~古墳初	第2面	流路1	(22.7)	(3.9)	2	333
98		623	弥生土器	広口壺	不良(口縁)	弥生後~古墳初	第2面	流路1	(15.4)	(3.6)	2	321
98	53	624	弥生土器	二重口縁壺	完形(口縁)	弥生後~古墳初	第2面	流路1	18.2	(8.5)	2	334/339
98		625	弥生土器	壺	良(底)	弥生後~古墳初	第2面	流路1	*1.7	(4.2)	2	321
99	51	626	弥生土器	甕	完形	弥生後~古墳初	第2面	流路1	14.8	26.5	2	334
99		627	弥生土器	甕	やや良	弥生後~古墳初	第2面	流路1	(16.6)	(24.5)	2	333/334
99	50	628	弥生土器	甕	完形	弥生後~古墳初	第2面	流路1	16.1	26.8	2	339
99	50	629	弥生土器	甕	完形	弥生後~古墳初	第2面	流路1	16.5	24.2	2	339
99		630	弥生土器	甕	不良(口縁)	弥生後~古墳初	第2面	流路1	(16.0)	(6.5)	2	314
99		631	弥生土器	甕	良(口縁)	弥生後~古墳初	第2面	流路1	15.6	(8.2)	2	323
100		632	弥生土器	甕	やや良(口縁)	弥生後~古墳初	第2面	流路1	(15.7)	(10.9)	2	314
100		633	弥生土器	甕	やや良	弥生後~古墳初	第2面	流路1	*5.2	(16.3)	2	334/512
100		634	弥生土器	甕	やや良	弥生後~古墳初	第2面	流路1	*4.8	(21.1)	2	314
100		635	弥生土器	甕	やや良	弥生後~古墳初	第2面	流路1	*3.8	(21.8)	2	333/340/512
100		636	弥生土器	甕	やや良	弥生後~古墳初	第2面	流路1	*4.6	(27.0)	2	512/514
100	50	637	弥生土器	甕	完形(口縁)	弥生後~古墳初	第2面	流路1	(11.6)	(14.0)	2	313
100		638	弥生土器	甕	やや良	弥生後~古墳初	第2面	流路1	15.5	(16.3)	2	333/334
101	51	639	弥生土器	甕	完形	弥生後~古墳初	第2面	流路1	13.7	21.5	2	321
101	50	640	弥生土器	甕	完形	弥生後~古墳初	第2面	流路1	12.6	17.5	2	313
101		641	弥生土器	甕	良(体)	弥生後~古墳初	第2面	流路1	(12.9)	16.5	2	333/334
101	51	642	弥生土器	甕	良	弥生後~古墳初	第2面	流路1	14.8	20.2	2	321
101	51	643	弥生土器	甕	完形	弥生後~古墳初	第2面	流路1	13.6	18.4	2	321
101		644	弥生土器	甕	良(体)	弥生後~古墳初	第2面	流路1			1	175
101	55	645	弥生土器	鉢	やや良	弥生後~古墳初	第2面	流路1	(11.4)	5.6	2	512
101		646	弥生土器	鉢	不良	弥生後~古墳初	第2面	流路1	(15.8)	(4.8)	2	334/340
101		647	弥生土器	壺(甕)	やや良(底)	弥生後~古墳初	第2面	流路1	*(4.0)	(4.2)	2	321
102		648	弥生土器	甕	良(底)	弥生後~古墳初	第2面	流路1	*4.0	(6.3)	2	321
102		649	弥生土器	鉢(甕)	良(底)	弥生後~古墳初	第2面	流路1	*3.4	(5.4)	2	334
102		650	弥生土器	甕(鉢)	良(底)	弥生後~古墳初	第2面	流路1	*4.2	(3.8)	2	334
102		651	弥生土器	有孔鉢	良(底)	弥生後~古墳初	第2面	流路1	*4.0	(8.5)	2	340
102		652	弥生土器	有孔鉢	やや良(底)	弥生後~古墳初	第2面	流路1	*3.7	3.9	2	334
102		653	弥生土器	有孔鉢	良(底)	弥生後~古墳初	第2面	流路1	*3.2	(3.7)	2	333

遺物観察表 (10)

挿図 番号	図版 番号	遺物 番号	遺物名	器種	残存状態	時期	遺構面/層	遺構名	口径	器高	調査次	登録番号
102		654	弥生土器	有孔甕	良(底)	弥生後～古墳初	第2面	流路1	*4.6	(8.3)	2	323
102		655	弥生土器	有孔鉢	やや良	弥生後～古墳初	第2面	流路1	*3.8	(6.8)	2	321
102	55	656	弥生土器	高坏	不良(坏)	弥生後～古墳初	第2面	流路1	(22.9)	(7.5)	2	333/334
102		657	弥生土器	高坏	良(坏)	弥生後～古墳初	第2面	流路1	(21.4)	(7.1)	2	334
102	55	658	弥生土器	高坏	完形(坏)	弥生後～古墳初	第2面	流路1	20.8	(4.9)	2	323
102	55	659	弥生土器	高坏	やや良(坏)	弥生後～古墳初	第2面	流路1	(25.4)	(6.9)	2	334
102		660	弥生土器	高坏	不良(坏)	弥生後～古墳初	第2面	流路1	(12.9)	(2.4)	2	334
102		661	弥生土器	高坏	やや良(坏)	弥生後～古墳初	第2面	流路1	(14.4)	(4.2)	2	333
102	54	662	弥生土器	高坏	良	弥生後～古墳初	第2面	流路1	13.5	11.9	2	323
102	54	663	弥生土器	高坏	良	弥生後～古墳初	第2面	流路1	11.6	11.2	2	324
102	55	664	弥生土器	片口鉢	やや良(口縁)	弥生後～古墳初	第2面	流路1	(38.8)	(14.0)	2	333
103		665	弥生土器	甕	やや良(口縁)	弥生後～古墳初	第2面	流路1	(15.6)	(4.5)	2	339
103		666	弥生土器	壺(甕)	良(底)	弥生後～古墳初	第2面	流路1	*(4.6)	(7.3)	1	93
103		667	弥生土器	壺(甕)	やや良(底)	弥生後～古墳初	第2面	流路1	*(9.8)	(3.3)	1	98
103	55	668	弥生土器	無頸壺	不良(口縁)	弥生中期	第2面	流路1	(21.0)	(8.3)	2	321
103		669	弥生土器	広口壺	不良(口縁)	弥生中期後半	第2面	流路1	(20.8)	(1.5)	2	333
103		670	弥生土器	甕	不良(口縁)	弥生中期後半	第2面	流路1	(33.2)	(15.3)	1	98
103		671	弥生土器	鉢か	不良(口縁)	弥生中期後半	第2面	流路1	(37.0)	(8.0)	2	334
103	59	672	木製品	(別掲)								
103		673	木製品	(別掲)								
103	58	674	石製品	(別掲)								
104		675	弥生土器	甕	やや良	弥生後～古墳初	第2面	流路1	14.2	(21.9)	2	392
104		676	弥生土器	甕	良	弥生後～古墳初	第2面	流路1	*4.4	(23.2)	2	389
104		677	弥生土器	甕	良	弥生後～古墳初	第2面	流路1	13.5	23.7	2	396
104		678	弥生土器	甕	良	弥生後～古墳初	第2面	流路1	12.6	18.1	2	430
104		679	弥生土器	有孔鉢	完形(底)	弥生後～古墳初	第2面	流路1	*3.2	(3.1)	2	436
104	55	680	弥生土器	鉢	良	弥生後～古墳初	第2面	流路1	(10.6)	4.8	2	392
104		681	弥生土器	壺(甕)	不良(底)	弥生後～古墳初	第2面	流路1	*6.8	(6.4)	2	443
104		682	弥生土器	高坏	やや良	弥生後～古墳初	第2面	流路1	*12.1	(5.9)	2	444
104		683	弥生土器	広口壺	やや良	弥生後～古墳初	第2面	流路1	(15.8)	(21.0)	2	433
105	56	684	弥生土器	甕	不良(口縁)	弥生中期後半	第2面	流路2	(17.5)	(5.7)	2	337
105	56	685	弥生土器	甕	不良(口縁)	弥生中期後半	第2面	流路2	(25.8)	(10.8)	2	351
105	56	686	弥生土器	広口壺	不良(口縁)	弥生中期後半	第2面	流路2	*(26.8)	(3.1)	2	341
105	56	687	弥生土器	壺	不良(体)	弥生中期後半	第2面	流路2		(7.0)	2	341
105		688	弥生土器	壺(甕)	やや良(底)	弥生中期後半	第2面	流路2	*9.8	(5.3)	3	232
105		689	弥生土器	壺(甕)	完形(底)	弥生中期後半	第2面	流路2	*8.4	(4.4)	3	234
105	56	690	弥生土器	壺	不良(体)	弥生中期後半	第2面	流路2			2	351
105	56	691	弥生土器	壺	不良(体)	弥生中期後半	第2面	流路2			2	351
105	56	692	弥生土器	鉢	やや良	弥生後～古墳初	第2面	流路2	(12.4)	8.5	2	337
105		693	弥生土器	鉢	不良	弥生後～古墳初	第2面	流路2	*3.7	(5.5)	3	232
105		694	弥生土器	鉢	良(底)	弥生後～古墳初	第2面	流路2	*4.1	(5.8)	3	232
105		695	弥生土器	高坏	やや良(脚)	弥生中期後半	第2面	流路2		(15.4)	3	231
107		696	弥生土器	甕	やや良	弥生後期	第2層		(13.8)	19.2	2	2
107		697	弥生土器	甕	良(口縁)	弥生後期	第2層		(14.6)	(10.4)	1	15
107		698	弥生土器	鉢	不良	弥生後期	第2-2層		(9.8)	(5.7)	1	190
107		699	弥生土器	高坏	不良(坏)	弥生後期	第2-2層		(27.2)	(4.5)	1	190
107		700	弥生土器	高坏	やや良(脚)	弥生後期	第2-2層			(7.6)	3	212
107		701	弥生土器	二重口縁壺	不良(口縁)	弥生後期	第2-2層				3	217
107	63	702	弥生土器	甕	不良(口縁)	弥生後期	第2-2層		(16.2)	(4.0)	3	188
107	63	703	弥生土器	広口壺	不良(口縁)	弥生中期後半	第2-2層		(18.0)	(2.5)	3	176
107		704	弥生土器	広口壺	不良(口縁)	弥生中期後半	第2-2層				3	217
107		705	弥生土器	有孔鉢(甕)	完形(底)	弥生後期	第2-2層		*4.2	(6.0)	2	480
107		705	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後期	第2-2層		*3.2	(6.2)	3	213
107		707	弥生土器	甕(壺)	完形(底)	弥生後期	第2-2層		*4.5	(4.2)	3	225
107		708	弥生土器	壺	完形(底)	弥生後期	第2-2層				3	198
107		709	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後期	第2-2層		*4.0	(2.4)	3	217
107		710	弥生土器	甕	完形(底)	弥生後期	第2-2層		*4.9	(3.2)	3	226
108	58	711	石製品	(別掲)								
108		712	石製品	(別掲)								
108	58	713	石製品	(別掲)								
110		714	石製品	(別掲)								
113	63	715	瓦器	椀	不良	12c	第1層		(16.8)	(3.2)	1	221
113	63	715	瓦器	椀	不良	12c	第1層		(15.9)	(4.7)	1	221
113	63	717	黒色土器	椀(両黒)	不良(底)	11c後半	第1層		*(6.1)	(2.8)	1	221
60		718	須恵器	坏蓋	不良	奈良時代	第1層				3	26
60		719	須恵器	坏蓋	不良	奈良時代	第1面	溝21			3	82
62		720	白磁	椀	不良(口縁)	11～12c	第1層				3	37
62		721	青磁	椀	不良(口縁)		第1層				3	25
62		722	青磁	椀	不良(口縁)		第1層				2	21
62		723	青磁	椀	不良(口縁)		第1層				3	21
63		724	石製品	(別掲)			第1面	溝10/溝11			3	123
63		725	須恵器	高坏	不良(口縁)	初期須恵器	第1面	溝23			3	67
63		726	須恵器	高坏	不良	初期須恵器	第1層				2	21

遺物観察表 (11)

挿図 番号	図版 番号	遺物 番号	遺物名	器種	残存状態	時期	遺構面/層	遺構名	口径	器高	調査次	登録番号
	63	727	縄紋土器	深鉢	不良(口縁)	縄紋晩期	第1層				3	32
	63	728	瓦器	羽釜	不良(体)	13c	第1面	溝/土坑			1	224
	63	729	白磁	椀	不良		第1面	溝/土坑			1	224
	63	730	陶器?		不良		第1面	溝/土坑			1	224
	63	731	瓦器	椀	不良	11~12c	第1面	溝			1	226
	63	732	須恵器	鉢	不良(口縁)		第1面	溝			1	234
	63	733	土師器	皿	不良(口縁)		第1面	溝			1	226
	63	734	黒色土器	椀(両黒)	不良(口縁)	11c	第1面	土坑			1	230
	63	735	黒色土器	椀(両黒)	不良(高台)	11c	第1面	土坑			1	230
	63	736	瓦器	椀	不良(口縁)	11~12c	第1面	溝			1	232
110		737	縄紋土器	深鉢	不良(口縁)	縄紋中期	第3層				3	248

残存状況は個体の残存率をおおむね4段階にわけて示す。「不良」には残存率10%未満のものも多く含まれる。また、()は特定の部位に限った残存状況を示す。口径・器高は単位cm。口径()は復元値。
*は口縁以外の径(底径など)。器高()は残存高。確認調査の調査次数は「1」と表記。

遺物観察表 (12)

挿図 番号	図版 番号	遺物 番号	遺物名	種類	残存状 態	時期	遺構面/層	遺構名	法量	調査 次	登録 番号	備考
木製品												
16		16	建築材	不明	部分	中世	第1面	ピット1	長(13.6)*幅(6.7)*厚5.1	2	497	ヒノキ属
23		67	斎串		一部欠	中世	第1面	井戸1	長(15.5)*径0.8	2	331	シイノキ属
56	59	261	農具	不明	部分	古墳前期	第1面	土坑8	長(4.6)*幅(5.0)*厚(1.4)	3	284	アカガシ亜属
88	59	541	建築材	柱	根のみ	弥生後期～ 古墳初頭	(第1面)	建物9	長56.0*径13.3	3	202	ツツジ科シャシャンボ
88	59	542	建築材	柱	根のみ	弥生後期～ 古墳初頭	(第1面)	建物9	長23.0*径(9.5)	3	201	ツツジ科シャシャンボ
88	59	543	建築材	柱	根のみ	弥生後期～ 古墳初頭	(第1面)	建物9	長38.7*径(7.6)	3	200	ツツジ科シャシャンボ
103	59	672	農具	平鋏	一部欠	弥生後期～ 古墳初頭	第2面	流路1	長(16.4)*幅14.4*厚(0.7)	2	336	アカガシ亜属
103		673	不明		部分	弥生後期～ 古墳初頭	第2面	流路1	長10.3*幅3.8*厚1.3	2	323	炭化著しい 広葉樹
鉄製品												
16	57	17	釘		一部欠	中世	第1面	ピット2	長(3.6)*幅0.9	3	105	
47	57	215	釘		一部欠	中世	第1面	溝15	長(3.1)*幅0.7	2	213	
石製品												
23	57	66	紡輪		完存	中世	第1面	井戸1	径5.6 孔径0.8*厚1.5	2	318	滑石(蛇紋岩)
30	57	94	砥石		一部欠	中世	第1面	井戸4	長(8.0)*幅5.4*厚4.9	2	317	黒色物付着 流紋岩質火山岩
47	57	214	砥石		一部欠	中世	第1面	溝14	長(7.9)*幅6.0*厚3.1	3	108	黒色物付着
50		245	石鍋		部分	中世	第1面	溝18	長(6.9)*幅1.5*厚(1.1)	3	191	滑石 温石の破片か
56	57	262	管玉		完存	古墳前期	第1面	土坑8	径0.4 孔径0.3*長0.8	3	229	碧玉 双方穿孔
56	57	263	白玉		完存	古墳前期	第1面	土坑8	径0.4 孔径0.2*厚0.3	3	229	滑石
56	57	264	白玉		完存	古墳前期	第1面	土坑8	径0.4 孔径0.1*厚0.3	3	229	滑石
56	57	265	白玉		完存	古墳前期	第1面	土坑8	径0.4 孔径0.2*厚0.2	3	229	滑石
56	57	266	白玉		完存	古墳前期	第1面	土坑8	径0.3 孔径0.2*厚0.2	3	229	滑石
56	57	267	白玉		完存	古墳前期	第1面	土坑8	径0.3 孔径0.1*厚0.2	3	229	滑石
56	57	268	白玉		完存	古墳前期	第1面	土坑8	径0.4 孔径0.2*厚0.2	3	229	滑石
83	58	522	砥石		完存	弥生後期～ 古墳初頭	第1面	溝32	長19.5*幅10.9*厚9.0	1	137	
83	58	523	砥石		完存	弥生後期～ 古墳初頭	第1面	土坑20	長8.2*幅9.4*厚3.2	3	97	
83	58	524	砥石		完存	弥生後期～ 古墳初頭	第1面	溝26	長8.0*幅7.9*厚3.6	2	36	正珪岩
91		577	石庖丁		部分	弥生	第1層		長(5.5)*高(5.0)*厚0.8	2	160	ホルンフェルス
103	58	674	石鏃	凹基無茎式	完存	弥生後期～ 古墳初頭	第2面	流路1	長3.0*幅1.5*厚0.5	2	325	サヌキトイド
108	58	711	石斧	太型捨刃石斧	部分	弥生後期	第2-2層		長(8.7)*幅(8.7)*厚(4.2)	3	190	砂岩
108		712	石斧		部分	弥生後期	第2-2層		長(9.5)*幅(6.0)*厚(4.6)	1	176	
108	58	713	石斧		部分	弥生後期	第2-2層		長(7.4)*幅(8.6)*厚(3.0)	1	142	
110		714	剥片			弥生	第3層		長2.1*幅1.9*厚0.6	3	242	サヌキトイド
	63	724	石材	不明		中世	第1面	溝10/15	未計測	3	123	

法量は単位cm。()は残存長。確認調査の調査次数は「1」と表記。

遺構一覧表(1)

遺構名	遺構面	地区	時期	調査次	調査時名称	備考
建物						
1	第1面	J-4-7-H1-g9/10	中世	(その2)	18建物	調査時柱穴番号と報告書 ピット番号は対応しない
2	第1面	J-4-7-H1-f9/10	中世	(その2)	87建物	
3	第1面	J-4-7-H1-gh8	中世	(その2)	88建物/121ピット/126 ピット/150ピット/152 ピット/130ピット	
4	第1面	J-4-7-H1-d6	中世	(確認) / 1区西	18建物 (14ピット/15 ピット/16ピット)	
5	第1面	J-4-7-H1-b4	中世	(確認) / 5区	34建物 (2ピット/3 ピット/4ピット/33ピッ ト)	
6	第1面	J-4-7-H1-cd3	中世	(確認) / 5区	35建物 (10ピット/12 ピット/16ピット/19ピッ ト/20ピット/21ピット/22 ピット)	
7	第1面	J-4-7-H1-f10	古墳前期	(その2)	29建物	
8	第1面	J-4-7-H1-ef9	古墳前期	(その2)	154建物 (30-3ピット 52ピット/53ピット/61 ピット/111ピット)	
9	(第1面)	J-4-7-H1-j7	弥生後期	(その3)	109建物 (35ピット/38 ピット/41ピット/47ピッ ト/55ピット/61ピット/66 ピット)	
柱列						
1	第1面	J-4-7-H1-h9/10	中世	(その3)	136柱列	
2	(第1面)	J-4-7-H1-j8	弥生後期	(その3)	107柱列	
ピット						
1	第1面	J-4-7-H1-h9	中世	(その3)	49ピット	
2	第1面	J-4-7-H1-g8	中世	(その2)	120ピット	
3	第1面	J-4-7-H1-f9	中世	(その2)	27-2ピット	
4	第1面	J-4-7-H1-f9	中世	(その2)	63ピット	
5	第1面	J-4-7-H1-h9	中世	(その3)	59ピット	
水溜						
1	第1面	J-4-7-H1-fg8	中世	(その2)	84土坑	
2	第1面	J-4-7-H1-f9	中世	(その2)	6土坑	
井戸						
1	第1面	J-4-7-H1-ef9	中世	(その2)	47井戸	
2	第1面	J-4-7-H1-g9/10	中世	(その2)	16井戸	
3	第1面	J-4-7-H1-g9	中世	(その2)	51井戸	
4	第1面	J-4-7-H1-g10	中世	(その2)	20井戸	
5	第1面	J-4-7-H1-gh10	中世	(その2) (その3)	58井戸 42井戸	検出は (その2) 掘削は (その3)
6	第1面	J-4-7-H1-g9	中世	(その2)	117井戸	
7	第1面	J-4-7-H1-h8/9	中世	(その3)	104土坑	
8	第1面	J-4-7-H1-h8	中世	(その3)	105土坑	
9	第1面	J-4-7-H1-h9	中世	(その3)	62土坑	

遺構一覧表 (2)

遺構名	遺構面	地区	時期	調査次	調査時名称	備考
10	第1面	J-4-7-H1-j10	古墳前期	(その3)	10井戸	
11	第1面	J-4-7-H1-e8	古墳前期	(その2)	106土坑	
12	第1面	J-4-7-H1-i7	古墳前期	(その3)	85井戸	
落込み						
1	第1面	J-4-7-H1-i10/H2-i1	中世	(その3)	18落込み/20溝	
2	第1面	J-4-7-H1-c3	弥生後期	(確認) / 5区	14溝	
土坑						
1	第1面	J-4-7-H1-f10	中世	(その2)	42土坑	
2	第1面	J-4-7-H1-h10	中世	(その3)	14土坑	
3	第1面	J-4-7-H1-h9	中世	(その3)	64土坑	
4	第1面	J-4-7-H1-g9	中世	(その2)	72土坑	
5	第1面	J-4-7-H1-g8	中世	(その2)	123土坑	
6	第1面	J-4-7-H1-g9	中世	(その2)	118土坑	
7	第1面	J-4-7-H1-h9	古墳前期	(その3)	63土坑	
8	第1面	J-4-7-H1-h10	古墳前期	(その3)	19土坑	
9	第1面	J-4-7-H1-f9	古墳前期	(その2)	113土坑	
10	第1面	J-4-7-H1-f10	古墳前期	(その2)	21土坑	
11	第1面	J-4-7-H1-f10	古墳前期	(その2)	31土坑	
12	第1面	J-4-7-H1-e7	古墳前期	(その3)	124土坑	
13	第1面	J-4-7-H1-f7	古墳前期	(その3)	127土坑	
14	第1面	J-4-7-H1-g7	古墳前期	(確認) / 3区東 (その3)	3土坑 130土坑	
15	第1面	J-4-7-H1-g9	古墳前期	(その2)	17土坑	
16	第1面	J-4-7-H1-g7	古墳前期	(その2)	91土坑	
17	第1面	J-4-7-H1-e5	古墳前期	(確認) / 1区東	18土器埋納遺構	
18	第1面	J-4-7-H1-de5	古墳前期	(確認) / 1区東	4落込み	
19	第1面	J-4-7-H1-f9	弥生後期	(その2)	110土坑	
20	第1面	J-4-7-H1-h10	弥生後期	(その3)	40土坑	
21	第1面	J-4-7-H1-e8	弥生後期	(その2)	108土坑	
22	第1面	J-4-7-H1-h7	弥生後期	(その3)	108土坑	
23	第1面	J-4-7-H1-j9	弥生後期	(その3)	9土坑	
24	第1面	J-4-7-H1-j9	弥生後期	(その3)	7土坑	
25	第1面	J-4-7-H1-c3	弥生後期	(確認) / 5区	11土坑	
26	第1面	J-4-7-H1-e4	弥生後期	(確認) / 1区東	23土坑	
27	第2面	J-4-7-H2-i8	弥生後期	(その3)	112土坑	
溝						
1	第1面	J-4-7-H1-f7/8	中世	(その2) (その3)	77溝 120溝	
2	第1面	J-4-7-H1-fg8	中世	(その2)	78/79溝	
3	第1面	J-4-7-H1-f7/8	中世	(その2) (その3)	80溝 118溝	

遺構一覧表 (3)

遺構名	遺構面	地区	時期	調査次	調査時名称	備考
4	第1面	J-4-7-H1-g7/8	中世	(その2) (その3)	81溝 117溝	
5	第1面	J-4-7-H1-f7/8	中世	(その2) (その3)	82溝 119溝	
6	第1面	J-4-7-H1-g7/8	中世	確認/1区東 (その2) (その3)	2溝 95溝 116溝	
7	第1面	J-4-7-H1-ef7	中世	(その2)	135溝	
8	第1面	J-4-7-H1-e7/8/9/10	中世	(その2)	157溝	
9	第1面	J-4-7-H1-g8/9/10	中世	(その2)	2溝	
10	第1面	J-4-7-H1-g8/9/10 H1-h8	中世	(その2) (その3)	1溝 4溝	
11	第1面	J-4-7-H1-g9/10 H2-g1	中世	(その2)	3溝/33溝	
12	第1面	J-4-7-H1-g9/10	中世	(その2)	14溝	
13	第1面	J-4-7-H1-gh9	中世	(その2) (その3)	13溝 51溝	
14	第1面	J-4-7-H1-gh9	中世	(その2) (その3)	15溝 52溝	
15	第1面	J-4-7-H1-gh9	中世	(その2) (その3)	71溝 4溝	
16	第1面	J-4-7-H1-h9	中世	(その3)	54溝	
17	第1面	J-4-7-H1-ghi8	中世	(その2) (その3)	73溝 74溝	
18	第1面	J-4-7-H1-ghi8	中世	(その2) (その3)	73溝 80溝	
19	第1面	J-4-7-H1-h7/8	中世	(その3)	91溝	
20	第1面	J-4-7-H1-h7/8	中世	(その3)	83溝/87溝	
21	第1面	J-4-7-H1-h10	中世	(その3)	28落込み/29溝	
22	第1面	J-4-7-H1-i10 H2-i1	中世	(その3)	17溝	
23	第1面	J-4-7-H1-i10 H2-i1	中世	(その3)	16溝	
24	第1面	J-4-7-H1-j10	中世	(その3)	11溝	
25	第1面	J-4-7-H1-d9 e9/10 f10	古墳前期	(確認) /1区西 (その2)	2溝 5溝	
26	第1面	J-4-7-H1-f9/10	弥生後期	(その2)	4溝	
27	第1面	J-4-7-H1-ef7	弥生後期	(その3)	121溝	
28	第1面	J-4-7-H1-e6f6/7・ g7/8/9・h9/10・i10・ H2-ij1	弥生後期	確認/3区東 (その2) (その3)	4溝/6溝/8溝 76溝 13溝/115溝	
29	第1面	J-4-7-H1-g7 h7/8	弥生後期	(その2) (その3)	89溝 94溝/114溝	
30	第1面	J-4-7-H1-ij10	弥生後期	(その3)	12溝	
31	第1面	J-4-7-H1-def7/8	弥生後期	(確認) /1区西 (その2) (その3)	9溝 83落込み 132落込み	
32	第1面	J-4-7-H1-de6/7	弥生後期	(確認) /1区西	11溝	
33	第1面	J-4-7-H1-de6/7	弥生後期	(確認) /1区東	2溝	38溝と一連か

遺構一覧表 (4)

遺構名	遺構面	地区	時期	調査次	調査時名称	備考
34	第1面	J-4-7-H1-de6/7	弥生後期	(確認) / 1区東	19溝	39溝と一連か
35	第1面	J-4-7-H1-de4	弥生後期	(確認) / 1区東	20溝	40溝と一連か
36	第1面	J-4-7-H1-de4	弥生後期	(確認) / 1区東	22溝	41溝と一連か
37	第1面	J-4-7-H1-d1/2	古墳前期	(確認) / 1区東 (確認) / 5区	26溝 29溝	
38	第1面	J-4-7-H1-bc4	弥生後期	(確認) / 5区	5溝	33溝と一連か
39	第1面	J-4-7-H1-c4	弥生後期	(確認) / 5区	6溝	34溝と一連か
40	第1面	J-4-7-H1-c3/4	弥生後期	(確認) / 5区	7溝	35溝と一連か
41	第1面	J-4-7-H1-c3	弥生後期	(確認) / 5区	31溝	36溝と一連か
42	第2面	J-4-7-H1-gh7	弥生後期	確認 / 3区東	5溝	
43	第2面	J-4-7-H1-h9/10 ij8 I1-a8	弥生後期	(その3)	109溝	
44	第2面	J-4-7-H1-i10 H2-ij1	弥生後期	(その3)	111溝	
流路						
1	第2面	J-4-7-H1-d9/10 e9/10 f10	弥生後期	(確認) / 1区西 (その2)	(第2-2層) 流路北	確認調査時は流路としての遺構名称は付さず
2	第2面	J-4-7-H1-fgh9/10	弥生後期	(その2) (その3)	流路南 110流路	
3	第3面	J-4-7-H1-fgh9/10	弥生	(その3)	113流路	第2面流路2の第3面段階